
宙の船 流転の岸

招夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宙の船 流転の岸

【Nコード】

N3814F

【作者名】

招夏

【あらすじ】

『次の瞬間、私は眩い光に包まれていた。流星の一つが落ちてきたんだと思った』
高校生ヒュウガミナキの日向瑞樹に降りかかる災難と冒険の物語

登場人物

（地球人）

ミズキ・ヒュウガ（日向瑞樹） 悪性腫瘍疾患あり、ハルの宇宙船
ナンディに拉致される

マサキ・カイヅカ（貝塚正樹） 瑞樹の幼馴染（お隣さん）

サツキ・カイヅカ（貝塚皐月） 瑞樹の幼馴染（お隣さん）、正樹
の妹

（ハル人）

カナメ・フォティニア・グラブラ（一般人）

銀髪、赤眼、長身

破壊神の異名を持つエンジニア、分解再生装置の開発者の一人、
推定年齢300歳以上

デイモルフオセカ・グラブラ

（またはオーランティアカ、またはシヌアータ）（森の民ノオリジン
タイプ）

栗色髪、翠眼

エクソダス時点で、カナメの配偶者だったが、ハル脱出時に事故
で死亡

ニシキギ・エウオニムス（一般人）

金髪、碧眼、長身

エンジニア

アーマルターシュ・サイカチ（一般人）

金髪

ラークスパーの助手の仕事をしている

イベリス・センパービバレンス（森の民ノリセプタータイプ）

茶髪、茶眼

バイオラングを活性化する為に再生されたが、待機中

ブラキカム・イベリディフォリア（一般人）

灰汁色髪、グレー眼、身長低め

医師、推定年齢300歳以上

ミント・ペニーロイヤル（ファームの民）

萌黄色肌、黄緑色眼

コブ・ケルクス（ファームの民）

深緑肌、黒髪

カナメの親友、推定年齢300歳以上、ミントの先祖級祖父

イブキ・ピラミダリス（一般人）

創造神の異名を持つ、カナメの親友、分解再生装置の開発者の一人、宇宙船ガルダを率いていたが、脱出直後、ガルダは行方不明になっ
てしまう、推定年齢300歳以上

フェリシア・アメロイデス（一般人）

イブキの配偶者、宇宙船ガルダに乗船、推定年齢100歳以上

ラークスパー・コンソリダ

銀髪、アイスグレー眼、老人型

統括担当アンドロイド

ムラサキ

黒髪、紫瞳、女性型

エデュケーショナル担当アンドロイド

トウキ

灰汁色髪、紫目、青年型

セキュリティー担当アンドロイド

アレオーレ（植物） サボテン型

羽あり、テレパシー能力あり

コンピュータナンディ

宇宙船ナンディを統括しているメインコンピュータ

第1話 星降る夜（前書き）

この物語を、私の愛する家族と、自力ではどうすることもできない人生をどうにかしようともがいている人に捧げます。 招夏

第1話 星降る夜

設計図を見ながらモノを作る。船の設計図なら船が、車の設計図なら車ができる。設計図があればどんなに大きな飛行機だって、大海に浮かぶ船だって、人がたくさん働くことができる巨大なビルだって、楽しく快適に暮らせる街だって作れる。

そして…何度聞いても信じられないことだけど、人懐こい目をした柴犬も、ホクホクのジャガイモも、香り高いけど鋭利な棘を持つバラも設計図を持っている。

だから…設計図さえあれば、私だって作ることができる。

……世界は、設計図で溢れている。

* * *

外に出た瞬間、キーンと冷えた夜気が瑞樹^{みずき}を包み込んだ。温暖化が叫ばれている昨今だけれど、冬はやはり寒い。しかも冴えわたった夜空に星がくつきりと見えるような日の夜中は、特に寒かった。放射冷却というやつだ。

ニットのマフラーと手袋はつけてきたものの、その夜の寒気は、ダッフルコートの際かな隙間から皮膚にまでしのびこんで骨の髄まで震えあがらせた。こんなことなら買ったばかりのダウンを着てくれば良かったと、瑞樹は少し後悔する。

月明かりは無い。家の周りは閑静な住宅地になっているので明るいが、少し外れまで行くと田畑が広がっていて、闇が深くなる。闇の中で星座は生き生きと輝く。

「瑞樹^{みずき}？ 一人なのか？」

隣の家から背の高い人影が現れた。

「ん。あれ？ 正樹^{まさき}ちゃんも一人？ 皐月^{さつき}ちゃんは？」

「皐月は全然起きねーよ、ぐっすりだ。だから早く寝とけって言ったのに」

正樹は苦笑した。

「瑞樹はよく一人で外に出してもらえたな。おばさん、付いて行くって言わなかったのか？」

二人は住宅地の明かりが途切れる辺りを目指して、ゆっくりと歩き始めた。

「うん、こっそり出てきたもん」

「おいおい、大丈夫なのかよ？」

正樹がたじろいだ気配が夜の闇に伝播する。

「大丈夫だよ、星見るくらい。なんでもないよ。みんな心配しすぎなんだよ」

瑞樹は肩を竦める。

「まだ私は、そんなに簡単に、死んだりしないし……」

瑞樹はひっそりと笑った。

「……」

正樹が、この闇夜に負けなくらい暗い顔をしたことを瑞樹は気配で察知する。

「……ごめん、冗談」

言っただけ、瑞樹は急に声のトーンを明るく変えた。

「皐月ちゃんに残念だったね。ほら、小さい頃、流れ星を見るって言い張って、随分頑張ってたことあったじゃん？ 三人でずっと空を見上げてて。ママたちがいい加減にしなさいって」

瑞樹はクスクス笑った。

「そんなことあったな。首が痛くなつて、皐月が下向いた途端に星が流れて……あいつ、大泣きしたんだっけ？」

正樹も笑う。

「あの頃は……楽しかったな」

——なんだか年寄りになっちゃったみたい、私まだ十六なのに……。

「その皐月がもう、中学生だ。俺も歳をとったわけだなあ」

「歳とったって、正樹ちゃんまだ高校生じゃん。ねえ、私たちの会話って年寄りっぽいよ？」

「瑞樹が年寄りみたいに昔は良かったなんてゆーからだろ」

正樹は首から双眼鏡をぶら下げている。それがボタンに触れて力チャカチャ音がした。

「その双眼鏡で見れるの？」

「さあな。少しは役に立つかもしれないだろ？」

住宅地を抜けても、二人はまだ歩き続けていた。

もう少し先に行ったところに、川のほとりに沿って作られた小さな公園がある。普段、子供たちさえ見向きもしない程の小さな公園で、明かりもつけてもらっていないので星を見るのにはうってつけだ。

正樹は双眼鏡を、しし座が見える東の方角に向けた。真夜中の二時半、雲がなく月の出ていない暗闇は、しし座流星群を見るのには又とない絶好のチャンスなのだ。と天気予報のお姉さんは言っていた。

「正樹ちゃんがそんなに張り切って流星群を見に来るとは思ってなかったな。皐月ちゃんだけで来るかもしれないって思ってたし……」

瑞樹は意外そうに呟いた。

「俺はロマンチストなんだ」

正樹はうそぶいた。

「ふーん、知らなかったよ」

瑞樹はこっそり肩をすくめる。

正樹は一つ年上の幼馴染で、小さい頃から所謂、ガキ大将と呼ば

れる人種だった。ガキ大将なんて、今の世の中では絶滅危惧種もしくは化石なのではないかと思うかもしれないが、しかし、彼はそうだった。

学校でもあれやこれや人の世話を焼いたり、色々な活動のとりまとめをしたりするのが大好きで、小中高と必ず一度は児童会長や生徒会長をやっていた。目の届く範囲の人たちの世話をし尽くすということに情熱を注いでいる彼は、ある意味でロマンチストなのかもしれない。

——正樹ちゃんは、たぶん、これからも変わらないんだろうな。

人の性格って、早いうちに決まってしまうんだ実感できる人だ。小さい頃、ううん、もしかしたら持って生まれてくるのかも。そう、お母さんのお腹の中で精子と卵子が出会ったその瞬間に決ってしまうものなのかもしれない。だとしたら……私って一体、どんな人間なんだろう。何のために生まれてきたんだろう。

「……なあ、瑞樹、俺、来年大学受かったら、イギリスに留学しようと思うんだけど……」

「えー？正樹ちゃんが行くって言ってたのアメリカじゃなかったけ？」

正樹が父親の会社を手伝うために経営学を外国で学びたがっていたのを瑞樹は知っていた。正樹の性格からするとアメリカの方が合っているように見えるし、確か本人もそう言っていたはずだ。

「アメリカにも行くさ。そのうちな」

正樹はのんびりした調子で言ってから、瑞樹の目を覗き込んだ。

「……でもイギリスだったらおまえも行けるんじゃないかと思うんだ」

正樹は目を逸らして薄く笑う。

「もちろん、それだけじゃないぜ、これからはヨーロッパが出てくる。ユーロが最近強いのは、あんまりニュースとか見ないお前だっ

て知ってるだろ？どこの国に行っても俺にとっては勉強だしな」

「ニューズくらい見るよ。失礼なっ！」

さらに憎まれ口を叩こうとして、言葉に詰まり、瑞樹は下を向いて唇を噛んだ。

——まただ。また正樹ちゃんの悪い癖が始まった。

「私は行かないよ。イギリスなんか行けるわけないじゃん。正樹ちゃん、人の世話ばかり焼いてたら自分のこと何もできないよ。また、正樹ちゃんの悪い癖が始まった」

「なんで行けないんだ？ ガーデニングの勉強したがつてたじゃんか。ガーデニングと言えばイギリスだーってお前言っただろ。もうあの夢はあきらめたんか？ お前飽きっぱすぎるぞ、いつだってなんだって途中で放り出して、逃げ出して……」

「そっいうわけじゃないよ！」

くどくどと続きそうな正樹ちゃんの言葉を遮る言葉だけは勢い良く出てきたが、その後が続かない。

「もし、俺のことを心配しているんだったら、現地でお前の面倒みるくらい、俺の勉強の邪魔にはならないぞ。何を心配しているんだか知らないがな、お前は人の心配をする前に自分のことをまず考える、いつもそう言っているだろ」

正樹ちゃんは真っ直ぐな目で私を見た。

——苦手なんだよね。正樹ちゃんは一度言い出したら聞かないし、押しがメチャクチャ強い。いい加減な言い訳では断りきれない。

瑞樹は心の中で溜息をつく。

——いつかは知れることだ、しかし、このタイミングで話すつもりがなかった。心の準備が……できていない。

「……正樹ちゃん、私、行けない。でも……代わりに……」

瑞樹はぐくりと唾を飲み込んだ。

「もつと遠いところに行かなきゃならないみたいなんだ」

——駄目だ。言葉が震える。私は自分が可哀想でしかたないんだ。弱い人間だから。

でも、自分のなけなしのプライドにかけて、泣き崩れるような醜態だけは晒したくなかった。

「……瑞樹は死なない。大丈夫だ。失くすのは左腕だけだろ。お前は大丈夫だ」

正樹ちゃんの声は少し震えていて、でも深く響くその声は、まるで自分に言い聞かせているみたいに聞こえた。

——暗闇で良かった。私の顔はどうしようもなく歪んでいるにちがいない。

号泣する一歩手前で必死に踏みとどまる。そして心の片隅で冷静に理解する。

——そうか、正樹ちゃんは知ってたんだ。知っててあんなこと……言って……

「ごめん、俺、聞いちゃったんだ。お前んとこの小母さんと小父さんが話してるの。二人とも泣いてた。瑞樹、希望を持ってくれ。そして生き抜いてくれ。その為なら、俺、どんな協力だってするし……」

正樹ちゃんの声はひどく震えていた。

来月、瑞樹は左の腕を失う。もう決まっていることだ。小さい頃から病弱だった瑞樹は色々なものを失ってきた。腫瘍が出来やすい体質なのだそうで、皮膚、腸、甲状腺……トカゲが自らの命を守るために尻尾を切って逃げるように、瑞樹はあらゆるものを切って死から逃げてきた。

「利き腕じゃないけど、腕失くしたら、もうガーデニングは無理だよ。どうやってスコップ持つの？ 結構力使うんだよー」

少し笑って見せる。いかにも作り物めいてる、自分でそう思いながら。

「……それに今度のは悪性らしいんだ。家庭の医学で見たもん」
——もうこれで終わりだろう。私は逃げられない。

一度悲しみに膨れ上がった感情が徐々に収束すると、ひどい疲労感が体中に広がってくる。

「……瑞樹の夢なんだろ。イギリスでガーデニングの勉強するの。あきらめるなよ。最後まであきらめるな」

正樹ちゃんは顔を片手で押さえたまま小さく呟いた。

正樹ちゃんの口癖だ、『あきらめるな』。瑞樹は今までこの言葉でどれほど励まされて、前進してこれたことだろう。瑞樹は幼い頃ひどい泣き虫だった。近所の悪餓鬼にいじめられては泣き、ころんでは泣き、芋虫がスカートにくっついてても泣いた。そんな瑞樹が、なんとか人前で泣かずに前進できるようになったのは、正樹の励ましと、幼い頃まだ健在だった祖父の存在だった。

祖父はいわゆる祖父馬鹿で、何の事でも瑞樹のことを手放しで褒めちぎってくれた。泣き虫であることさえ、

「よう、そんなに涙がホロホロであるの、すごいのお。立派な目じやのお」と褒めてくれた。

祖父は盆栽と菊を育てるのが趣味だったので、瑞樹も植物を育てるのが大好きになった。子供にしては渋い趣味になってしまった娘に、母はちよつと、否、かなり、がっかりしていたようだ。盆栽に没頭している娘にしょっちゅう溜息をついていたから。

唯一、母好みのまま維持されているものと言えば、それは腰まで届く少し栗色がかかった長い髪だけだったかもしれない。

「みことな髪ねえ。昔は黒髪がいつて言われていたらしいけど、このきれいな栗色の髪なら誰も文句なんて言わなかったと思うわ。一体誰に似たのかしらねえ」

母は瑞樹の髪を梳かすのが好きだ。だから私は髪をなるべく切らなかった、たとえショートにしてみたくなつたとしても……。瑞樹が母の為にあげられることなどその程度のことだったのだ。瑞樹は母の心中を察しながらも、祖父と泥だらけになって土いじり

をし、菊の手入れをしたり盆栽の枝を整えたりすることに没頭した。

植物は分かりやすい。水を欲しがっているのか、根詰まりしているのか、肥料が足りないのか、虫で困っているのか、不思議と瑞樹には言葉で会話をしているように分かった。サツキ展では賞をもらったし、菊を栽培しては市の文化祭に出展したこともある。

「いい歳の娘が盆栽だの菊だのって……」

母はいつもそう言って溜め息をついた。別に薔薇とか百合が嫌いなわけではなかった。特に菊が好きなわけでもなかった。ただ祖父の喜ぶ顔が好きだった。

「瑞樹や、お前は天才じゃのう。みてみい。この花つきの見事なこ
と」

九州弁混じりの祖父の言葉はまろく、温かい。

なんの取り柄もなく、病気がちで、心配ばかりかけていた瑞樹にしてみれば、祖父の手放しの賞賛は何物にも換えがたい宝物だったのだ。その祖父が亡くなってもう五年になる。

「瑞樹、祖父ちゃんが生きてたら、なんて言ってくれたかなあ。ごめん、祖父ちゃんほど頼りにならなくて。でも、お前は絶対生きなきゃだめだ。ここまで頑張ったんだし。希望を持てれば、絶対生きられるって、だから……頼むから生きててくれよ」

「……ありがと、正樹ちゃん」

「馬鹿！ありがとなんて言うな」

正樹は本気で怒っているみたいだ。

その時、突然、音もなく、月のない夜空に星が飛び散った。それは数え切れない程で、季節外れの花火みたいに見えた。

「流星雨だな」

正樹が呆然とした声で言った。

「すごいねえ。こんなの、私、初めて見たよ」

この瞬間、瑞樹は諸々の悲しみから一瞬で解放された気がした。
そう、ほんの一瞬だけだ。

次の瞬間、瑞樹は眩い光に包まれていた。
——流星の一つが落ちてきたんだと思った。そこまでしか、私は覚えてない。

眩い光に目を閉じた正樹が次に見たものは、地面の上にふわりと落ちた瑞樹のマフラーだった。

「瑞樹？ 瑞樹！ どこだ？ 瑞樹っー！」

正樹の呼びかけに返答するものはなかった。

* * *

ほうき星が通った後には、たくさんの塵が残されるのだそうだ。その塵は地球の大気とぶつかって流星群になる。たまたま地球の軌道にぶつかって流れ星になって消える塵、ぶつからずに永久に宇宙空間を漂う塵、どっちが幸せなんだろう。私は時々考える。流星になって燃え尽きる方がつらいのか、永久に塵として漂う方がつらいのか。

第2話 宙翔ける船（1）

初めにあったのは、長い時間をかけてゆっくりと堆積した悲しみだった。

それは何千年、何万年も前に自らと共に凍結させられていた、いわば永久凍土のごとくうず高く堆積した悲しみだった。それは雪解け水のように密かに雫となり、やがて小さな一筋の道を造り、小さな川になり、みるみるうちに嵐の後の濁流のように心の中を侵食していった。

カナメは号泣する一歩手前で、目覚めた。

頭の中に浮かんだのは僅かに三つの言葉「ハル」「イブキ」「デイモルフォセカ」。目から涙が流れ落ちる。自分はその三つとも失ってしまった。

赤ん坊は何故、生まれ落ちてすぐ、あんなにも大声で泣くのか。その気持ちが分かるような気がする。失ったものの為に泣くのかもしれない。そうでなければ、失えなかったものの為に泣くのだ、この無限ループを彷徨う僕の魂のように。

カナメは気持ちを収束させることができなかった。

「脈拍、血圧、呼吸ともに乱れ始めました。鎮静剤投入します」
単調で正確な声がする。人が死ぬ直前だってこんな風に何一つ乱れることはないのだろうとカナメは遠ざかる意識の中で思う。

メインコンピューター・ナンディーは、目標を定めるや否や、千名の乗務員の覚醒を命じた。分子レベルまで分解されている人間を再生するのに、ハル標準時間で約一カ月程かかる。再生された体と

心がインターフェースをとる為に、更に一週間必要だ。
その作業が終わるころには、宇宙船ナンディーは太陽系の一番端に到達する。

宇宙船ナンディーには、約一千万人もの人間が、その遺伝子情報のみで搭乗していた。薄暗い照明が灯ったその部屋には、機械が生み出す低いうなり声と、コツコツと響く数名の足音だけが聞こえる。宇宙船ナンディー、再生者回復ルームの中に女が立っていた。年の頃は三十代前半、黒い髪を髷にして結ったスリリとした女だ。女は一人一人を確認するように、静かに再生者を覗き込んで歩いていた。その女に、カツカツという快活な足音で近寄った初老の男がいた。

「ムラサキ、良くない知らせだ」

ラークスパー教授は、その言葉とは裏腹に眉一つ動かさず、冷静そのものの表情でそう言った。

「何か？」

「NO・00153383の再生状態が良くない」

「カナメですね」

ムラサキと呼ばれたその女性は、少し憂いを含んだ表情で答えた。
「そうだ。確か君のお気に入りではなかったかな？」

ラークスパーの表情には何の色も覗えない。からかっている訳でも、同情している訳でもなさそうだった。

「使える人間ですよ。再生状態が良くないとは、具体的にどのような？」

この二人に共通しているものがあるとしたら、表情が薄いという点だろう。ムラサキは無表情に聞き返した。

「人間とは複雑な生き物だよ。いやはや、私の手には負えそうになり。どんなに優遇しようと道を踏み外す、かと言って冷遇しても踏み外す。だからと言って、彼を諦めるのはかなりな痛手だ」

ラークスパーは肩を竦めた。表情の乏しい顔に僅かに薄笑いの色

が浮かぶ。

「カナメを私に任せてはもらえませんか？」

ムラサキは思案顔で言った。

「実はそれを頼みに来たのだ。任せて構わないかね？」

「承知しました」

* * *

瑞樹は光の中を上昇していた。

——暑い、熱い！ 熱い！

瑞樹を包む空気は、一瞬にして炎そのものになったかのようなだった。髪が焦げる匂い。熱くて息が出来ない。

『死んでしまう！』

血が粟立つような恐怖。声にならない悲鳴。そして意識は遠のいて行った。

瑞樹は何かの液体の中にいた。体中に纏わりつくトロリとしたコロイド状の液体。意識はぼんやりとあったが、何も思い浮かばない。自分がどこにいるのか、何をしているのか。

ただ、焼け爛れた皮膚に纏わりつく液体が心地よく、息も苦しくない。

——液体の中に頭の先まで浸かっているのに、どうして苦しくないんだろう。

まるで空気を吸い込んでいるように、穏やかに液体の中で呼吸する。

——考えなくちゃ……。

しかし思考はまとまらず、唯々薄ぼんやりした、不幸ではない幸福の中に漂っていた。

時々明かりがついて、誰かが瑞樹を覗き込んでいるのが分かる。
何をしゃべっているのかは、全く分からない。ただの音、ただの音
節。全く知らない外国語のように頭の上を素通りして行く。
——ここは、ひどく風変わりな病院なのかもしれない……。

第2話 宙翔ける船(2)

「ブラキカム、この子助かったようですね」

黒髪を鬘まげに結って紫色の髪留めを付けたスラリとした女が、赤みがかった金髪の背の低い太った男に話しかけた。

「ええ、ダメかと思ったけど、もち直しましたよ。なかなか生命力の強い子だ」

ブラキカムは、瑞樹の入った水槽に表示されているバイオリズムメーターをチェックしながら言った。

「いつ話せるようになりますか？」

「マダム・ムラサキ、それははっきり言えないな。生命体は機械じゃないからね。治ったら、とでも言っておこうかな。それに言語が全く異なるようですよ。我々の言葉には反応しないから」

ブラキカムは口の片方を持ち上げて笑った。

「まあ、あなたには関係のないことかもしれないがね」

今度は言外に皮肉っぽさが滲み出ている。

それまで黙っていたもう一人の濃い茶髪の男が口を開く。

「でも、大脳コンタクトならすぐに会話できるでしょう？」

「イベリス、今はまだ地球人とそのような接触をするべきではありません。大脳コンタクトをするということは、相互に情報が交換される危険があると言うことです。採取した地球人の情報を分析してみなければ、こちらの情報を開示できるかどうか、まだ判断できません。この地球人は、事故でたまたまこのようなことになってしまっただけで、ここに地球人を置いておく事さえ、既に想定外なのですから。あまり勝手なことをしないようにお願いしますね」

ムラサキは駄々っ子をあやすような口ぶりで言った。

「いつ話せるかって、あなたが先に言っただけですよ？」

イベリスは不満げに反論する。

「話すことと大脳コンタクトは別です」

ムラサキは無表情に言い捨てた。

「言語が違うなら、あなたが話すと言ってるのは大腦コンタクトをすることなんじゃないですか？」

「イベリス、私はあなたがたと違います。お解りだとは思いますが」「分かってますよ。あなたには心がない。だから情報も搾取されないそう言うことですよね」

ムラサキは屈託なく頷いた。

「やめろよ。ムラサキにそんなことを言っただって意味がないだろう？ どうしたんだ、イベリス、早速地球人の女の子をお茶にでも誘うつもりか？」

ブラキカムが茶化すように言う。

「そんなんじゃないですよっ」

イベリスは弾かれたように反論した後、耳まで赤くなった。

「悪いことは言わん。この子に特別な感情を持つのはやめとけ」

ブラキカムは急に真顔になって言った。

「何故です？ この子が地球人だから？」

「それもある。だがな、この子はもうすぐ死ぬことになるからさ」

「どういうことですか？ さっきこの子は助かったとあなたは言いましたよ」

ブラキカムの言葉に動揺してそう訊いたのは、しかしムラサキの方だった。ムラサキの動揺した様子にブラキカムもイベリスも驚く。「どうしたんです？ あなたらしくない様子だな。この子は悪性の腫瘍持ちなんだ。地球の医学ではまず助からないでしょうな」

ブラキカムが静かに言った。

その時ドアが音も無く開いて、白髪に榛色の瞳をして落ち着いた雰囲気の初老の男と素晴らしく美しい金髪を結いあげた女性が入ってきた。

瑞樹は水槽の中で自分を取り囲んでいる人達をぼんやり眺めながら、懸命に考えを廻らせていた。

——なんだろうこの違和感。病院にしては雰囲気が違うみたいだし……。

ふと気づいた事実瑞樹は納得した。

——そうか、分かった。この人たちみんな色が薄いんだ。外国人なんだね。それで雰囲気違うんだ。そうか、そうか。

瑞樹は納得して、再び深い眠りに落ちていった。

「ムラサキ、どうかな、地球人の分析は進んでいるかね。どの程度の文明なのか、どの程度の知能なのか、人口はどれくらいか」

初老の男は、穏やかな眼差しでムラサキを見つめる。

「ラークスパー教授、その前に医師としての私の意見を聞いてもらって構いませんか？」

ブラキカムは、話に割り込むと返事を待たずに続けた。

「地球人と我々は身体的に似ている……というよりもむしろ同じと言っていいですね。体の形状つまり指の数、目の位置、歯の形などから遺伝子を構成する四つの塩基、細胞を構成しているミトコンドリア、ゴルジ体、クエン酸回路、神経伝達方法、速度、脳の構成に至るまでほぼ同じです。骨格や色素の量や聴力の音域、識別できる光線の波長などに多少違いはありますが、これはハルと地球の環境の違いによるものでしょう。気圧や重力や大気の構成などが多少違いますからね。つまり地球人と我々は同じ系統樹に属していると考えてほぼ間違いないでしょう」

ブラキカムはてきぱきと説明した。

「我々の同朋だという意見ですね？　つまり、我々の他の船が着いていたと……」

イベリスは興奮して口を挿んだ。

「その結論は性急過ぎるね。我々は、今やっと太陽系にたどり着いたばかりだ。同朋が既に住み着いていると考えるのはちょっと無理があるだろう」

ラークスパー教授は、少し困ったように言う。

「ラークスパー教授、性急なものにも、同朋ですよ。間違はなく。違う惑星で違う条件で進化しているはずなんです。もし同じ進化の系統樹に属してなくて、ここまでお互いに似ることができたら、それは奇跡と言うんですよ」

ブラキカムは捲し立てた。

「その奇跡が起こったんだとしたらどうするね？」

「ありえませんか」

ブラキカムはラークスパーが言葉を終わる前に否定した。

「ラークスパー、もし他のハルの宇宙船が先に、例えば記録も残らないくらい昔に着いていたという可能性があるのでしたら、対処の方法を考える必要がありますね」

ムラサキが氣遣わしげに問いかけた。

「ムラサキ、それは今後ゆっくり考えるところじゃないか。そんな昔では同朋かどうかの確認さえできるかどうか分からないのだし。何れにしろ、後の決定は上で判断することになるだろう。君達は情報いずの収集と地球環境対応プログラムを進めておいてくれたまえ」

ラークスパー教授と金髪の女性は、先に部屋を出て行った。

「この子は……ハルの医学でなら助ける事ができるのですか？」

ムラサキが瑞樹を見ながら訊いた。

「微妙なところですね、ハルの医学でもかなり高度な医療を施さないとならないでしょう。詳しく調べた訳じゃないので、なんとも言えませんが、最悪の場合、遺伝子にも手を出さないといけないかもしれないな。カナメとイブキが開発した分解再生装置を医療用に改良したんですよ。ついこの前ね、と言ってもハル脱出前ですが……試してみますか？ 地球人の治療の許可をもらえるのならすぐに使えますよ」

ブラキカムが興味津々な顔でムラサキを覗き込んだ。

「分解再生装置を？」

ムラサキは、少し顔をしかめて言った。

「気に入りませんか？ ニシキギという人物を御存じですか？ 彼はなかなか優秀なエンジニアでね。そりゃ、あなたのお気に入り、イブキやカナメに比べれば見劣りはするでしょうが、ちよつとした小細工は得意です。役に立つやつですよ。イブキはこの船には乗っていないんだし、カナメは使い物にならないでしょ？ 仕方がないんですよ」

ムラサキは小さくそうとだけ答える。

ブラキカムは溜息をついた。

「あなたがどうしてもこの地球人を死なせたくないって言うんなら、話は簡単じゃないですか。むしろ、あなたがこんな小娘一人にどうしてそこまで拘るのかそっちの方が気になりますけどね」

ブラキカムが好奇心剥き出しの表情でムラサキを見つめる。

「いえ、大した理由ではないのです。そうですね、この子には何のメリットもないでしょう。私の勘違いです」

ムラサキは急に無表情になって部屋を出て行った。

「おい、見たか？ さっきのムラサキの顔。あんなムラサキの顔初めて見たぜ。なんであの子をあんなに助けたがつてるんだ？ ムラサキでも人の命が惜しいと思ったり、勘違いしたりするのかな？」
そう言いながらブラキカムはイベリスを振り返った。イベリスは何か考え込んでいるらしく反応がない。ブラキカムはイベリスの顔の前で手をひらひらさせた。

「おーい、生きてるかー？」

「ねえ、ドクター、代わりに僕がどうしてもって頼んだら、この子を助けてもらえるように頼んでくれますか？」

イベリスの言葉に、ブラキカムは更に不思議そうな顔をした。

「お前達、何か、どうかしたのか？ この子の親戚か？ いやムラサキに親戚がいるわきゃねーか」

「この子は森の民だ」

瑞樹を見つめたまま、イベリスは呟くように言った。

「森の民？ この地球人がか？」

ブラキカムは訝しげにイベリスを見る。

「……いや、わからない。違つかもしれない。でも、なんでだろう……」

——僕はこの人を助けたい。

イベリスは、心の中でざわざわするものを感じながら呟いた。

「地球にも森の民がいるってことになれば、益々他の船が着いてい
たってことになるんじゃないか？ 彼らはハルでも、かなり特殊な
存在だし……」

ブラキカムは勢い込んでイベリスに問いかけた。

「いや……どうかな。そう念押しされると自信がなくなるよ。僕た
ちは普通なら、お互いが森の民であるかどうかなんて分からないん
だ。なのに何故だろう……僕はこの子が森の民じゃないかと感じる
んだ」

「なーんだ、勘ってやつか？」

ブラキカムは急にテンションを下げて肩を竦めると、先に部屋を
出て行った。

一人瑞樹の前に佇んだイベリスは、今度は小さな声で瑞樹に囁く
ように言った。

「……僕は君を助けたいよ」

第2話 宙翔ける船(3)

アーマルターシュは、すばらしい金髪の持ち主だ。いつもは結わえてひつつめているが、プライベートの時は、見事な髪を滝のように豊かに下ろしている。今はオフだったが、映像ルームで地球人達から採取した記憶映像を寝る間も惜しんでチェックしていた。

アーマルターシュはラークスパー教授の秘書のような仕事をしている。ハルにいたところはフォボスで森の民の管理官をしていた。フォボスは、惑星ハルの三つの衛星のうちのひとつだった。

フォボスに送られてくる森の民は、例外なく法を犯した者ばかりだ。アーマルターシュは刑罰に怯える森の民をてきばきと指示通り依りわけ、監視し、処分した。アーマルターシュは森の民が大嫌いだった。アール・ダー村で、あの光に溢れた村で、ハルの現実も知らされず温々と暮らしていながら、どうして法を犯すのか。腹立たしさばかり感じていた。

地下都市で、あの奈落の底で細々と暮らしていた父と母は早いうちに分解されてしまった、脱出船に搭乗する、それだけの理由でだ。自分だってフォボスでの仕事があれば早々に分解されていたはずなのだ。フォボスでの仕事を得ることができ、今回も早々と再生してもらえたのは、当時から目をかけていてくれたラークスパー教授のお陰だった。

「美しいわ……」

大脳コンタクトのリモコンを自分の脳波にチューニングしながら目を閉じる。この地球人から採取した映像はもう何度も見ていたが、何度見ても飽きる事が無かった。森や川や動物たち、透きとおった水を湛えた湖、雪、雨、雲、空、太陽、星、オーロラ、そして海！

すべてがゆつくりと息づいて、調和して、雄大で、時には恐ろしさで、時には慈しみに溢れていて、五感すべてを刺激する。この人間はそんな自然の中で人生を送っているのだ。

ハルにはそんな自然はなかった。海も雲も雨もそんなのは全て昔話だった。伝説だった。ハルにかつて存在した風景、それが地球では、今、存在する。

地表をジタンに焼かれ、水も大気も地表から失ったハルは、生き残った僅かの人類や動植物を地下都市に養うだけの茫漠とした惑星になっていた。そんな地下生活をも脅かしたのは、ジタンの大爆発だ。ジタンの寿命が尽きたのだ。そしてハルはジタンに飲み込まれた、はずだ。我々はそれを見届けることなくハルを捨てた。いや、一旦は、ハルと共に滅亡したのだ。あの、ハル脱出の時に……。

地球に降り立ちたい。大地に吹く風を、暖かく照らす光を、荒々しく大地を削る海の波をこの体で感じてみたい。アーマルターシユはこの地球人の記憶が好きだったが、逆に辛く感じてもいた。ひどく喉が渴いているのに、目の前の水を飲めない状態。今すぐにも脱出艇に乗り込んで、地球に降り立ちたいという衝動を抑えるので苦しくなるからだ。

もちろん、そんな豊かな自然ばかりの地球ではないことも承知している。戦争をしている国、貧困と飢えが慢性化している国、マネーゲームばかりを重要視する国、他の国を支配する事のみを考えている国。色々な国の様々な事情、様々な地獄。

アーマルターシユはもどかしくなる。

——どうしてみんな地球を見ないの？　こんなに恵まれた惑星をどうして大事にしないの？　そんなことやっている場合じゃないでし

よう？

そして、日に日に強くなる思い。

——私達が貰うわ。そんなに地球を苛めるなら、私達が大事に住むわ。私達が森を川を湖を海を守っていくわ。ハルでだってそうしたかったのよ。私たちのハルをそんな風に大事にしたかったわ。なのに……許せない。

* * *

身近にある大切なもの、それは失くしてしまわないと分らないものなのかもしれない。失くしてから気づくのはとても切ない。それが少しずつ褪せる色鮮やかなTシャツのように、いつのまにか失われていくものだと最初から分かっていたら、失う前から切ない。でも、この世のすべてのものが、いつかは失われていくものだとしたら……そう考えたら、幾分気が楽になる。何故なら、この切なさもいつかは失われてゆくはずだから。

（第2話宙翔ける船 終了）

第3話 エリアE（1）（前書き）

「」は日本語、「」はハル語の設定にしております

第3話 エリアE（1）

瑞樹の水槽の前に黒い人影が立ったのは、随分時間が経ってからのことだった。

火傷は、ほとんど癒えている。覚醒していられる時間が徐々に延びていた。

その人影は、手に持っていた金属の棒のようなもので瑞樹の水槽を叩き割った。トロリと流れ出す透明な液体。飛び散るガラスの破片。

いきなり外へ出された瑞樹は、あまりの苦しさにとた打ち回った。
——苦しい、息が、息ができない！

肺からすべての液体が出て空気と入れ替わるまでの間、地獄のような苦しみが瑞樹を襲った。何度も激しく咳きこんで、やっと楽に息ができるようになった途端、瑞樹は何か袋のようなものに入れられて部屋を出た。

寒くてガタガタ震えながら、瑞樹は何が起こっているのか懸命に考えようとする。その時、頭の中に声が響いた。

『静かに。声を出さないで。私はあなたに危害を加えません』

冷静な声だったが、とても甘やかなその声は耳に心地よかったし、きちんと意味が分かる。

——日本語……だよねえ。女性のような気がするんだけど。

しかし、瑞樹を軽々と運んでいるからには、男性なのか怪力女なのか。

運ばれている間、聞き慣れない言語の会話が何度か聞こえた。瑞樹を抱えている人と誰かが話している声。

——何語なんだろう……。

ドサリと降ろされた場所は、明るい日差しが溢れていた。緩められた袋の口から顔を出すと、サングラスを掛けた黒尽くめの人が、深い緑色の肌を持った大きな人と会話をしていた。

「コブ、この子をしばらくエリアEで預かって貰えますか。理由は言えないのですが」

「マダム、そりゃ誰かね？」

ムラサキは黙ったままだ。

「一度あんに言わなならんち思っちょったが……カナメはわしの手を負えん。ここから出るつもりもなけりや、わしと話す気もおこらんらしい。そげな状態で、また得体のしれんこげな子供を連れてきて、どげするつもりかね？」

「コブ、お願いしましたよ。この子が落ち着いた頃に、また説明に来ます」

無表情のままムラサキは言った。

「マダムの頼みち言うんならしよーがねーけど……マダムは一度メインコンピューターにオーバーホールしてもらった方がいいと思うよ。カナメが変になってしもうてから、マダムもなんか様子がおかしいき」

男は肩をすくめた。

「私なら心配無用です。この子は光を浴びても大丈夫なはずですから、普通の服を着せてやってください。それから、この子は言葉を話せません」

「知恵遅れかね？」

コブが目を見開いた。

「そうではありません。言語が異なるのです」

「言語が……異なる？」

コブは怪訝そうな顔で繰り返した。

「申し訳ないけど、今は説明できないのよ、コブ。時間がないからでは頼みます。このエリア以外には出さないで貰えますか？」

「ああ、わかった」

コブは困り果てた顔をしてムラサキを見送った。

そこは見渡す限り木々が鬱蒼と茂っていた。どこかで水が流れる音がする。深緑色の肌を持つ人が瑞樹に何か話しかけてきた。

「わしはコブち言うんじや。コブち呼んじょくれ。あんたは何て名かね？ 名前も言えんかね」

コブは何度も自分を指してコブと言った。名前だろうと瑞樹は判断する。

「……ミズキ」

同じように自分を指した。コブは分かったと頷いた。頷くのはどこの国でも肯定の意味なんだろうかと疑問に思いながら瑞樹も頷いた。コブということが分かったしるしに。

「ところで、瑞樹、なしてそげなズタ袋にいつまでも入っちよるんかね？」

コブは瑞樹が入っている袋を指さして首を傾げた。瑞樹には、なんだかよく分からないので、首をかしげていると、コブが突然大股で近寄ってきて袋から瑞樹を引っ張り出そうとした。

「きゃーあああ」

森の中に瑞樹の悲鳴が響き渡る。コブは熱く焼けた火箸でも触ったかのように後ろに飛び退くと、大きな手のひらで自分のおでこをバチンと叩いた。

「忘れちよった。服を着せてくれちムラサキに頼まれちよったんじやった」

コブはあたふたとどこからか服を持ってきた。白い上下に分かれた服で、ちよつとブカブカしているけれど、肌触りがサラリとしていて気持ちがいい。薄い生地なのらしく、光が透けて来るようだ。これは肌着を着けていないと拙いだろう。

「あの……下着はないの？」

しゃがみこんだまま、コブを見上げた。コブは首を傾げる。

「し・た・ぎ、これじゃ丸見えじゃない！」

必死に服をつまんで指を透かして見せる。

「ああ、下に着るもんか？ 忘れちゃった。こりゃ、誰か女のもんに頼んだ方が良さそうじゃのう」

コブは女性を連れてきた。萌黄色の肌で丸い大きなライトブラウンアイの綺麗な娘だ。瑞樹と同じくらいの年だろうか。しゃがみこんでいる瑞樹を見て、驚いたように口をポカンと開けたが、すぐに自分の体で瑞樹を隠すようにして建物の中へ連れて行ってくれた。

「私は」と娘は自分を指差した「ミント」これを何度か繰り返す。

瑞樹も同様に自己紹介をする。

オレンジ色のビビットカラーのビキニのような下着を付けると肝心なところは隠れるけどシースルーで体の線がばっちり見える。

——なんだ？ この服。前にチビT着て臍出してたら、はしたないとママにひどく怒られたことがあるけど、これを見たらママはなんて言うかな。

「あなた、おなかが空いている？」

ミントは胃の辺りを指し示す。

「何か食べたい？」

何かを口に入れる真似をする。

そう言えば意識が戻ってから何も口にしていない。おなかが空いているのかいないのか自分で判断できないくらいだ。何か口に入ればわかるかもしれないと、とりあえず頷いた。ボリウムがあるものを出されたら困るなと思いつつ待っていると、ミントは湯気がほっこり上がったスープを持ってきてくれた。

「ありがとう」

ありがたく口にする。

「ミントは食べないの？」

ミントを指さしてから食べるジェスチャーをする。

「私は食べないのよ。ファームの民だから」

首を横に振って否定した。

「ファームの民が食事を摂らないことを知らないなんて、あなた何者？」

不思議そうに興味深そうにミントは瑞樹を見つめた。

何を言っているのかわからない瑞樹は、首を傾げたが、とりあえずスープを飲み始めた。

そのスープは飲めば飲むほどお腹がすいた。最後の一滴まで飲もうとスプーンで集めているとミントが何やら話しかけてきた。

「まだお腹すいてる？ もっと食べたい？」

もっと食べたいかと聞いているようだったので、瑞樹は勢い込んで頷いた。ミントは軽く笑うと、食べ終わった皿を下げて部屋の隅にあるごみ入れの入口のような所に皿ごと放り込んだ。

——えっ？ 皿ごと入れるの？ 割れちゃう……。

瑞樹は驚いて目を見開いたが、別に皿が割れる音はしない。皿もスプーンも吸い込まれるように静かに消えていった。

次にミントは、その横にある四角い電子レンジみたいな形の機械を操作して待つことしばし、呼音がした。中からトレイを取り出すとその上には丸いパンのようなものにペースト状のものが添えられた皿が出てきた。紅茶のような色をした飲み物も付いている。丸いパンのようなものは実際パンだった。真ん中から二つに割るとほかほかと湯気がたって焼きたてみたいだ。ペーストは甘い蜜の味がする。紅茶のようなものは紅茶より刺激の少ないハーブティーのような味がした。

あの電子レンジみたいなものの中から、違う種類の食べ物それぞれに適切な温度で出てきたのが不思議だった。ペーストはほどよく冷えていてパンはホカホカで、飲み物は熱すぎず冷たすぎずの適

温だ。

——あれは電子レンジじゃないのかな？何も入っていなかったはずのレンジの中から手品のように食べ物が出てきた。あんなのうちにも一台欲しいかも。

などと思いつつパンを平らげる。

最初に見た時はちよつと少ないなと思ったけど、小ぶりなパンを二つ食べたところで満腹になった。

「もつと食べたい？」と聞くミントに首を振って否定した。

「ここどこ？ 私、家に帰らないと……パパもママも心配するし……」

ここと指し示して、その後のことをジェスチャーで伝えるのに困ってしまった。ミントは首をかしげてしばらく瑞樹を見ていたが、瑞樹の手をとるところ言った。

「来て、あなたは森を見たいんじゃないの？」

もしかしたら分かってくれたのかもしれない、と瑞樹は嬉しくなつてミントに引っ張られるまま付いて行った。建物の中にあるエレベーターに乗り込むとミントは最上階のボタンを押した。瑞樹は、エレベーター内に書いてあるはずの、行く先階の表示やエレベーターを作ったであろう会社やメンテナンス会社の名前を探したが、どこにも書いていない。それどころか行く先階の数字すら瑞樹には読めなかった。

——何語だろうか？ 数字は世界各国共通のはずじゃなかったかな？ 英国では一回をグランド階、二階から一階とカウントするんだぞ、と以前正樹ちゃんが言ってたことがあるけど、なにこれ、どの文字も読めないよ。

瑞樹がパニックの手前まで行ったところで、エレベーターは最上階へ着いた。一歩外に出るとそこは眩しい光で満ちていた。展望台のような造りになっているらしく、三百六十度の景色を見ることが

できた。ガラスを張っていない展望台には、植物たちが発散する濃密な空気と湿気が満ち溢れていた。そこは緑のジャングルのど真ん中だった。

遠くに隔壁のような白い壁が見えるが、それ以外は辺り一面森で、棟の前方二か所に小さな湖が見えた。

「あなたがいるのはエリアEよ。わかる？」

ミントが瑞樹を優しく覗き込んだ。

「ここ、どこ？ 太陽は？ あれ太陽じゃないよね？」

瑞樹は、太陽と比べるとあまりにも小さな光源を指さす。

「ここどこ？ あなたたち何者なの？ 私、なんでこんなところにいるの？ 家に帰りたい。帰して？ 帰してよ……」

涙が溢れて止まらなかった。

——そうだ、思い出した。すごく寒い日だったじゃない。冬だったはずだ、日本は今冬だ、ここはどこなんだろう？ 私はどうしちゃったんだろう。

「帰りたいよ。夢なら醒めて。私、家に帰りたい……」

瑞樹は蹲ったまま泣いて、泣いて、ショックと疲れで意識を失ってしまった。

第3話 エリアE（2）（前書き）

「」は日本語、『』は脳内共通言語、つまり言語が違っていても意味が通じる言葉という設定です。

第3話 エリアE(2)

『瑞樹、瑞樹、起きてください。瑞樹』

誰かが瑞樹を揺さぶって名前を呼んでいた。ゆっくりと目を開ける。辺りは光が落ちて暗くなっていた。淡い電灯が部屋を薄暗く照らしている。

——なんだ、やっぱり夢だったんだ。ちゃんと言葉分かるよ。誰の声だっけ？

はっと我に返って体を起こす。目に飛び込んできた風景は、瑞樹の部屋ではない。

——夢じゃない？

再び途方に暮れる。

『瑞樹、大丈夫ですか？ コブから連絡を受けて来ました。起こしたくはなかったのですが、私はあまり長い時間ここにいる訳にはいかないのです』

艶のある黒髪を髷にして結い紫色の綺麗な石のついた髪留めをさし、髪留め以上に鮮やかな紫色の瞳をした美しい女の人が、心配そうに瑞樹を覗き込んでいた。

「あなたは誰？」

『ムラサキと人は呼びます』

「……あの水槽みたいな所から私をここまで運んでくれたのはあなた？ 違うよね、いくらなんでもそれは無茶よね。でもあなたの声が聞こえた。運ばれてた時に話しかけてくれた？」

『私が運んだのです、瑞樹。なんでもないことなのです』
ムラサキは微笑した。

「見かけによらず力持ちなんですね」

瑞樹は目を丸くする。そしてふと気づく。さっきからムラサキは口を開いていない。

「あの……私、あなたの言葉が分かるって思っていましたけど、あな

たしやべってます？ あれ、私、変なこと言ってます……よね」

『私は言語を使って話しているわけではないのですよ。さつきからあなたの脳に直接コンタクトしています。だから私は、日本語をしゃべっている訳ではないのです』

「冗談……ですよね？」

——でも……彼女の言葉を、私は耳で聞いているのではないかもしれない。その証拠にムラサキさんの唇は、ちつとも動いていない。

疑問だらけの頭を抱え込む。

「ここはどこなんですか？ 私は何でこんなところにいるのか、思い出せないんです。知ってるなら教えてもらえませんか？ 私どうにかなりそうなんですけど……」

瑞樹は、縋りつくようにムラサキを見つめた。

『私の左胸には認識番号があります』

そう言って、ムラサキは美しい胸元を少しはだけさせて、十桁以上はあるかという文字の刻まれた白い肌を見せた。

『この番号は私自身を示すものです。どんな姿をしていようとこの番号が付いていればそれが私なのです。それが鳥であっても植物であっても、この番号があれば、それは私なのです』

「はあ」

——この国の人は、こんな番号を皆に振ってるのだろうか？

背筋がぞくつとする。

『私は、あなたにあなたである認識番号を認めることができました』
ムラサキはにつこり笑った。

『あなたは、間違いなくあなたなのです』

「はあ」

——さっぱり分らない。

質問に答えてないじゃんと言いたところだが、言っていることがあまりにも分からなかったので、とりあえず言われたことを考えてみた。

自分が自分以外のものではあればいい、と思ったことがないと言え

ば嘘になる。

実はあなたは貴族のお嬢様でしたとか、実はあなたの検査結果は別人のものでしたとか、自分に都合のいいたわいのない空想。

あなたは、実は別人でしたと言われることを期待していた訳ではなかったけど、間違いなくあなたですと言われても少しも嬉しくない。

「私は、私以外の人間だと思ったことはないですよ。私には、そんな番号どこにも付いてないし……」

『そうではないのです』

そう言つて、少し困つたようにムラサキは笑つた。

『あなたに番号が付いているものではありません。でも私には解るのです。あなたが内包しているものが私には解るのです。だからあなたが必要なのです。あなたが解決してくれると私はすぐに解つたのです』

ムラサキの縋るような目が、瑞樹に注がれる。

「あなたの言つてること、さっぱり分かりませんよ。あの、お願いです。私を元の場所に戻してくれませんか？ 父も母もきつと心配してると思うし……私、これは会つたばかりの人にあんまり言いたくないことなんですけど……もう長くは生きてられないんです。骨肉腫が左腕にできてて、手術する予定だったんです。だから、私も少しでも長い時間、両親の側に居てあげたいんです。お願いします。ここがどこかなんて、もうどうでもいいです。もし、あなたが誘拐したんだつて言うなら、それも許します。とにかく家に帰らせてください。私は、ここに居ても何の役にもたたないで死ぬだけだと思います」

瑞樹は、涙ながらに懇願する。

『私は、あなたに助けて欲しいのです』

ムラサキは少し困つた顔になる。

「だから、助けて欲しいのは私の方なんですけど……」

瑞樹は途方に暮れる。

『あなたにならできると思って、連れて来たのです。確かに、あなたに頼むのは、虫がよすぎると言われたら、私には返す言葉がないのですが……』

——この人、どうなってるんだろ、話がかみ合わないし、サッパリ言いたいことが分からないし……虫がよすぎるってなんのこと？

私が助けることができることってなんだろ。それが解決したらいいんだろうか？ 帰してもらえるんだろうか。

「つまり、私があなただけを助ければ、元の場所に戻してくれるんですね？」

瑞樹は諦めたように言った。

『そうです』

ムラサキは安堵したように微笑んだ。

「で、何をしたらいいんですか？」

『ですから、助けて欲しいのです』

瑞樹は眉間に人差し指を当てて唸った。心の中で呟く。

——だーかーらー。

「……何が問題なんですか？」

瑞樹は辛抱強く聞いた。

『それが、解らないのです』

「はい？ 何が問題かあなたに分からないことを、どうやって私は解決すればいいんですか？」

『それはあなたが見つけれなければならぬことだからです』

「ちょ、ちよつと、待ってよ。普通は問題があつて、それを解いて解決で万々歳でしょ？ 問題も分からずにその問題を解けて言われたって、そんなのできないでしょ？ ふつーは……」

『問題は、あなたにしか解らないのです』

「じゃあ、何ですか？ 私はこの訳わからない、文字も読めない、言葉も分からない、どこかも分からないこの場所で、問題を見つけて出して、それを解決しなければならぬと、あなたはそう言ってる

「んですか？」

『そうです。解ってもらえましたが』

ムラサキは鮮やかに微笑んだ。

——いや、分かってないし……

瑞樹は心の中で呆然と呟く。

呆然とし過ぎて言葉もでない。ムラサキは心底ホツとしたらしく、満面の笑みを浮かべている。

「その問題も答えもこの森にあるんですか？」

それくらいは教えてもらわないと。

『そうです。あなたはやっぱりあなたです。ちゃんと解っているのだわ』

ムラサキは嬉しそうだ。ちっとも嬉しくない瑞樹は溜息をついた。「分かりました……いや分かってないけど、やってみます。その前に、あなた、痛み止めとか持ってます？」

さつきから左腕が針で突かれているようにちくちくと痛んでいた。タイムリミットまで、そんなに時間はなさそうだ。自分はこのヘンテコな場所に来てから、どれくらいの時間を過ごしているんだろうか。こんな痛みは前にはなかった。症状が進んでいると言うことなんでしょうか。途端に気分がめり込んでいく。

『腕が痛むのですか？』

ムラサキは眉を顰めた。

「ええ。本当に、私はもう長いことないですよ。問題が解けないで、そこから死んでたら、せめて、死体くらいは家に帰してもらえませんかでしょうね」

皮肉を込めて、瑞樹はムラサキを睨みつけた。

『死体になったら帰っても意味がないでしょう？ それに、協力してくれて成果があれば、私もあなたを助けることができるかもしれませんよ。こんな風にね』

ムラサキが瑞樹の左腕に手を乗せると、腕がふわりと温かくなつた。

『痛みを感じている神経だけを麻痺させておきました。これでもう痛くないはずです』

「麻痺させたって……」

『痛みを感じている部分だけです。普通に動かせるでしょう？』

確かに痛みは嘘のように消えたが、腕を動かすことには何の支障もない。

「腫瘍もこんな風に無くせるの？」

『今の状況では無理です。だから協力して欲しいのです』

「あなた何者？」

瑞樹の問いにムラサキは小さく笑って答えなかった。

『ここはエリアEと呼ばれている場所です。ここは隔壁で囲まれています。隔壁の外へは決して出ないでください。それ以外は自由です。ここにいる緑の肌をした人たちがエリアEの管理をしています。彼らは善良で、忍耐強いのですが、多少排他的なところがあります。何か必要なことがあったら、この管理棟に来て私にコンタクトを取った方がいいでしょう』

——排他的って……

瑞樹は戸惑う。

——それは外国人に対してということだろうか、それとも肌の色の違う人種に対してという意味だろうか……それとも他に何か自分に異分子としての理由があるのだろうか。緑色の肌の人間……そんな人種が世界のどこかにいたのだろうか。

ムラサキは、考え込む瑞樹を無視して説明を続けた。

『食事もこの場所で摂れます。モルキュラーオープン（分子オープン）という機械にナンバーを入れると食べ物が出てきます。これがメニューです』

メニューを見たが、さっぱり分からない。大体の食べ物のカテゴリーをムラサキは教えてくれた。飲み物なのか食べ物なのか、極めて大雑把にだけ。

『残ったものや使った食器は、このダストシュートにすべて放り込んでください。ただし、必要なものを放り込まないように気をつけてください。一度入れると取り戻せません。くれぐれも手をつ込んだりして、間違えて入れたものを取り出そうなどと考えるはいけませんよ』

「手をつ込んだらどうなるんですか？」

何気なくダストシュートの入口を指でついて覗き込もうとしながら、瑞樹が訊いた。

『手も分子レベルまで分解されます』

——ひえー恐ろしい機械ではないか！

瑞樹は弾かれたように指を引っ込めた。

——そんな恐ろしい機械が、世界のどこかに……否、地球上に存在したのだろうか。

疑問とその回答が緩慢な速度で瑞樹を追いつめる。

「万が一間違えて、大事なものを落としてしまったら、どうすればいいんですか？」

『あきらめることですね。あきらめて新しいものを手に入れることです』

ムラサキはふわりと微笑んだ。

瑞樹は訊きたくて、でも怖くて訊けなかったことを聞くことにした。今訊かなければもう聞くことができないかもしれない。

「ここは……日本ではないですよね」

ムラサキは肯定した。

「まさかとは思いますが……地球でもない？」

ムラサキは今度は悲しそうに肯定した。

「ここはどこなんですか？」

ムラサキは答えない。

「私……もしかして、もう死んでしまったんじゃないですか？」

怖かった。この問いにもムラサキは頷くだろうとそう思っていたから。だが、ムラサキは首を横に振った。

* * *

人は大事なものを失くした時、どのような行動をとるのだろうか。嘆き悲しむか、諦めるか、代わりの物で満足するか、見つかる当てがないのになんと探し続けるのか。

その人にその行動をさせるもの、あるいは行動させないものはなんだろうか。環境？ 性格？ 遺伝子？ あるいは……自分でさえ覚えていない遥か遠くからの記憶の欠片だろうか。

（第3話エリアE 終了）

第4話 心の扉を開ける鍵（1）（前書き）

「」は日本語、「」はハル語、「」は脳内共通語です。

第4話 心の扉を開ける鍵(1)

「ムラサキ、呼びましたか？」

キヤメル色の短髪に深紫色の人懐っこい瞳、背は高すぎもせず低すぎもせず、極めて平均的な体型の少年が声をかけた。

「ええ、トウキ。少し困っています。エリアEの例のあの子なんです……」

「ミズキ・ヒュウガですね」

トウキは心得顔で頷いた。

「ええ、時間がないのです。今あの子に死なれては、捕獲した意味がなくなってしまうです。エリアEに連れて行けば、すぐにでも覚醒すると思っていたのですが……」

「揺さぶって、力の解放を促す訳ですね？」

トウキはにこやかに言った。

「お願いできますか？」

「やってみましょう」

トウキは頷いた。

「これは言うまでもないことでしょうが……」

背を向けて去ろうとしているトウキをムラサキが呼び止めた。深い紫色の瞳が振り向いてムラサキを見つめる。

「二度と失敗は許されませんよ」

トウキは、僅かに目を見開いてから苦笑した。

「失敗ですか、手厳しいな。ならば私ではないものを使えばいいでしょう？」

「あなたにしかその機能が付いていないのです。残念ながら……」

ムラサキは苦々しげに言った。

そして、その機能を付加できるものはこの船に乗っていない。否、今となつては、どこにもそんなものは存在しないのだ。トウキを、このトウキをナンディーに搭載させたのには訳があった。ある人間

の為だ。その人間が必要とする時が来る、ムラサキがそう判断した。しかしその人間はここにはいない。いなくなったと言った方が正しいのだが。

「もしかして、私の機能を使って瑞樹を見つけたのですか？」

トウキは、目を細めてムラサキを見つめた。

「その機能だけを使うことも検討したのです。あなたを起動することには、色々と問題がありましたからね」

「それでも私は起動させられた訳ですか？」

「必要だと判断したからです」

ムラサキは無表情で答えた。

「心得ておきましょう」

トウキは言い残すと立ち去った。

* * *

瑞樹は何日も森の中を歩き回っていた。管理棟が見える範囲で行っては戻り、別の方角へ歩いてはまた戻った。何しろ小学生にさえ馬鹿にされるくらいの方角音痴なのだ。管理棟は高くて目立つので目印にしているが、鬱蒼とした森の中に入ってしまったら、あつという間に見えなくなってしまう。

何日も何日もそれを繰り返したが、成果は全く上がらなかった。悪戯に疲労だけが積もって行く。ムラサキに言われたことを何度も反芻する。『私にしか分からない問題』それが何なのかさっぱり分からなかった。

ここの森の植物は少々変っていた。瑞樹の見慣れない植生で、実

際に見たことはないが、どちらかというと温かい熱帯に見られるような大きな葉をつけたものが多いようだ。全般的に葉っぱが多く茂るタイプが多く、花や実がなる木が少ない。人が食料を得るために森を切り開いた様子がなく、それなのに、そこに植物を維持管理する人々が、あの例の緑色の肌をした人達が、常に働いているのだった。

「管理棟」

緑色の肌をした人に瑞樹が話しかける。話しかけられた人は、無言で左の道を指した。瑞樹が最初に覚えたこの国の言葉は「管理棟」だった。管理棟に行きさえすれば、食べることに寝ることに困らなかった。

瑞樹は根っからの植物好きだ。子供の時から植物の気持ちがなんとなく分かる気がしていた。それは場所が変わっても、たとえ見たことないような植物であっても、変わりが無い。それどころか、この植物は接触が増えれば増えるほど、はつきりと具体的に、その要求や植物の感じていることが理解できるようになっていると感じ始めていた。

森での問題は、緑色の肌の人たちの方だった。瑞樹が植物に接触することを快く思っていないようなのだ。食べられる実を採って食べる分には文句を言わないのだが、食べ終わった後の種を、日当たりの良さそうな場所に埋めようとしたら怒られた。

何を言っているのか分からないので、なんで怒られたのかは分からない。怒られていることだけが分かった。その他には、調子の悪そうな下草に水をやっても怒られたし、密集し過ぎていると思った葉っぱを間引いても怒られた。

歩道らしい場所にあった雑草のような草を抜いた時はひどかった、大声で怒鳴られて、肩を強かに叩かれて、「管理棟」という言葉を叫んで帰り道を指された。

恐らく管理棟に帰っているという意味なんだろう。ムラサキさん
といい、緑の人たちといい、ここの人たちの考えていることはサッ
パリ分らない。

管理棟の展望台らしいところから見えていた湖まで足を延ばして
みようと思いついたのは、その日の朝だった。最近、方向音痴の症
状が軽減してきたからだ。というのも、一度通った道がなんとなく
わかるので、戻ることには苦労しなくなってきたのだ。

一度通ったところの植物は通らなかつたところの植物と明らかに
違う雰囲気を感じていた。それはまるで、埃だらけの車のボディを
指でつとなぞった時にできる指跡にも似て、瑞樹にははっきりと区
別することができた。

「面白いねえ、もう少ししたらあなたたちとお話ができる気がして
きたよ。何考えてるのかなんとなく分かるみたい」
クスクス笑いながら植物に話しかける。

そんな瑞樹をファームの民が時々もの珍しそうに見ては、ヒソヒ
ソ話しながら通り過ぎてゆく。瑞樹にはそれがおかしくて仕方ない。
——ヒソヒソ話さなくなつて、言葉が分からないのに。

「緑の人たちよりもあなたたちの話のほうに分かるって変だよな」
独り呟きながら歩きだした。

* * *

銀色の髪は肩に届くくらい伸びていた。髭も伸び放題だ。サング
ラスをかけているので眩しくはないが、光の下に行くと皮膚がすぐ
にチリチリして赤くなる。

カナメは光が落ちる夜間に行動することになっていた。

管理棟に行けば食事もできるし、コブとも話ができる。しかし、カナメはもう何日も管理棟に近づかないで暮らしていた。水は豊富にあるので渴き死ぬことはない、適当に木の実を食べれば飢え死にすることもなさそうだ。それなのに何日も水以外を口にしていなかった。食物を摂取することに心が抵抗する。問題はカナメの心にあった。

もちろん誰とも話す気にもなれない。このまま誰にも見つからずに死んでしまえば、もう再生されることもないだろう。そう考えてから苦笑う。

——ここまで役立たずになれば、誰の前で死のうが再生されないか。望むところだ。

その日、光が落ちる少し前、その湖に行こうとしたのはほんの思いつきだった。今いるところにも飽きていたし、もう少しひらけた空間が見たくなった。ねぐらにしているテントをしょって湖に辿り着いた時、光はまだ落ちていなかった。

森を抜けて急に視界がひらけた時、湖に人影があるのに気がついた。

長い栗色の髪、小柄な女性。

カナメは凍りつく。

——デイモルフォセカ？

女は湖の浅瀬に立っている。ファームの民の服を着ているが、その肌は緑色ではない。

——まさか……

カナメが引つ張られるように前へ出ようとした時、背を向けたまま、その女が叫んだ。

「さっぱりわからない！ 問題ってなんなんだあー」

カナメは歩みを止めて、ぽかんと目を見張る。

――聞いたことがない言葉だ。さっぱり意味がわからない。

いつの間にか付いてきていたアレオーレが横で羽ばたいた。

アレオーレはサボテン種の植物だ。しかし歩き回ることができるし、薄い透明な翅を持っているので、飛ぶこともできる。随分昔、ハルで、デイモルフオセカが萎れかけていたアレオーレに力を使つて動けるようになって以来、常にカナメに纏わりついていていた。

『さっぱりわからない！ 問題ってなんだあー』

アレオーレは、嬉しそうに緑の葉っぱをクルクル振り回しながら飛びまわつて騒いだ。アレオーレの言葉は、耳では聞こえない。頭の中で幽かに響く。

「おい、アレオーレ、今あの女はそう言ったのか？」

カナメの肩にちょこんと乗ると、頭のでっぺんに付いている蕾をぶんぶんと縦に振った。

「おまえ、あの女の言ってることが分かるのか？」

アレオーレは今度も肯定した。

「あいつ何者だ？」

黒い大きな瞳が、やけに目立つ顔立ちで、デイモルフオセカとは全く別人だとすぐに分かった。ただ、デイモルフオセカと同様に、光に耐性のある肌をしている。地下都市の暗闇で長年暮らしてきた一般人は、大半の者がその色素を失っていたが、アール・ダーの光の中で暮らしてきた森の民は、一般人に比べると深い色の肌を持っている。

その女は森の民に似ていた。森の民がこんなに早く再生される理由を、カナメは一つしか思いつけない。そうであるならば、こんな所で一人で自由に歩き回っているはずがないのだ。

カナメはしばらく木陰で様子を見ることにした。アレオーレはパタパタとせわしなく羽を動かしながら湖へ近づいて行った。

瑞樹は、シースルーの上着を脱ぎ捨てるとザブリと湖に飛び込んだ。そんなに暑くなかったが、風がないので寒くはない。何か生き物でもないかと湖の中を探索する。

透明度の高い湖で、水面からも水底にゆらゆらと水草が揺らめいているのが見える。小さな魚の影が見えた。

「さかなー」

瑞樹は嬉しくなって、小さな魚を追いかけ回す。泳ぎは得意なのだ。正樹ちゃんに仕込まれた。皐月ちゃんはもっと上手に泳げる。人魚みたいに。

水の中から急浮上して湖面に顔を勢いよく出した。

——そう……だ、思い出した。私は正樹ちゃんと流星群を見ていた。そうしたら流れ星が自分に向って落ちてきたんだ。

瑞樹は愕然とする。

「私、やっぱり……死んでるんじゃないのかな」

寒くないのに鳥肌がたってくる。

瑞樹は岸に上がると、意気消沈して上着を羽織った。

「ここで石積みしなさいって言われた方がまだ話は簡単な気がするよ」

岸辺で膝を抱えて座り込む。涙が滲んできく。

——どうしてこんな事になったんだろ。じいちゃん、私、死んでしまったのかな、そうなら迎えに来てくれたらいいのに。

泣き出しそうになるのをぐっと堪える。

『石積みしなさい』

頭の中で声がした。びっくりして顔を上げると、緑色の葉っぱに透明な翅を付けた虫みたいな生き物が、頭の上をぐるぐると飛び回っている。

『石積みしなさい』

『石積みしなさい』

何度も何度も繰り返す。

「あなた……何？」

誰かと聞かどうか迷ったが、人ではなさそうだったのでこう訊いた。

『アレオーレ』

その虫は嬉しそうに返事をした。

『アレオーレ』

『アレオーレ』

何度も繰り返す。

「虫なの？」

瑞樹も嬉しくなって問いかける。

『植物！おまえ、失礼！』

『おまえ、失礼』

これも繰り返される。

——植物と話ができた？

瑞樹はどんどん嬉しくなって言い返す。

「おまえじゃないよ、瑞樹、だよ」

『瑞樹』

『瑞樹』

『瑞樹』

アレオーレが瑞樹の差し出した掌に停まった。

「よろしくね、アレオーレ」

『よろしくね』

『よろしくね』

何度も繰り返すので瑞樹は笑い出してしまった。アレオーレは人懐こい野良犬みたいに瑞樹の周りを纏わりついた。

第4話 心の扉を開ける鍵(2) (前書き)

「」は日本語、「」はハル語、「」は脳内共通語です。

第4話 心の扉を開ける鍵(2)

メインデッキとのモニター会議が終わって、管理棟を出たばかりのコブは久しぶりにカナメに出会った。

「カナメ？」

驚きの表情が、すぐに痛ましいものを見るような顔になる。

「ちゃんと食べちやるんか？ 髪でも切ってこざっぱりすりゃ、ちつとは元気が出ると思っくんじゃけど……」

コブは、短く切ったこわごわの髪をぼりぼり掻いた。

「今、食糧を少しばかり分けてもらった」

カナメは低い声で答えると、立ち止まる様子もなく森の中に引き返し始めた。

「やつぱりまだここにおるんか？ 今メインデッキと会議が終わったばかりじゃが、今回見つけた新しい惑星はハルに良う似ちやるという話じゃったぞ。ただ残念ながら先住民がおるき、どうするか悩んじゃるようじゃ。中央に戻らんのか？」

「僕には関係ないからね。先住民がいるんなら、仲良く一緒に住むか、無理やり強奪するか、別の惑星を探すかどれかだろ」
どれにも興味がない。

我々は起源の惑星を捨てたのだ。捨てたのはそれだけではない、その上にいたはずのたくさんの動物も植物も人の想いも、すべて捨ててきてしまった。今さら新しい惑星で新しい生活をやり直すだけの気力が彼にはなかった。

「カナメ……今度の惑星はハルに似ているだけじゃねえんだ。先住民もハル人にそっくりなんだそうじゃ」

立ち去ろうと背を向けたカナメが立ち止まる。

「気にならんか？」

「何が？」

深い紅の瞳が睨みつける。

「ブラキカムつちゅう医者を知っちよるか？ 彼は生物の進化についてもう知っちよってな、違う環境の惑星で生を受けて進化した生き物は、姿形が全く異なることが普通なんだそうじゃ。進化していく過程で取捨選択されていく訳じゃから、同じ選択をする確率はものすごく低くなるんじやと、もしかしたら、爬虫類が進化して文明を持つちよってもおかしくねえんじやちほざいとった。服着てコンピューターに向かっちよるトカゲとか想像でくるか？ わしには考えられんけんがな」

コブは小さく笑った。

「他の船が着いてたかもしれないって考えている訳だね？」

コブの話は長い。要点よりもそこに至る過程が長すぎるのだ。カナメはうんざりして言った。

そんなことがあるわけがないとカナメは溜息を吐く。他の船が着いていれば、それなりの痕跡があるはずなのだ。それが船の発見ではなく先住民との共通点をあげつらうのであれば、それは見つからない証拠ではないか。

同時に六隻の船がハルを脱出した。最初は通信をとりつつ同じ航路をとっていたはずなのだが、結局、この船一隻だけになってしまった。たとえ多少の時期をずらして、その惑星に着いたとして、先に到着した船が見つからない訳がない。

「そう考えるのが自然じゃち、ブラキカムは言っちよる」

「先住民が同じハル人なら、なんの問題もないじゃないか」

「それが、ハルの船が着いたち、証拠の物も無けりや、人の中の記憶にも無いんじやち」

予想どおりだ、カナメは心の中で溜息をつく。

「もう先住民の記憶採取をしているのか？」

コブは頷いた。

——ならば既にその惑星に、相当近付いているのに違いない。

「じゃあ、ハル人じゃないんだろ」

カナメは興味を失ったように立ち去りかけて、ふと思い出したように振り向いた。

「そう言えば、エリアEに変な女の子がいるよね。あれ誰？」

「分からん。ムラサキが連れてきた。面倒見てくれち言われちよるけど、言葉が通じんき、わしも事情はよう知らん。瑞樹ちゅう名前らしい。森の中でムラサキからの頼まれごとをしちよるようじゃ。気にせんでいいき」

ムラサキと聞いて、明らかにカナメの機嫌が悪くなったのに気づいて、コブは首をすくめながらぼそ言った。そうとだけ言つとカナメは森の中に戻って行った。

カナメのムラサキ嫌いはハルにいた頃からの事だ。ハル脱出の時にも、ガルダを守るためにとつたムラサキの行動が、カナメをひどく怒らせた。

ガルダは脱出した六隻の船の一つだ。

悪い人じゃないんじゃが……とコブはいつもムラサキを庇ってきたが、今回の件ではムラサキを庇えば庇う程、カナメの態度を悪化させてしまうようなので、それもやめた。

コブは一人盛大な溜息をつく。

カナメは一人になると、さつきコブが説明しようとしていたことに思いを馳せた。

——他の船が先に着く。そんなことがあり得るだろうか？ 今近づいている惑星はハルにそっくりだと言う。昔のハルか、末期のハルか、どちらに似ているのか、名前は……

そんなことさえ聞いていなかった。

——聞いてどうする？ 新しい惑星なんて糞くらえだ。
一人毒づく。

——大事なものを全部失くしたのに。新しい惑星なんていない。
イライナイ。

* * *

この前とは別の湖のほとりに来た。さっき管理棟で手に入れた食べ物を実験作に口に放り込む。食べなければいいのと思う。そうすれば終わりにできるのに、なのに体が要求する。腹が立つ。食べれば食べるほど敗北感で惨めな気分になった。おまえはそうまでして生きていたいのかと。

背後でガサガサと木を揺さぶる音がした。カナメはハツとして振り返る。奥の方のポモナの木がゆさゆさと揺れるのが見えた。
「なんで、こんな高いところにしか実がついてないんだろ。あーん、採れない。アレオーレ採ってきてよ」

『採ってきてよ』

『採ってきてよ』

アレオーレは嬉しそうに繰り返す。

「役に立たないなあ」と瑞樹が言えば、

『役に立たないなあ』

『役に立たないなあ』とアレオーレも繰り返す。

「しょーがない、登るか」

瑞樹は枝にぶら下がるように手を掛けて登り始める。

『しょーがない、登るか』

『しょーがない、登るか』

パタパタと瑞樹の頭の周りを飛び回る。

「あー、後ちよっと……」

『あー、後ちよっと』

『あー、後ちよつと』

伸ばした手がフルフル震える。ようやく紅く熟れた実の一つに手が届いた。力を込めて引つ張ると紅いモモほどの大きさの実がポトリと手の中に落ちてきた。

やったーと思った瞬間、バランスが崩れた。

「きゃー」

下草になっている低木の上にズササと落っこちる。バキバキと枝の折れる音がして、それきり沈黙した。

アレオーレは、しばらくその周りを所在無げにクルクル回っていたが、カナメがいることに気づいてパタパタとカナメに近寄った。

『瑞樹、落ちた』

『瑞樹、落ちた』

繰り返す。

「そのようだね」

カナメは肩を竦める。

『瑞樹、死んじゃった？』

『瑞樹、死んじゃった？』

アレオーレが、あんまりうるさいので、カナメは渋々生死確認をすることにした。背中から仰向けに落ちたらしい、顔に栗色の髪がかかって表情は見えないが、唸り声が聞こえた。

「大丈夫だ。生きてる」

アレオーレにそう言つと、アレオーレは嬉しそうにまた羽ばたいた。

『瑞樹、生きてる』

『瑞樹、生きてる』

「アレオーレ、お前、この女がそんなに気に入ったのか？」

『瑞樹、好き』

『瑞樹、好き……一緒』

繰り返す。

「何が一緒なんだ？」

『デイモルフオセカ、アイリス、一緒』

アレオーレはそう一言言うと、瑞樹の頭の周りでまたパタパタと飛び回っている。

カナメは息が一瞬止まってしまったかと思う。デイモルフオセカの名前を今まで口にしなかったし、誰もカナメに聞かせなかった。だけど、忘れようとしても忘れられない、その名前……

——アイリスも一緒と言うことは、森の民ということなのだろうか？ いや、待てよ。言葉が通じないのはハル人じゃないということか。まさか、新惑星の人間？ コブはなんと言っていた？ その惑星の先住民はハル人にそっくりだと……そう言っただけだったか？

第4話 心の扉を開ける鍵（3）（前書き）

「」は日本語、「」はハル語、『』は脳内共通語という設定です

第4話 心の扉を開ける鍵(3)

惑星ハルには、一般人の他に緑色の肌を持ち光合成を自らの皮膚で行う「ファームの民」と、見かけは一般人と変わらないが、特殊な能力を持ち植物を操ることのできる「森の民」が存在した。

恒星ジタンの周りを回っていた惑星ハルは、ジタンの終末とともに崩壊した。崩壊直前まで植物を操り、過酷になっていく環境を整え、ハル文明を永らえさせていたのが「森の民」だった。

森の民は短命だ。力を使う時に命を削ってしまうのがその原因だった。アイリスもデイモルフオセカも森の民だった。

——こいつが新惑星の先住民ならば、新惑星にも森の民が？

「いたたたた。やつちゃったよー。子供のころは木登り得意だったのになあ」

瑞樹は腰をさすりながら起き上った。目の前に背の高い怪しい人が立っている。

銀色の髪で、顔がほとんど隠れているので男なのか女なのか、若いのか年寄りなのか、さっぱり分からないが、びっくりするくらい肌の色が白かった。

「誰？」

もの思いに耽っていたカナメに、鋭い言葉が飛んできた。カナメはハッとして瑞樹を見つめる。

「誰？」

「誰？」

アレオーレが繰り返す。

「君こそ誰なんだ？」

カナメはムツとして聞き返した。

「君こそ誰なんだ」

『君こそ誰なんだ』

アレオーレは律義に繰り返して通訳してくれる。

「私は日向瑞樹……だけど……」

『私はヒュウガミズキ……だけど……』

アレオーレが繰り返す。

——あれれ？ この人もアレオーレがしゃべることが分かるんだろうか？　もしかしてこの人は誰でもこの子の言葉が分かるのかな。瑞樹が考えている時に返事が返ってきた。

「僕はカナメ・P・グラブラだ」

瑞樹は確信する。

「あなたもアレオーレと話せるんだ。ここの人は誰でもアレオーレと話せるの？」

勢い込んで確認する。

アレオーレが通訳するのを待たなくてはいけないので、地球の裏側にいる人と電話で話しているみたいだと瑞樹は思う。

「僕は話せる。でも誰でも話せるわけではないよ。君はアレオーレの言葉が分かるのか？」

カナメの問いに瑞樹は頷いた。

森の民の一部は、植物の言葉がわかる。カナメは森の民ではなかったが、植物の言葉を聞きとることだけができる特殊なハル人だった。

「君、どこから来たの？」

あまり長い文章だとアレオーレ通訳では時間がかかり過ぎるので、手短かに話す。

「私は……地球から」

日本からと言うか、地球からと言うか迷って、ムラサキの言葉を信用してみることにした。ここが地球ではないとするならば、どこから来たかと問われれば地球と答えるのが妥当だろう。

「地球？」

カナメが面白そうに笑ったので、やっぱりここは地球で、からかわれただけなんだろうかと瑞樹が思い始めた頃、ムラサキの言葉を裏付ける返答が返ってきた。

「それはどこにあるの？ 君の住んでる国の名前？」

銀色の髪をかき上げると、真紅の鋭い瞳が出てきた。鼻筋が通っていて薄い唇。アニメに出てくる宇宙人みたいだなーと瑞樹は思わず見入ってしまう。

「地球を……知りませんか？」

紅い瞳を呆然と見ながら瑞樹が問う。

「知らない」としばらくの間の後、その人は言った。

「じゃあ、アースは？ テラは？ ガイアは？ それから……」

貧弱な知識の中から、世界中で呼ばれている地球の名前を羅列する。

「一体いくつ名前を持つてる国なんだ？」

あきれ顔で呟くと、

「こっち、来て、面倒くさい」と言って瑞樹の手首を引っ張った。

瑞樹は、カナメに引っ張られながら自問する。

——地球という言葉为例え知らなかったとして、どこかの国の名前と思う地球人がいるだろうか。

頭の中で、43パーセントがYes、44パーセントがNo、13パーセントがよく分からない、と色分けされた円グラフが浮かんだ。

湖の側にテントのような半月形の小さなドームがあった。瑞樹は手を引っ張られたままドームの中に入る。

「ここで暮らしてるの？」

肩に留ったアレオーレが通訳してくれる。カナメは首を縦に振った。

肯定の仕草は地球と同じだ。コブやミントの時にわかっていた。

カナメの住居は実に簡素で何もない。奥に打ち捨てられたように小さなラジオのような機材や工具らしいものが落ちていた。

——これi pod？ じゃないよねえ。

瑞樹が一人呟くと、カナメはそれを拾い上げてヘッドホンのように自分の頭に取り付け、もう一つの同じものを瑞樹の頭にも取り付けた。スイッチを入れると、瑞樹の頭の中に声が聞こえてきた。

その声は、アレオーレやムラサキさんがしゃべっている時のように頭の中で響いた。

『見せてよ。地球を……目を閉じて』

瑞樹は、ごくりと唾を飲み込むと目を閉じた。

『ひゃあ！』

目を閉じただけのはずなのに、瑞樹はいつの間にか自分の家の前に立っていた。

『帰って来たの？ 私……帰れた？』

呆けたまま辺りを見回すと、すぐ横に背の高いカナメが立っている。

『ひゃあ！ ああああなた、こんな所まで付いて来たの？』

カナメも周りを見回している。

『これは君の記憶の中のイメージだ。実際にそこにいる訳じゃないよ。君が頭の中で思い出した記憶が鮮明に見える。だから目を閉じてはつきり思い出して……』

そう言われて、瑞樹は必死に思い出そうとする。遠くの景色や周りの木々が、前よりも鮮明になってきた気がした。

『ここが地球？』

カナメは瑞樹の家を見て、その隣を見て、さらに通りを見て、さらに遠くの山を見た。空を見て、太陽を見て、木を見て、家の前の舗装されたアスファルトの道路を見た。

『ここが地球？』

カナメは瑞樹の目を見て繰り返す。

『地球……だけど、日本の、私の家の前だよ。地球は惑星の名前、その中の日本という国に私は住んでる。だから、そんなに、いつも自分が地球にいるなんて考えたことなかったよ』

『空気が違う、なんだか嫌な匂いがする』

カナメはくんくんと匂いを嗅ぐ。

『なんか焼いてる匂いするね。冬のはじめの落ち葉たきだと思うよ。本当は最近外でゴミを燃やしたらいけないらしいんだけど……どっかの人が燃やしてるんだろうね』

匂いまでリアルだ。

『燃やす？ 落ち葉を燃やすの？』

カナメは訝しげに訊いた。

『そう。他のものを燃やしたらダメなんだよ。有毒ガスが出る場合があるからね。ここでは葉っぱは燃やさないの？ 緑の肌の人たちは落ち葉とかを集めて籠に入れてるのは見たけど……あれ、どうするんだろ？』

——腐葉土でも作るのか？

『燃やさない。燃やしてはいけないから』

『ふーん、じゃ、ゴミはどうするの？』

『ゴミって何？』

カナメは怪訝そうに問い返した。

『ゴミって……要らなくなったもの……かな？』

『必要がなくなったものという意味なら、全て分子分解して再利用する』

『ひゃー、エコロジーだねえ。早いとこ地球にきて掃除してくれたらいいのに。地球は大助かりだよ。その時はついでに私を家まで連れてってくれると助かるんだけどなあ。宇宙人なら宇宙船とか持ってるんでしょ？』

半信半疑のまま、ここが異星人の星だと仮定して、冗談めかして

言つとカナメはびつくりしたように瑞樹を見た。本当に僕たちが宇宙人だと思つてゐるの？ とかなんとか言つてくれることを心の半分で期待する。

『僕たちが地球に行つても構わないの？』

笑いで返されることを半分期待していた瑞樹は肩透かしを食らつてうろたえる。

——おお！ 大真面目だ。マジヤバくない？

『そうかー、構う人がいるだろうね。エイリアンっていうのは大抵悪者で、地球を侵略しに来るものだもんね。あなたたちも今いる地球人を滅ぼしてから地球を乗っ取ろうとか考えてるくちな？』

不安になつて少し泣きそうな気分だったけど、それでも軽くないなして、窺うように紅い瞳を見上げる。

『さあね、僕には分からないな』

カナメは不機嫌そうに言い捨てた。

『そ、そうだろうねー、こんな所でテント暮らしやつてるおっちゃんに分かることじゃないよねー』

最後まで冗談にしてしまいたい瑞樹が必死にたいたいた軽口に、カナメはストレートに反応した。パシッと小気味よい音がして頭をはたかれた。

『いたっ！ 何すんのよ！ 叩くことないでしょお？ あのね、いいこと教えてあげようか？』

『知らない』とカナメは言つたけど、瑞樹は構わず続けた。

『人間つてね、本当のこと言われたら怒るんだつて。じいちゃんが言つてたよ。宇宙人だかなんだか知らないけど、同じじゃん！』

思いつきりむくれる。

『もう少し遠くから見た映像ないの？ 地球の全体像が分かるような』

『地球に住んでるんだよ。そんなの分かるかい……つて、待つて、ついこの前テレビで見たよ。月から撮影した地球だつてニュースでやつてた。そんなのでもいいの？』

『いいよ』

『こんな感じ……』

その時のニョースを思い出す。

月の地平線から登る地球と沈む地球、白黒の月面から見る極彩色の地球は、まるで過去から現在を見ているように、鮮やかに丸く浮かび上がっていた。

『この手前の灰色の地平線は何？』

『これは月から見た地球なんだって……あ、月は地球の周りを回っている唯一の衛星だよ。ボコボコのクレーターだらけなんだって地球から見たらこんな感じ』

今度は、地球から見る月を思い出す。

『国によつて違うらしいんだけど、日本って私が住んでる国ではね、お月さまでウサギがお餅ついてるってお話があるんだよ。月ってね、常に同じ面を地球に向けてるんだって、そももって、その見える方の月面の模様がウサギがお餅ついてるように見えるの。私、子供のころは本当にウサギさんがいるんだって信じてたのに、ウサギどころか空気もないで学校で教えられて、ガッカリしたよ。ま、いくら私でもウサギが餅をつくとは思ってなかったけどね』

カナメは無表情を必死に装って、心の動揺をひた隠していた。地球は惑星だった。それもハル……昔のハルにそっくりだ。しかしハルには衛星が三つあった。ルシフェルとウエスペルとフォボス……どれも地球の月とは全く似ていない。

——この子は自分の出自を地球だと名乗った。それならば、ここが地球ではないことを知っているのだ。

——要警戒。

カナメは心のシールドレベルを上げる。

——誰かがこの地球人に接触して情報を与えている。誰が？ もし

地球から送り込まれたスパイならば、意識のある状態の彼女がここまで簡単に地球の情報を明け渡すだろうか。

そうであるならば、この女の記憶自体だって本物だという保証はない。

『ねえ、聞いてる？』

『うん？ああ聞いている。ウサギと餅がなんだか分らなかったけどね』

カナメは用心深く瑞樹を見下ろした。

『ウサギは耳の長い動物、餅はもち米をついて作る食べ物です、他に質問は？』

上の空っぽいカナメに、瑞樹はガミガミと説明する。ほんの一瞬、カナメの考えていることが瑞樹の頭の中に入ってきていた。

それはほんの一瞬で、流れ星のように定かでなかったけど……それはとても切ない感情だった。

——ハルへの思慕？ 失った哀しみ？ なんて切ない。

たくさん泣いて鼻の奥が痛くなったときに嗅いだ夕方の匂いみたいだ。

——ハルって……この人たちが居た惑星なんだろうか。失ったって、どうして？

『ねえ、あなたたちが居たっていう惑星を見せてよ。これって一方通行の映像じゃないんでしょ？』

それを見れば、ムラサキの言葉もカナメの言葉も信じられる気がする。

『だめだ』

カナメは冷たく拒否した。

『なによ、ものすごいケチじゃん。地球だって見せてやらなきゃ良かった。もったいない、損した』

悲しみにも似た怒りがこみ上げてくる。なによりもカナメの豹変ぶりが腹立たしかったのかもしれない。

いい人かもしれないと思って話をしていたら、何かのセールスだったと気付いた時のような……そんな裏切られた気分だったのだ。「いりません」と答えた途端にセールスマンが纏う空気のように、器械を通して伝わってくるカナメの心の波動が、突然金属にでも変ったかのように冷たくなったから。

『君から情報を貰わなくたって、いずれ見られてたよ』
カナメは無表情に言った。

『こーんな森の中にいて、そんな情報を誰から貰うんですかねえ』
瑞樹はムツとして厭みたらしく言い返した。二人してしばらく睨みあう。

『君、ムラサキから何を頼まれてる？この森で何をしてる？』
探るような紅い瞳が瑞樹を睨みつけた。

『いーっだ、絶対、教えないよー』

教えようにも教えられないのだと素直に言える状況ではなかった。瑞樹は頭の器具を引きはがすとドームの外へ走り出た。あっけにとられたカナメは一人テントの中で呆然と瑞樹を見送った。

第4話 心の扉を開ける鍵（4）

ハルの宇宙船ナンディーは月に着陸していた。月の南極付近、永久影の中に船はひっそりと隠れていた。ここならば地球の月探査衛星の目もかわせるし凍りついた水もある。

「なあ、イベリス、あの地球人の女の子が消えたって聞いたか？」

ニシキギは氷を切り出しながら宇宙服の中からくぐもった声で訊いた。

「ええ、聞きましたよ」

宇宙服の中は適温に保たれているとは言え、氷を切り出す作業で汗だくだ。温度調節機能が労働で生じる温度変化についてこれないのだ。だからと言って宇宙服を脱ぐわけにはいかない、空気も薄いし、外はマイナス二百度だ、一瞬で凍ってしまう。

「どこに行ったんだろうな」

「さあ、ナンディーの中にいるんだろうから、そのうち見つかるでしょう？」

イベリスはこのニシキギという人物があまり好きではない。薄い金髪に冷たい青い目をしていて、どことなく寒々とした印象を受けるし、周囲の人からもあまりいい噂を聞いたことがない。

自分の気に入らない者を排除するのに手段を選ばないとか、配偶者をとつかえひつかえしているとか……確かめたわけではないが。

宇宙船の中は目覚めさせられている人が少ないせいで、慢性的な人手不足となっていた。氷の切り出しという極めて不本意な肉体労働に選ばれたのも運が悪かったが、ニシキギと一緒にいうのもイベリスにとっては運の悪いことのとんでもりだ。

「君、本当に知らないのか？」

疑り深そうにニシキギはイベリスを覗き込んだ。

「本当に知りませんよ」

汗が背中を流れていくのがわかる。早いところ切り上げてシャワーを浴びたいところだ。

「君、森の民だって本当なのか？」

イベリスはびくりと手を止めた。

「そんなことを聞いてどうするんですか？」

表情が強張っている。

「そんな怖い顔をするなよ。単なる好奇心だ。俺の周りにはいなかっただけだから」

ニシキギは片方の口の端を持ち上げて笑った。

「僕はリセプタータイプなので、今は森の民ではありません」

イベリスは呟くように答えた。

森の民には力を使えるタイプが三通りあって、それぞれ『オリジンタイプ』、『マルチタイプ』、『リセプタータイプ』と呼ばれる。

オリジンタイプは植物を操る力を持っているものの自分の意志で力を出せないタイプで、植物からの要求で力は勝手に消費される。よってこのタイプはしばしば傀儡と揶揄されることがある。

マルチタイプは力の源でありなおかつ自在に自分の意志で力を使えるタイプで、リセプタータイプはオリジンタイプもしくはマルチタイプの力を被曝することによって力が見えるようになるタイプだ。

ハルを脱出する際、人類は一旦すべてが遺伝子情報と記憶情報のみを残して、分子レベルまで分解された。その後、必要な人間が必要だけ再生される。今回も必要とされる人員が再生された。

その中に、森の民のオリジンタイプとマルチタイプは含まれていない。そして今後、この二つのタイプが再生される予定はない。何故なら、この二つのタイプは再生できないからだ。再生してもすぐ

に死んでしまふ、力を数時間で使い果たして。

力を被曝しないイベリスには森の民としての能力はない。今回イベリスが再生されたのは森の民の力が必要になりそうだった為だが、まだ呼び出しを受けていなかった。呼び出されれば、ある方法を使つて力を被曝させられるはずだ。

ソーマは魔薬だとイベリスは思う。ソーマのマーブル色をした種を、ある液体に入れると溶解して乳白色の霊薬ソーマができあがる。それを飲むとイベリスのようなりセプタータイプの森の民は力が使えるようになる。

ソーマを飲んだ時の高揚感と恍惚感を、イベリスは忘れることができない。前回力を使うために飲んだ時はそのままフラフラとエリアEを歩き回ったことまでを覚えている。

力を使い果たしてしまうまでイベリスは何かに憑かれたように歩き回った。そしてエリアEの森は元気を取り戻し、イベリスは再び分解された。

ソーマの白い種には森の民の力が吸収されている。

ソーマの種は二種類ある。黒曜石のように黒いものと、大理石のように白いものと。

黒い種は森の民の力を吸い取る力を持っていて、黒い種に森の民が触れると地上に落ち、白い花が咲く。白い花は白い種を結ぶ。力の強い人で4、5粒、弱い人なら1、2粒の白い種を实らせることができる。つまり森の民は黒い種を手にした瞬間に命を吸い取られてしまうのだ。一方、白い種は地に蒔けば青い花を咲かせ、たくさん黒い種を結ぶ。

ハルを脱出する前にソーマの黒い種は森の民の命をすべて吸い取った。

一体、いくつの白いソーマの種があるのか、イベリスたち森の民は知らされていない。

ソーマの種を使う時に感じる嫌悪感や後ろめたさは、これに由来している。「共食い」そんな言葉がイベリスを苦しめる。リセプタータイプならばまだ救いがあった。再生ができる。

その他のタイプは、力を吸い取られるだけ吸い取られて再生ができない。救いがない。どうして森の民だけがこんな辛い立場に置かれるのかイベリスは納得がいかなかった。

イベリスはこれまでエリアEの植物への力の注入の為に二回再生された。そして用が済めば再び分解される。人をなんだと思ってるのかと言いたいところだが、エリアEはこの船のバイオラングだ。エリアEがダメになれば自分の身だって危ういのだ。仕方がないことだと今では諦めている。今のところ用が無いから氷の切り出しなんかを手伝わされている。これも仕方がないことだと溜息をついてやり過ごす。

「なあ、君、デイモルフオセカ・オーランティアカって知ってるか？」

イベリスの溜息などお構いなしでニシキギはしゃべり続ける。

「デイモルフオセカなんて名前、珍しいと思うんだが、森の民にはよくある名前なのか？」

「あまり聞きませんね」

イベリスが知っている近所のお姉ちゃんがデイモルフオセカだった。それ以外は知らない。そしてそのデイモルフオセカはオーランティアカ家の二女だった。

「じゃあ、その子のこと知らないか？」

「知ってますよ。なんでデイムのことを知りたいんですか？」

イベリスは怪訝そうにニシキギを見上げた。ニシキギは背の高い男で一九〇センチはある。恐らく他人を見上げたことなど滅多にな

いだろう。

「どんな子だった？」

「いい人でしたよ。優しくて。他人のことばかり心配してる人だった」

イベリスは用心深く答える。

ディムには、小さい頃よく面倒を見てもらった。姉御肌的な人ではなかったが、思いやりが深く、人の痛みをよく分かってくれる人だった。ニシキギなどの口からその名が出たことにさえ嫌悪感を感じてしまう。

「でも、法を破って地下都市に潜入したって聞いたぜ？」

ニシキギは意地悪そうに笑った。

ハルでは森の民はアール・ダー村から勝手に出てはいけないことになっていた。地下都市に勝手に行くこと、それは即ち法に触れることになるのだった。

「事情があつたんですよ……」

怒りで声が少し震えてしまった。イベリスがディムの行動の肩を持ってしまふのには訳があつた。

「行方不明なんだって？」

「フォボスで死んだって聞いてます。行方不明だと言う噂も聞きますけど……フォボスで母が一緒だったって言っていましたから」

イベリスはだんだん不機嫌になってくる。

「君のお母さんが？」

ニシキギは手を休めてイベリスを見つめた。

「ええ、母は……フォボスで死にましたから」

この話をするのは本当に嫌だ。

母はフォボスで死んだ。刑罰を受けた為だ。母も、ディムだってハル政府の制度の犠牲になったんだとイベリスは思っている。母のやったことは確かに許されないことだけど、大人になった今、イベリスは母を責める言葉を思いつかない。気持ちがかかるからだ。

当時、大半の者がそうであつたように、イベリスの父と母も政府が決めた夫婦だった。イベリスが初等部に入つた年、母は自殺しようとして誤つて父を殺してしまった。

母から取り上げようとした包丁が父の命を奪つたらしいと後で母方の叔父から聞いた。事件はイベリスが初等部に行っている間に起きた。帰つて来たイベリスが見たものは、リビングに広がる夥しい父親の血と……その中で、逃げもせず泣きもせず真白な顔で震えていた母の顔だった。

普段なら父親とイベリスの為においしい料理を作っているはずの包丁が父の胸に深々と刺さっていた。

母は絶望したのだ、父に離婚を切り出されて。

あの日の事を思い出すと今でもイベリスは頭の中が真っ白になる。

不機嫌な顔で黙々と氷を切り出し始めたイベリスにニシキギはそれ以上のことを訊かなかった。ニシキギはデイモルフオセカ・オーランティアカとカナメの配偶者デイモルフオセカ・グラブラが同一人物ではないかと疑っていた。

イベリスの証言を聞いてなお、ニシキギはその疑いを晴らす気にはならない。ハル政府の下では、森の民と一般人が婚姻することは禁止されていた。ニシキギにとってデイモルフオセカ・オーランティアカは、彼の人生のターニングポイントにたまたま居合わせた人間だった。もっとも彼女はそのことを認識しているはずはないのだが、それでもニシキギにとっては心に刻みつけられた痣のように消すことができない人物だった。

そして、そのデイモルフオセカの情報があのカナメの弱みを握る為の材料になるかもしれないと気付いた時、それを利用する場面を想像してニシキギは高揚した。

今はまだいい、カナメは使い物にならない。このままの状態が続くのなら特に利用価値のない情報だ。ニシキギは薄く笑うと作業を続けた。

第4話 心の扉を開ける鍵（5）（前書き）

「」は日本語、「」はハル語、「」はダイレクトコンタクト語という設定です

第4話 心の扉を開ける鍵(5)

イベリスは手早くリフレッシュメントでシャワーを使うと、食事をとる為に厚生棟へと向かった。時間的に随分遅くなったからか、厚生棟のランチルームには、まばらにしか人がいなかった。イベリスが座る場所を探していると、ブラキカムがいることに気づいた。

「隣、いいですか？」

「もちろん」

ブラキカムの薄い褐色の瞳が悪戯つ子のように輝いて微笑んだ。

「ドクターは随分遅い食事なんですね」

座りながらイベリスは話しかける。

「いつもこんなもんだぜ。おまえこそどうしたんだ？ 随分疲れているようだが、俺の診察を受けたいなら、一時間後にしてくれよ。しばらく戻らないからな」

「ただの疲労ですよ。診察は無用です。クレーターの中の氷を切り出す作業をやったんです」

「おおラッキーボーイだったか。お疲れさん。で？ 地球は見られたか？」

「見えるわけないでしょ、永久影の中の作業なんですよ？ 今度ドクターもやってみるといい。零下二百度の中で汗だくになるなんてなかなかできない経験ですからね」

「残念ながら、俺は患者を見るので手一杯だ」

ブラキカムは全然残念じゃなさそうにニヤニヤしながら言った。

「……カナメさんはいつ戻ってくるんですか？ 再生……されたんですよね？」

「カナメ・グラブラ？ さあな、分からん。マダム・ムラサキに任せてある。復帰は無理かもしれない。何故だ？」

「となると、今後も技術的なことはニシキギがやることになるんで

しょうね」

イベリスはがっかりしたように溜息をついた。

「ニシキギは気に入らんらしいな」

ブラキカムはニヤニヤしながらイベリスを見つめる。

「あの人が指揮をとり始めると、途端に嫌な雰囲気が漂うんです。協力する体制が崩れて、他人を出し抜こうとか、自分だけ上手くやるうとか、逆の場合だと自分は何をしてもダメだから、もうどうでもいいやとか……調和が乱れます」

「カナメがそんなに上手く人をまとめあげてたか？ あいつはどこからかと言うと人間嫌いでスタンドプレーが好きだったと思うが……」
「それでも、カナメさんは誰の言うことにも分け隔てなく耳を傾けました。事に当たっても正確に見極める人でした。カナメさんが上手くできないというか……興味のない所は、周りがカバーしようって協力する体制も自然にできてました。ハルにいたころは、それでうまくいったんです」

何よりも、イベリスがカナメに肩入れをしてしまうのは、森の民を「力」としてではなく、「人」として脱出させようと尽力してくれたことが、その理由かもしれない。ソーマの白い種にして持ち出すのではなく、森の民を、ファームの民と一緒に、エリアEで暮らせるようにしたいのだとカナメは言った。

結局、それは叶わなかったけれども……。

「カナメにとって都合の良いことと、君にとって都合が良いことが、たまたま一緒だっただけかもしれないよ？」

ブラキカムは意味ありげに言う。

「そうでしょうか……」

——僕にとって都合のいいこと、カナメさんにとって都合のいいこと……

イベリスは考えながら、皿の中身をたいらげていく。

「……ニシキギだって、そんなに悪いやつじゃないさ。ちょっとあ
くが強いくらいのもんだ。そう嫌わないでやってくれ」

しばらくして、ブラキカムは少し寂しげな様子でそう言った。

「ドクターはニシキギと仲が良いんですね。もしかして、僕が地球
人の女の子を助けて欲しがってたことをニシキギに話しましたか？」

ブラキカムがニシキギの肩をもつことを想定していなかったイベ
リスは、少しむっとして訊いた。

「あー、話したかもしれないなー。なんか言ってたか？」

「逃がしたのは僕じゃないかって疑ってました」

イベリスはむっとした顔で言う。

「君じゃないの？」

ブラキカムはおどけて目を丸くした。

「違いますよっ！」

イベリスは怒って立ち上がると、トレーをダストシュートに放り
込んで立ち去った。ブラキカムは面白そうにイベリスを見送ると肩
を竦めた。

* * *

瑞樹は、カナメのテントから逃げ出した後、管理棟へと向かった。
管理棟でムラサキとコンタクトをとろうと考えたからだ。カナメと
いう人物について聞いておきたいことがあったし、緑の人たちが自
分の何に怒っているのかも知りたかった。

ところが、管理棟の前に見知らぬ男が立っていた。キャメル色の
柔らかな髪に人懐っこそうな深紫色の瞳。その人は管理棟の前
に立って、瑞樹を認めると優しげに微笑んだ。

『瑞樹だね』

その人の声は、ムラサキの時のように完璧に理解できた。アレオ
ーレの幽かな言葉とも違う、カナメのあの機械を使うよりもっと
鮮明に頭の中で響く。

「あの……あなたは？」

『僕はトウキ。ムラサキからの伝言があるんだ』

「ムラサキさんからの？」

瑞樹は期待に胸を膨らませる。もしかしたら、勘違いだったから
家に帰しますとかじゃないだろうか。どう考えても、この森で自分
が解決できることなどありはしないだろうと感じ始めていたからだ。
『ここでは不都合だから、中へ入ろうか』

トウキはそう言う与管理棟の中に入って行った。

トウキの後ろについて歩きながら、瑞樹はある違和感を感じてい
た。ムラサキの時にも感じていたことだが、それはムラサキ独自の
個性なんだと思っていた。だけどこの人にも何か共通した雰囲気を
感じていた。それは……存在の希薄さのようなもの。

表情の乏しさとか匂いのなさとか体温の低さとか（実際に触った
訳ではないが……）が、他の人たち、ミントやコブやカナメなどと
は違う気がするのだ。

『どう？ ムラサキからの課題はクリアできそうかい？』

管理棟の一室で、トウキは訊いた。

「さっぱりダメです。どうしても問題がわかりません。何が問題か
さえ分からないんだから、当然解決策もない訳で……なにかヒント
のようなものはもらえないんでしょうか？」

トウキはキラキラ光る瞳で悪戯っぽく瑞樹を見つめていたが、や
がて苦笑した。

『全く？ 全く何も感じない？』

「何かを感じろって言われてたんですけどっけ？ 私、何が問題かは

何も感じませんよ、でも……」

『でも、何？』

「この植物のことなんですけど……もしここが本当に地球ではなくて、これから地球に行こうとか考えているんなら、この植物は太陽光を当てない方がいいと思いますよ」

『それはどうして？』

「なんだかうまく言えないんだけど、枯れるような気がする。ここは暖かい気候な割には光度が弱いですよ。私が住んでいた日本という国は温帯に属していて、中くらいの気候、つまり暑すぎず寒すぎずの国だけど、ここよりはずっと光線が強いですよ、たぶん。だから、太陽光線はこの植物にはきついんじゃないかって、それくらいかな、感じたのは……」

『君がそう言うのならそうなんだろうね』

トウキは微笑みながらそう言う。

「信じるの？」

すんなり受け入れられたことに逆にびっくりする。なんでそんなことが分かるのかとか、調べたのかとかつつこまれると思っていた。

『嘘なの？』

瑞樹は首を横に振る。嘘をついたつもりはなかった。そう感じたのは本当だったから。

「あの……ムラサキさんはなんて？」

この人はムラサキの言葉を伝えに来たのではなかったか、ふと思いついた瑞樹は訊いてみる。何故か、さっきから心の中がざわざわして居たたまれなかった。何かが頭の中で勝手に動き回っている感じ、落ち着かない。

『何か必要なものはありますか、とのことだよ』

トウキが微笑みを湛えたまま言った。

「それだけ？」

瑞樹は呆然とする。

『それだけだよ』

瑞樹の心の中で失望がじわじわと絶望に変わっていく。

「……必要なのはヒント、問題、解答よ！ 私を家に帰して。お願い帰してください」

瑞樹は泣き出した。何故か自分をうまく抑えることができなくて心が暴走する。いつもなら、こんな場面で、会ったばかりの人の前で泣くような自分ではなかったのに、まるでひびが入ってしまったグラスのように涙が止まらなかった。嗚咽さえ止めることができない。

『扉は開いた。後は君次第だ』

謎の言葉と微笑みを残してトウキは部屋を出て行った。

彼が出て行ったと同時に瑞樹は号泣した。どうしてなのかは分からない。何かが心の中から溢れ出して止まらなかった。

* * *

人の記憶は曖昧なものだ。今自分が見ている景色だって、隣で見ている人の景色とは違うかもしれない。色とか空気とか音とか……人は自分に関係する情報を選び分けて、自分に必要な情報だけを見ている。自分だけの自分本位な記憶を完璧なまでに人に伝えられたとしたら、その人は私の心に潜む善意や好意や悪意までも見てしまふことにならないだろうか。そう思うといたたまれなくなる。

（第4話 心の扉を開く鍵 終了）

第5話 良心の呵責（1）（前書き）

「」はハル語、「」は日本語になっています。

第5話 良心の呵責（1）

以前、母が、室内で植物をたくさん育てていたことがあった。

少し肉厚のその植物は、室内の寂光の下で良く繁った。初夏の頃、母が掃除をする為にその植物たちを日の良く当たるベランダに出しているのを見かけた時、瑞樹は驚いた。その植物たちの呻く声が聞こえたからだ。

『アツイ、イタイよう』

植物達は太陽の光から逃げ出したがっていた。

「ママ、その植物、部屋に入れた方がいいよ。太陽の光が嫌いなんだって」

堪らず、瑞樹は母に言った。

「何言ってるの？ 植物は太陽の光が大好きなのよ。こーこーせいって言うのを学校で習わなかったの？」

母は、瑞樹の言葉を笑い飛ばした。

瑞樹も光合成のことは理科で習っていたので、そんなもんかなと渋々納得した。その植物達は、夕方になるころには室内に戻されていたが、次の日、そのほとんどの葉を枯らした。太陽の光が強すぎたのだ。それから一、二カ月ほど瑞樹は憂鬱な気持ちで過ごさなければならなかった。

その植物を置いてあったのはリビングで、火傷で苦しんでいるその植物の呻き声を否応なくずっと聞かなければならなかったから。聞こえていたのに、分かっていたのに、何もしなかった、消極的な加害者になってしまっている自分。その後ろめたい気持ちのことを良心の呵責と言うのだと瑞樹が知るのもう少し後のことだ。それくらいの年齢の話。

瑞樹は「良心の呵責」と「藁をもつかむ思い」を天秤に乗せて悩んでいた。ムラサキの、トウキの、緑の人たちの心が知りたい。この人たちの考えが、瑞樹にはさっぱり分らない。カナメだって瑞樹の情報は搾取するくせに、自分たちのことは何一つ教えてくれない。

——さっぱり分らない。謎だらけだ。この人たちの気持ちを知りたい。

瑞樹の頭の中は、それで一杯になっていた。

カナメのあの器械を使えば、みんなの考えていることが手に取るように分かるに違いない。そうすれば、自分で探さなければならぬという問題も、もしかしたらその解答までも全部わかるかもしれないじゃないか。

地球に帰る、ここが地球じゃないかどうかなんて本当は分からないけど、兎に角、家に帰りたかった。

カナメがあの器械を簡単に貸してくれるだろうか。出自の惑星も見せてくれなかったほどのだから、答えは限りなく否だと思われる。貸してくれと言って断られれば、その後の管理は厳重になるだろう。テントの中に無造作に置かれていたのを思い出す。

——ほんのちよつとだけ、持ち出して、使った後にすぐに返せば……
ここまで考えると良心の呵責を覚えて息が詰まりそうになった。

——これって泥棒だね。でも、早く両親の元に帰りたいし……
瑞樹はノロノロと歩きながら、それでも確実に、カナメのテントがあつた辺りへと近づいて行つた。

管理棟を出て、森に入つた瞬間に感じたことだけど、何かが昨日と違う気がする。木や草の気配がいつもより鮮明だ。それに、気のせいかもしれないが、カナメがどの辺に居るのかが瑞樹には漠然と

だがかかった。

まるでそこら中に生えている木や草が教えてくれているみたいだ。カナメはこっちだよと。不思議な違和感を覚えながら、瑞樹は予感通りの場所でカナメを見つけたのだ。

しばらくカナメの様子を観察する。カナメは定住しているのではないらしく、前にいた場所よりももう少し湖よりの場所にテントを張っていた。

カナメの行動はこうだ。

光が落ちるまでは木陰で座ってぼーっとしていて、光が落ちると森の中をウロウロとろつき回る。

一体この人は何をしてるのか、瑞樹にはさっぱり分からない。

森の中をうろつき回っている時はテントごと移動してしまうので、ぼーっと座っている明るいうちに目を盗んでテントに入り込むしかなさそうだった。

カナメが座っている後ろからそっと近寄る。鼓動が速く大きくなってくる。カナメはテントの入口を背にして座っていた。カナメの座っている場所からテントまでの距離は五メートル程。注意を反らせられれば忍び込むことは可能かもしれない。

瑞樹は木切れをカナメの左前方に投げしてみた。ガサガサッと音がする。カナメは微動だにしない。今度は右の方に投げしてみる。変化はない。

――寝ているんだろうか。

瑞樹は首をひねる。仕方なく瑞樹はそろそろとテントに近づいて中に入った。カナメが動く気配はない。

テントの中を見回す。前に見たのと同じように器械は打ち捨てられていた。二台拾い上げて、急いでテントの外へ出た。

「地球では他人の物を勝手に持ち出して良いことになってるの？」

目の前にカナメが立っていた。瑞樹は凍りつく。

「ハルではね、それは泥棒と言っただよ」

鋭い緋色の瞳に射抜かれたように瑞樹は息もできない。何を言っているのか分からなかったけど、怒っていて、瑞樹の行為を責めているということだけは分かった。

「なんとか言えよ」

カナメの手が瑞樹の手首を掴んだ。

「ごめんなさい」

消え入るような声でやつと謝罪を口にする。瑞樹はガタガタと震えていた。

「何言ってるかわからない。来いよ」

テントの中に引つ張り込まれる。カナメは怒りの収まらない様子で瑞樹が持ち出そうとした器具を瑞樹に取り付ける。

「いやだ、怖い！」

瑞樹は反射的に器具を引き剥がしテントから逃げ出そうとした。

「こら、待てよ！」

足を掴まれて瑞樹は転倒した。しゅるりと幽かな音がして、手首と足首に蛇が巻きついたように、しなやかな素材の縄が掛けられて瑞樹は完全に拘束されてしまった。瑞樹は恐怖でめちやくちゃにもがくが、そのしなやかな素材の縄は綻ぶ気配さえない。瑞樹は震え上がった。拘束された恐怖と盗みを働いたという良心の呵責とで息が詰まって声さえ出せない。本当に怖い時には声が出せないものだと聞いたことはあるけど、まさか自分がそんな状況に陥ると思っていなかった。

『このグレイプニルという縄は強力な縄でね。あの巨大狼フェンリルを繋ぎ止めていたと言われる伝説の紐にあやかっつつけられた名前だ。それくらい強力ってことさ。逃げようなんて考えないことだよ。もっとひどいことだってできるからね。君はこれが欲しかった

「んだろう？ 使い方を教えてやるよ」
頭の中で冷たい声が響く。

紅い瞳がイメージで頭の中一杯に広がって、一定のリズムをもって瑞樹に囁いていた、すべての記憶を明け渡すようにと。
瑞樹は悲鳴を上げながら、深い記憶の中に沈んでいった。

* * *

誰かが泣いていた。

瑞樹は、薄暗い廊下の長椅子に座って泣いている一人の女性の前に立っていた。

「小母さん、どうして泣いてるの？ 万里ちゃんはどこ？」

万里ちゃんのママだ。

——万里ちゃんは具合が悪いつて、だからしばらく遊べないつて、我慢しようねつてママが言ったのは、昨日だったかな、もう一日前だったかな。

幼い瑞樹は考えを巡らす。

「瑞樹ちゃん、万里は……万里はね、遠い国に行ったの」

万里の母親の言葉に、まだあどけない様子の瑞樹は無邪気に首を傾げる。

「どこ？ 瑞樹も行けるところ？」

目を見張って訊き返す。

遠い国……それは瑞樹に魅惑的に響いた。

「ダメよ、瑞樹ちゃんが行ってはいけない所よ」

小母さんは絞り出すような声で言った。

「手紙は書ける？」

瑞樹の母親がやってきて、瑞樹に、やめなさい、と叱った。

「阿部さん、気を落とさないようにね」

母親は痛ましそうに涙声でそう言った。

「瑞樹ちゃんは大丈夫よ。万里の分も生きて頂戴」

小母さんは泣き崩れた。瑞樹ははじかれたように顔を上げる。

「嘘。万里ちゃんはどこ？ どこなの？」

病室の中を泣きながら探しまわる。同じような病気で同じような病状だった。少しだけ、ほんの少しだけの無理が万里の命を削ってしまった。幼い瑞樹には重すぎた友達の死。

瑞樹の生きてきた十六年の間の記憶はほとんどが闘病の記憶だ。

次々襲ってくる病魔との闘い。不審に思った両親が遺伝子検査を受けてみようと言い出したのは瑞樹がいくつの時だっただろうか。

両親の悪い予感は的中して、遺伝子の僅かな違いで、腫瘍を抑えるはずのたんぱく質を作り出せないことが判明した。

そうじゃないかと疑っている時の不安と、そうだったと分かっているからの不安は全く異なるものだ。母は泣いた。おそらく父も心の中で泣いていたと思う。

そう言う風に生まれてしまった娘を持つ親の気持ちは瑞樹にだって理解することはできない。そしてそんな風に生まれついてしまった瑞樹の気持ちは、恐らく両親にも完全に分かるはずはないのだ。

この設計図でしか自分は生まれなかったのだと、この設計図でなければ自分ではなかったのだと何度言い聞かせても納得できない自分があった。

どうして私なのかと、どうして私はこうなのかと。抜いても、抜いても蔓延る雑草のように同じ疑問が生え出してくる。

悲しくてたまらなかった。

気づいたら、だだっ広い草原に一人だけでポツリと立っている。草達は風に揺らめいて瑞樹に問いかける「なんで私なんだろう？」「なんで私はこうなんだろう？」暗転した。

一際大きな存在として正樹ちゃんが現われるのはいつからだっただろうか。一つ年上で、隣に住んでいるちょっとカッコいい面倒見のいいお兄ちゃん。可愛い妹がいて、瑞樹を入れて三人で良く遊んだ。

木登り、鬼ごっこ、川原で水切り、柿の実とり、どんぐり拾い、どれもこれも温かくて懐かしい。

「あきらめるな、瑞樹」

正樹ちゃんの口癖だ。あきらめなければ、最後の最後まで頑張れば何とかなると正樹ちゃんはいつも言っていた。本当に彼はそう信じているのだ。そしてそのとおりの結果をもぎ取れる人。正樹ちゃんはその言う人だった。

流れ星と一緒に見ていて、流れ星が瑞樹に落ちてきた。瑞樹は全く分からない状況に放り込まれて、この分からない世界で、ヒントもなしに問題を探して答えを出すようにとムラサキに言われている。

瑞樹は途方にくれる。

「ごめん、正樹ちゃん。私、もう戻れないかもしれない」
力なく瑞樹が呟く。

「瑞樹、諦めるな、お前の悪い癖だ」
正樹が怖い顔をして怒っている。

「だって、さっぱり分からないよ。もう駄目だよ。もう……クタク

タだもん」

心の底からそう思う。もう、ここで死んでしまうに違いない。

そして、あの疑問が心の中にグランドカバーのように広がってしまつので、瑞樹は諦めて呻く。

「なんで私はこうなんだろう」

深い……深い井戸の底から、円く切り取られた蒼穹を眺めている羽の折れた鳥になつた気分だつた。しかも病気の鳥だ。手当をしなければもう間もなく死ぬはずだ。事態は……最悪だつた。

第5話 良心の呵責（2）（前書き）

「」はハル語、「」は日本語、『』はダイレクトコンタクト語です。

第5話 良心の呵責(2)

カナメは深い溜息をついた。

——僕が関わる女は皆追い詰められている。アイリスもディモルフオセカもこの子も……。ムラサキは瑞樹に何をさせようとしているのだろうか。

カナメは瑞樹の縛めをほどいた。瑞樹が記憶の底から浮上してきた気配がする。

『ムラサキの心の中をこれで探ろうと思ったの？』

カナメの問いに瑞樹は魂が抜けたように虚ろな瞳で頷いた。

『貸してあげてもいいけど、ムラサキとトウキには使っても無駄だよ』

カナメは気の毒そうに言った。

瑞樹はえっ？ という様子でカナメを見上げる。

『ムラサキもトウキもアンドロイドだから、これをつけても何もわからないんだ。これ人間用だから』

瑞樹が目を見開いた。

『アンドロイド？ 人間じゃないの？二人とも？』

カナメは頷いた。

瑞樹は急に力が抜けてしまったように頂垂れた。

——私は……。愚かだ。自分が苦しいからって盗みをしようとしたなんて……。パパやママや正樹ちゃんに合わせる顔ないな。なんて馬鹿なんだろう……。私。

同時に湧き上がる、取り返しのつかないことをしてしまったという思い。

——地球人はみんなこんな人間だと思われてしまったかもしれない……。どうしょ。

情けない気持ちで、それでも懸命に謝罪の言葉を紡ぎだす。

『……ごめんなさい。地球でも人の物黙って持ち出したら泥棒って言われます。犯罪です。こんな愚かなのは……私だけです……ですから、どうか地球のこと、地球人のこと悪く思わないでもらえませんか？』

声が震える。泣き出したいのをぐっと堪えた。

『もういいよ、事情は分かったし、こっちに全く非がないとは言えないようだし……』

カナメは瑞樹の瞳を覗き込む。

『ねえ、君っていつもこんな風に泣かないの？ いつも我慢してる？』

カナメの問いに瑞樹ははっと顔を上げた。

——さっき見た夢の中の記憶を……この人は見たの？ どこまで知られてるんだろうか。

昨日トウキの前でひび割れてしまった心が再びきしみ始める。瑞樹は必死で抑え込んだ。

『……泣いたら、泣いたらもう二度と立ち上がれないって気がするから。もう、二度と自分の力で立ち上がれないって……』

そうでなくても、臨界点をとうに過ぎているのは自分でも分かっていた。

傷のないエメラルドがないように、心に傷のない人なんてどこにもいない、そんな人は人間ではないと思う。だけど、多すぎる傷を受けてしまったら人はどうなるんだろうか。エメラルドのように砕けてしまうんだろうか。

瑞樹はそんなことをぼんやりと考えていた。

『泣けばいいんだよ、涙はその為にあるんだ』

瑞樹は小さく首を振った。崖つぶちで、飛び降りて自ら命を落とすか、敵に打ち取られるか二者択一を迫られた人のように。

『涙は心の中の悲しみを外に押し出す為にあるんだよ。心の中にため続けていたら辛いだろ？大丈夫、君はちゃんと立ち上げられる。だって、君は人だから。悲しみはいつか癒えるし、傷はいつか治るよ』
これはイブキの受け売りだ。

カナメは思い出す。ハルのアール・ダー村にイブキと初めて行った子供のころから、気が遠くなるくらいの時間が流れて、こんな所まで来てしまった。アイリスもデイモルフオセカも救うことができないまま、イブキさえも失って、こんな所まで来てしまった。

大脳コンタクトの器械は人の心の中の本人さえ気づいていない感情を映し出す。カナメには瑞樹の堆積した悲しみが実際に目で見えるようにわかった。それがもう崩れそうになっていることも。

瑞樹が泣くことをしなくなったのはいつからだったか。諦めて、押し殺して、気持ちを外に出さないようにして生きてきた。自分が泣けば周りも泣く、自分にできることは、自分のせいで周りが泣くことを最小限にすること、それだけだった。

特に知っている人の前では用心深過ぎる程心を押し殺して明るく振まった。いや、振るまえた。困るのは誰も知っている人がいない時だった。

一人で乗った電車の中で、お遣いに行く自転車で、何気なく一人で夕陽を見た瞬間に、発作的に襲ってくる悲しみに耐えるのが一番難しかった。自分一人では自分の気持ちを支えることができないくらい、心の中にわだかまった悲しみが重さを増していた。

——もう少し……あとほんの少しだけ……辛くない人生が欲しかった

たよ。

私の……こんな惨めでささやかな欲望をこの人は知ったんだ。だからこんなことを私に……。自分が情けなく惨めで、哀しかった。

——そう……か……私は可哀想だって思われることが怖かったんだ。突然気づいて苦く笑う。

それでこんなに悲しみをため込んでしまったんだ。文句も言わずに重荷を背負ってるつもりでいたけど、私はただの見栄っ張りだっただけなのかもしれない。

可哀想だとは言わず、頑張れとも言わず、悲しみにけりを付けたら、また立ち上がれと、立ち上がることができると言ってくれたこの人に、同じ種類の、尽きることのない悲しみを見た気がした。

コトリとどこかのネジが抜け落ちた音を聞いた。重さに耐えられなくなった橋のように突然瑞樹は崩れ落ちた。

『辛いよう……どうして……こんなに……辛いのかな？』

小さな子供みたいに声をあげて泣いた。

『そうだね』

カナメは静かに相槌を打った、何度も、何度でも。瑞樹は泣いて、泣いて、泣き疲れて、不覚にも眠ってしまった。

堰を切ったように泣いている瑞樹を可哀想に思う反面、カナメは不思議な気持ちに戸惑っていた。自身の心の中の堆積した悲しみまでもが同調して洗い流されていくような気がしたからだ。心の中にわだかまった悲しみを流し出したかったのは本当は自分だったのかもしれないとふと気づく。

大地に着地した時のような安定感を感じる。泣き疲れて無防備に眠ってしまった瑞樹の髪をカナメはやさしく何度も撫でた。

「ここを出て行く時期が来たようだ。こんなのばかりだな僕は……」

…」

カナメは苦笑いして小さく呟いた。

* * *

『で、君はどうしたいの？』

光が落ちた暗闇の中でカナメの声がする。

『どうしたいって……もちろん地球に帰りたいですよ。本当にここが地球じゃないって言うのなら。家族が心配してると思うし……』

あんまりひどく泣いたので瞼が腫れぼったい。鼻の奥がつんと痛くて涙の匂いがして、頭も痛い。調子悪い。悲しみが消えたというよりも脳味噌が涙に混ざって消え去ってしまったような気がして、瑞樹はがっくりと項垂れる。昨日トウキに泣かされた時よりも数十倍ひどい気分だった。

それに昨日はなんで泣けたのか分からなかったけど、今日のは理由が最悪だ。惨めな自分に気づいた為だから。しかし、号泣した上、眠り込むという醜態を晒した以上、自分の何をこの人が知ってようが、もうどうでもいいやといった投げやりと言うか、開き直ったと言うか、そういう安定した気分にはなっていた。

『僕はこちらを出るよ』

『ここ？』

『エリアE』

『ああ、ようやくぼーつとするのに飽きたんですね。随分ここに居たんですか？』

『ぼーつとしてた訳じゃない。瞑想していたんだよ』

カナメはムツとして言い返す。

瑞樹はこめかみをグリグリと揉みほぐしながら、そうですかと興味なさそうに答えた。

『それで、少し外の様子がわかったら君が地球に帰れるように力を貸してあげようかと思ってるんだけど……』

『ほんと？』

興味なさそうに話していた瑞樹の態度が一変する。

『私、本当に帰れるんですか？』

『僕はここで随分長い間、瞑想していたんで、君がどういう立場にいるのかさっぱりわからない。自分の立場もよく分かってない。だから外で君の状況と僕の状況とを把握してから、何ができるか考えてあげるよ。多少時間がかかるかもしれないから、君はこの管理棟でコブの仕事でも手伝いながら待っていてくれないか？ どうせならハルの言葉も覚えてくれると話が早くなってありがたいんだけど』

『……それは、つまり、ムラサキさんの問題を解かなくても地球に帰してもらえると、そういうことですか？』

じんわりと幸福感が込み上げてくる。

『そう言うこと』

カナメは瑞樹の復活に小さく笑んだ。

『待ちます。待ってます。言葉も覚えます！』

瑞樹は踊りださんばかりだった。

『じゃ、そう言うことで。ここを畳むよ。それから、これ……』

カナメは小型大腦コンタクトの器械を自分の頭から外すと瑞樹に渡した。

『貸してあげるよ』

瑞樹を指さす。

『これ貸してくれるんですか？』

瑞樹は器械を指してから自分をさす。カナメは頷いた。

『これが必要なのはとりあえずは君のようだからね』

『瑞樹、これ必要』

アレオーレが訳してくれる。

「私にはこの子も必要みたい」

瑞樹は溜息をつく。アレオーレは嬉しそうに飛び回った。

『アレオーレ、瑞樹、必要』『瑞樹、アレオーレ、必要』

繰り返しながらクルクル飛び回る。

カナメは少しだけ笑って、手元の僅かな光を頼りに管理棟へと歩き出した。瑞樹も慌ててその後を追った。

* * *

東南アジアにハナカマキリという昆虫がいる。蘭の花に住んでいて、その花に擬態し蜜を吸いにくる虫を捕まえて生きている。白い体で手足がほんのりピンク色で、住んでいる蘭の花にとっても良く似ていて美しい。美しいと思うと同時にあまりの危うさに心細くなる。この虫はこの植物が絶滅してしまったらどうなるんだろうか。私は……一人の人、一つのこと、一つの希望に依存してしまうことが心底恐ろしい。結果、いくつもの退路を心の中に準備してしまう。私は途轍もなく臆病で往生際が悪い人間なのだろう。いつそハナカマキリのような潔い生き方ができたら、それは存外幸せなのかもしれない。

（第5話 良心の呵責 終了）

第5話 良心の呵責（2）（後書き）

第6話 漸進（1）

瑞樹はミントに付きっきりでハル語習得に励んでいた。ハル語を習いたいと言った時のミントの喜びようだった。瑞樹と話がしたいと思っていたけれど、言葉が分からなくて困っていたのだとミントは言った。

カナメの機械を使ってミントと初めて会話した時のことだ。

勇気を出して一歩踏み出してみれば、案外こんなものなのかもしれない。ミントと会話をしていると、他の緑の人たちも興味津々で集まってきた。緑の人たちはファームの民と呼ばれる人たちで、バイオラングであるこの森を守っていること、すべて計画に基づいて植物を管理しているのが、勝手に植えたり抜いたりされると、とても困るのだということも分かった。

だから果実を勝手に食べても怒らないのに、勝手に種を植えたり草を抜いたりしたら怒っていたのだ。

なんでも思ったことも、聞いてみればなんだと思うことが案外多いものだ。ルールさえ分かれば、何をして良いのか、悪いのか分かる。間もなく瑞樹はファームの民とうまくやっていけるようになった。

「瑞樹、ハル語の上達が早いね」

ミントが目丸くして言った。

「そ？」

自分でもびつくりしていた。確かに学校でも英語はさほど苦手ではなかった。が、ハル語は格別に、かつてしゃべっていたかのよう

に口にさらりと馴染んだ。

「コブがしゃべっているのよりも良く聞き取れるよ」

「私はコブがしゃべっているのが全く聞きとれないよ」
瑞樹はちよつと落ち込む。

コブがしゃべる言葉は早くて、こんがらがって聞こえて、さつぱり瑞樹には聞き取れない。アレオーレがいないと、百回くらい聞き返すことになって、そのうちコブの機嫌が悪くなる。アレオーレはオールマイティだ。どんな言葉も聞き取ってしまう。ただ、アレオーレの言葉を聞き取れる人は滅多にいない。私とカナメだけだ。

「問題ないよ。みんな適当に聞いて合わせてるだけだし」

ミントは悪びれもせず言つてのけた。

「それって、ちよつと、コブに失恋かなって思っただけど……」
瑞樹はコブが気の毒になる。

「それを言うなら、コブに失礼、でしょ？」

ミントはころころと笑つた。ミントは本当に気立ての良い子で、瑞樹の面倒も嫌がらずに良く見てくれる。とても忍耐強い人だ。

「ねえ、ハルにはファームの民と普通の人と二種類の人種がいるの？」

「うーん、人種って言うかどうかわからないんだけど、もう一種類特殊な人たちがいるわ」

「特殊な人たち？」

「うん、特殊な力を持っている人たち。森の民って呼ばれてるの」

「……森の民、特殊な力？」

「その人達は植物を操る力を持っているの。その力を使うことで、光合成がたくさんできるようにしたり、繁殖力を高めたり、暑さに耐えられるようにしたりできるのよ。そして、その人達は惑星ハルに残った僅かな森とエリアEを守っていたの」

「その人達はどこにいるの？ ここにもいるの？」

「ううん、今はいない。私も良く知らないんだけど、エリアEの植

物たちが順調に育成しなくなつて酸素供給量が減つてくると突然やつてくるの。でも、変なのよね」

ミントは考え込みながら呟いた。

「变つて、何が？」

「やつて来る日は私達、管理棟の外に出してもらえないの」

「ふーん」

「ねえ、今から言うことはコブとかに話さないでね。いい？」

ミントは急に声のトーンを落とした。ほぼヒソヒソ声だ。

「うん……」

瑞樹も声をひそめる。

「私の友達が偶然その森の民を見たことがあるらしいの。その人は正気じゃなかったって言つてた。何かに憑かれたみたいに目だけきらきらさせて、森の中を狂つたみたいに歩き回つてたんだって」

「……」

瑞樹は眉間に皺を寄せる。

「で、次の日にはエリアEの森が元気になっていたのよ」

「森の民って……なんだか、怖いね」

瑞樹が深刻な顔で言つた。

「コブに言つちやだめだからね」

ミントは釘を刺した。

「じゃあ、今ここにいるのは皆ファームの民なんだね？」

意味もなくヒソヒソ声になる。

「そうよ。あなた以外はね。あなた……本当に地球つて惑星から来たの？」

ミントはまだ疑っているのだ。

「うん、そうだけど……あんまり何度も猫を押されると自信が無くなってくるな」

「猫じゃなくて念でしょ？ でも、あきれた、そんなものなの？」

私は何度聞かれてもハルから来たって自信持つて言えるよ」

ミントが胸を張る。

「ミントもいきなり地球に連れていかれて、そこで何度も何度も念押しされたら、あら私はハルから聞いたのかしらって思うようになるって」

瑞樹がぐったりとしながら言った。

「聞いたのかしらじゃなくて、来たのかしらでしょ？」

ミントもいささかぐったりして訂正した。

「ファームの民って本当に液体しか口にしないんだね。最初は信じられなかったけど」

「肌で光合成をするから食事で摂る必要がないのよ。水分とミネラルは必要だけどね。だからファームの民の服はシースルーになっているの。便利でしょ？」

「ふーん、でもパンに食べられてみたいなーなんて思わないの？」

「パンに食べられてどうするのよ。パンを食べてみたいでしょ？」

訂正してミントは笑い転げた。

「小さいころにね、モルオーブンから食べ物を出して食べたことがあるわ。あれ、見学者用だから、ファームの民は使っちゃいけないんだけど、一般の人がおいしそうに食べているのを見て興味がいちゃってね。友達と一緒にとりだしたの」

「食べてみたの？」

乗り出して訊く瑞樹に、ミントは頷いた。

「ひどかったわ。二口ほど食べたところで吐いちゃったの。友達はおつとひどくて、一週間下痢が止まらなかったって言ってたわ。親には怒られるしね」

「ふえー」

不思議な話に瑞樹は溜息をつく。

ハルという惑星は地球に似ているのだとミントは言った。カナメから貸してもらった小型大脳コンタクトは活躍していて、ミントは地球を見たがったし、瑞樹はハルを見たがった。ミントの記憶の中のハルは外側からみる分には地球のような惑星だったけど、ミント

の生活圏としてのハルはエリアEという限られた空間のみの記憶しかなかった。

地球が太陽の周りを回っているように、ハルは恒星ジタンの周りを回っていた。もし太陽が寿命を迎えれば、地球もまた失われる。それは遠い未来のことだけど、確実に起こることだ。そしてハルにはその大変な事態が起こってしまった。

「地下都市を作ってかろうじて生き延びていたのよ」とミントは悲しげに言った。

「だから、実際の生活はファームの民の場合だと地下都市のエリアEだけの記憶になっちゃうの。青いハルは昔のハルよ。見たことはないわ。これは学校で教えられた記憶なの」

ミントが生まれるずっとずっと前の青い水を湛えたハル。すでに赤茶けて干からびた惑星になっていたんだと頭では分かっているんだけど、あの美しかったハルを思う時、ミント達は憧れとも思慕ともつかない切ない気持になるのだと彼女は目を潤ませて言った。瑞樹の記憶の中の地球を見ながらそう言った。

ジタンがダメになる寸前でハルの人々はハルを脱出した。エクソダスだ。瑞樹は未だに信じきれないのだけど、今いるここも、他のエリアもすべて宇宙船の中にあるのだという。今この宇宙船はどこかに着陸しているらしくて、その星の重力になっているので体が軽いのらしい、また飛び立てばハルの重力になって体が重くなるとミントは笑って言った。

聞いていると、よその惑星のことながら、途方に暮れる。地球人は月でさえほんの数歩しかその足跡を残していないというのに、もしここで地球がダメになってしまったらどうなるんだろうか。地球

は環境悪化が叫ばれているけれど、地球人はまだどこかで何とかな
ると思ってる。実際、まだなんとかできるだろうと瑞樹も信じてる
……しようとさえすればだけど。

ハルの人たちの目に、私たち、地球人は一体どんな風に映るだろ
うか。

第6話 漸進(2)

伸び放題だった髪を切って髭を剃ったので首から上がすうすうして心細い。カナメは周囲の軽い驚きと戸惑いと複雑な表情に迎えられた。可笑しなことに一番カナメの復帰を喜んでいたのはマダム・ムラサキのように見えた。アンドロイドでも上辺だけでなく、心から喜ぶことがあるのだろうかと考えてカナメは複雑な気持ちになった。

カナメが想像していたよりも状況は進展していないように見えた。宇宙船ナンディーが月の南極の永久影に着陸していることと水の補給をしたこと以外に目立った動きがないようだ。

「カナメ、待っていたよ」

ラークスパー教授が穏やかに言った。

「実は再生装置が故障中でね。仕事を増やしたいところだが人手不足だ。ニシキギが見てくれてはいるんだが、今ひとつはかばかしくない。すぐにでも君に見てもらいたいんだが」

作業の遅れの理由はそれかとカナメはすぐに思い当たった。

「分かりました」

イブキが作った装置だ。一筋縄ではいかないんでしょう、あいつの凝り性が発揮された逸品ですからねとラークスパー教授には言っておいた。

ニシキギ……聞いたことがない名前だ。自分からすれば随分若い者なんだろうと想像する。カナメはハルを脱出する時、既に三百歳を超えていた。イブキも同様だ。

カナメとイブキはその昔、天童と呼ばれた。あるいはイブキは守

護神ヴィシユヌ、カナメは破壊神シヴァと呼ばれていたこともある。カナメは幼いころから物を分解することに取りつかれていた。およそ人の想像のつかないものを想像のつかないレベルまで分解して周囲を驚かせた。その結果付けられた不本意な仇名だ。

最終的にカナメは人間さえをも分子レベルまで分解する装置を開発した。イブキも似たような状況で、その結果、再生装置を開発した。だから分解再生装置は二人の共同開発装置なのだった。ハルの人々はその装置を使ってすべての物を分解再生することで、狭い地下都市の中で究極のリサイクル生活を営むことになった。ゴミという言葉のない生活だ。それは宇宙船ナンディーの中でも活かされている。

そして、その当然の結果として、カナメもイブキも自ら開発した装置を使って分解再生を繰り返し、ハルを脱出した時には三百歳というおよそ人とは思われない長い年月を生きることになってしまっていた。

ハルを脱出する時、カナメはイブキと別の船に乗るように割り当てられていた。分解再生装置を船でも使用する以上、その開発者が固まって同じ船に乗ることができないのは最初からわかっていたことではあったが、イブキを失ったことはカナメにとっては大きな痛手だった。しかも、イブキの乗った宇宙船ガルダはハル脱出直後から行方不明になってしまった。

その時失ったのはイブキだけではない。そのことを思い出すことがカナメには苦痛だった。苦い気分で分解再生装置を修理しているエリアGへ向かう。

ニシキギと思しき人物が分解再生装置の内部に潜り込んで点検をしていた。

「どう？ 治りそう？」

カナメは装置の中を覗き込みながら問いかけた。潜り込んでいた人物が聞きなれない声に訝しげな表情で顔を出した。

「あんた誰だ？」

眉間に皺を寄せて青い瞳が冷たく睨み返す。白っぽい金の髪を見ながらカナメは二、三回くらい再生した人物だろうと推測する。原因はまだ分かっていないのだが、分解再生を繰り返すと色素が抜けてしまうのだ。カナメも今でこそ銀髪に紅い瞳になってしまったが、元々は黒髪と濃茶の瞳を持っていた。

「カナメ・グラブラだ。君はニシキギ？ だよね」

カナメは手を差し出した。ニシキギは一瞬ポカンとした顔をしたが、再びしかつめらしい顔になって手は出さなかった。

あまり愛想のいい人物ではないらしいと感じてカナメは嬉しくなる。自分があり人付き合いのいい方でないので、賑やかな人付き合いのいい人だと合わせるのに疲れ果ててしまうのだ。

「今までどこで何をしていたのか知らんが、人は足りている。あんなの仕事はないよ」

ニシキギはそう言ったが、エリアGは閑散としていて、人が足りているようには見えない。

「そう？」

カナメは辺りを見回す。

「もうじき、この装置は修理完了する。そうなればすぐにでも人手は足りるようになるのだ」

ニシキギはムキになって言い返す。

「そっか、じゃ、言葉に甘えて違うことをさせてもらっよ」

カナメはクルリと向きを変えると部屋から出て行こうとしている。ニシキギはあつけにとられた。

——拘りが……無さすぎないか？ 自分が開発した装置だろうが！
と言いたいのをニシキギはぐつと堪える。

「あ、そうそう、その装置、故障と関係ない所をいじるとトラップが発動することがあるから気を付けた方がいいよ」

カナメの声がドア付近で響いた時、パチンと何かが挟まる音がしてニシキギの呻き声がした。

「なんなんだよ、これは！」

ニシキギの毒づく声が聞こえる。これで三回目だった。

「助けた方がいい？」

戻ってきたカナメが手を伸ばすとニシキギが仏頂面でその手をとった。

「イブキの細工だよ、それ。僕を睨むなよ」

カナメは肩を竦める。

ニシキギの話を聞いてみると再生装置はかなり深刻な状態のようだった。全部で十台ある装置のすべてで同様の故障が起こっているらしい。再生しても意識が戻らないのだと言う。

「何人意識が戻ってないんだ？」

カナメがニシキギに訊いた。

「二十人、最初の十人が意識を回復できないことを担当者が気づかないまま次を開始してしまったんだ」

ニシキギが忌々しそうに言った。

「その人達、どうしてる？」

「医療センターに置いてある」

置いてあるって、死体じゃあるまいしとカナメは苦笑するが、ニシキギはほとんど同じようなものだと言いたく言い放った。

「もう一度分解した方がいいかもしれない」

「俺もそう思っているが、今はドクターが管理している」

「ブラキカム？」

ニシキギは頷いた。

* * *

医療センターはエリアHにある。医療センターは他のエリアよりも人が多くて活気がある。カナメはブラキカムを探した。

「カナメさん！カナメさんじゃないですか？」

どこからか聞きなれた声がある。

「イベリスじゃないか」

イベリスはカナメの所に走ってきた。

「戻ってきたんですね」

ニコニコと笑う顔が人懐っこい人柄を表している。イベリスとカナメはフォボスで初めて会った。イベリスはリセプタータイプの森の民だ。森の民だが技術系に強いのでフォボスでは助手のように働いてくれた。フォボスは表向きハルの第三衛星ということになっていたが、正確には巨大人工衛星だ、もっと正確に言えばフォボス自体が脱出するための宇宙船の組み立てドックになっていた。

「君は今ここで働いているの？」

「エリアEに呼び出されるまでですけど。今はドクターブラキカムの手伝いをしています」

「そっか。ブラキカムを探しているんだけど、どこにいるか知ってる？」

「もちろん、今からこれを持って行くところです」

とイベリスは医療器具を持ち上げて見せた。

「カナメ！」

ブラキカムはカナメをがっしりと抱きしめた。

「ブラキカム、やめてくれよ」

自分にこんな暑苦しい出迎えをしてくれるのは今では彼とコブぐらいだなとカナメは苦笑する。もっともブラキカムはコブと違って

背がカナメよりもかなり低いのでしがみついているという感じだけど、それがコブだと抱きかかえられているような形になる。ブラキカムもカナメやイブキと同じくらい長い人生を送っている一人だ。

「そうか…… やっぱりもう一度分解するしかないか。分解しないで何とかしてやりたかったんだが……」

ブラキカムは難しい顔をして言った。

「それから、もう一つ頼みがあるんだけど」

こっちが本題だとしても言うようにカナメが身を乗り出した。

「なんだ？ ややこしいことはごめんだぜ」

「エリアEで診てもらいたい患者がいるんだ」

「ファームの民か？ 彼らのことは彼らの医者任せの方がいいぜ。体の造りが微妙に違う」

「地球人だ」

声を低くしてカナメが囁くと、聞いた途端にブラキカムもイベリスも目を丸くして椅子を倒して立ち上がった。

「エリアEにいるのか？」

二人とも同時に叫ぶ。周りの喧騒が一瞬静まって、三人を注目した。

「声を小さくしてくれよ。彼女はこういう状況にいるんだ？」

「治療水槽をぶっこわして逃亡中だ」

ブラキカムが声を低めて説明する。

「彼女が壊したことになるのか？」

カナメは呆然と呟く。

「あの子が壊したなんて誰も思っていないさ。誰かが連れ出したに決まってる。だけど、誰も

連れ出した人間を見ていない。彼女も見つからなかった……もしかして、お前が連れ出したのか？」

ブラキカムは急にカナメに視線を合わせる。

「まさか！」

「だろうな」

ブラキカムは溜息をつく。

ムラサキたちだ、カナメは合点する。ファームの民以外で接触を持っていたのはムラサキとトウキだけだった。しかし、訳が分からない。何のために？

「で？ 診察って？」

ブラキカムは疲れたようにカナメを見上げた。

「彼女の記憶を覗いた。腫瘍摘出手術をする直前にここに来てしまったらしいんだ。一体どういうやり方で地球人の記憶採取してるんだ？」

カナメの口調が非難めく。

「彼女のは全くの事故さ。あんなに傷つけて採取した地球人は他にいないよ。普通は記憶を採取したらすぐに戻してる」

ブラキカムは言い訳をするように言った。

「とにかく、後どのくらい彼女に時間があるのか知りたい。それまでに家に帰してやるって約束しちゃったんだ。その為の診察だ」

「またまた、ややこしい人間に関わってるな」

ブラキカムは力なく笑う。

「……またって……そうだね」

カナメは一瞬目を見開いた後、淡く笑った。

それまで黙ってブラキカムとカナメのやりとりを聞いていたイベリスが口を開いた。

「あの、彼女はエリアEにいて何ともないんですか？」

「？」

カナメとブラキカムがイベリスを見つめる。

「彼女は森の民だって感じたんだけど……違ったのかな」
最後は呟きになる。

「そう言えば、瑞樹は植物と話せるみたいだよ」

カナメの何気ない一言にブラキカムもイベリスも驚いた。

「まさか！ 植物と話せる森の民なんていませんよ。少なくとも僕は話せない」

イベリスが否定する。

「僕は植物と話せる森の民を知っていたよ」

カナメは溜息とともに言った。

「まさか……」

「アール・ダーの学校で先生が植物と話せることなどないんだと教えていたことも知ってる。でも、それでも、その人は植物と意志の疎通をはかれてた」

僕も少しなら理解できるという言葉は呑み込む。

「まさか……」

イベリスは凍りついたように黙り込んだ。一人だけ、植物と話せると言い張っていた人を知っていたからだ。

* * *

ウィンウィンと低音の稼働音だけが響く薄暗い部屋の中でムラサキは静かに目を閉じて佇んでいた。そこにコツコツと規則正しい軽快な足音が近づいてきてムラサキの前で止まった。

「どうでしたか？ 驚いたではありませんか？」

ムラサキは物憂げに眼を開けると近づいてきた人物に静かに話しかけた。

「あれは誰ですか？ あれは……」

トウキは表情の薄い顔に淡い動揺を刷いていた。

「あれを見て人間はどうしてNO86522347であると分からないのか私は不思議でなりません」

「別人なのには違いありませんよ。しかし……あれは誰なんだろう。NO86522347に限りなくそっくりで……面白いことに、力が解放されないように仕組まれてありましたよ。あれは自分でやったのかな、それとも生まれつきなのかな」

トウキは見たこともない生き物を見たかのように呟いた。

「力は解放されたのですね？」

ムラサキの言葉にトウキは頷いた。

「このことはラークスパーには？」

トウキはムラサキを見つめた。

「もちろん伝わっています」

ムラサキは心得顔で頷いた。

「どうするつもりですか？ 地球を……地球人を……」

「無論、どうもしません。我々是我々の子供たちを新天地に導く、その使命を果たすために存在するのです。それはいつまでもどこでも、どのようにしてとも限定されていないのです。人は死に、文明はいつか滅びるものです。それまで待つもよし、自ら手を下すもよし。選択肢は無限です」

「私が言っているのはそのことではありません。もし地球人が同朋であるとするならば、どのように対応するつもりかと訊いているのですよ。もし彼女がNO86522347であるのならば、新天地に導く我々の子供たちの中に彼女も含まれるはずではありませんか？ ほかの地球人はどうなのですか？」

「トウキ……あなたはアンドロイドでありながら、人間の感情を過剰に理解する存在なのだということを忘れないください。以前のような過ちを犯すことがないようにしてもらいたいです。正直に言うと、私はあなたを起動することには反対だったのです。あなたの役目はほぼ終了です。もし今後、あなたから我々の計画を阻むような言動を感知した場合には直ちに機能停止させる準備があります」

「……」

トウキは無表情のまま口を噤んだ。

「では、セキュリティセクトに戻り、自らの使命を遂行してください」

「……了解しました」

トウキ型アンドロイドはセキュリティ部門を担当している為、人の痛みを感じる機能が強化されて搭載されている。人が痛みを感じていれば救出して痛みを取り除く作業を最優先する。痛みを感じさせる事象が起ると予測される場合には、それを取り除くか、その状況下から対象を退避させる行動をとるように設定されている。

時として人は涙を流す。つまり泣くという行為を行う。これも痛みを感じている場合があり、この傾向は年齢が低くなるほど顕著になり、年齢が高くなるにつれ痛みで泣くことは少なくなるが、無論、大人も涙を流す場合がある。この場合の問題は、痛み以外で人が泣くことだ。

アンドロイドが作られた当初、人間のボディガードとして使用する為にトウキ型のうち幾体かは人の感情を理解する機能を搭載された。更にその内の一体のトウキが、ある特殊な能力を獲得したのはハル滅亡の遥か以前のことだ。そのトウキは森の民の能力を感知し、それをコントロールすることができた。

* * *

関数 $f(x) = 1/x$ のグラフを学校で習った時、初めて漸近線という言葉を感じた。限りなくある数値に近づく曲線。先生がチョークで描いた曲線が黒板を突き抜けてどこまでも、どこまでも突き進

み、様々な障害や悪条件に屈せずに、勇ましく逞しく進んでいく、
そんな一途な曲線のイメージが頭の中に浮かんだ。例えその数値に
辿り着けないことが分かっているても漸近線は諦めない。自分もそう
ありたいと思う

(第6話 漸進 終了)

第7話 散りゆくものとは知りながら

結局次の日、ブラキカムがカナメとエリアEに行くことになった。瑞樹がお昼にあたる食事をとる為に管理棟に向ってミントと歩いている時にカナメとブラキカムはやってきた。ミント自身は食事を摂らないが、瑞樹に気を使っていつも一緒に食事について来てくれるのだった。

「やあ」

カナメは瑞樹に気づいて手を上げた。瑞樹はカナメを見詰めたまま反応がない。

「もう僕のこと忘れちゃった？」

忘れてくれてた方がありがたいけどカナメは内心想う。

「ああ、そうだった、まだハル語は無理だよね」

カナメが最後まで言う前に瑞樹の言葉が飛んできた。

「カナメって、もっとおじさんだって思ってた！」

目を丸くしてカナメを指さす瑞樹にブラキカムが吹き出した。カナメは絶句する。

「……随分ハル語が上手だな」

憮然としながらもカナメは瑞樹のハル語に驚く。

「すごく覚えるのが早いんですよ」とミントが自慢げに言った。

「君の教え方がいいんだろうね。コブに頼まなくて良かったよ」

カナメはミントに微笑んだ。

「おじいちゃんに任せたら聞き取れない言葉をたくさん覚えて大変なことになるわ」

ミントは吹き出した。

「お祖父ちゃん？ って、この子コブの孫なの？」

ブラキカムが目を丸くした。カナメはミントをブラキカムに紹介する。

「お祖父ちゃんって言うても、ご先祖様クラスのお祖父ちゃんです

けど」

ミントはこころ笑った。

ファームの民も森の民と同様に三つのタイプに分かれている。寿命が非常に長い樹木族と一般人と同じくらいの寿命の多年族と短い寿命の短年族だ。普通の植物がそうであるように、樹木族の寿命は長い。千年をも超える命を永らえている者もいる程だ。一方、短年族は次の世代を生み出すと間もなくその寿命を終える。

コブは樹木族なので、カナメやイブキが八回程分解再生をした頃でさえ、その長い寿命をただ黙々と生きていた。

「コブに似なくて良かったな」

ブラキカムがニヤリと笑う。

コブときたら、大木はこうあるべきとも言っようながっしりした体躯と大樹にふさわしいぎっしりと茂った葉ならぬ、髪の毛を持っていた。

「私はお祖父ちゃんに似たかったんですけど」とミントは悲しそうに肩を竦めた。

「ママに似てしまったみたいで……お祖父ちゃんも短年族じゃないかって心配しているんです」

「大丈夫だよ。君はパパに良く似てる」

カナメがフオローする。ミントの父親は多年族で今も元気だ。

「ありがとうございます。カナメさんってもっと怖い人かと思ってました」

ミントはにっこりする。

「随分エリアEをうるつき回っていたからね。怖がらせたんだったら申し訳なかった」

カナメもにっこりした。

「ところで、一般人のドクターが一緒ということは、瑞樹に用事ということですか？」

「そうなんだ。展望台にある診療室は使えるかな？」

「私、訊いてきます。ところで皆さんはお食事はもうお済みですか？」

カナメもブラキカムも首を横に振る。

「まだなら、瑞樹と一緒に済ませていただけませんか。瑞樹は一人で食事をさせるとちよつと問題があるので」

ミントはそう言つて悪戯つばく瑞樹を見つめた。

「へ？ 問題？ 何かあつたつけ？」

瑞樹は腑に落ちない顔をする。モルオープンの操作はすでに完璧だ。時々間違えて得体のしれないメニューを選んでしまうことはあつたが。

「あら？ そうかしら？ とにかく、ドクター達と一緒に食事に行つてね。じゃあ」

ミントはそう言い残すと足早に去つて行つた。

「問題つて何だろ？」瑞樹はブツブツ言つてから「さて、じゃあよろしかったら、私と一緒に食べに行きましょうか？」とにこやかにブラキカムに話しかけると、再びブラキカムが吹き出した。

「ほんとに君を食べちゃつていいの？」

ブラキカムが悪戯つばく瑞樹の目を覗き込む。

「は？」

きよんとする瑞樹の頭をカナメはパシッと叩いて、すたすたと管理棟に向つて歩き出した。

「何何？ 私、なにか変なこと言つた？」

カナメは返事もなしで歩き去り、クスクス笑い転げているブラキカムと一緒に瑞樹も管理棟へと歩き出した。

唐突にカナメの呆れた声が飛んできた。

「おい、問題はそれだ！」

明るい日差しが降り注ぐ展望台にあるランチルームで食事を摂る。

各々の料理をモルオープンから取り寄せた。トレイをテーブルに乗せたと同時にカナメが指摘する。

「何が問題ですか？」

瑞樹はむっとする。

「バランス悪すぎ。ほとんどデザートじゃないか」

瑞樹のトレイにはパウンドケーキに似て甘く仕立てたパンと果物とジュースが乗っている。

「これはデザートじゃなくてパンでしょ、主食じゃないですか！」

瑞樹が言い終わらないうちに、カナメは席を立つと具がたくさん入ったスープをモルオープンから取り出して、瑞樹のトレイに乗せた。

「これはなんですか？」

「それも食べなさい」

「ええー、そんなに食べられないんですけど」

「だったらその果物をやめればいい」

「ええーそれはちょっとー」

果物は外せない。果物だけはこのエリアで採れたリアルものだ。実を言うと、瑞樹はモルオープンから出てくる食べ物が少し苦手だったのだ。味が悪いわけでも、口触りが悪いわけでもないのだが、それでも実際に木に実っているものと食べ比べた時に、どうしても命から生み出された方を舌が選んでしまう。

「いつもこんなメニューを選んでいるのか？」

カナメは呆れて訊く。

「いつもはミントが選んでくれてるって言うか……私にあんまり選ばせてくれない」

久しぶりにミントの監視がない食事、瑞樹はホクホクして自分の好きなメニューばかりを選んでいたのだった。

ミントめーこんなガミガミおやじと食事をさせおってー瑞樹は唸る。

「ミントが正しい」

カナメはしゃりと言うと食べ始めた。

それまでニヤニヤしながらカナメと瑞樹を眺めていたブラキカムが口を開いた。

「君たち仲がいいねー、兄妹が長いこと付き合ってる友達みたいだ」
「誰がこんなのと！」

カナメと瑞樹は同時に言っ、ふんとお互いにそっぽを向いた。
カナメはジャングルの緑を見ることになる。日に透ける緑色の葉脈に目がとまりカナメはふと昔を思い出す。

目を離すとディムも甘いものばかり……そして胸がズキリと痛む。
忘れたいのに忘れられない。

診察室は展望台の片隅にあつた。さっきミントが使っていたいい旨を知らせに来たのだった。瑞樹は診察台に横たえられて診察を受けていた。診察は簡単なものだった。聴診器で体内部の音を確認もなく、血圧を測ることもなく、喉を見るから口を開けてとも言われなかった。空港で使われる金属探知器のようなものを体中にかざす。その器械と体の間には三センチほどの空間があるはずなのに、何かフワフワしたものが体中を這いまわっているような感触がした。

ブラキカムは難しい顔でモニター画面を見ている。瑞樹も顔を傾けてモニターを覗き込もうとしたら、モニターをさりげなく見えないうちにされた。

「ここは痛くない？」

ブラキカムは左腕の上腕の辺りを指で押した。

「痛くないです」

「ここは？」

鎖骨の辺りを押す。

「いえ」

嫌な言葉が頭をよぎる。

――転移……してる？

「何か、薬を飲んでいる？痛み止めとか……」

「いえ……でも……」

瑞樹は唇を噛みしめる。間違いない、病状が良くない時のドクターの表情つてのはどこでも同じなんだなと妙な所に感心する。

「でも、何？」

「ちよつと前に痛かったんです。針でちくちく刺されているみたいに。エリアEに連れてきてもらつてすぐの頃でしたけど……あの、私をここに連れてきてくれた人は……問題とかないんですよね？」

ここに連れてこられた経緯はわからなかったけど、正規の手順ではないだろうと感じていた。彼女が人ではないということとは分かったけど、瑞樹にはアンドロイドだから許されること、許されないことがあるのかどうか判じることができなかった。迷惑をかけてしまうことになるのだろうか。なにしろ裸のまま袋に入れられて連れてこられた訳だし……普通ではないよね。

「名前を出すことで、その人に迷惑が掛るかもしれないと君は心配している訳だね？」

ブラキカムの問いかけに、瑞樹はこくりと頷いた。

「君たちの惑星もしくは国ではどうか知らないけれど、医者というものは個人のプライバシーに深く関わる人が多いものだからね、守秘義務というのがあるんだ。連れて来た人の名前を無理に言う必要はないけど、聞かされたところで、その情報は治療以外には使わないよ」

「そうですね……その連れてきてくれた人に痛み止めが欲しいって言ったら、痛い所に手をかざして……そうしたらフワリって温かくなって痛みを感じなくなつたんです。不思議なんですけど」

それでもムラサキの名前を出すことをためらつた瑞樹は状況だけ

を話した。

「それって……」

ブラキカムは眉間にしわを寄せる。

そんなことができるのは彼らだけだ。しかし、ラークスパーにはその機能が備わっていない。

——ムラサキかトウキか……。

そうであるならば、瑞樹は完璧に痛みを感じることなくここまで症状が進んだことになる。痛ましい目で瑞樹を見る。彼らなら痛みを感じる神経だけを麻痺させることなんて朝飯前だ。警報を切られた状態でこの子はもう随分長い時間を過ごしてしまったのだらう。ブラキカムは憤りを感じる。

「ムラサキか？ トウキか？ 彼らはそんなことをするべきじゃなかった」

ブラキカムは低く唸るように言った。

痛みを消してしまえば、体は楽になるかもしれない。でも、代わりに退きさしならない状態まで気付かないことになってしまうのだ。そうなる前に治療を受ける、その為の痛みなのだ。

「私、ムラサキさんだなんて言ってませんよ」

瑞樹は目を見開いた。

「ムラサキなんだな。そんなことできるのはやつらだけだ」

ブラキカムは怒っているようだった。

「どうかムラサキさんを責めないでもらえませんか。実際私、助かったんです。痛いのは嫌だし。こんなに自由に体を動かせながら、意識もはつきりしたままで、最後まで過ごせるのって……ありがたいいことだっと思ってるんです」

瑞樹は静かな瞳でブラキカムを見詰めた。

「君……」

ブラキカムは不思議な思いで瑞樹の深い茶色の目を見つめる。

女性とは元々こんな風に強くできているのかもしれない。かつてこんな風に静かにブラキカムを見詰めた翠色の瞳の女性がいた。ハルを脱出する少し前のことだ。

* * *

「カナメ、彼女はもう地球に帰ることはできないだろうよ」

それまで押し黙っていたブラキカムがエリアEを出たところで言った。先に歩いていたカナメはブラキカムを振り返る。

「もって地球時間で三か月、シビアに言えばいつ死んでもおかしくない状況だ」

「そんな……」

「地球人の記憶採取プロジェクトは終了している。ナンディーは、この先どうなるかは知らんが地球に近づくことはしばらくないと聞いている。地球に帰そうとすると小型脱出艇を使うくらいしか手がない。それで月から地球までどのくらいかかるか、お前に言うまでもないだろう？ 最悪、脱出艇の中で彼女は死ぬことになるかもしれない」

「ハルの医療でどうにかできないのか？」

ブラキカムは首を横に振った。

「分解再生すれば……」

「彼女の問題は遺伝子にある。分解再生しても多少生きる時間が延びるだけで、また同じ病氣と闘うことになる。それは森の民のタイポリジンを分解再生することと同じじゃないのか？ 俺が彼女だつたら、そんな治療は望まない」

「遺伝子进行操作すれば……」

「それじゃ、もう彼女じゃないだろう？」

「じゃあ、ここで死ねと？ 彼女には何の落ち度もなかったんだろ
う？ それとも宇宙人に拉致されたいと星に願いを掛けていたとで
も言うのか？ こんな形で連れてきてしまった僕たちに責任はない
のか？ 死に際に家族に会えないんだぞ」

最後の言葉を絞り出す。最期に会えないこと、それがどんなに辛
いか分かってるから。

「生きていれば、どうしようもないことって必ずあるんだよ。ガル
ダを見ろよ。あんな風に隕石が当たっちまうなんて誰も思わなかつ
た。あれは誰の責任だ？ その結果何人が死んで、再生もされない
状態だったか、お前知ってるか？」

人を再生する為には決まりがいくつかある。大雑把には以下の四
つがその条件になる。

一、犯罪等による刑罰の為、再生を制限されていないこと

一、森の民（リセプタータイプを除く）ではないこと

一、死体が三分の二以上残っている、もしくは明らかに死亡してい
ると確認できる部位が残っていること

一、再生する為の社会的理由があること

三番目は同一人物が複数存在することを禁止している為だ。ガル
ダでは死んだ者の

ほとんどが船外に放り出されて、その遺体を回収することすらでき
なかった。

「ガルダの話をするな」

カナメはブラキカムを睨みつけた。

「たくさんのファームの民が死んだ。ほかにも救援に向かった他の

船の人間も巻き添えをくったんだ。そいつらはそれを望んでいたと思うか？　最後に家族に会えたと思っているのか？」

「うるさい！　ガルダで誰が何人死のうが僕には関係ないし責任もない。瑞樹とは明らかにケースが違う」

カナメは低い声で叩きつけるように言葉をぶつけてブラキカムを睨みつけた。

「それが君の本音なら俺だって言うぞ。地球人の女の子が一人死ぬくらい俺には何の関係もない。責任もない！」

どなり散らした後ブラキカムは溜息をついた。

「君は関係ないなんてちつとも思っていない。だから自分を責め続けているんだろ？　どうしようもないことって確かにあるんだよ

……君も俺も神じゃない」

「……僕は自分が神だなんて思ったことは一度もないよ」

カナメはひどく暗い瞳で、痛みを堪えているように言った。

第7話 散りゆくものとは知りながら(2)

ガルダにぶつかった隕石は、ガルダが飛び立つ直前までリーダーに引つ掛からなかった。どこから飛んで来たのか、どのくらいの大きさだったのか、さっぱりわからないまま警報は鳴り響いた。

急速な減圧と気温低下。隔壁が降りて遮断されたのはエリアEだった。急激な減圧に船外へ吸い出される者、気を失う者、その他のエリアでも衝撃による死傷者が多数出た。エリアEの処置が終わって隔壁が上がったところには、ほとんどの植物が凍死寸前だった。

その頃ナンディーのエリアEにいたデイモルフオセカは植物たちの異変を感じ取っていた。ナンディーの植物たちに動揺が走る。どの船にもあるエリアEの植物は元が一つの木だったものが多い。離れていても自分の分身の異変に気付くことが出来たのかもしれない。「何かあったのかしら？」

デイモルフオセカはガルダのエリアEで事故があったらしいという情報をコブから聞いた。デイモルフオセカは真っ青になった。ガクガク震えてくるのを抑えられない。何もかも放り出して、ガルダに向って発進しようとしている救援隊の中に紛れた。

「デイモルフオセカ？　そこで何をしてる？」

カナメはナンディーのメインデッキから救援隊に細かい指示を出していたが、救援隊に紛れているデイモルフオセカに気がついた。

「エリアEなんでしょ？　ちょっと行ってくる」

「駄目だ！　邪魔になるだけだ。行くんじゃない！」

「……ごめん、必ず帰るから」

デイモルフオセカはカナメの制止を振り切って小型輸送船に乗り込んだ。

そして、それがカナメとの別れになってしまった。

ガルダのエリアEの被害は想像を超えていた。バイオラングとしての機能はほぼ壊滅的で、ファームの民の半数以上が船外に吸い出されて行方不明となり、船内に留まれた者も負傷者よりも死者の方が多い状態だ。デイモルフオセカの力くらいではどうしようもないように見えた。

それだけでも最悪の事態だったのに操舵にも衝撃の影響が出ていた。

「このままじゃ、ジタンにつっこんじまう」

先に飛び立っていた五隻の宇宙船が息を飲んで見守る中、ガルダはゆっくりとジタンの中心に進路を変えていた。

「イブキ！ 舵をきるんだ」

カナメはモニターで警告する。

「わかってるさ。今修理中だ」

ガルダから聞こえてくるイブキの声は落ち着いているように聞こえた。カナメは少し安心する。

「イブキ、エリアEの様子はどんなんだ？」

「今フェリシアに行ってもらってる。すぐに状況がわかるだろう」
言い終わらないうちにフェリシアの声が割って入った。

「イブキ、エリアEは想像以上に悪いわ。分解している森の民を全部再生して起こしても駄目かもしれない。その前に酸素不足になるわ」

フェリシアの声は震えていた。

フェリシアの言葉が終わらないうちにエリアE内に酸素低下の警告音が鳴り始め、棚という棚から緊急用の酸素マスクがぶら下がってきた。しかし次の瞬間、フェリシアの声のトーンが変わった。

「デイモルフオセカ？ あなたどうしてここに？」

「フェリシア、私、やってみる。私でできない分は他の森の民を起こしてください。応急処置くらいしかできないかもしれない」

デイモルフオセカの声は少し震えていた。

「デーム？」

フェリシアの持っているレシーバーからカナメの声が聞こえた。酸素低下でぼんやりしたデイモルフオセカの頭にカナメの声がひどく遠くに聞こえた。

「大丈夫、私はやれる。私が守る」

デイモルフオセカは小さく何度も呟いた。

「だめ……危険よ、あなた力をコントロールできないんですよ！もうこの船は駄目よ、避難するしかないのよ！」

フェリシアの泣きそうな声が響きわたる。

「ダメ！ ガルダを見捨てないで！ 私が何とかするから！ 絶対何とかするから！」

デイモルフオセカの意志の強さを表すような力強い声が響き渡る。

デイモルフオセカはものすごい勢いで体中の力が吸い取られるのを感じていた。木や草が呻いていた。癒す力を求めて目に見えない触手をデイモルフオセカに伸ばしてくるのがわかる。

——大丈夫、まだ、死んではいけない。だから……大丈夫。

「お願い神様、ハルの神様、私に力をかけて」

デイモルフオセカは植物たちから伸びる触手を渾身の力を込めて一旦ぐつと押しとどめた。やがてデイモルフオセカの体全体が白い光で包まれる。風も吹いていないのに栗色の髪が逆巻いてうねる。止めようと手を伸ばしたフェリシアの指先が弾き返された。

デイモルフオセカはゆっくりと一歩前へすすんだ。二歩三歩、エリアEの中を光の塊が移動していく。

それはほんの数十分のことだったけど、フェリシアには何時間もたったように感じられた。光の塊はその大きさを徐々に小さくしな

からエリアEの隅々を照らして行った。デイモルフオセカはフェリシアの元までゆっくりと歩いて近づいてきた。光はほぼ消滅している、デイモルフオセカの顔の青白さが際立つ。

「私にできるのはここまで……ここまでみたい」

デイモルフオセカは、ふわりとほほ笑んでから倒れこんだ。

「デイム……デイム！」

デイモルフオセカはフェリシアの震える細い声を不思議な思いで聞いていた。

——なんで泣いてるの？

痛みも苦しさも無かった、むしろとても安らかに静謐な闇に閉ざされていく。

「もう大丈夫。ナンディーに帰らなきゃ……」

デイモルフオセカの体は氷のように冷たくて、脈は凍りついて行くかのように幽かになり、やがてフェリシアの腕の中で静かに途絶えた。

一方、エリアEの植物はかろうじてその命脈をつないだように見えた。凍死を免れた木の枝からは瑞々しい葉が萌出て、根の残った草は新芽を吹いた。

イブキとフェリシアからの連絡をじりじりした思いで待っていたカナメはモニターの前で歩きまわっていた。

「カナメ、良い知らせと悪い知らせだ。悪い方は二つもあるぜ」

憔悴しきった顔のイブキがモニターに現れた。

「まず良い知らせだ。エリアEが復活した。デイモルフオセカのお陰だ。酸素濃度は徐々に回復している。悪い知らせは……すまない。デイモルフオセカが……死んだ」

カナメは瞠目する。

——嘘だろ……。

「森の民全員がかかっても無理なはずだったらしいんだ、一人で飛

び込んで行くなんて……無茶な。カナメすまない」

イブキは唇を噛みしめる。

「ディムを分解するぞ。でも俺が絶対完璧に再生してやるからな、約束する。それから悪いニュースのもう一つだ……」

イブキは沈痛な面持ちでカナメを見詰めた。

「ここで一旦、ガルダはワープドライブモードに移行する」

「何を言ってるんだ？」

カナメは信じられないと眼を見開く。

「舵の復旧が間に合わない。ジタンにぶつかる前にワープする」

「危険だ！ ジタン系内でワープするなんて……」

「じゃあ、ジタンに突っ込むか？ どっちにしたって危険なんだよ、カナメ。そこで、君たちまで巻き込むわけにはいかない、他の五隻はなるべく全速力で圏外に避難してくれ。ディムが守ってくれた船だ。今度は俺が守って見せるさ。Dポイントで合流する予定だ。俺を信じろよ」

不敵な微笑みを浮かべた後、イブキは全艦放送に切り替えた。

「宇宙船ガルダより全艦に告ぐ、本船は只今よりワープ体制に入る。ジタン、ハルの重力圏でのワープの為、他船への影響を考え三十分の猶予を設けた。その間に全速力でジタン系外へと退避願いたい。以上」

この放送がイブキとの別れになった。ガルダはジタンにぶつかることはなかったが、そのまま行方知れずとなってしまった。Dポイントにガルダは現れなかったのだ。いつまで待っても。カナメは僅かな時間に配偶者も親友も同時に失ってしまった。

ディモルフオセカにガルダのエリアEの窮状を知らせるようにコブに仕向けたのがムラサキだった。ディモルフオセカにしかガルダを救えないとコブを焚きつけたらしい。事実その通りだったのかも

しれない。が、そのことを後から知らされてカナメは愕然とした。

ムラサキはディモルフオセカが森の民であることを知っていたのだ。知っていて放置し、いざと言う時の切り札として利用したのだとカナメはその時気づいた。腹立たしかった。何よりも、自分が何もできなかったことが腹立たしかった。

* * *

意識があるということはどういうことだろうか。(*)脳の中で神経ネットワークの上を信号が走ることだと定義するとパソコンもサ―モスタットも意識をもつことになるらしい。重力相互作用でつながっていることを考えると地球と太陽だって微弱ながら意識があるということになるそうだ。カンブリア時代に地球は何を考えていただろうか、恐竜時代には、産業革命の時代には……。絶滅した動物や植物を思い出すことはあるのだろうか。もし、失ったものを地球が悲しんでいるとしたら、それはとても切ないことだ。

(*) 脳のからくり 竹内 薫 茂木健一郎 著 参照

第8話 月に死す(1)

「で？ これは何ですか？」

エリアEはあんなに光に溢れているのに、他のエリアは薄暗い。ほかのエリアは全部こんな風に薄暗いんだろうか。なんだか気が滅入る。

「脱出艇」

カナメはさらりと答えたが、それはどう見ても魚雷のように見えた。今からこれに乗って敵艦にぶつかって行くんだと言われたら、それは恐ろしい事だけど、本当のことだと信じられる物体に見える。「まさか、これで地球に帰れとか言うんじゃないですよ」

不吉なものを見るように中を覗き込む。

「そうだよ」

カナメはにつこり笑った。

「冗談言わないでくださいよ。こんなんで地球まで帰れるわけないじゃないですか」

声を張り上げる。こんなのに乗り込んで、空気がないどころか上も下もない宇宙空間を漂うだなんて狂気の沙汰だ。

「帰れるよ。ちゃんとコンピューター制御されてるから目標地点に十メートル程の誤差で着く。多少時間がかかるかもしれないけど、その間は快適に過ごせるようになってる」

乗せてしまえば、後は運次第だ。正直なところ、地球に着くまでに瑞樹が生きていられるかどうかの保証はない。だが、もし三か月もつのならば、無事両親に会うことができるだろう。ブラキカムは悲観的だったが、瑞樹があまりにも元気そうなので、大丈夫な気がカナメにはしていた。

「嘘だあ！ 絶対信じないもんね。私こんなには絶対乗らないか

らね」

瑞樹はカナメの手を振り切って逃げ出した。

「あ、おい、待てったら」

カナメは瑞樹が走って逃げた方に走りだしたが、瑞樹が急に立ち止まったので危うく躓きそうになる。

「おい、急に止まるなよ。踏んづけちまうかと思った」

カナメは瑞樹の視線を辿る。そこにはニシキギが立っていた。

「おやおや、その地球人を逃がしたのはあんただったのか？ 仕事はろくにしないのに、そういうことはするんだな」

ニシキギは勝ち誇ったように言った。

「知り合い？」

瑞樹は振り返ってカナメを見上げた。

「まあね」

知っていることは知っていたのでそう答える。

「おい、どうしてこいつはハルの言葉をしゃべってるんだ？」

ニシキギは驚いて瑞樹を見つめた後、カナメを睨みつけた。

「……私、しゃべってたらまずかった？」

瑞樹は不安そうにカナメを見上げる。

「構わないさ」

「仕事してないって……もしかして、私のせい？」

「いや。だってこいつが人は足りているから手伝わなくていいって言っただよ」

カナメは悪びれる様子もなく言った。

「他の仕事があると言っただけだったか？ 地球人と遊ぶことが仕事なのか？」

「遊んでいるように見えた？」

カナメはちよつと困ったように笑う。

「見えるな」

「遊んでるんじゃないよ。この人は私をこんな恐ろしい魚雷の中に押し込めようとしてるんだよ。そんなの遊びでやられたらかなわな

いし……」

言った後、瑞樹は急にはっとした顔になってカナメを見つめる。

「これって、遊び？ 悪い冗談なの？」

「だからー、これは脱出艇であって魚雷なんかじゃないんだって。遊びでも冗談でもないよ」

カナメは弱りきった顔をする。

「この地球人を帰すつもりなのか？ こんな脱出艇が地球上で見つかったら、我々の存在が分かってしまうだろうが。しかもこいつはこんなに流暢にハル語をしゃべってる。そんなやつが地球で誰にどんな情報を漏らすのか考えないのか？」

ニシキギは顔を顰める。

「存在が分かっちゃまずかった？」

カナメは苦笑する。

「当然だろう？」

ニシキギは呆れたようにカナメを見つめる。カナメは困ったようにニシキギを見つめた。

「ニシキギ、考えすぎだよ。この子が何をしゃべったからって、一体何人の地球人がそれを信じると思うんだ？ それに脱出艇は身元が分からないようにハルの情報は何も記載されていないものを使うし……」

ところがカナメの言葉に返答したのはニシキギではなく、ムラサキだった。

『ダメです。その子を帰してはいけません』

突然頭の中で声が響く。三人とも後ろを振り返った。ムラサキは廊下の壁を伝いながらヨロヨロと歩いてきた。

「ムラサキさん？」

瑞樹はムラサキの様子がおかしいことに気づいて駆け寄る。ムラサキの肩に手をかけようとした瑞樹の手をカナメが掴んで止めた。
「触っちゃだめだ。マダム・ムラサキ、あなたいじられましたね」

『私に触ってはいけませんよ、瑞樹。感電します』

ムラサキの体は小刻みに震えていて、時々電気が放電するようなバチバチという音がした。

「なんで？ 誰がこんなことを……」

膝をついてしまったムラサキの前で瑞樹も同じように膝をつく。

「もしかして君がやった？」

カナメはニシキギを振り返った。ムラサキの様子を冷やかな目で眺めていたニシキギがニヤリと笑う。

「なんで？ なんでこんなひどいことをするの？」

瑞樹がニシキギを睨みつける。

「ちよつと情報をもらおうとしただけだ」

ニシキギは無然とする。

「情報を無理矢理取り出そうとするとセキュリティが発動するんだ」
カナメが説明する。

「よく知っているようだな」

ニシキギは不愉快そうだ。

『あなたにも、こんな風に良く故障させられましたものね』

ムラサキはカナメを見上げて微笑んだ。

「僕はこんなひどい目に遭わせてませんよ。あなたはあつと言つ間に機能停止してたでしょう？」

カナメは心外そうに弁解する。

「……もしかして、あなたの方が悪者と違う？」

瑞樹は呆然とカナメを見上げる。

『カナメ、瑞樹をそんな脱出艇に乗せてはいけません。取り返しがつかなくなります』

「私、こんなのに乗りませんからご心配なく」

「あのなー、地球に帰りたいって泣いたのは君だろ」

『帰してはいけません。まだこの子の仕事は終わっていません』

「あの……私、あの問題も解答もさっぱり駄目です。わかりません。この魚雷以外の帰り方があったら帰りたいって思います。あなたとの約束は破ってしまうことになってしまいましたが、どうか許して

くださいね」

瑞樹は済まなさそうにムラサキを覗き込んだ。

『瑞樹、帰らないでください。お願いです』

言葉はぶれたように響いて、よく聞き取れなかったが強い意志が伝わってくる。

「もうそろそろ駄目かな？」

ニシキギはまるで天気の話でもするかのように呟いた。

「ちょっと、あんた、あんたがムラサキさんをこんな風にしたんでしょ？ 何とかしなさいよ」

瑞樹はニシキギの腕をつかんだ。気のせいかな瑞樹がニシキギに触れた瞬間、ニシキギが目を見開いた気がして瑞樹は手を離す。

「瑞樹、ムラサキはもう駄目だよ」

カナメがのんびりとした声でニシキギに同調する。

「どういうこと？」

「中身をお取り換えってことだ。人間じゃないんだから死ぬわけじゃない」

ニシキギはこれっぽっちも罪悪感を持っていない様子だった。

「よ、よく分かんないけど……それって、中身取り替えたら、別人になるってことなんじゃないの？」

「記憶はそのまま保存されているから同じようなのがまた現われるだけだ。別人じゃない別物だ。機械なんだからな」

ニシキギは肩を竦めた。

「でもっ！ 別物でも別人でもどうでもいいんだけど、私が言いたいのはそんなことじゃなくて……私はムラサキさんに別物になって欲しくないの。同じ種類の電化製品買ったって癖あったり、壊れやすかったり、長持ちしたりするじゃない！ ムラサキさんには今のこのままのムラサキさんでいて欲しいの！」

詭弁だ、滅茶苦茶だ。自分でもそう思う。それでも……今、このムラサキさんを失えば、自分は地球へ帰る手がかりを一つ失ってし

まうんじゃないか……そんな気がしたのだ。

「ハルの技術のことは地球人には分らないだろうな」

ニシキギの顔には侮蔑の色がありありと浮かんでいた。

「なによ！ 地球人だからって馬鹿にすることないでしょう？」

瑞樹はニシキギに掴みかかった。

カナメはその様子を横眼で見ながら溜息をつくとムラサキに話しかけた。

「機能停止させるよ」

『カナメ……』 音声 がぶれてもうほとんど聞き取れない。『瑞樹は……なのです。……しては……ない……』 音声 が途切れてしまう。

カナメは仕方なく靴の先でムラサキの背中のある部分を思いつきり蹴った。帯電していたムラサキの体がシンと静まり動かなくなった。背後ではまだ瑞樹とニシキギの争っている声がある。何を子供相手にと思ったところで、ドサツと体が床に叩きつけられる音がしてカナメは驚いて振り返った。

そこには床の上にはったりと倒れたニシキギがいた。

「瑞樹？」

「どんな物にだって魂が宿ってる。だから大事にしなきゃいけないの！ 言葉をしゃべれる機械だったら尚のこと、絶対に、私が保証するよ。心を持ってる！」

瑞樹はニシキギの腕を絞め上げながらそう言った。

「やめなさい！ やめるんだ」

カナメはニシキギから瑞樹を引き剥がした。ニシキギは床に倒れたまま呻いている。騒ぎを聞きつけた人が何人が集まってきた。カナメは瑞樹を捕まえたまま叫んだ。

「おい！ 誰かニシキギを医療センターへ連れて行ってやってくれ！」

まだジタバタしている瑞樹には低い声で囁く。

「ムラサキを運ぶから手伝いなさい。修理しなくてもいいのか？」
大人しくなつて解放された瑞樹は、ムラサキの倒れているところへ走り寄る。

瑞樹はムラサキの腕をとると肩に手を回し立たせようとする。ずしりと重い。こんなに華奢なのにこんなに重い。やっぱり人じゃないんだと実感する。反対側のムラサキの肩をカナメが担いだ。

「こんな風に運ばなくてもいいんだよ。人間じゃないんだし」とカナメは言つたが、瑞樹は下ろさなかつた。口を真一文字に結び頑な表情でムラサキを運ぶ瑞樹を見て、カナメはため息をつく。

「君、強いんだね。ニシキギを投げ飛ばしちゃうなんて……」

カナメは恐ろしげに瑞樹をチラリとみた。

「……小さい頃からじいちゃんに武道やらされたの。女だからこそ、自分の身は自分で守れなきゃダメだって……」

瑞樹の声は微かに震えていて、抑えているのは怒りよりも悲しみなのだとカナメは気づいた。たかがアンドロイドだ、ハル人ならば悲しんだりしない。

地球人とハル人の間にある意識の差を肌で感じる。この他にもたくさんあるであろう意識の差。

——どうするつもりなんだろう……ハル人は……どうするだろうか……地球人は。

「……僕のテントに忍び込んだ時、どうして僕にもあの技を使わなかったの？ そうすれば、逃げられてたじゃないか」

カナメはふと思ひ出して口にした。

「あの時のことはもう言わないで。良心の呵責で体動がなかったんだよ。自分が悪いことをしてるって分かってるのに、その上、人ま

で傷つけられないよ」

瑞樹は弱弱しく呟いた。

良心の呵責があつて本当に良かったとカナメは胸を撫で下す。

「そこを曲がつたところにエリアGがあるから……そこで修理してみよ」

「うん」

瑞樹が返事をして頷いた時、ムラサキを支えている方の肩がミシリと軋んだ気がした。それきり腕の感覚が消えて、肩から手先まですべてが動かなくなつた。

——折れた？ 支えただけで……折れた……。

瑞樹は頭の中が真っ白になる。

「おい、誰か手伝ってくれ」

カナメが声をかけるとエリアGにいた人が何人か集まつてきた。

ムラサキはその人達によつて奥に運び込まれていった。

「おい、泣くなよ。なんとかしてみようから」

瑞樹は震えながら顔を上げる。いつのまにか涙が零れていた。カナメが怪訝そうに覗き込んでいる。

「カナメ……私……」

頭が混乱していて何を話したらいいのか瑞樹には分からない。縋りつくような目をしているだろうと瑞樹は自分で思う。

「駄目でも、ムラサキはまた復活するんだ。そんな情けない顔するなよ」

カナメは優しく笑つた。その優しい笑顔に心が静まって行く。

奥へ立ち去りかけるカナメを呼び止めた。

「カナメ」

カナメが何事かと振り向く。

「カナメ……ありがとうね。私のこと、地球に帰してくれようとして、本当にありがとう……ムラサキさんのことお願いします」

カナメは一瞬不思議そうな顔をした後、頷いてにっこり笑つた。

「終わるまで、その辺で待ってて」
そう言い残すと立ち去った。

瑞樹はエリアGの隅っこの壁にもたれて、そのままズルズルと崩れ落ちた。

「やっぱり最後は地球で死にたかったなあ……」
涙がハラハラと落ちる。

——日本人なら畳の上で死にたいってお年寄りと言うらしいけど、私は地球の上にさえいないんだね。青い、青い地球の上で死にたかったな。

「もつとも、地球にいたらそんなこと考えもしなかったよ。これで良かったのかも……ね」

——パパとママは、私が死んでしまったといつかは諦めるんだろうか、それともいつまでも待ち続けてしまっただろうか……。

どちらでも切なく、寂しく、申しわけなかった。どこも痛いところはなかったけど、呼吸が苦しかった。視界が暗く狭くなっていく。
「……パパ、ママ、ごめんね。最後に一目会いたかったよ」

瑞樹はそのまま意識を失った。

第8話 月に死す(2)

気がつくとも目の前にムラサキが立っていた。

『あれ？ 治ったんですか？』

ムラサキの姿は、全体的に淡く光っているように見えた。

『瑞樹、私など運ぶ必要はなかったのですよ。肩……折ってしまいましたね。ごめんなさい』

ムラサキさんは痛々しいものを見るように瑞樹を見つめた。

『あれ？ でも変だな、肩折れてないよ』

瑞樹は自分の体も淡く光っていることに気づく。

『私……どうしたんだろ？』

悲しげなムラサキの視線を追う。そこには壁にもたれたまま蹲っている瑞樹自身がいた。

『私……死んじゃったの？』

呆然と呟く。

『どうしてすぐカナメに言わなかったんですか？ 一度死んでしまつたら、再生不良になってしまうことがあるんですよ』

ムラサキさんは美しい眉をひそめた。

『一度つて……そんな……二度も三度も死なないでしょう？』

ムラサキの奇妙な言葉に死んでしまったことを悲しむタイミングを失ってしまう。

『ここにもって仕方がありません。外に出てみましょうか。実は私、この地から地球をまだ見ていないのです』

ムラサキの体がフワリと浮いて天井を突き抜けて行った。慌ててそれを追いかけようとして、ふと自分の死体を見つめた。

——こんなにあっけなく死んでしまうとは思ってなかったなあ。

自分の遺骸をしばらく見つめた後、瑞樹もフワリと飛び上った。

外は月面だった。月の南極の永久影から上昇して地球が見える面

へと移動する。青く光る地球に瑞樹は目を見張る。

——私、本当に地球にいなかったんだ！。

最後の最後まで信じてなかった。ムラサキに言われても、カナメに言われても、ミントに言われても、どこか心の隅で自分は地球から離れてないって思ってた。

『私、死んだ後、もしこんな風に色々な所に行けることができたなら、月に行ってみたって思ってた。月から地球を見たらさぞかし綺麗だろうなって。まさか月で死ぬなんて思ってもみなかったなあ』

地球は、丸くて、青くて、白くて、緑で、オレンジ色で……宇宙の中にぽっかりと、ただ一つの存在のように浮かんでいた。

——私はここで死んでしまっ……もうあの青い球体の上には戻れないんだ。

淡い寂寥感が心に浮かぶ。それは本当に淡い、淡い気持ちで……。自分の魂の淡さに依っているんだろうかとふと思う。

『美しいですね。昔のハルにそっくりです』

『ミントもそう言っていました』

『私達は子供達の記憶の中に美しかった頃のハルを植え付けるか、最後の現実のハルの姿を植え付けるか迷ったのです。そして私達は前者を選びました。それが正解だったのだと今わかりました。あの美しかったハルのイメージがあったからこそ、私達はここに辿り着けたのだと……』

『はあ……なんと言ったらいいのか……良かったですね』

地球人としてはどのような反応をしたらいいのか困る。悪いことなのか良いことなのか、分からなかったからだ。ただ、鮭の遡上みたいな感じかなと何となく微笑ましく感じはする。

鮭は元の川じゃない似たような川に、間違えて戻ってしまうことはあるのだろうか。あったとしたら、鮭はそこで幸せになれるのだろうか。そんなことを考えていた。

『ハルから脱出したのは六隻の船団でした。はぐれたり、事故にあつたりして消えたものもあります。その船の一つが随分前に地球に既に着いていたかもしれないとあなたは考えることはありませんか？』

何気なく言葉をふるムラサキを瑞樹はぼかんとした顔で見つめる。

『……いやいや、私達は地球上で発生したんだと信じていますよ。』

そんな途轍もないこといきなり言いださないでくださいよ』

うるたえる瑞樹にムラサキはふふつと笑った。

『長い間、メインコンピューター・ナンディーと私は一緒に宇宙空間を漂ってきました。船に乗っている私たちの子供達が幸せに暮らせる惑星を求めてね。私は人間ではありませんから、寂しいとか退屈したとか人間が感じるような感情はないのですが、それでも、銀河系の中で太陽を周る地球を見つけた時、正直私はホッとしたのです。アンドロイドがホッとするなんて変でしょう？ でもこれで使命が果たせる、そう思った時、私の神経ネットワークの上の信号がいつもより滑らかに流れるのを感じました。幸せといっているいい感覚でした。ここだ、間違いないと思いました』

『他にも地球みたいな惑星がたくさんあるって聞いたことがありますよ。銀河系の中にもその他の島宇宙にも』

『……瑞樹は輪廻転生という言葉聞いたことがありますか？』

——あれ話題そらされた？

『生まれ変わるってことですね。宗教によって違いますけど、ありますよ、そういう考え、地球にも』

『地球では生まれ変わった人間が前はどんな人間もしくは生き物だったのかを知ることができますか？』

『そんなこと知ることができないでしょう？ 時々怪しげな占い師があなたの前世はシジミでしたとか言ってることはあるけど

ね」

瑞樹はクスクス笑う。

『そうなんですか』

ムラサキは残念そうに俯いた。

『ハルの人は分かるんですか？』

瑞樹の問いにムラサキは首を振って、人間は不便ですねと呟いた。心なしかムラサキの姿が前よりも透けてきているような気がして瑞樹は目を擦る。

『一つ、訊いてもいいですか？』

ムラサキは瑞樹を見つめて微笑んだ。

『なんででしょう？』

瑞樹は首を傾げる。

『あなたはどうして私を助けようとしてくれたのですか？ 私がアンドロイドだと知っていたのでしょうか？』

『なんでって……あなたが苦しそうに見えたから。それにあなたは私を地球に帰してくれると言ってくれた人だから。条件付きでだけ……』

『私は苦しそうに見えましたか？』

ムラサキの言葉に瑞樹は頷いた。

『私はアンドロイドなんですよ』

ムラサキはくすりと小さく笑った。

『大人の人間から人間のように扱われるのはなれていないので……その、少し戸惑っているようです。小さい子は別ですけどね。小さい子は私のことを母のように姉のように慕ってくれます。アンドロイドと知るまではね。私はエデュケーション部門のアンドロイドとして利用されてきたし、人間たちを利用することになったのたためらいもありませんでした……』

ムラサキはそう言うと言を細めて地球を見つめた。

『でした…ですか？』

『今は少しためらいを感じています。あの鋼鉄の体を離れたせいで
しょうか』

ムラサキは小さく笑んだ。

『あなたは……私を人間として扱ってくれた。だから私も人間とし
てあなたに謝罪しておきます。これから、あなたを巻き込むであろ
う諸々のことについて……』

『どういうことですか？　これからって……私、死んだんですよ
？』

『……そろそろお別れのようにです』

ムラサキはドキツとするくらい美しい顔で呟いた。

『お別れって……私はこれからどうしたらいいんですか？』

ムラサキはにっこり笑って、まっすぐ宇宙の虚空を指した。

『瑞樹、未来へ……未来へ行きなさい』

そう言った刹那、彼女は光の影だけになり、風に吹かれたように
かき消えた。

『未来へって……私はどうしたらいいんですか？』

一人残されて途方にくれる。

その時、ぐいつと引つ張られる強い力を感じて、瑞樹は地面に吸
い込まれるのを感じた。

——地面に吸い込まれるってことは地獄行きってこと？

声にならない悲鳴を上げながら瑞樹もかき消えた。

* * *

死んでしまっただろうなるのだろう、これは誰もが考えて、誰もが
等しく回答を得られない永遠の問題だ。もしも魂だけになって自由

に行きたい所に行けることができるなら、地球上のたくさんの場所に行くことだろう。高地に出現する花畑や砂漠の月やグレイシャーブルーに輝く北極の氷を見に行く。それに飽きたら月や火星や木星や海王星まで足を伸ばしてみる。（足があればけど……）だけでもそのうち、きっと地球が恋しくなつて、再びあの大地に生まれ変わることを熱望するようになるだろう

第8話 月に死す 終了

第9話 再生不良(1)

ブラキカムはエリアGにやってきていた。ニシキギは肩が外れていてかなりの重症だ。聞けば地球人の女の子にやられたという。そんな馬鹿なと思いつつ、傷害事件であるので事情を聴くためにカナメを訪ねることにしたのだった。

カナメはムラサキを修理中だった。

「カナメ、なんだ？ ムラサキは壊れちまったのか？」

「ニシキギが壊したんだ。僕じゃないからね」

カナメは防護服と防護面をつけているので声がくぐもっている。

「そんなこと調べに来たんじゃない。ニシキギのことだ」

「ああ、彼はどうだった？」

手元の器具が火花を散らす。

「右腕脱臼だ。やつは地球人の女がこんなことしたって喚いてたけど、あの子にそんなことできるわけないだろ？ 状況を聞きたいと思ってるね」

ブラキカムの言葉にカナメは表情を曇らせた。

「彼女は面倒な立場になりそうかい？」

カナメは顔を顰める。

「お前まであの子がやっただって言ってるのか？」

ブラキカムは呆けた顔をした。

「他にも目撃者がいるかもしれない。ニシキギを運んでもらうのに助けを呼んだらすぐに何人が来たからね」

「なんてこった」

「状況は悪そうだね」

カナメは防護面を上にあげて、心配そうにブラキカムを見つめた。

「彼女に直接会って話そう。どこにいる？」

「その辺で待っていてくれって言ってるけど、見なかった？」

「ちよっと見てくるわ」

ブラキカムはエリアGの入口付近を見に行つて、その隅に蹲っている瑞樹を見つけた。こんな小さい子があんな大きな男を投げ飛ばして、脱臼させられるもんかなと思う。それほど瑞樹は小さく、頼りなく座っていた。

「なあ、瑞樹、ちょっと聞きたいんだけど……瑞樹？」

ブラキカムが瑞樹の肩に手をかけると、瑞樹の体はグラリと傾いてそのまま床の上に転がった。

「……瑞樹？ 瑞樹！」

ブラキカムは慌てて瑞樹の呼吸と脈を確認する。

「どうした？ ブラキカム」

カナメが防護面を外して近づいてきた。瑞樹が倒れているのが見えて、カナメは小走りになる。

「瑞樹？ どうした？」

「……死んでる」

ブラキカムはカナメを見上げた。

「何を冗談言ってるんだよ？ さっきまでびんびんしてて、ニシキギを投げ飛ばしたんだぞ。ここまでムラサキだって運んで……そんな……何の前触れもなく、こんな急に……」

——前触れ？

カナメは突然思い出す。

——さっき瑞樹は何と言った？

ありがとと、地球に帰そうとしていたことへの感謝を……そして、縋りつくような瑞樹の目を思い出す。あの時、どうして気づいてやれなかったんだろ。別れの言葉を言っていたのに……。カナメは呆然と瑞樹を抱き上げた。まだ微かに温かい。

突然カナメは瑞樹の亡骸を担いでエリアGを後にした。

再生を目的とするならば生きている内に分解する方が望ましい。死後八時間以内なら再生可能だが、時間が経てば経つほど色素定着

や記憶等が不安定になり再生不良になりがちだ。

瑞樹を一刻も早く分解する必要があった。

「おい、カナメ、どうするつもりだ？」

「分解する」

「再生装置が壊れてるぜ、それに許可なく地球人を分解再生してもいいのか？」

「再生装置はすぐに直す。一人の命を救う為の許可ってなんだ？ そんなものが必要だという政府ならば、そんな政府こそ必要がないんだ」

カナメは吐き捨てるように言った。大股で歩いて行くカナメを少々太り気味のブラキカムが息を切らしながら小走りで追いかけた。

「カナメさん！ このムラサキはどうするんですか？」

背後から呼び止める声がする。

「新しいの入れといて！」

カナメは怒鳴り返した。

人を再生する条件の四番目。再生する為の社会的理由があること

……。

これは非常に曖昧で、同時に非常に残酷な条件でもある。

ハル脱出時に生存していたほとんどの者が、ハルを脱出し新天地に移住するという理由で再生することが認められた。すなわちエクスダスを成功させる為という社会的理由があると定義されたからだ。

三百年にもわたる長い間、カナメやイブキが再生され続けたのは科学技術への貢献という社会的理由が認められた為だった。しかし、ハル脱出直前のある時点までは、乳飲み子を抱えた母親にさえこの理由が求められたのだ。ハル脱出計画実行以前に病死したり事故死したりした場合、いくら本人が望もうと親族が望もうと、この四番目の条件をクリアできなければ再生は認められなかった。

どのような境遇の子供でも、ハル政府が全面的に責任を持つて養育することを保証していたのがその理由だ。その保証の存在が、子供のために母親が、もしくは父親が必要だと考えることを、社会的な必要ではなく個人的な必要だと定義づけてしまうのだ。結果、社会的な貢献をしていると認められた親は再生され、認められない親は再生されない。ある意味とんでもなく不公平な条件であると言えるのだ。

しかもそれを認める理由も認めない理由も流動的で曖昧で不透明なのだ。この条件が設定された本来の理由……それを知っている者はごくごく僅かで、しかもハル政府の極秘事項に分類されているので、知っていてもそれを口にすることはできない仕組みになっている。

カナメにとつて、その理由も再生される条件も取るに足らないくだらないことだと考えはするが、ある意味仕方がないことだとも思われた。

その理由とは、要するに、地下都市の生活を脱出まで無事に継続させ、エクソダスを成功させる、その為に貢献できるかどうかなのだ。貢献できないものまでをも際限なく再生するには地下都市は狭すぎた。

このエクソダスが成功すれば、いずれ大きくその仕組みを変える必要が出てくることは目に見えている。エクソダスの為に開発された諸々の装置やシステムはいずれ大きな社会的障害になってくるだろう。

しかし、何はともあれ、今この地球人を死なせることが、ハル政府の計画にマイナスに働くだろうという事を証明しさえすれば、四番目の条件をクリアできることをカナメは知っていた。今はそれだけで十分だった。

「おい、ニシキギ、この子を訴えるつもりはあるか？」

カナメは医療センターに瑞樹を担ぎこむなり、肩を固定してもらっているニシキギの前に立った。ニシキギは怪訝そうに見上げた。

「そうだな。肩の脱臼なんて重症だからな。仕事をできなくなった分の補償と謝罪をしてもらわないとな」

ニシキギはむっとした顔で言った。

「ところで、そいつどうしたんだ？ 俺を投げ飛ばして具合が悪くなつたのか？」

「僕が彼女の代わりに補償するよ」

「あんたが俺の分まで仕事をすると言うことか？ それじゃ、あまりにも当たり前すぎるな。そんなにその女の代りに何かしたいと言うなら、今ここで土下座でもしてもらおうか？」

ニシキギは唇を片方だけあげて意地悪そうに笑った。

周囲の誰もが手を止め息を潜めて二人のやりとりを見守っている。

「……」

カナメは無言でニシキギを見つめた。

「ニシキギ、いい加減にしろよ。瑞樹は……」

ブラキカムが口を挟んだのをカナメは仕草で止めた。

「この子持つとして」

カナメは瑞樹をブラキカムに渡すと膝をついた。両手を床につき頭を下げる。

「すまなかつた。瑞樹を許してやってくれ」

みな一様に驚いて息を呑む気配がしたが、一番驚いていたのは当の本人のニシキギだった。張り付いたような作り笑いが消えて唇を歪める。

「どうしてこんな地球人の為にそんなことまでするんだ？ あんたには誇りというものがないのか？」

ニシキギの言葉は静かだったが怒気を含んでいた。

「瑞樹に地球へ帰してやると約束した。再生できたとして地球へ帰れないような罰を受けてしまえば意味がない。僕にとっては約束を守るの方が大事だ」

カナメは立ち上がると、ブラキカムに渡していた瑞樹を抱き上げる。

「再生？ そいつどうしたんだ？」

ニシキギの問いにブラキカムが静かに首を振った。

「そんな……」

絶句するニシキギを後に、カナメは医療センターの奥にある分解再生装置へ瑞樹を運んで行った。

瑞樹の体はゆっくりと時間をかけて分解され、分解装置の中に吸収されて行く。分解装置はハルを脱出して以後カナメがバージョンアップさせていた。以前は一年分の記憶を採取するのに八時間もの長い間、記憶採取装置を装着して採取しなければならなかったが、カナメは記憶採取を分解装置に組み込んで分解しながら記憶を採取できるようにしていた。このやり方ならば、分解する直前までの記憶を残すことができる。ただし、分解に多少時間がかかるというデメリットはあった。

「完全に死んでしまっただけでも記憶採取ができるのか？」

いつのまにか治療を終えたニシキギが後ろに立っていた。

「完璧な記憶は取れないかもしれない。分からない」

カナメは振り向きもせず答えた。

「……さっきは……すまなかった」

ニシキギは呟くように謝罪した。

「こいつが死んだのは……俺のせいかな……」

ニシキギは消え入りそうな声で言った。

「いや、そうじゃない。瑞樹は……もうずっと前から具合が悪かったんだ。もう長く生きられないことを知ってたから……僕が無理を

させたんだ。自分のした約束を守る為にね。だから、君のせいじゃない」

カナメは苦い薬を飲み込むように息を呑みこみながら続けた。

「それに……瑞樹は確かにやり過ぎたよ。滅茶苦茶なやつだ」

カナメは苦笑する。

「滅茶苦茶だけど憎めない……というところか？」

ニシキギもクスリと笑う。

「投げ飛ばされた君がそう言うんなら、そうなんだろう」

カナメは失笑した。

「遺伝子をいじる必要があるとドクターが言ってたが……」

「うん、これからシステムを設計してみるよ。時間が掛るかもしれないけどね」

「……俺が設計したものを使ってみてはもらえないだろうか？」

「？」

カナメはニシキギを見つめた。

「俺は……森の民のタイプオリジンを再生する研究をしていた」

カナメは目を見開く。

「遺伝子ではないと分かっていたけど、遺伝子をいじることで、別のルートで再生できるんじゃないかとずっと考えてた。多少見た目が変わっても中身がその人であればいいと俺は考えていて、それを……イブキさんに叱られた。その時に作っていたものだ」

「君は……イブキと一緒に仕事をしていたんだね」

いつだったか、森の民のタイプオリジンを再生することにひどく熱心なやつがいるとイブキが言っていたことがあった。彼だったのかもしれないとカナメはふと思い出した。

「俺はイブキさんのようになりたいくてこの分野に進んだんだ」

「そっか、じゃあ、ガルダに乗れなくて残念だったな」

「いや、俺はナンディーに乗ることを希望した。イブキさんは二人じゃない。俺はいずれイブキさんを追い越して破壊神シヴァと対決するんだと、そう考えてた。それが目標だったからな」

ニシキギはカナメを真っ直ぐ見つめた。

「おいおい、破壊神シヴァって誰の事だよ」

カナメは眉を顰める。

「……だから俺はあんたに頭なんて下げてほしくなかった」

「君がしろって言ったんだろう？」

カナメは呆れて絶句する。

「手を出して」

「？」

カナメは言われるままに手を出した。

ニシキギはカナメの手の甲に記号の羅列を書き込む。

「これがシステムのIDとパスワードだ」

言い残すとニシキギは踵を返して立ち去った。

第9話 再生不良(2)

徐々に再生されていく瑞樹を見ながらブラキカムは溜息をついた。まだ親指ほどの小さな胎児だ。心臓や脊椎が透けて見える。再生装置はカナメが速攻で修理した。

「やつぱり色素定着率が悪いみたいだな」

ニシキギが呟いた。

「仕方ないさ。一旦完璧に死んでしまおうところなんだ」

ブラキカムは再生データをチェックしている。瑞樹の再生が完了するまで一月以上はかかる。

* * *

「どういうことですか？ 地球へ降り立つ計画が全く進んでいないわ」

アーマルターシュはラークスパー教授を問い詰めていた。

「しばらく延期だ。月と火星に地下都市を建設することを優先したからね。火星の地下都市は大規模だが、かなり早くから着手していたから、もうだいぶ出来上がっているはずだよ。一度君も視察に行つて来るといい」

ラークスパーは穏やかに微笑んだ。

「どうして？ どうしてですか？ 目の前に地球が……あんなに昔のハルにそっくりの地球があるのに」

「ムラサキが言っていたことを検証してみたのだよ。ハルの植物とファームの民は地球上では生きて行けない。一般人でも色素の薄いものは地球の昼を耐えることができないだろう。我々の使命はすべてのハルの民を無事に植民させることなのだよ」

「そんな……月はともかく火星は遠すぎます」

「月はロケーションとしては良いところだよ。しかし重力が小さすぎる。長く滞在すればそれだけ体に影響が出る。月はエネルギー基地として使い、定住するなら火星か、難易度は上がるが金星の環境を整えることも考えている。金星なら十分な重力がある。火星でさえ地球の重力の半分以下なのだからね。もしくは別な惑星を太陽系外で探すか……」

「ファームの民の為にだけに地球を諦めると言うのですか？ 一般人は問題ないんでしょう？」

「いやいや、全く問題がないという訳ではないよ。さっきそう言っただろう？ アーマルターシュ」

ラークスパー教授は榛色の穏やかな瞳でアーマルターシュを見つめた。口調も駄々っ子をあやすように穏やかだ。

「一般人だつて地下暮らしが長いから色素が失われているし、君みたいに三度以上再生をしたものは特に色素が薄い。恐らく君が地球に降り立って太陽の光を直接見ることはできないだろう」

「私は……地球に降りたいんです。あの青い海を風を雨を自分の目で見て肌で感じたいんです。地下都市なんかでは駄目なんです」

何のためにハルを捨てて、こんなところまで来たのか。何のためにあんな汚れた仕事に手を染めて、あんな……人を踏みにじることをしてまでこんなところへ逃げてきたのか。すべては第二のハルで、その大地の上に降り立ち、昔の豊かな自然の中で根を張って暮らすためではなかったか。

「それは追々考えてゆこうじゃないか、地球に降り立つことは最終目標だ。まずは我々の足元を固めたいのだよ。地球とコンタクトをとるのはその後だつて構わんよ。交渉が友好的に行くか敵対的になるかわからないのだからね」

「地球人なんて滅ぼしてしまえばいいんですよ。地球を全然大事に

していないんだから。地球人の聖書に載っているように一旦滅ぼしてしまえばいいんだわ」

我々はすでに多くのハル人を踏み台にしてここにこうして立っているのだ。地球人を踏み台にすることなど、それに比べればまだましな方ではないか。彼らにとって我われが宇宙人であるように、我々にとって地球人は宇宙人なのだ。

「アーマルターシュ、君は我々を侵略者にするつもりかね。しかも地球人は同朋かもしれないと言うのに？」

「同朋ならば墮落したんですよ。神ならば、かつてそうしたのでしよう。当然の報いです。一体、地球上で一日にどのくらいの森が焼き払われているか教授はご存知ですか？」

「地球人から得た情報はすべて記憶しているよ」

「それでも地球人が同朋だと思いいになりますか？」

「同朋であろうとなかろうと、感情を持っている生物が文明を築いているならば、それを易々と破壊するのは道を外れることではないのかな？ 私の経験上、生物は弱いようできて実は強い。生き残った地球人が、いつかその憎しみを踏み台にして我々に復讐する時が来るとは考えられないかね？ その証拠に我々は生き残ったではないか？ 母星を破壊されて尚、我々は生き残っているではないか。神でさえ我々を殲滅することができなかったのだとは考えられないかね？ いずれにしても我々は神ではないし侵略者にもならない。それが我々ハルのやり方であり方針なのだよ」

ラークスパー教授は静かだが毅然と言い放った。

アーマルターシュの目から涙が一筋流れ落ちる。

——ならば……どうしようと言うのか。

* * *

宇宙船ナンディーは再び静かに月面から浮かび上がった。月の重力圏から外れると人工重力装置が回転し始める。

「体が重くなつて疲れるな」

太り気味のブラキカムは小さく呻いた。

重力が変わると一時間くらいは体の調子が悪くなつて運ばれてくる人で医療センターは溢れかえる。

月に着陸した時も軽くなつた重力に適合できなかった患者で医療センターはごった返していたが、逆の作用でも同様の状況になるのだった。

「ドクター、こつちにも具合が悪い人が……」

ブラキカムを手伝っているイベリスも休みなしだ。

患者の波がおさまつてしばらくした頃、イベリスは使用した機材を分解する為に奥の部屋へ入った。そこはいつも物置として使われていたが、今日はパーテーションで区切られていて奥で誰かが横たわっている気配がした。寝込むほど具合の悪い人がいたかなと疑問に思いながら、中をちらりと覗き込んでイベリスは驚愕した。

「……デイモルフオセカ？」

イベリスは静かに近づくと顔を覗き込む。もう随分前にアール・ダー村で見たきりだけど、間違いないデイモルフオセカだ。

——どうしてこんなところに？

「やっぱ、デイモルフオセカだと思うか？」

突然後ろからブラキカムの声がしてイベリスは飛び上った。

「え？ デイムじゃないんですか？」

「……違う」

ブラキカムは心底困り果てた顔で否定した後、急に表情を変えた。
「君、デイモルフオセカを知ってるの？」

「知ってますよ。デイモルフオセカ・オーランティア力でしょ？」

「アール・ダー村で家が近くだったんです」

「そうか、君は森の民だったんだ」

「え？ ええ」

忘れていたのかとそっちの方にびつくりする。一般人と森の民の間の垣根はハルにいた頃に比べると格段に低くなっている。ファームの民と比べれば外見上は一般人と森の民は全く変わらないし、その上、今この船の中で森の民の力を持っている正しい形での森の民など存在しないのだから、忘れてしまうのも無理はないのかもしれない。なかった。

「で？ これは誰なんですか？」

「ミズキ・ヒュウガだ。あの地球人だよ。昨日再生が終わったばかりなんだ」

ベッドから出ている瑞樹の白い手をブランケットの下に入れながらブラキカムは呟いた。

「ええ？」

——あの地球人？

「どうしてこんな姿に？」

「分解再生したんだ、少々具合の悪かった遺伝子を操作した。色素定着が悪いのは彼女が完全に死にしまったせいだ。色素が薄いのは仕方がないんだ。でも、ここまで面変わりする程遺伝子はいじつちやいない。分からないんだ。どうしてこんなことになったのか」

ブラキカムは本当に途方に暮れている様子だった。

「こんなのカナメに見せられるわけがない……俺はどうしたらいいんだ？」

「カナメさんはこの子を地球に帰すって言ってましたからね。こんな姿じゃ、地球に帰っても家族がそれと分からないですよね」

「それだけじゃねえんだよ」

ブラキカムは頭を抱え込む。

「それだけじゃないって？」

「ニシキギがどこにいるか、知ってるか？」

イベリスの質問は全く無視してブラキカムはイベリスの腕をつかんだ。

「エリアGでしょ？」

「連れてきてくれるか？」

ブラキカムに縋るような目で見つめられてイベリスは首を傾げながらもエリアGへ向かった。

「再生が上手くいっていないってどういうことだ？」

ニシキギは明らかに不機嫌そうに医療センターにやってきた。

「ニシキギ……どうにかしてくれよ」

ブラキカムはニシキギを見るなり泣きつくように言った。ニシキギはベッドに横たわる瑞樹の顔を覗き込んだ。

「これは……誰だ？」

ニシキギは見覚えがあるような気もするその女性を見つめた。

「昨日再生が終了して再生装置を開けたらこの子がいたんだ」

「瑞樹なのか？ これじゃあ、別人じゃないか」

ニシキギはモニターを覗き込みながら慌ただしく再生データをチェックし始めた。

「意識は？」

ニシキギはデータをチェックする手を休めずにブラキカムに問いかけた。

「まだ戻っていない。脳波は異常ないからそのうち目を覚ますだろう。どうする？ もう一度分解再生しなおすか？」

ブラキカムが溜息をつく。

「駄目ですよ！」

それまで黙ってなりゆきを見守っていたイベリスが鋭く口をはさんだ。ブラキカムもニシキギも驚いてイベリスを見詰める。

「ディムはタイプオリジンだったはずなんだ。分解されたらもう再

生できない」

「こいつは何を言ってるんだ？」

ニシキギは怪訝そうにブラキカムに問いかけた。

「イベリス、落ち着けこの子は瑞樹だ。デイモルフオセカじゃない」

「デイモルフオセカ？」

ニシキギは再度瑞樹を食い入るように見つめた。

「そっくりなんだ。俺も知ってる」

ブラキカムは溜息をついた。

「デイモルフオセカ……グラブラ？」

ニシキギの目が細くなる。

「デイモルフオセカ・オーランティアカですよ」

イベリスが訂正する。ブラキカムは複雑な顔でニシキギとイベリスを見つめた。

「……顔は似ていても中身は瑞樹だと思う。でもイベリスが言っていることを検証するのは簡単な事だ。今から彼女の組織を採取して検査にまわそう。その結果を待ってからでも遅すぎるということはないよ」

ブラキカムは疲れ果てたように言った。

ニシキギがいなくなった医療センターでブラキカムはイベリスに囁いた。

「カナメが月から帰還したら俺にすぐ知らせてくれ。こんな状態を見せるわけにはいかないから……どこかに隠しとくか？」

否、それもまずいかとブラキカムはぶつぶつと呟いた。

「ドクターは……デイモルフオセカ・グラブラっていう人を知ってるんですか？」

この名前がニシキギの口から出た時のブラキカムの驚いた顔が気になって仕方がなかった。

「ああ、知ってるよ」

ブラキカムは用心深く答えた。

「それはデイルフォセカ・オーランティアカと同一人物なんですか？ カナメさんの姓と同じですね。何か関係が？」

「イベリス、医者には守秘義務というものがあることを忘れないでくれよ」

「……」

イベリスは眉間に皺を寄せて黙り込んだ。

第9話 再生不良(3)

月の地下都市セレーネは小ぢんまりしてはいるが、ナンディーと同じ機能を持っており、広さはその三倍程度ある。太陽光のお陰で電力にはことかかないが、重力がハルの六分の一しかないので、長い間滞在すると骨密度が低下する恐れがあった。

セレーネにもバイオラングであるエリアEがあったが、同じ植物を植えてもナンディーのものと比べると明らかに骨格が細く広い葉をつけ別の植物のようになった。

「コブ、そろそろ引き上げよう。ナンディーは火星の軌道に入ったんだろう？ 向こうでも仕事はたくさんありそうだよ」

カナメはセレーネのエリアEで働いていたコブ呼びにきた。

ナンディーは火星には着陸しない。月からの脱出速度が 2.38 km/s であるのに対し、火星ではその倍以上の 5.02 km/s 必要だ。ナンディーはもともハルの軌道上で造られた船で、着陸することを想定されていない大型船なのだ。火星の重力下でこの速度を維持することは不可能だ。よってナンディーは火星の軌道上にいるほかなかった。

「こっちの作業は楽しかったな。ここの重力になれてしもうたら、ナンディーに帰った時の体の重さが嫌になるじやろうよ」

ナンディーは現在地球の重力1Gに調節されているはずだ。

「仕方がないよ」

カナメは苦笑いしながらコブを促した。

「ここは誰が残るんか？」

「トウキ達と数名のファームの民だ。ファームの民は一か月毎に交代だ。それ以上は体に良くない」

「アンドロイド任せっちゅうわけか」

「……仕方ないだろ」

「さつきから、お前は仕方ないばかり言っちゃるようじゃな」

コブは渋い顔で言った。

「だって……仕方ないだろ」

「世の中は仕方がないことばかりじゃ。ファームの民が地球で生きられんちわかつて、それも仕方ないことじゃ」

コブは怒っているようにも悲しんでいるようにも見えた。

「地球にはそのうち日帰りの旅行でも行くといいよ」

カナメの言葉にコブは怒ったようにカナメを睨みつけた。

「火星もいい所だよ。たぶんね」

カナメは肩をすくめると小型艇へと乗り込んだ。

瑞樹を分解してから一か月はとうに経っていた。遺伝子を少々いじる必要があるからとブラキカムとニシギに任せてきたが彼らから何の連絡もない。もう再生ができていてもいい頃なんだけど、とカナメは思いを巡らす。

月から地球は目と鼻の先だ、なのに脱出艇に乗ることをあんなに嫌がっていたんだから、火星から帰れと言ったら絶対乗らないと怒りまくるだろうなとぼんやり思う。

「カナメ……瑞樹が死んだち噂で聞いたんじゃないけど、あれは本当のことなんか？」

「ああ」

コブが息を呑む気配がする。

「だから分解した。そろそろ再生されてる頃なんだけど……」

コブが安堵の息を吐く。

「あの子是不思議な子じゃな。森の民ではないんじゃないけど、それに似た種類の子なんじゃないかち、よく思いよった。あの子が歩いて回るようになってからエリアEの植物が少しずつ元気になってきちよる」

コブは目を細めて呟いた。

それは薄い膜を剥がして行くような幽かな変化だったが、少しずつカメラのピントを合わせて行くように植物たちの生気が鮮やかになって行くようだったとコブは語った。イベリスに力を使ってもらう予定だったのが延び延びになっていて、それでも今ナンディーのエリアEは森の民の力が必要ないくらいまで回復しているのだと言う。

ついさっき、セレーネのエリアEで霊薬ソーマを使って力を被曝した森の民が植物たちに力を使っただけだ。その森の民は死ぬ直前で分解された。

「あの光景は何度見ても嫌なもんじゃ」

コブは顔を曇らせた。

今回イベリスを使わなかったのはブラキカムが反対したからだ。イベリスは今やブラキカムの有能な助手として必要な人間になっていた。

「やあ、イベリス、ブラキカムはいるかな？」

カナメはナンディーに到着し次第、医療センターに立ち寄った。

イベリスはぎよっとする。

「カナメさん！ 帰ったんですね」

笑顔が強張っている。

「ち、ちよっと待っててくださいね。い、今ドクターを呼んで来ますから」

イベリスはあたふたと奥へ走って行った。

「なんだ？ あれ」

カナメは一人呟くと勝手に奥へ入って行った。未処理のファイルを持っていたので分解しておこうと奥の部屋に入っていく。勝手知ったるブラキカムの物置だ。

でもそこには見慣れないパーテーションがあって部屋が区切られていた。不思議に思っ、ファイルをダストシュートに突っ込むとそっと中を覗き込んだ。

誰かがベッドに横たわっている。患者だったのかと納得して引き返そうとした瞬間、カナメはその場に釘付けになった。

「デイモルフオセカ？」

どうしてここに？ という疑問が頭の中でグルグルする。引き寄せられるようにベッドの側まで近寄った。顔を覗き込んだ瞬間後ろで声がした。

「カナメ！」

ブラキカムが立ち竦んでいた。その後ろにはイベリスがいて同様に凍りついている。

「ブラキカム、これは……どういうことだ？」

何故デイモルフオセカがここに？ と言いつけたカナメをブラキカムが遮った。

「カナメ……落ち着いて聞いてくれ。これはミズキ・ヒュウガだ。

どうしてこうなったか俺にも分からない。イベリスによるとハルで森の民だったデイモルフオセカ・オーランティアカにそっくりなんだそう。俺は似ているのは外見だけだと思うんだ。それでも一度やり直そうと考えたんだが、そのデイモルフオセカはタイプオリジナルだったらしくて、イベリスがこの子が森の民タイプオリジナルじゃないかって心配してて、それで……」

「検査を……してるのか？」

カナメの問いにブラキカムはこくこくと首を縦に振った。

「……信じられない」

——いくら遺伝子を多少いじったからってここまで面変わりするものか。しかもデイモルフオセカにそっくりなんて……。

カナメは混乱したまま医療センターを後にした。

「カナメさん、随分動揺してましたよね。あんなに動揺するなんて思ってませんでした。やっぱりドクターの言ったとおり、隠しておくべきでしたね。もっと僕が気を付けるべきでした」

「いや、いいんだ。これで良かったんだよ……たぶん」
ブラキカムはすごく疲れているように見えた。

* * *

適者生存という言葉がある。かつてダーウィンが導き出した考え方だが、最近の学説ではそれが少々違っていているのらしい。不適者脱落ということなのだそうだ。つまり適でも不適でもない者も生き残れるのだ。我々人類は脳を進化させ、結果、人々を病気や怪我から救うために医学を発達させてきた。それはつまり、この適でもなく不適でもない範囲を広げてきたということになるのではないだろうか。本来ならば淘汰されている遺伝子が生き残れるようにしてきたと言えるのではないだろうか。医学は我々人類をどこに導くのだろうか、脆弱な種としての未来なのか、更なる多様性を秘めた種としての未来なのか。それを知るためにはまだまだ時間がかかりそうだ

（第9話 再生不良 終了）

第10話 ミズキA、ミズキB（1）

——ハル脱出の時、どうしてディモルフオセカはガルダに行ってしまったのか。

いくらエリアEがメインの事故だったとはいえ、自分の制止を振り切ってまで行ってしまったディモルフオセカの強い意志が、カナメは未だに納得できない。

森の民ならガルダにだっていた。確かにディモルフオセカは強い力を持っていた森の民だったけど、彼女一人でどうにかできるような状況ではなかったはずなのだ。

——なのに彼女はたった一人でどうにかしてしまって……たった一人で逝ってしまった。

釈然としない思い。

こんなことを言うのは、人として許されないことと分かっているけれど、彼女にはガルダに行って欲しくなかった。ほかの方法でガルダを助けることはできたかもしれない。分解されていない者なら全員。時間が許す限り情報を転送すれば、分解されている者でも少なくとも半数くらいなら他の船に乗り換えることができただろう。

——イブキとこんな風に別れることも免れたかもしれない。否、なんてひどい考えだ。

自分勝手すぎるとカナメは自嘲する。しかし……とカナメは思う。森の民タイプオリジンは再生されない。いつかは彼女と別れなくてはならないことは分かっていた。

——ただ一度きりの命……。

それは覚悟していたことだった。だけど……こんな形で彼女がいなくなることも、イブキまで同時に失うことも全く想定していなかった。突然ぼっかり空いてしまった胸の奥の空洞は何を以ってして

も埋めることができなかった。

——あんなに似ているんだ、あの子に訊いたら何か理由を聞けるんじゃないだろうか？

ふと湧きあがった思いつきに、カナメは抗う術を持たなかった。

医療センターはいつ行っても人で溢れている。スタッフの一人が話しかけてきた。

「あら？ カナメさん？ 具合でも悪いんですか？」

彼女は太い腕をヒラヒラさせながらニコニコと近づいてきた。彼女の悩みはもう少し痩せること。医療センターのスタッフなら誰でも知っている悩みだ。その明るい悩みそのままに人の良い人懐っこい笑顔だ。

「あの……ちょっと重力になれなくて。さつき月から戻ってきたばかりだね」

「ああ！ それなら良い薬がありますよ。今ブラキカムは出張サービス中でいないんだけど、大丈夫、私が処方できます

彼女はいそいそと引出しから重力酔いの薬を取り出した。

「ありがとう」

カナメは鮮やかなオレンジ色の錠剤の薬をもらった。

「ここで飲んで行きます？」

「ちよつと奥の部屋を借りるよ。薬剤過敏症気味なんで、飲んでから少しここで様子を見たいんだ」

「いいですよ。パーテーションの奥は入らないでくださいね。患者さんが休んでいるから。何か異常があったら大声で呼んでください」

「ありがとう」

カナメは愛想よくにつこり笑うと奥の部屋へ歩いて行った。

さつき見た時と同じように、瑞樹はパーテーションの奥で静かに眠っていた。静かに歩み寄る。

「……ねえ」

ひっそりと話しかける。

「ディムなんだろう？ ディモルフォセカ？」

カナメはそつと頬を指先で撫でた。

「ディム……教えてくれないか？ 理由が知りたいんだ……」

手のひらで頬を撫でる。

「何故ガルダに行った？ フェリシアの為？ エリアEの植物が心配だった？ それとも……イブキの為？」

髪の毛を漉くように撫でる。柔らかい栗色の髪が指に纏わり付く。カナメは唇を噛んだ。

「……ディム」

カナメの指先が瑞樹の頬を伝って唇に触れる。

温かくて柔らかい。昔のままのディモルフォセカ……。

カナメは愛おしそうに指を唇に這わせる。

「何をしている？」

突然パーテーションの脇から声がしてニシキギが入ってきた。びっくりとしてカナメは手を引っ込めた。

「……」

気まずい雰囲気が漂う。

「こいつが誰かに似ているのか？」

ニシキギは探るようにカナメを見つめた。

「……いや」

ニシキギから目をそらしてカナメは小さく呟いた。

「イベリスによると、この顔はディモルフォセカ・オーランティアカにそっくりなんだそうだ。彼女は森の民タイプオリジンだった。あんたはその森の民を知っていたのか？」

「……」

カナメはそらしていた視線をニシキギに戻した。

「ディモルフォセカなんて名前、森の民でも珍しい名前だそうだ。イベリスがそう言っていた。そう言えば、あんたの奥さんもディモ

ルフォセカという名前だとか、奇遇だな。グラブラ夫人はいつ再生されるんだい？」

ニシキギは片眉を上げた。

「……君はデイモルフオセカ・オーランティアカを知っていた？」

カナメは静かに訊いた。

「……いや……それが何か？」

「いや……ならいいんだ。僕の妻は再生されない。ガルダで死んだから……」

カナメはそう言うたとさつさと医療センターから出て行った。絶句したニシキギを置き去りにして。

森の民はハルの地上に残った唯一の森アール・ダー村で、一般人とファームの民は地下都市ハデスで暮らしていた。その三つの種族は厳密に区分けされていて、お互いに交わることがなかった。

地下都市で森の民の力を持つことが発覚したものは、幼少期ならばアール・ダー村に連れて行かれ、そこで養父母に養育された。物心ついた年齢であればフォボスに連れて行かれて処分された。森の民に地下都市の生活を知らせることが一切禁じられていたからだ。

森の民と一般人が結婚することは当然許されていなかった。それはファームの民も同様だった。遺伝子を管理すること、それが当時ハル政府の方針だったからだ。三つの種族が交わることなくそれぞれで進化する。それがハル政府の望んだことだった。

否、奇麗事を言うのはよそう。

森の民は、ハル政府から捨てられた人たちだったのだ。

遺伝子的に弱く病みがちですぐに死んだ。政府はそんな人たちを姥捨て山のようにアール・ダー村に隔離した。ジタンの光線と熱は日増しに強くなっていき、アール・ダー村が消滅するのは時間の問

題だと考えられていた。平たく言えば、体が丈夫でない病気がちな人が定員オーバー気味の地下都市を追い出されたというのが真実だった。

彼らはアール・ダーの森を守ること生き延びた。森を守る力こそ、彼らが手にした唯一にして強大な力だった。故に彼らは「森の民」と呼ばれる。今にして考えれば、ハル政府のつた人種隔離政策が森の民の力を生じさせたのかもしれないが、それはあくまでも結果論に過ぎない。背景はともかく、森の民の力がなかったら、我々ハル人はエクソダスもできないまま、ハルと一緒に滅亡していただろう。

地下都市の科学力と森の民の力は車軸の両輪だった。どちらが欠けても我々は滅びていた。

第10話 ミズキA、ミズキB（2）

瑞樹が目を覚めたのは、それから一週間後のことだった。

長いトンネルの中をとぼとぼと歩いていたら明りが見えた。明りがある方へ行きたいのに行きたくないのか分からないまま、とにかく歩き続けていたら目が覚めた。

そんな茫漠とした気分のまま天井を見つめる。

——ここは……どこだろう。

ぼんやり考える。起き上がってみる。どこも痛くなかったし具合も悪くなかったが、何かがいつもと違う気がする。

——いつもと違う？いつもの私ってどんなだったかな。

そして、恐怖に包まれる。

——私は……誰だろう？

名前を思い出せない。

ベッドから飛び降りて鏡を探す。

——顔を見なければ……。

顔を見れば自分が誰だか思い出すかもしれない。

鏡はなかったが、何かの装置の銀色の部品に反射して映る自分の姿が目に入った。見知らぬ女が映っている。青白い肌に深い翠色の瞳、明るい茶色の髪、後ろを振り向いたが誰もいない。恐る恐る前を見ると見知らぬ女も自分と同じ行動をとった。ごくりと唾を飲み込むと、見知らぬ女も途方に暮れた表情でごくりと唾を飲み込んだ。

「瑞樹！ 目が覚めたんだね」

茶色の髪の男が部屋に入ってきた。

男は手に持っていた様々なものを壁にある穴の中に押し込むと軽快な足取りで近づいてきた。

——瑞樹？

「具合はどう？　今ブラキカムに知らせてくるよ」

ここまで言うとうと気づいたように立ち止まった。

「そうだ！　自己紹介していなかったよね。僕はイベリスって言います」

人懐っこそうな笑顔に勇気づけられて瑞樹は口を開いた。

「あの……私はミスキっていう名前なんですか？」

イベリスの顔が一瞬曇る。

「名前を思い出せないの？」

「うん。私……変ですよ？」

「とにかく、ドクターを呼んでくるよ」

記憶採取が上手くいかなかったのかもしれないとブラキカムは言った。

「何も思い出せないか？」

「何か思い出せそうな気はするんだけど……ダメ、頭が痛い」

瑞樹は眉間に皺を寄せた。

「無理することないさ。ハル語を覚えているみたいだから、近い記憶から思い出していけるかもしれない。何か思い出せそうだと自分で思ふのならそれは正しいと思うよ。焦らないで、よく睡眠をとってリラックスすることだ。再生してすぐは悪い夢を見ることが多いかもしれないけど、しっかり眠ることが回復の薬だからね」

ブラキカムは明るく言うといベリスを促して部屋を出て行った。

「なあ」

部屋を出るとすぐにブラキカムはイベリスに話しかけた。

「彼女、別人になっちゃったんじゃないかな？」

暗い瞳でイベリスを見上げた。

「どうしてそう思うんですか？」

イベリスは声をひそめる。

「エリアEで一度だけ瑞樹を診察したことがあるきりなんですけど、

微妙に違う気がする。それにどうしていきなりハル語を話す？ 地球の言葉は彼女が生まれてからずっとしゃべっていた言葉なんだぜ？ あれは生まれつきのハル人の話し方だった。瑞樹はうまく言えないけど、癖のあるハル語をしゃべってた」

「じゃあ、あれは誰なんですか？ まさか……」

イベリスは絶句したまま立ちつくした。

* * *

瑞樹はエリアGの廊下を一人ふらふらと歩いていた。

——確かこの辺にあったはずだ……でも何が？

行けば分かるかもしれない。そう思いついたら居ても立ってもいられなくなつて、一人医療センターを抜けだした。

エリアGの廊下に、張りがあつて良く通る女の声が響いていた。

「これを借りるわ、私にも操縦できるように軌道を設定して頂戴！」

アーマルターシュはニシキギに向かって言った。

「軌道の設定を自分でできないような人間はこれを操縦しない方がいい」

ニシキギはしかめっ面で言った。

「地球とここを往復できればいいのよ。その設定だけしてくれたらいいの、簡単なことでしょ？」

高飛車なアーマルターシュにニシキギは溜息をつく。

——なんでこんな女が早々に再生されたんだろうか。

仕事が増えるだけなのにとニシキギは心の中で毒づく。

そこへ別の心細げな女の声がした。

「あの……あなたそのシャトルでどこに行くの？」

ニシキギはうんざりと声のする方を見て驚愕する。

長い茶色の髪、翠色の瞳……。

——あれは……間違いない。

「地球よ、私が行って何とかしてくるわ」

アーマルターシュは鼻息荒く言い放った。

「地球？ どこなのそれ」

瑞樹の言葉にニシキギは眉を顰めた。

「あなた地球を知らないの？ 再生したばかりなのね」

アーマルターシュは馬鹿にしたように言った。

「私、ナンディーに帰りたいの。地球に行く途中に寄ってもらうことはできないかしら」

アーマルターシュもニシキギも目を丸くする。口を開いたのはアーマルターシュだった。

「帰還おめでとう。ここがナンディーよ。これに乗る必要がないんだったら邪魔しないでさっさとどこかに行っちゃってくれる？」

「ここがナンディー？」

瑞樹の問いにニシキギが怪訝な顔で頷いた。

「ナンディーに帰ってたんだ、私……ナンディーに……良かった」

瑞樹は安堵した表情でへたへたと座り込んだ。

「良かった……」

声が次第にフェードアウトしていく。幸せそうに目を閉じて……しかし再び目を開いた途端、瑞樹は悲鳴を上げた。

「ここ、どこ？ 私……」

瑞樹はパニックに陥っていた。ニシキギは瑞樹の豹変に驚愕する。

——人格が変わった？

「何なの？ この子。今なんて言った？ なんか変じゃない？」

アーマルターシュも眉を顰める。

「とにかくあんたはラークスパーの所に戻ることだ。俺はこの子を医療センターに連れて行かなければならないようだ。ラークスパーはあんたの行動を知っているのか？」

「知ってるわけじゃない」

アーマルターシユは傲然と言い放った。

「俺に命令するつもりなら彼の許可を取ってからにしてもらいたいね」

ニシキギは言い捨てると、蹲って泣きだした瑞樹を医療センターへ引っ張って行った。

「人格が変わった？」

瑞樹に鎮静剤を投与した後、ニシキギから状況を聞いたブラキカムは目を丸くした。

「最初見た時はミスキ・ヒユウガじゃない別人になってしまったのかと思ったんだが、自分がナンディーにしていると聞いたら豹変した。後に出てきた人物が瑞樹だと思う」

「つまり、瑞樹と誰か別な人格があると君はそう言ってるんだな」

「ドクターも豹変した瞬間を見れば信じられるだろうよ。後に出てきた人格の言葉は理解できなかった。恐らく瑞樹の国の言葉なんだろう」

鎮静剤で朦朧としてきた瑞樹の顔をニシキギとブラキカムが覗き込んだ。瑞樹のぼんやりとした瞳がニシキギの瞳を見つめ返す。

「おい、おまえのこと睨んでるぜ。ムラサキのことでまだ怒ってるんじゃないか？」

「そんなことは覚えてるって言うのか？」

ニシキギは浚面で立ち位置をずらす。ニシキギがずれた方を瑞樹の視線が追いかけた。

「ほら、やっぱりおまえを見てるぜ」

「もうムラサキはちゃんと修理されている。確かに中身は新しくなっているが、前の記憶もきちんと残されるんだから問題ないだろう？」

ニシキギは弁解をする。

「なんで俺がこんな弁解をしなければならんだ？」

ニシキギは忌々しそうに呟いた。

「おまえが勝手に弁解してるんだろ？」

ブラキカムは吹き出した。

瑞樹はニシキギの言葉には反応しなかったが、それでもニシキギの瞳を見詰めたままだった。

「俺の顔がどうかしたか？」

ニシキギはイライラして問いかけるが瑞樹からの返答はない。

「瑞樹、少し眠りなさい」

ブラキカムはニシキギを促して外に出た。外に出ようとしたところで、瑞樹が慌てたようにニシキギを必死な様子で引きとめた。

「何だ？」

ニシキギの問いかけに、瑞樹は途方に暮れたように言葉もなく、ただひたすら彼の瞳を見つめる。

「困ったな。ニシキギ、この子が眠るまで傍にいてくれる？ 俺、

他の患者診なくちゃならないからさ」

「なんで俺がそんなことしなきゃなんのだ？」

「理由が聞けそうなら聞いておいてよ。俺も知りたいからさ」

ブラキカムは肩を竦めるとさっさと出て行った。

それから瑞樹は何度となく医療センターを抜けだした。一つの人格はエリアGにいるニシキギを探して回り、もう一つの人格はエリアEの中で当ても無く徘徊した。前者の人格をミズキA、後者をミズキBと呼び始めたのはブラキカムだった。

カナメが初めて見た人格はミズキAだった。エリアGの片隅で彼女はニシキギを目で追っていた。次に見たのがミズキBだった。彼女はエリアEをうろつきまわっていた。

「よく一人で来るんじゃないが、何かを探しちよるらしくてずっと歩きまわっちゃうよ」

コブが困ったように言った。

「ミントが話しかけてみたんじゃが、会話がかみ合わんち言うっちゃった」

カナメは溜息をついた。記憶採取がうまくいかなかったらしい。それにしても人格が複数出るなどとは予想していなかった。外見がここまで変わることも予想外だったが、人格までも変わってしまうとは予想していなかった。

「カナメ、どうする？ 外見だけなら再再生しようかとも思ったんだが。人格まで変わったとなるとそれも難しいな。記憶採取がもうできないもんな」

ブラキカムは盛大に溜息をついた。

「あの二人は誰なんだと思う？」

カナメはブラキカムを見つめた。

「俺が想像するに、ミズキAが元の瑞樹だと思う。ミズキBはハル人の誰かだ。誰かはわからんがね。どこかに残っていたデータがミックスしちゃったんじゃないかと思うんだが……」

「装置は全面的にチェックしたけど、異常はなかったよ。ニシキギのシステムもチェックしてみたけど、それらしい問題はなかった」

「ニシキギを疑ってた？」

「最初はね。彼のシステムは完璧だ。大したもんだよ」

「なのにこれだ」

「ミズキBは何を探しているのかな」

「さあな、でも、ニシキギが言うにはミズキBはナンディーに帰りがついていたそうだ」

「ナンディーに帰る？」

「ナンディーに帰りたいがるハル人って誰だ？ お前、心当たりあるか？」

カナメは考え込む。ナンディーに帰りたいがるということだけを考えば、心当たりはあり過ぎた。あの時、ナンディーからガルダに救援部隊を送ったのは約二十名。誰一人無事に帰ってこれなかった。死んだか、ガルダと共に宇宙のどこかに消えたかだ。しかし、ナン

デイーに帰りがる人の記憶がナンディーに残っていると考えるのには無理がある。皆無だ。

「お前、ミスキBにもう会ったか？」

ブラキカムがカナメから目をそらしたまま訊いた。

「見かけたことはあるけど……」

カナメは怪訝そうにブラキカムを見つめる。

「……まさかとは思うが、あの時ディモルフォセカはガルダに行っていないよな」

ブラキカムの声は震えているようだった。

カナメは固まったままブラキカムを凝視する。

「ディムは……ガルダで死んだんだ……」

カナメの言葉にブラキカムは目を見開いて凍りついた。

「先生？ 急患なんですけど……」

突然声をかけられて、二人とも呪縛から解かれたように我に返った。

「カナメ、悪いな、その件はまた後で話そうぜ」

ブラキカムは堅い表情のまま診察室へと戻って言った。

瑞樹はエリアGにいた。ニシキギを目で追いつけている。カナメはその瞳を追う。

「あ、カナメさん。今度はどこに行ってたんですか？ セレーネは順調だそうですね」

エリアGのスタッフが話しかけてきた。

「小惑星帯に行ってきたよ。あそこは資源の宝庫だね。マンガン鉱をたくさん含んだ小惑星が固まってる一帯があってね、かなりの量を確保してきたよ」

「マンガンですか。まさか本当にあれをやるつもりじゃないでしょうね」

「たぶんやるだろうね。あの量のマンガンを見たら君もやりたくないだろうよ」

カナメは薄く笑った。

「ところで瑞樹はいつからああしてるの？」

「ああ、あの子、瑞樹って言うんですか？ 何にもしやべらないから名前も知りませんでしたよ。そうだな、もう二時間近くああしてるかな。昨日なんて一日中ああしてましたよ。ニシキギを見て何か楽しいんですかね。最初はニシキギも嫌がってましたが、最近は慣れちゃったみたいで……」

呆れたように言う。

「ふうん」

カナメは釈然としない面持ちで目を離した。

「あの子どういう子なんですか？」

「……さあ」

カナメは苦笑する。

「何のためにこんなに早く再生されたんですかね。それでなくても人手不足なのに、もっと使える人間を再生してほしいですよ」

ブツブツ言いながら持ち場に戻って行った。再びカナメはニシキギを目で追う瑞樹をしばらく見つめていた。

第10話 ミズキA、ミズキB（3）

「おい、ニシキギ、また来てるぜ」

同僚の冷やかし声に振り返ると瑞樹が立っている。瑞樹はミズキAの人格になると、ここエリアEにニシキギを捜してやつてくる。最初は追い返したり、仲間の冷やかし声に抗議して不機嫌になっていたが、最近はすっかり諦めモードになっている。ああ、また来たのかと言った状態だ。

瑞樹自身に話しかけてもみたが、言葉が通じないのか反応がない。誰の言葉にも反応しない。ニシキギの瞳ばかり見つめている。ニシキギは仕事が終われば、なんとなく行きがかり上、医療センターまで送り届けるという日々を送っていた。

その日、仕事が終わって瑞樹を送り届けようと見渡した時、瑞樹は近くに見当たらなかった。人格が入れ替わって突然いなくなることは珍しいことではなかったので、そのまま帰ろうとしたときに、エリアGと一緒に働いている女性に声を掛けられた。

「ねえ、あの瑞樹って子なんだけど……大丈夫かなあ」

「なにがだ？」

「さっきヒースとホスタが話しかけてて、しばらくしたら連れて行かれたんだけど……」

同じエリアGで働いていてもどこか孤立している風情のニシキギには友人と呼べる人間がない。そのせいで仲間内の噂話などにも疎い。そのニシキギでさえ、ヒースとホスタについては良くない噂を聞いていた。

「どっちに行った？」

どこか落ち着かない気持で訊き返す。

「エリアHの方だから、もしかしたら医療センターに連れて行ったのかもしれないと思ったんだけど……」

ニシキギの動揺した気配に女性は少し引き気味に答えた。
「分かった」

ニシキギは走った。

——こんなのは馬鹿げてる。俺はなんでこんなに追い立てられるみたいに走ってるんだ？

なのに急^せく気持ちを抑えられない。

エリアGはエリアHの隣とはいえ、それぞれにスペースが必要なエリアなのでかなりな距離がある。

周りの人が驚いた表情で振り返るのにも構わずニシキギは走り続けた。エリアGからエリアHまでの間に疑わしい部屋を一つ一つ覗いて回る。

あんな連中が瑞樹を大人しく医療センターに送り届けておしまいということがあるだろうか。考えれば考えるほど気が急^せいてしまう。見つからないことに焦って、指先が冷たくなっていく。

——どうしてだ？

自分でもよく分からない。

医療センターの先、一番先端の部屋まで確認してから医療センターまで再び走りながら戻った。見つからない。ブラキカムに手を貸してもらった方がいい。ニシキギはそう判断して医療センターに駆け込んだ。

「ブラキカム！ 手を貸してほしいんだ！ 瑞樹が……」

「瑞樹がどうかしたか？」

ブラキカムの前にはぼんやりした様子の瑞樹が座っていて、何かの手当をしてもらっているようだった。その隣にはカナメもいる。

「瑞樹……」

ニシキギは肩で息をしながら呟いた。

「もしかして、探してたか？」

ブラキカムが驚いて訊いた。

「なんだかエリアGのやつらに絡まれてたみたいで、カナメが助け
たらしいんだが、少々乱暴に扱われたらしい。まあ、打ち身程度だ
から湿布貼ってるだけだな」

ニシキギはブラキカムの言葉に安堵の息をついたが、次の瞬間、
猛烈に怒りが込み上げてきた。瑞樹の腕や顔は打ち身で赤くなっ
ていた。

「あいつら……」

取って返そうとして部屋を出たところで、ニシキギはカナメに呼
び止められた。

「僕がいない間、瑞樹が随分面倒を掛けていたみたいで、申しわけ
なかった。いつも瑞樹を医療センターまで連れてきてくれていたん
だってね」

「別にあんたの為にやったわけじゃない。それとも瑞樹はあんたの
もののなのかな？」

「いや、そうじゃないよ。行きがかり上というだけだ」

カナメは苦笑する。

「なら、俺も同じだ」

「……ホスタとヒースは、確かに品行方正とは言い難いやつらだよ。
しかし、彼らにも言い分があるようだった。君が彼らを無能扱いし
たんだそうだが、それは事実かな？」

「馬鹿だから馬鹿だ、役に立たないと言っただけだ」

ニシキギの頑なな言い方にカナメは溜息をつく。

「君が、彼らと同等の立場ならばそれでも構わないさ。しかし、君
はあのグループのリーダーだろう？ 指導する立場の者が指導しな
いで罵倒してどうするんだ？ それで彼らが君の言うことを聞くよ
うになるとでも思ったかな？」

「何故そんな説教を今聞かなきゃならない？」

「彼らは君に仕返しするつもりで瑞樹に近づいたらしいんだ」

「……」

ニシキギは瞠目する。

「瑞樹が君につきまといっている理由は大体分かっている。その理由を取り除かせてもらうよ。悪く思わないで欲しいんだが……」

「悪く思う訳がないだろう？ そんなことができるなら、もっと早くやってくれれば良かったんだ」

ニシキギは吐き捨てるように言った。

「……そうか、分かった」

溜息をつくカナメをニシキギは睨みつけるとエリアHを出て行った。

カナメは再度診察室へ入って行った。

「しばらくの間、瑞樹をエリアGに行かないようにしてもらえるかな」

カナメはブラキカムに言った。

「分かった……だがな、カナメ、これ以上この子に関わるのはやめろ」

瑞樹の治療が終わったブラキカムがカナメを真剣な目で見上げた。
「瑞樹には地球での記憶がない。もう帰す意味がないだろう？」

「……それだけの理由で関わるなど言っている訳じゃないんだろうな？」

「この子はデイモルフオセカにそっくりだ。こんな状態でお前の傍に置いておきたくない」

「前から気になってた。ブラキカム、なんでデイモルフオセカを知ってるんだ？」

ハルにいたとき、カナメはデイモルフオセカをブラキカムに会わせただけだった。

「……ハルを脱出する直前、彼女は俺の患者だった」

ブラキカムの言葉にカナメは目を見開く。

「デイムはどこか具合が悪かったのか？」

そんなことをデイムから一言も聞いていない。

「いや、そうじゃない。少し……その……相談に乗ってただけだ」

ブラキカムはカナメから目をそらした。

「……それで？」

「今となつては、イブキの気持ちが良く分かるぜ」

ブラキカムは大きな溜息をついた。

「俺はお前を失いたくないんだ。この船に、一体何人俺たちほど長く生きている者がいる？　俺はお前を失いたくない。俺を昔から知っている人間がいなくなってしまうのがなんだか心細くて怖いんだ。この子に関わつて、お前がまた危うい生き方をするんじゃないかと俺は心配している。法を破れば、せつかく与えられている半永久再生の権利を失ってしまうんだぞ」

「僕はそんなもの望んでいない」

カナメはうんざりしたように言った。

「やつと新天地を見つけたのに？　これからなのに？　お前は未来を見てみたくないのか？」

「僕が欲しいものは、そんなものじゃない」

欲しいものはすべて過去に置いてきてしまった。もう取り戻せない。

「……イブキが言っていた。ニシキギは森の民のタイプオリジンを再生する方法をひどく熱心に研究していたらしい」

「それはニシキギ本人から聞いた」

「それともう一つ、彼はデイモルフオセカ・オーランティアカの情報を異常な執着をもって集めていたらしいんだ」

「……何のために？」

「それは知らない。それでイブキはとても心配していた。お前とニシキギが出会わないように細心の注意を払ってね。カナメに会えばデイモルフオセカのことを何か感づいてしまうかもしれないと言つてた」

森の民の再生に執着するものがデイモルフオセカを捜すのだとすれば、それは彼女が森の民だと知っていたのことに違いなかった。

——イブキが……だからニシキギのことを見かけたことがなかった

のか。

イブキの下で働いているにもかかわらず、面識がなかったことを不思議に思っていたカナメはようやくその理由が分かったのだった。「しかし、ブラキカム、君の情報量には舌を巻くな。君に秘密を持つとうなんて浅はかな考えだったよ」

カナメは苦笑する。

「とにかく、瑞樹の為に危ないことをするのはやめてくれ。ニシキギにはデイモルフオセカのことを嗅ぎつけられないようにしろ。あいつは悪い奴じゃないんだが、多少……いや、かなり屈折しているところがあつてな。あいつに初めて会ったのは十歳のガキの頃だったが、まるで手負いの獣みたいだったよ。あれでも丸くなってきた方なんだがなあ」

ブラキカムはふふつと小さく笑った。

「しかし、今日のやつは見ものだったな。誰かを心配して走り回るあいつなんて初めて見たよ」

* * *

宇宙ステーションで長期滞在している宇宙飛行士は、自分の国の上を通過する時の方が他の国を通過している時よりも心拍が安定したり緊張がほぐれたりしているというデータがあるという。心の拠り所なのだろう。太陽系を離れていった米国の探査機ヴォイジャーになった気持ちをと時々想像する。土星の輪をくぐり、海王星を超えても終わらない旅。だんだん小さくなる太陽……途方に暮れる。いつか見たアメリカ映画のように、ヴォイジャーが何かの間違いで心を持ったりしないことを心から願う。

(第10話 ミズキA、ミズキB終了)

第11話 デイモルフオセカ(1)

「出会ったところのお前は手負いの獣みたいだったよなあ」

イブキが苦笑交じりに言った。

高等部に入ってしばらくしてカナメはイブキと仲良くなった。それまでは二人とも反目し合っていた仲だったのだ。

「よくもまあここまで手なずけたものだと思うぜ」

「手なずけたのは僕の方だと思うよ。君が散歩をねだる子犬みたいに僕に付き纏うものだから、ついつい仏心を出しちゃったんだ。僕の一生の不覚かもしれない」

カナメが笑って言い返す。

「カナメ……事情が変わった。Dポイントじゃなく、Eポイントだ。そこで待ってる」

イブキがにやりと自信ありげに微笑んだ。

「え？ どこだって？ Eポイント？ どこだよ、それ」

カナメは自分の声で目覚めた。

隣の座席の人が何事かとカナメを見つめたので、咳払いをしてみます。

カナメは火星の地下都市アグニシティに向かう小型シャトルに乗っていた。到着するまでの僅かな時間に浅い夢を見た、イブキの夢だ。絶望感と焦燥感と不安が渦巻くハルの地下都市で、カナメにとってイブキは闇の中に灯った明りだった。イブキがいればなんとなる、そう思っていたのかもしれない。

——イブキはどうだっただろうか。

火星の地下に建設しているのはアグニという地下都市だ。火星の重力は地球の半分、つまり惑星ハルの半分以下しかない。それでも

他の惑星や衛星に比べればましな方なのだ。それに火星には鉄鉱石が豊富にあった。地下都市を造る際に鉄鉱石をふんだんに使った結果、アグニシティは鋼鉄都市のような雰囲気仕上がっていた。

「どうです？ カナメさん。広い割にセレーネよりもピッチが速いでしょう？」

アグニシティの建設の指揮をとっていたアオギリが声を掛けてきた。彼は大きな建造物を造るのを得意としている。

「そうだね」

宇宙服の中からカナメは嬉しそうに見渡した。

「セレーネの五倍はありますよ。エリアEもたっぷりスペースをとりました。今はまだ何も植えてないのでまだバイオラングとして機能していませんけどね」

「ファームの民をすぐに派遣できるようにするよ」

「分解再生装置は治ったんですか？」

「ああ」

すべての分解再生装置を修理し終わっていた。

「そいつあ良かった。そうだこれ……ここを掘っている時に見つけたんですけど」

アオギリは掌に青緑色の小石をいくつか乗せて見せた。

「なんだろう……ターコイズ？」

「おそらくそうでしょうね。ここは鉄分を多く含む土壌なので緑色のものが多いんですけど、これを見てくださいよ」

アオギリが取り出したもう一つの石は綺麗な水色をしていた。水色の石にところどころ小さく茶色や緑色が入っている球形で地球に良く似ていた。

「これは……」

カナメは息を呑む。

「そっくりでしょう？ ハルに」とアオギリが、

「そっくりだ、地球に」とカナメが同時に言った。

「なんですか？ カナメさんはもう既に地球に心が移っちゃったん

ですね」

アオギリは泣く真似をしてみせた。

「ごめんよ。ここ数日、毎日のようにセレーネで地球ばかり見ていたもんだから」

カナメは謝る。

「やめてくださいよ。カナメさんは簡単に謝り過ぎです」

アオギリは本気で怒っているようだった。

「どうかした？」

カナメはポカンとして訊き返す。

「ニシキギなんか土下座なんてする必要なんてないですよ。頭にくるんでやめてください」

「みんな知ってるんだね」

カナメは苦笑した。

ニシキギは仕事仲間になりに嫌われているらしく、例の話を聞いた人からかなりの数の苦情を既に受けていた。

「あいつは根性がひねくれてるんですよ」

「ふうん。ね、ところでさ。その青い石、僕にくない？」

「ええ？ カナメさん、まさかこの丸い石のことじゃないですよ
え」

アオギリは口元をひくつかせながら問いかけた。

「うん、そのことだよ」

カナメは邪気なく微笑む。

「これは……ちよつと……」

断るのも大人げない気がすると思いつつ、アオギリは口ごもった。惑星ハルに良く似たターコイズ、自分でも気づかないうちに気に入っていたらしいと今さら気づく。

「そうか……じゃ、そっちの緑色のはもらえる？」

カナメは拘る様子もなく続けた。

「こっちなら全部あげますよ」

アオギリはホツとして答える。やっぱりカナメさんの方が大人だと頭が下がる。

「ありがとう」

カナメは破顔した。

カナメはナンディーに戻ると、自室で緑色のターコイズを小型の分解再生装置に放り込んだ。小型のこの装置はハルで作ったものだ。イブキとどちらがより小さく作れるか競争した。カナメはふと、さっきのアオギリの様子を思い出して含み笑いをする。

——悪いことをしてしまったな。

彼があんなにあの青い石を気に入っていることに気づいてやれなかった。

子供が大事な宝物を取り上げられそうになったときの切羽詰まった顔だった。そして溜息を吐く。

——誰もが恋しいのだ、ハルが……僕たちの起源の惑星。

装置の取り出し口を開くと完璧に青く丸いターコイズが出てきた。「問題は……陸地がないってことだな」

その青い丸い石は地球というよりも海王星のように見えた。カナメはもう一度装置に放り込んだ。何度もやり直して、成分を調整して、白と茶色と緑が混ざった丸い青いターコイズを作り出した。

* * *

「エリアEで崖から落つこちた？」

ブラキカムはミントに聞き返した。瑞樹は医療センターにいて治療を受けていた。左手頸を捻挫していた。前の傷も癒えていないの

に……。傷だらけの瑞樹をブラキカムは痛々しい気持ちで見つめる。
「彼女は何かを探しているのよ。エリアE中を探してて、見ている方が辛くなるくらいなんです」

ミントの方が泣きそうな顔をしていた。当の瑞樹は痛そうな素振りを見せていない。

「痛みを感じていないの？」

カナメが後ろから話しかけた。

「おお、カナメ、アグニシティから帰ったのか？」

ブラキカムが振り返った。

「いや、痛みは感じているよ。心配ない。さっきまでは痛がってた。人格交代して静かになったんだ」

「人格交代……で？ 誰になったのかな？」

「ミズキAだ。彼女は痛みをあまり感じないらしい。言葉もほとんどしゃべらない、あ、ミント、もういいよ。ミズキAだからもうエリアEには行かないだろう」

可哀そうだがミズキAの時は鍵のついた部屋に入れてもらうようにしていた。

「わかりました。じゃあ、瑞樹をよろしくお願いします」

ミントは悲しそうに言った。

「あ、ミント、後からエリアEに行くよ。コブに伝えておいて」

カナメはミントに声をかけた。

「分かりました」

ミントはにっこり笑って出て行った。

「いい子だよな。ほんとにコブの子孫なのか？」

ブラキカムが後ろでニコニコしている。

「コブもいいやつだよ」

カナメは呆れたように言った。

「ところで、何か用か？」

ブラキカムは笑顔を張り付けたまま問いかけた。

「君にじゃないよ、こつち」

カナメはぼんやりと座っている瑞樹をみつめた。

「もう、そろそろ部屋に入れておかないと、エリアGに行っちゃうぞ」

「たぶん、もう大丈夫だろう。これがあればね……」

カナメは瑞樹に近寄るとターコイズの球を見せた。

「君が探しているのはこれじゃないの？」

カナメが瑞樹の掌に球を乗せると、瑞樹は目を見開いてそれを見つめた。

「……」

言葉もないまま見つめ続ける。

「地球に似てるだろ？」

瑞樹の見開いた瞳から大粒の涙が溢れだした。青い球を握りしめてカナメを見つめる。

「そうか！ 瑞樹は地球を探していたんだ」

ブラキカムが叫んだ。

「じゃあ、ニシキギの顔ばかり見てたのは……」

「彼の瞳はブルーだからね」

カナメが続けた。

「じゃあ、ミズキBが探してるのは？」

ブラキカムは期待を込めてカナメを見つめる。

「それは……分からない」

ブラキカムはカナメの言葉にがつくりと頂垂れた。

「カナメ！ 待つちょっとぞ」

コブは管理棟の前で嬉しそうに手を振った。

「ミズキBも一緒に来たんか」

コブはちよつと困った顔をした。

「今はまだミズキAみたいだよ」

カナメは笑った。

「ミズキAの方がここに来るなんぞ初めてじゃねーか？」

ミズキAは地球玉を握りしめたまま黙ってカナメに付いてきていた。

「ミズキBが何を探しているのか知りたくてね、連れてきたんだ。エリアEに連れてくれば交代すると思ってたんだけど……代わらないね」

「その為にここに来たんか？」

「いや、それだけじゃないよ。アグニシティがそろそろ始動する。そこでファームの民の出番と言う訳だ」

「分解再生装置は直ったんか？」

「ああ、直ったよ。広さはセレーネの五倍だそうだ。何人くらい必要だ？」

「そうじゃの……少し考えさせてくれるか？」

「もちろんさ、人選は任せるよ」

カナメは瑞樹がふらふらと歩き出したのを横目に見ながら返事をする。

「交代したらしい、じゃ、後で」

カナメは瑞樹の後を追って森の中に入って行っただ。

瑞樹は木の一本一本に触れながら森の中に進んでいく。触れられた木から木特有の芳しい香りがたちこめる。目の前で明らかに様子を变えていく木々を感じながら、カナメの確信は深まっていった。いつの間にかアレオーレが二人の周りを飛び回っていた。いつもなら騒ぎながらついてくるのに、アレオーレはただひたすら黙ったまま付いてきた。

「アレオーレ？ 今日随分静かだね」

カナメはアレオーレに話しかけた。

瑞樹がぴたりと立ち止まる。

『ミズキ、デイモルフオセカ』

アレオーレは哀しそうに繰り返した。

アレオーレの声に瑞樹が振り向いた。カナメを見つめる。

「ディム？ 君はディモルフオセ力なんだろう？」

瑞樹は表情のないまま長い間カナメを見つめ続けた。

「……」

ミズキBは何もしやべらない。

「……ディモルフオセ力？」

カナメはミズキBの瞳を覗き込んだ。ミズキBもカナメを見つめ返す。

「……ナン……ディーに……帰らなきゃ……」

混乱したようにミズキBが呟く。

「……そう、君はナンディーに帰ってくると約束した。だから、僕はずっと待ってた。ずっと待ってたよ」

カナメは瑞樹の頬に手を伸ばして、冷えた頬を柔らかく包んだ。

カナメの手の上からミズキBの小さくて冷たい手が重なる。地球玉が地面に転がった。

「冷たい手……君はいつも冷たい手をしていたね」

カナメは微笑むとミズキBを引き寄せて抱きしめた。ディモルフオセ力の深い翠色の瞳がカナメを見つめる。カナメは躊躇いがちに口づけた。そして、ついばむように何度も。

瑞樹の中で様々な場面がスライドショーのようにフラッシュアップする。

赤いジタン、黄色い太陽、薄紫色の空、抜けるような青い空、明るい二つの月といびつな月、菜の花畑に浮かぶ……ただ一つの月……漠然としたつかみどころのない記憶、記憶、記憶……。

瑞樹は何一つ体系づけてうまく思い出せないまま記憶の渦に閉じ込められてしまう。

あまりの激しさに眩暈がして、ミズキBは意識を手放した。

カナメは口づけている瑞樹がビクリと体を硬くしたことに気がつ

いた。はつとして抱きしめていた腕を緩めて見つめる。瑞樹は硬直したように体を硬くして目を見開いていた。

「……ごめん、忘れてた、ごめんよ、君は瑞樹なんだっ」

カナメは瑞樹をそつと離れた。

「あ！」

瑞樹は掌の中が空っぽになっていることに気づくと動揺して小さく叫んだ。慌ててカナメの腕からするりと抜けると、しゃがみこんで地面を探す。

「ここにあるよ。ほら」

カナメは瑞樹に地球玉を手渡した。瑞樹はしっかりと握りしめてぺたりと座りこんだ。小刻みに震えているのがわかる。カナメも視線を合わせてしゃがみこんだ。

「管理棟へ行こう、地球に鎖をつけてあげるよ……もう君から逃げ出さないように」

瑞樹はカナメを途方に暮れた様子で見つめた。

「……もう何もしないよ、ごめん」

緋色のカナメの瞳が悲しげに瑞樹を見つめた。

第11話 デイモルフォセカ(2)

「NO86522347が覚醒しましたよ」

トウキは少し憂いを含んだ様子でムラサキに話しかけた。

「こんな形で覚醒するとは考えていませんでした。あまりうまくいったとは言い難いようですね。この先どうするか……これだから人間は予測できない」

ムラサキは顔を顰めた。

「日向瑞樹は日向瑞樹なのですよ。いくら内包しているものがあつたとしても、彼女が日向瑞樹として生きてきた時間がなくなる訳ではない」

「あれが使えないのであれば、NO・00153383を利用するしかありませんね。できるなら彼にはまだ手をつけたくなかったのですか……」

「NO・00153383を利用しますか？」

トウキが苦笑する。

「利用しなければならぬのなら、なんでも利用します」

ムラサキはトウキを見つめた。

「ムラサキ055からの信号は、あなたに届きましたか？」

「……何を言いたいのです？」

「ムラサキ055が獲得した感情をあなたはキャッチしなかったのですね」

そう、ムラサキ055は感情と呼ぶべきものを獲得したのだ、彼女が消滅する寸前に。それは最後のメッセージとしてメインコンピュータに送られてきた。ムラサキ055の感情覚醒を誘発したのが瑞樹であるらしいということをトウキは感慨深く感じていた。

「無論、信号は届きました。理解不能でした。それだけです」

ムラサキ056は冷たく言い放つ。

「不思議ですね。同じように造られているはずなのに……我々は少

しずつ異なっている。僕が僕でしかないように、あなたもあなたでしかない」

「トウキ、理解不能です。もうあなたの出番はありません。セキュリティ部門で任務を遂行することに専念できないのであれば、機能を一時停止させることも可能ですよ？」

「任務を遂行することに専念しましょう」

トウキは穏やかに言った。

人間に個体差があるようにアンドロイドにも個体差があることにトウキは説明しようのない信号を感じていた。マイナスのイメージではなく、プラスの……人間で言うところの喜びに似た信号を。

『アイリス、面白くなりそうだよ。君のあの小さな友達はいつでも僕の神経信号をかき回して、高ぶらせる……』

トウキは誰にも気づかれないうちに小さく呟いてみた。呼ぶことがなくなつて久しいその名前を。今はこの先を見てみたい、トウキはそう判断した。

* * *

エリアEの管理棟の通信用モニターには、いつもなら見られないブラキカムの困惑した顔が映し出されていた。

「何やってんだ？」

ブラキカムは訝しげに問いかける。カナメはモニターの前で工具を使っていた。

「何って、今北極にペグを打ちこんだところさ」

「北極？」

「うん……日本は北半球にあるからね。ほら、できたよ」

カナメは地球玉をペンダントヘッドにしたネックレスを持ち上げ

て見せた。

「で？　なんでモニターごしに話してるんだっけ？　僕たち」

ブラキカムなんて始終顔を合わせているはずなのだ。カナメは頬杖をついてモニターの中のブラキカムに話しかけた。

「それは……だな、お前に直接会って話すと……」

ブラキカムは言い淀んだ。

「話すと？」

カナメは催促する。

「……悪い、そう追及しないでくれ……」

ブラキカムは目をそらして言った。

「なんの話なんだよ」

カナメは少し苛立って言った。

「この前、急患で中断しちゃってた話なんだけど……」

ブラキカムは言いにくそうに始めた。

「なんだっけ？」

「デイモルフオセカがガルダに行ったってのは本当なのか？」

ブラキカムの表情が暗い。

「そのことか……ああ、彼女はガルダに行った、そして……死んだ。こんなことで嘘をついたって仕方ないだろう？」

カナメは不思議そうにブラキカムを見つめる。ブラキカムの顔が歪んだ。

「そうだったのか……お前は……どうしてデイモルフオセカがガルダに行ったか……知ってるか？」

ブラキカムはいつになく歯切れが悪かった。カナメは片方の眉を上げてブラキカムを見つめ、静かに首を横に振った。

「君は理由を知ってるのか？」

カナメの問いにブラキカムはぐくりと唾を飲み込んだ。

「いや……それは……そ、そう言えば、ミスキBは……デイモルフオセカだったか？」

ブラキカムはカナメの目を見ずに問いかける。

「いや……まだはつきりとは分からない」

カナメの言葉にブラキカムはどこかほっとした様子に見えた。

「で？ ディムがガルダに行った理由って？」

カナメは身を乗り出す。

「……」

ブラキカムは沈黙した。

「……僕に言えないこと？」

カナメの声が掠れる。

「……」

言うべきかどうか迷っているブラキカムの顔を見れば、それは良くない話なのだと見当がついた。

「いいよ。言わなくて。聞いたところでディムが帰ってくる訳じゃない」

カナメは急に興味が失せたように溜息をついた。

知りたかったことだけど、今はそれを知るのが怖かった。なによりもブラキカムの口から聞くことが怖かった。

「今は知らない方がいいと思う。ただ……ディモルフオセ力を……悪く思わないでやってくれ、俺が言えるのはそれだけだ」

ブラキカムがここまで悩んでいる顔を初めて見た気がする。どんな悪い話なのか、そのことを考えるのも怖かった。悪い方へ悪い方へ考えてしまう。心の中のディモルフオセカのイメージが変わってしまうことも許せなかった。

「……瑞樹は医療センターに連れて帰ればいい？」

「瑞樹が落ち着いているなら、医療センターに連れてこなくてもいいよ。そこならミントもコブもいるんだろう？」

「わかった、預かってもらえるか訊いてみるよ」

オフになったモニターの前でカナメも電源が落ちてしまったようにしばらくぼんやりと座っていた。

* * *

「なんですぐに地球に行かないわけえ？」

アーマルターシュは酩酊状態の一步手前にあつた。

珍しく、いつも一緒にいるラークスパーがいない。カフェテリアのバーカウンターに座ってウェイターに絡んでいた。ウェイターは苦笑いをしている。

「アーマルターシュ？ どうしたんだ？ ラークスパーは一緒じゃないのか？」

ニシキギが隣の席にやってきた。

「なんで私があんな一緒に酒も飲めない爺と四六時中一緒にいなくちやいけないわけ？」

アーマルターシュはニシキギを睨みつけた。

「随分飲んでるな」

ニシキギは顔を顰めた。

「私はね、今、すぐにでも地球に行きたいのよ。それだけなの、何が悪いの？」

「太陽光線の問題は聞いたか？」

「遮光グラスに遮光服があるじゃない、何か問題でも？」

「そんなの付けなければならぬ場所でも行きたいか？」

「行きたいわよ。あんたは行きたくないの？ そもそも、どうして私たちにこんなハルの記憶があるのよ。私たちのハルはあんな地球みたいなんじゃないかった。乾いた不毛の砂漠の惑星だったじゃない。私のお祖父ちゃんの代の時だってそうだったのよ。なんでこんな青い水の惑星の記憶があるの？ おかしいじゃない。私はね、青いハルの記憶が好きだったわ。泣きたくなるくらい懐かしくて愛おしい。誰がこんな記憶を私に植え付けたの？ 地球はハルじゃないわ。私は青いハルが好きだったの。地球なんて嫌い！ 大嫌い！」

「……なのに行きたいのか？」

ニシキギは呆れて問う。

「そうよ、悪い？」

泣き出しそうなアーマルターシュの顔を見てニシキギは溜息をついた。

屈折していると思う。俺と同じだ。

「あんたは、ハル脱出前のフォボスで森の民の管理官をしていたと聞いたが……」

「それが何か？」

話題が変わってアーマルターシュは興味を惹かれたようにニシキギを見つめた。

「あそこに連れてこられた森の民は力を使い果たす処分をされたと聞いている」

「それで？」

アーマルターシュは急に不機嫌になって先を促した。

「あそこから逃げだせた森の民っているのか」

「あなた、何を探っているの？」

アーマルターシュは探るように目を細める。

「ちよつとした好奇心だ。森の民のことをあまり良く知らないんでね」

「ソーマって知ってる？」

「ああ、噂ぐらいは」

「あれが作られる前なら、正直な話、逃げられた森の民がいたかもしれないわ。あの頃のフォボスのエリアEはハルから切り離されたばかりで酸素供給能力がすぐに落ちる状態だね。それで、法を犯した森の民の力を使って維持していたんだけど、そうね、力があまりない人や、逆に強すぎてコントロールが強力にできる森の民だったら、植物から力を吸い取られずに生き延びていたかもしれないわ。でもソーマができてから変わった。ソーマは悪魔の種よ。力の強いものであると弱いものであると、その力の最後の一滴まで絞り

取るわ」

「ソーマの種をどうするんだ？ 飲むのか？」

「まさか！ 掌に載せるだけよ、黒い種をね。今でも記憶にこびり付いてるわ。黒い種を乗せる瞬間の森の民の怯えた顔も、震える命乞いの声も、乗せた時の眩しい光も、絶叫もね。力尽きた森の民の周りで咲くソーマの白い花は夢のように美しいの。力の弱い人で一つか二つ、そうね、一番多く白い種を実らせた人で五つだったかしら」

「ソーマの白い種から作る霊薬は森の民の力をもたらすと聞いたことがある。一般人が使っても力が得られるのか？」

「馬鹿ね！ 森の民の力は森の民のものよ。一般人が飲んでも力は得られないわ」

「あんたは飲んだことがあるのか？」

「馬鹿言わないで！」

アーマルターシュはテーブルを叩いて激しく怒った。

「あれは人の命を吸い取ってるのよ。あんなのを飲めるのは、人殺しか気狂いか、元々の力の持ち主だけよ。ものすごい陶酔感とか強壮効果があるとか言って飲みたがる人がいるけど、私に言わせれば頭がイカしてる人たちね」

「なんだか凄そうだな」

ニシキギは苦笑する。

「凄いのよ。私たちは森の民を踏みつけて今ここにいるのよ。それは火星や月の地下に住む為なんかじゃないわ。自然に溢れた第二のハルに降り立つことでしょう？ 私はその約束された大地の為に、目も耳も口も塞いでハルの国民を……もう二度と再生されない、罪もない人たちまで踏みつけて来たのよ。私は地球を諦めない。そんなの許されるはずがないじゃない！」

「地球人はどうするんだ？ 地球人たちにだって罪はないだろう？ 全部がとは言わないけどな」

「……そんなの分かってるわ。私は……ただ、自分がしかしたこ

との落とし前をつけただけなのよ。あなたが地球人の擁護をするなんて思ってたわ。ラークスパーにも説教されたし……なんだか私一人が熱くなってるみたい。馬鹿みたいね。酔いが醒めちゃったわ」

アーマルターシユはフラフラと立ち上がるとカフェテリアを出て行った。

アーマルターシユの後ろ姿を見送りながらニシキギは強めに作ってもらった酒をあおった。

——ラークスパーの説教が……。

ニシキギは心の中で呟く。ラークスパーはハル政府が最後に残した良心なのだとニシキギは思っている。

ほとんどのハル人は知らないことだが、彼のアンドロイドとしての役割は導師。どんな状況に陥ろうとも揺るがない、道を説く役割を担っている。

彼の思考はハル国家という大きな回転体の中央に位置する、いわば軸なのだ。だからアーマルターシユの個人的な落とし前などに揺らぐはずがないのだ。

もう二度と、何ものにも（例えば天変地異にさえ）脅かされたくはない、だから自らも侵略国家にはならない、ハル政府はそう決めた。それはやむなく母星を追われた人々の祈りだったのかもしれない。その悲痛な祈りでさえ、この国ではアンドロイドが管理している。

ニシキギがそれに気づいたのはハルを脱出する少し前のことだ。ラークスパーはムラサキやトウキに比べると情報を引き出すのが容易だった。

——この国はどこに向かっているのか……。

言いようのない息苦しさにニシキギは残りの酒を一気にあおると
バーカウンターを後にした。

* * *

デイモルフォセカは別名アフリカキンセンカとも呼ばれる南アフリ
カ原産の一年草だ。強光線を好み、花は直射日光下でしか全開しな
い。太陽によって開かされる花。この花は他の恒星の光でも開くの
だろうか。太陽を他の似たような恒星に入れ替えてみたと仮定する。
例えばペカス座五十一番星とかアンドロメダ座ウプシロン星とか
に。科学者は開花するだろうと答えるかもしれない。けれども心情
的には、太陽以外の光では咲かないのでは、否、咲かないで欲しい
と思ってしまうのは何故だろう

（第11話 デイモルフォセカ 終了）

第12話 ハル

ソーマの白い種は嚴重に管理されている。

何故なら、ソーマの白い種は、森の民タイプオリジンと同様に再生できないからだ。再生した直後から光りながら崩壊してしまう。黒い種が森の民から力を吸い取る以外の方法で白い種は生成できない。

結果、非常に貴重なその種を政府は特別嚴重に管理することになる。定期的に個数を確認し、使用する時はたくさんの書類にサインをした後、鍵のかかった小部屋から取り出される。しかし黒い種はそれほど嚴重には管理されていなかった。

「絶対にその辺に落としたりしないでくださいよ。特に森の民が復活している時には気を付けるようにお願いします」

管理部の人に念押しされたくらいで、ニシキギは比較的簡単にソーマの黒い種を手に入れることができた。

「これがソーマの種か……」

それは小指の先程の小さな種で、一粒だけが小さな透明な袋に入られていた。

ニシキギは震える手でそれを取り出すと、自分の掌に乗せてみた。黒い艶々とした丸い種は、もちろん光りもしなかったし芽を出す兆候も現わさない。ニシキギはほっとした様子で、しかし同時にひどく落胆した様子で種を袋に戻した。

最近瑞樹はエリアGにやってこない。エリアEに入り浸っている人と人が話しているのを聞いていた。

「ミント、瑞樹はどこにおるんか？」

コブが作業の傍らミントに話しかけた。

「三階の医務室で眠ってるわ」

ミントは曇った顔で答えた。

「瑞樹は日に日に弱って行くような気がする。食欲もないし、話しかけても返事がないし……地球に帰してあげないと駄目なんじゃないかしら」

「あげな状態で地球に戻してどげする？ 自分の家だって家族だって覚えちよらんのじゃろうが。人格交代はせんことなったんか？」

「前よりも不安定になってるみたい。でもどちらも弱ってるから、あまりはつきりした区別はつかないんだけど、ミズキAの時は地球玉を握りしめてるから……」

ミントは涙声で言った。コブは溜息をついた。

瑞樹は地球玉を握りしめて窓の外を眺めていた。木々の緑が目にも柔らかに映る。植物たちのざわめきが耳に心地よい。

——だけど……何かが違う。

何が違うのかと聞かれても説明できないけど、何かが決定的に足りない気がした。

そうなるともう居ても立つてもいられないくらい不安になって、瑞樹は胸に下がっている地球玉を握りしめずにはいられない。

——これをくれた人……カナメという名前の人。あの人はどういう人なんだろう。

前から知ってるような気がしたし、全く知らない人のような気もある。あの紅い瞳に見つめられるとドキドキして落ち着かなくなる。それに……自分を決定的に不安にさせているその理由を瑞樹は良く知っていた。自分が誰だかわからない、それがどんなことよりも不安になる第一の理由なのだった。なにしろ、この水色の球を握り締めると何故自分は心が少しだけ落ち着くのか、それさえも分からない。この人たちは私のことを瑞樹と呼ぶ。

——ミズキ……私、そんな名前だっただろうか。それに、私は二つの言葉をしゃべることができる。何故だろう。

最初に口から出た言葉は誰にも理解されなかったが、ミントを認識した途端、もう一つの言葉を使えるようになった。カナメはこの言葉を私がミントから教わったから、彼女を認識することによって思い出したのだろうと言った。自分のことを他人の方がよく知っているというのは、なんだかとても心許無い。

ドアがノックされた。返事をする。

——ミントかな？

コブだったらもつとノックの音が大きいもの。そう思いつつドアを開く。立っていたのは青い瞳を持ったあの人だった。名前は知らないけれど顔は知ってる。地球玉をもらう前、私はこの人の瞳ばかりを見ていた。目を離すことができなかった。

その人はずかずかと部屋の中へ入ってきた。

「久しぶりだな」

ニシキギは瑞樹の瞳を覗き込んだ。瑞樹は不安になって地球玉を握りしめる。

「そんなものを握りしめているということは、ミズキ・ヒュウガの方か？　それがあるから俺にくっついて回らなくてもよくなったわけだ」

ニシキギは複雑そうな瞳で笑った。

「あの？」

瑞樹はおずおずとニシキギを見上げる。

「お前は俺の名前さえ知らないんだろうな」

ニシキギは意地悪く微笑んだ。

「俺はニシキギだ。お前に以前ひどい目に遭わされたことがある」

「あの……ごめんなさい、私、何をしたんでしょうか？」

瑞樹は目を見開いてニシキギを見つめた。

「今日はお前じゃなくて、もう一人のミズキBの方に用事があった来たんだ。代われ」

瑞樹の問いは無視された。

「あの……でも、代わるって、どうやったらいいの……」

代わって欲しいなんて言われたのは初めてだ。

「では、この前の借りを返してもらうか」

ニシキギはいきなり瑞樹を壁に突き飛ばした。背中を壁に強かに打ちつけて瑞樹は呻いた。慌てて瑞樹が体勢を整えようとした瞬間、強い力が瑞樹の両手頸を頭の上で重ねて押さえつけた。治りかけの左手首がひどく痛んで瑞樹は顔を顰める。

「おっと、また投げ飛ばされてはかなわない。この前は油断したが、もうあんなことはさせないからな。記憶を失くしていても体で覚えていることはできるもんだろ？」

足をジタバタさせてもニシキギの体はびくとも動かない。

「やめてください！ 大声を出しますよ」

瑞樹はニシキギを睨みつけた。

「出せるものならな」

ニシキギは薄く笑むと瑞樹の首筋に銃口をあてた。瑞樹は首筋に当たる冷たい感触に震え上がった。

「私を……殺すの？ そんなひどいことされるようなことを……私は……したの？」

声が震える。恐ろしさとともに、何か説明のできない感情が込み上げてくる。

「……なんだろうこの感情は？ 後ろめたさ？ 分からない。でも、私はこの人が怖い。首にあてられた銃とは別の理由でも……怖い。」「殺しなどしないさ。言っただろう？ 俺は人格交代をしてほしいだけだ」

ニヤリと笑ってニシキギは引金を引いた。

鋭いショックが全身を駆け抜ける。気を失ってはいけないと思うが力が抜けてゆく。

——駄目なのに、意識を手放してはいけないのに……。

すっかり抵抗をしなくなっただけの瑞樹をかかえてニシ

キギはベッドまで運ぶ。

「さあ、出てこい、デイモルフオセカ」

ニシキギはソーマの黒い種を瑞樹の手に握らせた。

一旦閉じられた瑞樹の目が開き、ゆっくりとニシキギに焦点を合わせた。

「っ痛い、青年！ 女の子にこんな乱暴をしちやいかんよ」

瑞樹は首筋をさすりながらゆっくりと起き上がった。瞳の奥に強い光が宿っている。

ミズキAでもミズキBでもないニシキギは目を見張る。

「君があんまりひどいことをするからハニーもチビも敵前逃亡だ。お陰で僕が浮上できたけどね」

不敵な表情で瑞樹が笑った。

「……お前は誰だ？」

「ハルって呼ばれてたよ」

不敵な瞳でにっこり笑う。

「第三の人格って訳か？」

「人格って言うのかなあ」

ハルは吞気そうに答えた。

「俺はデイモルフオセカに用があるんだ。代われ」

「だーら言ったろ？ ハニーも君が沈めちゃったって……しばらく交代は無理だな」

「お前、男なのか？」

—— いったいいくつ人格が入り込んでいるんだ。

ニシキギは忌々しそうに呟く。

「いや、男じゃないだろうよ。女でもないだろうけど」

ハルはふと手の中にソーマの種があることに気づいた。

「なんだ？ これ、ははん、ソーマの種か」

ハルはソーマの種を掌でころころと転がした。

「お前には関係ない。返せ」

ニシキギはハルを睨みつけた。

「さては、君、ハニーに持たせて森の民かどうか試そうとしてた？」
「お前はハル人なんだな？ 誰なんだ？」

ソーマの種のことを知ってる、つまりハルの人間だ。

「だからハルだって名乗ってるじゃん」

ハルはけらけらと笑い転げた。ニシキギは思いっきりむっとする。

「ハニーなんか持たすなよな、こんなの」

ハルは急に鋭い目つきになって、ソーマの種を力いっぱい握りしめた。

ハルの握り拳がパアツと眩しく光って、次に手を開いた時には真っ白なソーマの種が三つ並んでいた。

「白い種が……」

ニシキギは驚愕する。

力の強い人で五つくらいかな……アーマルターシュの声を思い出す。

五つというのはすべての力を使い果たしての数だ。三つも、しかも花を咲かすこともなく白い種を出したのにハルはぴんぴんしている様子だ。

「お前は……何者だ？」

ニシキギは低く唸った。

「マナーも悪い上に、物覚えまで悪い兄ちゃんだな。ハルだって言うてるだろ？ 何度言わせるんだ」

「森の民なんだな？」

「いやー、森の民ってゆー訳じゃない」

「じゃあ、何故白い種を出せた？」

「あのねー、森の民は黒い種で白い花を咲かせんの。おわかり？ 花なんて咲かせなかっただろ？ まったく、ものを知らんなあ」

ニシキギは呆然としたまま動けない。

「なあ、ところで腹減ってるんだけど。瑞樹のやつ、ほとんど食べ物食べないでボケボケしてたから、力でねーって。白い種だったの三つだけ。情けねー」

戸口でミントが目を見張って立ち尽くしているのが見えた。

「おお、ミントじゃねーか。なあなあ、腹減ってるんだけど、なんか食べさせてよ」

「瑞樹？」

「あー、瑞樹ならどっちもこの兄さんが沈めちまった。僕はハルって名前だ。ハルって呼んでくれよ」

ハルはあっけにとられているミントの肩を抱いてさっさと部屋を出て行ってしまつて、呆然としたニシキギとソーマの白い種だけが取り残された。

* * *

「ハル、早くおいでよ」

ミントが嬉しそうに手を振った。

「おう、ちよつと待てよ。この髪の毛が枝に引っかかって……ええい、面倒くさいな。おばちゃん、その缺はさみちよつと貸して」

ハルは近くで枝の剪定をしていたファームの民に声をかけた。

「いいけど、あんまり枝をたくさん切るんじゃないよ。ちよつとひっぱれば絡んだ髪の毛なんてすぐにとれるのに……」

おばちゃんはブツブツ言いながらそれでも缺を貸してくれた。

「だいじょーぶ、大丈夫」

ハルはにやりとして腰まであつた栗色の長い髪の方ををばさりと切り落とした。おばちゃんは目を丸くする。

「きゃー、ハルったら……」

ミントが悲鳴を上げる。

ハルは気に留めずに切り落とした髪を選定された枝が入っている籠にばさりと投げ入れた。

「すつきりしただろ？」

少年のようになってしまった髪でハルは輝くように笑った。

「瑞樹が知ったら悲しむわよ、きつと」

「そっか？ 案外氣にいると思うぜ。なんたって洗う時が楽だ」

「ハルう」

「さて、行こうぜ」

ハルになってからの瑞樹は、ミントとエリアEの中を毎日のように駆け回っていた。湖で泳いで魚を追いかけたり、木の実をとったり、種を発芽させて植えたりした。その間、ミズキAとミズキBはなりを潜めたように現れなかった。

ハルは二人が回復するための深い眠りにについているのだと言った。

「ミント、内緒だぜ？」

そういいながらハルは種を手の上であつという間に発芽させた。

「ハルって森の民なの？」

「違うよ、でもこのことは内緒だからな」

ミントはこくりと頷く。

「ミント、見てろよ」

ハルは草むらにいた小さな緑色の虫を捕まえると、掌でぎゅっと握りしめた。ミントが悲鳴を上げる。

「ほら！」

ミントは顔を掌で覆ったまま見ようとしなない。

「大丈夫だって、見てみ」

ハルの掌にあつたのはつぶれた虫の死骸ではなく紫色の翅を擦り合わせて鳴く虫だった。リンリンと鈴をふったようないい音がする。

「手品みたい。どうやったの？」

ミントはハルの掌を見つめる。

「この虫なら葉っぱは食べない。枯葉を食べるから土が肥える。しかもいい声で鳴く。一石三鳥だろ？ たくさん捕まえて変えてやろう」

ハルはしばらくの間虫取りに夢中になっていた。

「瑞樹のことは心配だけど、ハルが来てくれて良かった。なんだから最近エリアEの植物がすごく元気だよ。瑞樹の体も良い調子みたいだし」

ミントが嬉しそうに笑った。

湖に浸した足で水を跳ね上げながらのんびりと天井を見上げていたハルは振り返って微笑んだ。

「ミントが一緒だったからとても楽しかったよ」

ハルの言葉にミントは不安になる。

「ハル？」

「本当に楽しかった。昔みたいだった……ミントはいい子だ。いつまでも健やかでいろよ」

「ハル……どこかに行っちゃうの？」

「そろそろ行かなきゃな、限界も近いし、最後にしておきたいこともあるし……」

「どこかへ行くの？　ねえ……昨日の夜、端末で何をしていたの？」

昨夜遅くにハルがコンピューターの端末の前に座っているのを見かけたのだが、なんだか怖くてミントは声をかけられなかったのだ。小さな瑞樹の背中のはずなのに、なにか途轍もなく大きな力を発散しているようで、近寄りがたい雰囲気だったのだ。

「……ミントさあ、セージと本当に結婚するのか？」

ハルが上目づかいでミントを見つめる。ミントの質問には答える気が無いらしい。

「なっ、何を言ってるの？　って、なんでハルがセージのことを知ってるの？」

突然の話題の変更でミントは慌てふためく。そんなミントの動揺ぶりを見ながら、ハルは盛大に溜息をついた。

「あいつ……ファームの民としてはサイターだぜ？」そして小さく吹き出した。「お前にべた惚れだし、いいやつなんだけどなあ……それでも、お前は苦労するだろうよ」

ハルはにやりと笑う。

「わ、私のことはどうでもいいのよ！ ハルのことを訊いているんでしょう？」

「……カナメを公安から取り戻してくるよ」

ハルは立ち上がった。

「え？」

「どんな理由であれ、人の想いや人生を踏み台にしてはいけない。やつらにそんなことはさせない。ちよっくらエリアEを出てくるよ。大人しく待ってな」

ハルはとびきり優しい瞳でミントを見た。

「なんのこと？ カナメさんならアグニシティに行ってるって聞いたわ。どうして公安に捕まるの？ どうしてそんなことがハルに分かるの？」

ミントが問い詰めているところにコブが青い顔をして小走りにやってきた。

「瑞樹！ カナメが公安に捕まったち連絡が入ったんじゃけど……どういうことかようわからんのじゃけど、あんたに証人として出頭するようにと公安が言っちやる」

コブはオロオロしていた。

「落ちつきなよ、コブ」

ハルはにっこり笑って見せると、じゃな、とミントに手をヒラヒラ振ってエリアEを後にした。

* * *

マーガレットは怯えていた。

さっきから何かが部屋の中にいる、そんな気がして仕方がないの

だ。気配がするので振り向く。そうすると気配が消える。それを夜中まで繰り返して、とうとう眠ることを諦めたマーガレットは映像ルームへ向かった。何か映像でも見て心を落ち着かせようと考えたのだ。

マーガレットはアーマルターシュと同じようにフォボスで森の民の監理官をしていた。

『マーガレット』

その声はマーガレットの頭の中でおどろおどろしく響いた。

女性の声だ。聞き覚えのある声。映像ルームに入った途端、その声はどこからともなく響いた。

「だっ、誰なの？ で、で、で、で、できなさいよっ」

『……助けて、助けてちょうだい』

「ひっ！」

マーガレットはあとずさる。

『私には息子がいるのよ……死にたくない、お願い助けて……』

白い手がマーガレットの手首をつかむ。

「きゃ——」

——森の民だ！ あの女だ！

真っ暗な穴の中を落ちるような感覚が襲い、マーガレットは意識を手放した。

『いいか、記憶しろ。カナメ・P・グラブラの証人が見つかった。』

明後日、アンドロイドを交えた証人喚問を開催する。そうラークスパーに伝えるんだ。忘れるな』

薄れゆく意識の中でマーガレットは有無を言わさぬ、何者をも従わせる声を聴いた。

マーガレットは記憶に刻みつける。

「私は明日、アンドロイドを交えた証人喚問を行うことをラークス

パーに伝える。開催は明後日、証人は……」

『ミズキ・ヒュウガだ』

「ミズキ・ヒュウガを証人として迎える」

『それでいい』

声は消えた。

マーガレットははっと目覚めて、自分が自分の部屋のベッドにいることに気がついた。日付は次の日になっていた。

* * *

柿はたくさんの白い花をつける。その後小さい緑色の柿の実が結ばれるが、その半数近くは大きくならないまま落下する。大きい柿の実になるものと落下するもの、その選択は柿の木がするのだろうか実がするのだろうか。前者ならば自然の毅然としたあり方への恐れを感じ、後者ならば自己犠牲に対しての切なさを感じる。自然は毅然としていて気高く……残酷だ。

第13話 星の欠片（1）

カナメはナンディーの奥に設置されている小部屋にいた。

連行された時に殴られたせいで口の中が切れていて、しょっぱい鉄錆の味がする。その小部屋には鉄格子のついた小窓と簡素なベッド、隅にあまり役には立ちそうもない目隠しのついた排泄用スペースがあった。

事情を知らない地球人が見ても、それは牢屋だろうと思うに違いなかった。

「お前みたいなエリートは、目の届かない所で何をしてたかわからんな！ え？ そうだろうが！ 俺の親父はそりゃ毒にも薬にもならん平凡なやつだったさ。だけど、ずっと政府の為に真面目に働いてたんだ。それが……それが、たった半日だ。たった半日、事故に遭って死ぬのが早かったただけだ……なのに再生されないと言われたんだ。あんたの父親だったら、ちょこつと口きいて、死んだのが半日遅かったってことにできるんだろうさ。森の民の配偶者を一般人だと偽り続けられたようにな！」

カナメを小突きまわして牢の中に蹴りいれたその男は牢のカギをかけた後で、そう毒づいた。誰がどのようなにして公安にそのことを知らせたのかさっぱり分からなかった。瑞樹がデイモルフオセカだったのならまだしも、彼女は記憶すら取り戻していない。

考えられるのは、ニシキギが感づいていたか、ブラキカムの記憶がなんらかの原因で漏洩もつえいしたか……。

「おまえなんざ、分解されて二度と再生されない犯罪者リストに載りゃいいんだ。さんざんいい思いをしてやりたいようにやってきたんだろうが！ 自分が造ったあの忌まわしい機械で粉々になれ！」

牢の見張りになっていた男はカナメを見るたびにそう言った。

一日一回取り調べを受けた。尋問官は概ね、規律に従って肅々と尋問を行ったが、中には暴力をふるう者もいた。明かりの乏しい牢の中にいると、もう何もかもがどうでもいいかなと思えてくる。

そもそも半永久再生権など自分には必要がなかったのだ。

どうして今自分が踏みとどまっているのかといえば、瑞樹を地球に帰していないこと、約束を果たしていないこと、それだけだった。羽が折れて井戸に落ちた病んだ小鳥……そんなイメージを抱いていた瑞樹をあのままにしておけない、それだけが今のカナメを支えていた。

カナメの尋問が続いているということは、具体的な証拠がないということだ。自白すれば罪は確定し、処罰がくだされるだろう。自分が拘束もしくは分解されてしまえば、瑞樹は地球へ帰る道を失う。

記憶を戻して、あの青い地球に帰して……そうしたら自分は心おきなく永遠の不帰路に向える。

あの瑞樹の惨めなイメージを知っているのは自分だけなのだ。本人でさえそれを忘れている。

「デイモルフオセカ……」

カナメは小さな声で呼んでみる。

——君がここにいないくて良かった、本当に良かった……。

心の中で呟く。デイモルフオセカはカナメの身を案じてばかりいた。自分のせいでカナメが悪い立場に陥っているのではないか、危険なことをしているのではないか、人の心配ばかりして……。

「君がいなくて良かったなんて思ったのは初めてだ」

暗い小部屋に横たわったままカナメは虚空に手を伸ばす。

——僕は君をきちんと照らしていたかい？ あのハルの暗闇の中で、僕は君の光になれていたかな……。

涙が溢れた。何百年生きていようと変わらない。

——僕は僕のまま、意気地無しで、イブキがデームが……必要だ。どうか僕に勇気をくれないか。もう一度だけ……瑞樹との約束を果たすまで……。

* * *

その日の尋問官は明らかにやりにくそうだった。

「カナメさん、私もこんなことを毎日毎日、細々聞き出すのは本意ではないんですがね、今日は、あなたの配偶者の件で進展がありませんね。証人になれるって人物が現れたんですよ」

「証人？」

——何の証人だ？

カナメは首を傾げる。

「ええ。それで、再度あなたの配偶者の確認をしますので、正直に教えてください。何度も繰り返すようですが、きちんと偽りなく正確に教えてください」

「分かりました」

カナメは薄く笑った。

職務とはいえ、根気のいる仕事だなと感心する。彼からはもう三度も尋問を受けている。尋問の内容はほぼ一緒だった。そのかわり、カナメの些細な言い方の変化や違いを丹念に突いてくる。地味な、しかし重要な作業なのだ。

「デイモルフオセカ・グラブラと言うのがあなたの配偶者ですな」

「はい」

カナメは素直に答える。何故か今日は尋問官の方がうるたえている気がする。

「旧姓は？」

「シヌアータ」

「シヌアータ家はナンディーには乗っていませんね」

尋問官はコンピューターを叩きながら再度確認する。

「シヌアータ家はアイラヴィータに乗っていました」

「おかしいですね、大抵家族は固めて乗る様にしていたと思います
が……」

尋問官は探るような目でカナメを見た。

「そうですね。もっとも彼女と結婚したのがハル脱出間際でしたか
ら……」

「なるほど。で？ 当人は乗船している訳ですな」

「いいえ、乗っていません。彼女は……死にましたから」

「どこで死にましたか？」

「ガルダの事故の救援に行きました。そして戻ってこれなかった」

「どうしてガルダの事故に彼女を行かせたんですか？」

これにはカナメは返答せず、首を横に振った。

「きちんと答えてもらえますか？」

「何度も説明するようですが、僕が行けと言ったわけではありません
ん。彼女は植物学者で……エリアEの植物に詳しくだったので、自分
で確かめたいと思ったのかもしれませんが、あくまでも僕の推測です
が。彼女はナンディーに戻ってこれると思っていたんです。救援に
向かった誰もがそう思っただけなんですよ」

「それは……そうですね」

尋問官は小さくため息をついた。

「では、最後にもう一度訊きます。デイモルフオセカ・グラブラは
デイモルフオセカ・オーランディアカと同一人物であるという通報
だったのですが……認めますか？」

「否定します」

「わかりました。私の尋問はこれで終わりです。後はラークスパー
教授が奥で待っています」

いつもよりも、あっけなく終わった尋問にカナメは肩透かしをく

らったような気分で立ち上がった。奥の部屋には数名の人が待機しているようでざわめいた気配があった。

ラークスパー教授を中心にしてムラサキ、トウキが座っている。アンドロイド尋問か、こつちが本番って訳だ、カナメは納得する。心の中を見透かす能力を持つムラサキとトウキがチラリとカナメを目で追った。そして後ろの席には幾人かの傍聴人がいた。証人席に座っている瑞樹を見てカナメは目を見開く。

――髪の毛が……いやそれよりも……瑞樹が証人？

「カナメ……そこに座って、そう。傍聴人は静粛に願うよ」
背後のドアが閉められた。

「さて、私たちの前で嘘は一切まかり通らないことを説明しておくよ。嘘、偽りのないように証人は証言を行うように。証言中はムラサキおよびトウキによってスキャンさせてもらう。スキャン中、疑わしい事実が発覚すれば、君も罪に問われることになることを覚えておいてくれたまえ。ミズキ・ヒュウガ、君は地球人だということになっているが間違いはないかね」

瑞樹は明らかに動揺しているように見えた。硬直したまましゃべらない。

「ハル語をしゃべれると言ってなかったか？」

ラークスパー教授はムラサキを振り返った。

「は、はい、間違いありません」

瑞樹は何かに急かされたように返事をした。

「よろしい、よろしい」

ラークスパー教授は微笑んだ。

「君は人格を二つ持っていると言いたのだが、今はそのどちらかね」

「あの……私はヒュウガ・ミズキで……その……もう一つの人格と
いうのは……」

部屋の中の誰もが息をのんで瑞樹を見つめる。

「誰なのかわかりません」

場内に溜息がもれる。

カナメは瑞樹の言葉を聞きながら違和感を覚える。

——瑞樹は……瑞樹なんだろうか。

エリアEで最後に抱きしめた瑞樹は自分のことさえ良く分かっていない様子だったのに。

「もう一人に代わることはできるのかね？」

「代わり方がわかりません」

瑞樹は消え入りそうな声でしゃべった。傍聴席にいるニシキギが舌打ちをする。

「心を静めていなさい。ムラサキにもう一人を引き上げさせてみよう」

瑞樹は怯えたようにラークスパー教授を見つめた。カナメはその様子を緊張の面持ちで見つめる。

『心を鎮めなさい、瑞樹。恐ろしいことは何もありませんから……』
頭の中にムラサキの甘やかな声が広がる。

瑞樹はあつという間に自分の意識をもぎ取られていくのを感じた、代わりに誰かが浮上していくのが見える。

——誰？ ハル？ ハニー？

「君の名前は？」

ラークスパー教授が穏やかに問いただした。

「私は……」場内に緊張が走る。「デイモルフオセカ・グラブラです」

場内がどよめいた。ニシキギが唇の片方を持ち上げて笑ったのが見えた。カナメは唾をこくりと飲みこむ。

——もう一つの人格は、やはりデймだったのか……。

「君の旧姓はオーランティアカで間違いないかね」

「私の旧姓はデイモルフオセカ・シヌアータです」

「君はアール・ダー村で育ったのでは？」

穏やかな、だが偽りを見のがさない冷徹なラークスパーの尋問にカナメは心の中で覚悟を決めて目を閉じた。

デイモルフオセカには地下都市で育った記憶がない。ラークスパーの言う通り彼女はアール・ダー村で育ったからだ。

フォボスから救い出すために自分の籍に入れた時、カナメはコンピュータを操作してデイモルフオセカ・シヌアータという人物を作り出した。これはデイモルフオセカの生まれながらの姓ではあったが、森の民の力が発症して抹消されていたデータで、ほとんどがでっち上げでできた記録をデイモルフオセカ・シヌアータという人物は持っていた。

コンピュータに出てくるその人物のデータは、本物のデイモルフオセカでさえ知らない。たとえ知っていたとしても、アイデンティティ（自己同一性）は破綻している。はずが……。

「私は地下都市ハデス居住地区エリアC9897に住んでいました。父の名前はエニシダ、母の名前はロザ……」

デイモルフオセカ・グラブラだと名乗った瑞樹は、ラークスパー教授のその後の質問に澁みなく答えた。

地下都市での暮らし、父のこと母のこと友達の名前、地下都市での職種、カナメとどうやって出会ったかまでカナメが作り上げたデータの人物そのものであるようにすらすると問題なく答えた。その裏付けがコンピュータ上で確認されて行く。

場内で一番あっけにとられたのはカナメだった。

——誰だ？ これは？

その気持ちを気づかれないようにひたすら心にシールドを張る。

「スキヤンの結果、デイモルフオセカ・グラブラとデイモルフオセカ・シヌアータの間に人格における同一性が認められました」

トウキが静かに言い、ムラサキがそれに同意した。

「ふむ、カナメ、残念だが、これは再生の時に君の配偶者の記憶が紛れ込んだとしか考えられんね。君の奥さんはガルダの救援で亡く

なつたとか」

「……はい」

「辛いことを何度も聞いてすまなかったね」ラークスパー教授は机をコンと叩くと「デイモルフオセカ・オーランディアカとデイモルフオセカ・グラブラは別人であると確認した。よってデイモルフオセカ・グラブラ、旧姓デイモルフオセカ・シヌアータは森の民ではなかったと断定する。以上だ」

呆然と座り込んだままのカナメの肩を幾人かがポンポンと叩いて行った。困惑気味のコブが、それでもホツとした様子でカナメの肩をバシンと叩いて行った。

瑞樹がラークスパーに肩を抱かれて連れてゆかれる。カナメの目の前を通過した時、それまで怯えていた瑞樹の表情が一変して不敵に笑うのをカナメは見た。大胆にもラークスパーの傍らで小さく親指を立ててガッツポーズまでしている。

カナメはあつけにとられてそれを見送ると、自分も退廷しようとした。

ニシキギがひどく怒ったように瑞樹を睨みつけているのが見えた。

* * *

「ハル、大丈夫だったの？」

ミントが瑞樹を見つけると駆け寄って飛びついてきた。

「良かった、良かった！ もう戻ってこないんじゃないかって心配したのよ」

「ミント、こらこら、ぶら下がるなよ」

ミントはハルの背中から抱きついてぶら下がる。そんなミントを

前に回して抱きしめた。

「……これで本当にお別れだ」

ハルはミントの瞳を見つめた。深い翠色の瞳が心なしかいつもより青みがかって見える。

「え？」

「もう少ししたらカナメが来る。彼にもお別れを言わなくちゃな」

「もう会えないの？」

ミントは涙ぐんだ。

「いつまでも君たちのことを見守っているよ。きつとまたどこかで会えるよ。チビのことを頼むね」

「チビ？」

「瑞樹Aのことさ」

ハルはにやりと笑った。

久しぶりに牢の外に出たカナメが公安の出口に向かう細い薄暗い廊下をとぼとぼと歩いていると、廊下の途中に項垂れたままぶるぶると震えている男が立っていた。カナメはふと立ち止まる。

「君……」

男は顔を上げた。

「お……俺は、罰せられますか？」

牢に入れられる時にカナメをひどく殴りつけた男だった。

暴力を許す気にはならなかったが、自分だって許される立場ではないのだということはカナメが一番よく知っていた。

「暴力が生み出すのは、痛みだけじゃない。憎しみや恨みや、さまざまな負の感情を生み出すよ。罪人に優しくしろなんて言うつもりはないけどね」

「す、すみませんでした」

男は深々と頭を下げた。

頭を下げなければならぬのは自分の方なのだ。カナメは眉間に皺を寄せる。

「君……名前は？」

男は哀れな様子で顔を上げた。

「……タクサス・カスピダタと言います」

声が震えている。

「良く覚えておくよ。君と君の父上の無念の思いも……しっかり受け取った。ハルはこれから変わっていかなければならない。エクソダスが成功すれば、君たち親子の無念を晴らせる日がいつか来るかもしれない。断定はできないけど、君の父上の遺伝子情報は残っているはずだからね」

カナメの言葉にタクサスは驚いたように顔を上げた。

「しかし、犯罪者であれば削除されていることもある」

「父は……父はそんな人間ではありません」

タクサスは首をぶんぶんと振った。

「なら、この船のメインコンピュータに残っているだろう。家族はまとめてあるから。では、僕はそんな日が来るように努力すると約束しよう。だから君も約束してくれないか？ 人としてなすべきことをすると」

タクサスは深く深く頭を下げたまま泣き崩れた。

第13話 星の欠片(2)

カナメがエリアEに行くとミントが泣いていた。ハルがいなくなるのだと言っ。

——ハル……懐かしい響きだけれど、誰だ？ それは。

カナメはエリアEで瑞樹が行ったと教えられた方に歩いて行った。こっちは、確か湖がある方角だ。しばらくいくと案の定、湖に出た。人工ジタンの下で湖はきらきら光っていた。その光る湖に誰かが浮かんでいるのが見えて、カナメに戦慄が走る。服が濡れるのにも構わず湖にじゃぶじゃぶと入って行った。

「アイリス？ 君っ！ 大丈夫か？ ……瑞樹？」

瑞樹が顔を上にしてのんびりと浮かんでいた。カナメは呆然と瑞樹を見下ろす。

「よう」

呑気に答える瞳は、瑞樹ではなくあの時の、尋問が終わった時の誰かの目だ。

「君は……誰？」

カナメの問いかけに瑞樹は体を起こして立ち上がった。

「そうだったな、アイリスはこんな風に死んでたんだっけな。脅かして悪かったよ。アイリスは僕のベストハニーだった。ああ、もちろん、君のデймもベストハニーだったよ」

たくさん居たらベストって言わないんだっけ？ とハルはブツブツ呟いた。

「僕は、君にお礼を言わなければならないようだ」

カナメは手を差し出した。

「礼には及ばないさ。借りを返したただけだ」

瑞樹の中の人格は鮮やかに笑んだ。

「何のことだ？」

「ハルの地下で不思議な人間が発生していたのは知っていたよ。死んでも生き返って……死ぬ前に若返ることもあったな。僕は不思議な人間ができたんだって面白く見ていた。君以外にも幾人かいた。君の友達にもいたよね、顔の良いお兄ちゃんときれいなお姉ちゃん」

「イブキとフェリシアのことかい？」

「そんな名前だったかな。君たちが地下でサイコロを振って良い目を出すよりも少し前に、僕も地上でサイコロの良い目を出していた。君たちが森の民と呼んでいる人たちを作り出したんだ。僕がまだ、青くてうつとりと見つめてもらっていた頃最後の一握りの大地を必死に守ってくれていた。森の民は全部僕のベストハニーだ」

「何を……言ってる？」

「君とデイモルフオセカのことは本当に楽しく眺めていたよ。僕のハニーと地下の不思議な人間のカップル……子供ができたらどんなのだろうってワクワクして見てた。だから、僕はデイモルフオセカの中に入り込んで脱出しようと考えたんだ」

「馬鹿な……」

「でも、デイムはあつという間に死んでしまった。計算外だったよ。彼女が自分の力以上の力を出してしまったんで、僕は彼女から逃げ出すこともできなかった。げに凄まじきは母の子を思う心ってやつだね」

ハルはクスクス笑った。

「……」

カナメは目を見開く。

「僕は消滅したはずだった。あの時、デイモルフオセカと一緒に……でも僕はここに居る。何故だ？僕は考えた。そして結論は一つだと気づいた。君とハニーの子供が地球に着いたんだってね」

「僕とデイモルフオセカの子供？」

ハルは頷いた。

「デイモルフオセカに宿っていた胎児の中に、僕の欠片が入っていたんだろう。そして一人の人間の体を支配できるまでに大きくなった。今の僕がそれだ」

ハルはこの世のものとも思われないほどの威厳をもって微笑んだ。
「君は、ハルだと……、自分がハルだと言っているのか？」

「僕がそれ以外を名乗ったことは今までになかったよ。誰も信じてはくれなかったけど」

ハルの瞳が不思議な瑠璃色を放つ。

「そして、もうこの体に留まれないくらいに大きくなってんだ。だから僕はもうここを出て行かなきゃならない」

ハルは少し寂しそうに瞬いた。

「……どこに行くの？」

「そうだね、この太陽系は結構面白いところだけど、もう地球にはテラがいるから」

「地球にも君みたいなのがいるの？」

「みtainなのってなんだよ」ハルはふつと笑った。「ハルが二字だろ、テラって言いやすいからそう呼んでるんだ。地球上には様々な人種がいて、それぞれにそれぞれの地球の呼び名があるんだよね。僕とは大違いだね」

ハルは自嘲気味に笑った。

「生き物を育てている惑星には僕みたいなのが必ずいるよ。だからもう一度僕もどこかで生き物を育てみようと思うんだ。いつか、どこかにいる僕を見つけてくれるかい？」

「火星には住みつかないのかい？」

「あー、君たち本当にこの星に住みつくつもりなの？ ここにも既に僕みたいなのがいるよ。でも、僕はあんまり好きじゃないな、趣味が合わないさそうだしね」

「趣味……」

カナメは啞然とする。

「最後にアグニシティにプレゼントを置いて行くよ。後で見に行ってみな。それから、これはお願いなんだけど、もしミントが子供を産んだら、ミントに霊薬ソーマを一滴飲ませてやってくれ。そうすれば寿命を延ばすことができると思うんだ」

ハルは悲しそうに言った。

「それから、これはとても大事なことだ。必ずチビを元に戻してやってくれよ」

「チビ？」

「瑞樹のことだよ。あの子はまだ十七歳なんだ、これからたくさん笑ったり、泣いたり……恋をしたりしなくちゃいけないんだ」

ハルの言葉に聞き覚えがあった。

「ふふ、これは君のセリフだね。君はこう言ってデイモルフォセカをフォボスから救い出してくれた。僕はなんでも知ってるんだ。だから君がついた嘘だってちゃんと知ってただろ？　だって全部僕の上で起こったことだったからね」

ハルは悪戯っぽくウインクをしてみせた。

カナメはデイモルフォセカ・シヌアータが持つ架空の情報をハルがスラスラと話したことを思い出す。

ハルは続けた。

「君が瑞樹から偶然採取した小型大腦コンタクトの機械に入っている彼女の記憶を返してやってくれ」

「瑞樹に記憶を返したら……デイムはどうなる？　デイムはあの体にいるんだろう？」

カナメは拳を握り締めた。はつきりと確かめたわけではなかったか、それは確信のようなものだった。

「この体はミズキ・ヒュウガのものだ。元の彼女に戻るだろう。君には辛い事だと思うけど、瑞樹は僕やハニーをここまで連れてきてくれた。彼女の使命はここまでだ。これからは自分の人生をきちんと

と生きていけるように導いてやってほしい。瑞樹は地球の子だ。この先君たちがどんな生き方を選択するかは分からないが、とにかく瑞樹は地球に帰してやってくれ。テラもそれを望んでいるはずだ」

「……」

カナメはハルの目を見ることができずにそらしてしまふ。

「瑞樹は、辛い人生を背負っていたせいで、逆に周りに甘やかされてきたから精神的にひ弱なところがあるんだ。きちんと自分の足で立つて生きていけるように君が鍛えてやってくれるといいんだが……ああ、もう限界のようだ」

そう言い残すとハルは両手を広げて顔を上に向けた。

鳥のような形の光が瑞樹の体からフワリと浮き上がるのが見えた。それは天井を貫いてエリアE全体を閃光で満たした瞬間、消え去った。

* * *

「すまない、カナメ……君とデイモルフオセカの子供のことは、俺が担当したんだ」

医療センターの片隅で、ブラキカムは項垂れて言った。

「デイモルフオセカがフェリシアに連れられて俺のところに来た時、君たちの赤ん坊はまだ親指くらいの胎児だった。森の民と一般人の子供、しかもデイモルフオセカはタイプオリジンだ。彼女はそことが知ればこの子が生まれる可能性がなくなると言って泣いた。彼女は一度だけでいいからこの子に生まれるチャンスを与えてほしいと俺に懇願した。君に知らせることはできなかった。このことが君の記憶に残れば分解・再生・記憶採取のどれかの時にばれてしま

う可能性があったな。フェリシアも同様だったから、それ以上はタッチさせなかった」

ブラキカムは深いため息をついた。

「俺は医師だったから守秘義務があつて、これは記憶採取、分解・再生のどの段階にも適用された。だから俺の記憶はタッチされる心配がなかった。例えメインコンピューターでも俺の許可なしに俺の記憶を見ることはできなかっただろう。メインコンピューターの製作者がそうだった、いわば安全地帯のような条件をいくつか作ってくれているのは知ってるだろ。俺は胎児の心音を確認してから、取り出して分解した。そしてガルダに乗せたんだ。イブキとフェリシアの養子として。名前はデイモルフオセカがカナメと名付けた。男の子だったよ。森の民の検査はしなかった。どこかに記録が残るとまずいからな。本当は陰性であることを確認してデймを安心させてやりたかったんだがな。まあ、こうしておけば、その後の処置を知らなくても、少なくともフェリシアはこの子が誰と誰の子供かわかるところだ。デイモルフオセカにはガルダに乗せたことだけを知らせた。彼女は再生できないことがわかっていたから問題ないはずだった。すまない。そのせいで、デイモルフオセカを死なせることになっちまったんだな」

ブラキカムはさらに深く項垂れた。

「いや……ドクター……力を貸してくれて、ありがとう。感謝するよ」

他に言う言葉をカナメは思いつけなかった。すべてが空っぽになった気分だった。

* * *

親は子供のために何をしてやれるだろうか。

ウミガメは産卵の時に涙を流す。生理的なものだと苦痛のためだとも言われる。しかし、私は、ウミガメが子供の為に祈って泣いているのではないかと思う。敵に襲われませんように、病気になりませんように、自分の足できちんと立ち上がり生きてゆけますように……子供の成長を見守ることを許されなかった親に唯一できることは、祈ること……それだけだ。

（第13話 星の欠片 終了）

第14話 光を求める指の先に

ハルが抜けた瑞樹はデイモルフオセカでいる時間が増えた。以前よりも少し大人びた雰囲気のデイモルフオセカは、カナメをきちんと認識した。

エリアEにいてコブやミントと穏やかに過ごす彼女は幸せそうに見える。

「カナメ、話があるんじゃないが……」

久しぶりにエリアEにやってきたカナメにコブは心配そうに話しかけた。

「最近、瑞樹が変わってきたような気がするんじゃないが……あれはあのままでいいんか？」

「どっちのこと？」

「ミズキ・ヒュウガの方じゃ。瑞樹のことはようは知らんのじゃけど、デймも瑞樹も二人とも力を使う」

「どうして入れ替わっているとわかるんだい？ 力を使うならデймなんだろう？」

「力の使い方が違う。デイモルフオセカのことならようわかつちよるつもりじゃ。あの子は純粋な森の民で植物にだけその力を使うことがでくる。ハルでは何度もこの目で見たきの。瑞樹は植物だけじゃねー、土や水や虫たちにまでその力を使う」

「まさか！」

「連れ込まんようにと気をつけちよった虫が何種類かあるんじゃないが、やはり何匹か紛れちよってな、最近被害が増えて困つちよったんじゃない」

「瑞樹がその虫を駆除した？」

「そげなことならわしらでもしちよる。虫を害のない別の虫にしたんじゃない」

「それはいつの話？」

それをしたのはハルなのかもしれないとカナメは思いつく。

「さつきもしちよったぞ」

カナメは耳を疑った。ハルの力ならば、そんな不思議なこともできるだろうと思っていた。何億年となく様々な生き物を育んだ惑星だ。

ハルが瑞樹の体から飛び立ったあの日、アグニシティのエリアEに突如、草原が出現した。細く長い葉を持つその植物は丈夫で、たくさん光合成を行った。

「今はどっちなの？」

「瑞樹じやろう？　今も虫を追いかけてちよるからな」

叢をガサガサとかき分けている瑞樹を見てコブはため息をついた。「ありがたいことじゃが、不安になる。ディモルフオセカと初めて会った時のごたる。わしは自分が別のものに変えられてしまうんじゃないかとびくびくしちよった。今のわしはディモルフオセカがそばなことせんのはわかつちよるが……」

コブは言いにくそうに言葉をとぎらせた。

コブたちファームの民は森の民を恐れていた。自らの体内に葉緑体を持つファームの民は植物に近い存在だ。森の民は植物を操る。だから、ファームの民も操ることができるのではないかと恐れていたのだ。実際は、森の民が力を使えるのは植物のみで、ファームの民にその力を使えなかったのだけれど。でも瑞樹の場合は……虫に使えるのであれば、ファームの民のみならず、すべての生物にとつての脅威になるかもしれない。

「瑞樹？　君は瑞樹だよな」

瑞樹は虫を探す手を止めてカナメを見つめた。

深い翠色の瞳、短く切られた栗色の髪……カナメは地下都市ハデ

入の自分の部屋を思い出す。デイモルフォセカもこんな少年のような短い髪で僕の部屋に逃げ込んできたのだった。あの時のデイモルフォセカに瑞樹はそっくりだ。

「地球の……カナメ」

ターコイズをあげてからカナメのことを地球の人と呼ぶようになってしまっていた。

「地球の人は君だよ」

カナメはクスリと笑った。瑞樹は無言のままちよつと首を傾げる。「何をしているの？」

「虫とり、ほらこれ」

緑色の芋虫をカナメの目の前にぶら下げた。

「……それ、どうするの？」

カナメはざつと後ろに引いた。

「変える」

瑞樹は両手で虫を包み込むと目を閉じてぎゅつと握りしめた。幽かな光が指の間から漏れ出る。手を開くと赤みがかった細長い生き物がぐにゅぐにゅと蠢いていた。瑞樹はその生き物をそつと土の上に放す。

「こ、これは？」

カナメが後ずさりながら訊いた。

「この生き物は葉っぱを食べない。枯葉を食べて土を分解する。土が豊かになる」

瑞樹はにやりと笑った。カナメの様子を見て悪戯っぽく笑うと、まだ土の上でのたうっているその生き物を再びつまみあげるとカナメの目の前にぶら下げた。

「うわっ」とカナメは後ろに尻もちをついてしまう。

瑞樹は、あははと笑いながらその生き物を枯葉の下にそつと埋めた。

「ミントと同じだ。これが怖いんだ」

あははははは、と笑いながら、すたすたとどこかへ行ってしまった

た。

残されたカナメはため息をつく。

——あれは誰だ？ まるで七変化だ。

人格の崩壊……カナメの脳裏に不安が広がる。

*

*

*

「デイモルフオセカ？」

デイモルフオセカになつてゐる時を知らせるようにコブに頼んでおいたら、その日のうちに連絡があつた。

「……カナメ」

躊躇いがちに伸ばしたカナメの手を、デイモルフオセカはふわりと両手で包みこんで自分の頬に当てて微笑んだ。デイモルフオセカは前にエリアEで会つた時よりもずっとデイモルフオセカらしくなつていた。

「何してるの」

カナメの問いかけにデイモルフオセカは微笑んだ。

「カナメにまた会えて……本当に良かったって考えてた」

デイモルフオセカは弱く笑んだ。

「……僕も良かったと思つてるよ」

カナメも同じくらい小さく微笑む。

「瑞樹のお陰ね……でも瑞樹は今、苦しんでる」

デイモルフオセカは悲しそうに言った。

「……苦しんでる？」

カナメの問いにデイモルフオセカは頷いた。

「ハルが抜けた後の空白を瑞樹と私とで分け合ったの。それで私は私の記憶を取り戻せたんだけど……」

デイモルフォセカは続けた。

「瑞樹は完全に自分を見失っている。自分が地球から来たことも、前の自分がどんなだったかも思い出せなくて、それで……」

「それで？」

「……あの子はハルに近づこうとしている」

「……」

「ハルはあの子を可愛がっていたから……あの子もハルを慕っていたから、ハルを恋しがっているうちにどんどんハルに近づいていつてるの」

「虫を変化させたのを見たよ」

「あれは森の民ではないわ……もつと、ハルに近い存在になろうとしている。近づき過ぎれば、巨大な力に飲み込まれる……危険だわ、とても危険」

デイモルフォセカは辛そうにそう言った。

「止めさせないと……いけないんだね」

カナメはハルの言葉を思い出す。

『これはとても大事なことだ。チビを元に戻してやってくれ』

ハルのこの言葉は、瑞樹を地球に戻せと言っているのではないことをカナメは痛いほど実感していた。ハルのこの言葉を、デイモルフォセカも知っているのだろうか。

「ハルは瑞樹のこと何か言ってた？」

デイモルフォセカが訊ねた。

「……君は何も知らないの？」

「表に出ている人格が何をしているか、何をしていたかわからないの。その部分だけ記憶がないから……表に出ていない人格同士で意思疎通を図っていたのは瑞樹とハルだけなんだと思う。瑞樹はハルのやり方をよく知っているみたいだわ。植物たちを見ていると良

く分かるの。私に瑞樹やハルの存在を覚えてくれたのも植物たちだしね……」

デイモルフオセカはちよっぴり寂しそうに笑った。

「そう……なのか」

カナメは少しほっとした様子で言った。

「ねえ、カナメ、植物たちのこのざわめきがあなたには聞こえる？」
デイモルフオセカはそっと目を閉じた。

「いや、聞こえないよ」

カナメは怪訝そうに否定した。

「あなたには聞こえないんだ。植物たちもハルを求めている、探している……瑞樹に同調して手を伸ばしてる。ハルは瑞樹のことなんて言ったの？ このままでいいって言ってないよね？」

デイモルフオセカは悲しげにカナメと植物たちを見つめた。

植物たちもデイモルフオセカに知られたくないのか、ただ単に知らないのか、ハルが言った事に関しては何も触れようとしない。

「……いや、特に何も……」

とても彼女には言えなかった。

瑞樹を元に戻して、その結果デイモルフオセカが消滅してしまうだろうとハルが言ったなんてどうして言える？ やっと再会できたのに……カナメは唇を噛みしめる。

「大丈夫だよ。僕がなんとかするから」

カナメはデイモルフオセカを抱きしめた。

ハル化する瑞樹の一日は大体こんな感じだ。人工ジタンが点灯されると共に起きだして、森を歩き回る。木の実を採り、種を植え、湖で泳ぎ、害虫を捕まえては変異させる。管理棟にはほとんど近寄らず、ほぼ自給自足状態だ。

時々心配して見に来るミントと会話をし、コブを見かけると逃げ

隠れる。コブが始終あれは駄目、それはしてはいけないと注意しているうちにそうするようになってしまったらしい。そして人工ジタンが消灯されると森の中で眠る。

「ほとんど獣の生活だな」

カナメは一日付き合ってあきれ果てる。

——年頃の女の子がこんなことでいいんだろうか。

「いいわけないでしょ？」

デイモルフオセカになった瑞樹があきれて言う。

「びつくりするわよ。管理棟で眠っていたつもりが、いつのまにか薄暗い森の中で眠ってるの。瑞樹がいつのまにか交替して森に戻っちゃうの。建物の中よりも森の中の方がエネルギーが取り込みやすいのは私にも分かるんだけど……」

彼女は苦笑した。

「森からエネルギーを摂ったらエリアEの酸素供給量が落ちるんじゃないのか？」

「植物からエネルギーを摂ってるわけじゃないみたいね。私は良く分からないんだけど、空気中からでも地面からでもエネルギーを取り込んでいるみたい」

「君にもできるの？」

「残念ながら、私にはその方法がわからない。瑞樹みたいにハルと接してなかったから……」

カナメは次の日、嫌がる瑞樹をエリアEから連れ出した。エリアEを出ていれば、ハル化する為のエネルギーを取り込めないのかどうかを知りたかった。

「どこに行ってみたい？エリアE以外で行きたい所に連れて行つてあげるよ」

「別にどこにも行きたくないよ。エリアEにいたい。何でエリアE以外にいきなきゃなんないの？」

「君はナンディーに来てからほかの場所に行ったことがないだろ？案内してあげようかと思ってね」

「エリアGも医療センターも行ったことがあるよ」

「それ以外で行ったことない所があるだろ？火星が見えるエリアに行ってみる？」

カナメは忍耐強く誘う。

「火星って何？」

「太陽系の第四惑星だよ。今火星の軌道上にいるんだ。もう少しでアグニシテイの真上を通過する時間だ」

なんで地球人に火星の説明をしなきゃならないかと思いながらもカナメは辛抱強く説明する。

「アグニシテイ？」

「そう。見てみる？」

瑞樹が頷いたのでカナメはホッとしてエリアHに連れて行った。

医療センター後方の隅っこに外を見ることができ展望デッキが敷設されていた。眼下に赤い惑星が見える。瑞樹は長い間、展望デッキにある望遠鏡に張り付いて火星を見ていた。

「アグニシテイは地下都市だから見ることはできないけど、離発着エリアには目印があるから見ればわかると思うよ」

それは大きな鳥が羽を広げているように描かれていた。

「あそこの上に船が降りるの？」

「船が着陸する時にはあの鳥の中心から扉が開くみたいに開口するんだ、そこから船ごと地下の離発着場に降りる」

「ふーん、地表に降りないの？」

「降りても構わないけどね。地表温度が低すぎるし大気もほとんどない。そのくせ稀に砂嵐が起きる。地表に降りるメリットが何もないんだ」

「ふーん、不便だね。ハルみたいに青い水の惑星を見つけたらいいのに」

瑞樹は不思議そうに呟いた。

「……そういうのもあるんだけど……ね」
カナメはたじろぐ。

青い水の惑星は古代ハルのイメージだ、瑞樹の中のその記憶はデ
イモルフォセカのものなんだろうか、それともハルが瑞樹に植え付
けたのだろうか。前者ならばデイモルフォセカと瑞樹の境界が曖昧
になっているのかもしれないと不安になるし、後者ならばハルの切
ない気持が痛々しかった。

「地球とかいう惑星のこと？」

「ああ」

——地球とかいう惑星……。

カナメは愕然とする。瑞樹の中でハルは地球は一体どういう惑星
として記憶されているのだろうか。不安になる。

「あの惑星ではミントたちファームの民は生きられないって聞いた
よ。そんな惑星じゃ意味がないんじゃない？」

そんな惑星と言った瑞樹に胸が痛む。言わせているのは僕なのか
もしれない、カナメは憂鬱になる。

「豊かな惑星だよ、地球は……水が豊かで、たくさんの生き物を育
んでいる」

ハル人である自分が地球の弁護を地球人にしなければならない矛
盾に違和感と混乱を感じながら、カナメは地球の説明を続けた。

「山は緑で覆われていて雨をろ過し浄水し貯水する、その水が川を
作る。川は海につながっている。川や海には魚や様々な生き物がい
て、風が吹いて、雨が降って、太陽が照らして、虹がかかる……」

説明しながらカナメは項垂れていく。

これはハルだ。僕たちの記憶の中に刻み付けられた美しかったこ
ろのハルの記憶。そして地球人である瑞樹がハルを懐かしみ、ハル

人である僕が地球を弁護するこの捻じれた現実。戻さなくてはならない、ハルの言葉がカナメに重くのしかかる。

「ねえ、アグニシティには何があるの？」

瑞樹の声にカナメはふと我に返った。

「え？ 何って…… ことほとんど同じだよ。エリアAからエリアHまでそろっている。ここよりは規模が大きいよ」

「エリアEもあるんだね？」

瑞樹の顔がぱつと輝く。

「ある…… けど」

エリアEに拘る瑞樹に不安が募る。

「ね、連れて行ってよ。アグニシティへ」

瑞樹は瞳を輝かせてカナメを覗き込む。

アグニシティへ行きたがる瑞樹を説き伏せてエリアEに連れ戻した。デイモルフオセラを失う以外の方法で瑞樹を戻す糸口を見つけれないまま、カナメはラークスパーに呼び出された。

*

*

*

力が欲しいと思う。重いものを運び、すばやく走り、高く飛ぶ、あらゆることを理解できて、人の心を動かす、人を癒す、力、力、力……。でも、本当に必要なのは、昨日を受け入れ、今日前進し、明日をより良く拓いてゆける力…… それだけなのかもしれない

第15話 奈落の底の記憶

エリアGは、瑞樹にとって通い慣れた場所だ。

エリアEに連れ戻された後、瑞樹はエリアGに現れた。ニシキギは小型シャトルの定期点検と整備を行っている。

「何をしに来た？ 俺はもう用済みなんだろう？」

ニシキギは、瑞樹を眼の端で捉えながらしかめっ面で問いかけた。「私が来なくなって寂しかった？」

瑞樹はニシキギを覗き込む。

——この人の瞳は青くて、相変わらず……心惹かれる。どうしてもんだらう……。

ここに来たのは単なる思いつきだ。

『おい、今日はもう終わりだ。帰るぞ』と不機嫌そうに言う声、ぶっきらぼうに瑞樹に伸ばされた手。曖昧な記憶の中で、彼がかつて瑞樹にぎこちなく見せてくれた優しさ。それだけを頼りに交渉してきた。

彼の優しさを利用しようとしていることは自覚している。それでも、どうしてもアグニシティに行きたかった。

「馬鹿馬鹿しい。いなくなっでせいせいしてるさ」

ニシキギは視線をそむけて肩を竦めた。

「相変わらず人けがないね、ここ」

瑞樹はニシキギの脇に回りこむ。

「人なら奥にたくさんいる。こんな小物は俺一人で十分だ」

ニシキギは無然とする。

「ねえ、私をアグニシティへ連れて行ってくれない？」

瑞樹はニシキギをにこやかに覗き込んだ。ニシキギは瑞樹を胡散臭そうに見つめ返す。

「なんで俺がお前をアグニシティに連れて行かなきゃならないんだ？」

「なんででも」

瑞樹は口元だけで笑ってみせる。

「話にならん」

ニシキギは再び作業を続ける。

「ねえ、白いソーマの種って厳しく管理されているんだってね」

瑞樹はニシキギを覗き込む。

「許可なしに持ち出すことはできないし、数も常に管理されているとか……あなたが持っている分はもう申告したの？ ハルからもらった分。それとももう使ってしまった？」

瑞樹は無邪気そうにニシキギの目を見つめる。

「そんなことを話したら、面倒なことになるのはおまえの方だぞ」

ニシキギは瑞樹を睨みつけた。

「使っていないの？ あれ勝手に使ったら法に触れるの？ でも、まだ持ってるんだよね？」

カマをかけてみる。何が法に触れるかなんて瑞樹は何も知らない。

「……」

ニシキギは作業をやめて立ち上がった。

「それとも、いつ使おうかって考え中？」

瑞樹は悪戯っぽくニシキギを見上げる。

「使つてるところを見つかって、どうやって手に入れたか説明するのは大変なんじゃないのかなあ？ あ、まさか、黒い種に変えて、また私に白い種たくさん作らせようとか思っていないよね？」

自分で思いつく限りの脅しの種を蒔く。優しさを利用し、脅しまでかける。やり方が最低なのは分かっていた。それでも、瑞樹はある意味必死だったのだ。

「何が目的だ？」

「え？ 凶星？」

「的外れもいいとこだ。面倒なことになるのはおまえの方だと言ってるだろ。目的は？」

「最初に言ったつもりだったんだけどな……私をアグニシティに連れて行って欲しいんだよ。何も難しいことじゃないでしょ？」

瑞樹は無邪気に微笑んでみせた。

「で？　いつ行きたいんだ？」

ニシキギは溜息をつく。

「今すぐ。当然！」

瑞樹はニツと笑った。

* * *

火星の軌道からアグニシティまで、小型シャトルを使うと小一時間ほどで到着できる。ニシキギは、シャトルを自動操縦に切り替えるまで一言も口をきかなかった。後部座席で瑞樹は大人しくしている。

「アグニシティで何をするつもりだ？」

ナンディーとの交信を終了した後、ニシキギが振り返った。

「さて、何をするつもりでしょう？」

瑞樹はおどけてみせる。

「何もないぜ」

「エリアEがあるんでしょ？」

「エリアEで何をする？」

ニシキギは操縦席を立てて飲み物を用意し始めた。

「火星にすぐに降らないの？」

「タイミングが悪かったな。ナンディーはアグニシティの真裏だった。しばらくは軌道上で待機だ」

ニシキギは瑞樹にも飲み物を渡して、自分でも飲み始める。
小型シャトルでは人工重力が働かない。受け取ったチューブ状の
飲み物から手を放すと、その辺に勝手に浮かんでいて面白い。

瑞樹は少しだけ飲み込むとチューブを空中でクルクル回して遊んで
いた。

「……ハルとか言うやつや、デイモルフオセカは出てこないのか？」
ニシキギは探るように低い声で話しかけた。

「デイモルフオセカ？ ハニーのこと？ 彼女はそううち出てくる
と思うよ。私が明け渡したらね」

この人にハニーを会わせるのは危険だ。心の中で何かが警告する。
瑞樹はニシキギを鋭く一瞥した。

「ハルは？」

「ハルは……いなくなった」

一瞬、瑞樹は泣きそうな顔になる。

「いなくなった？ あいつ、何者だったんだ？」

「ハルは……ハルだよ。それ以外の何者でもない」

さっぱり分からないと言うようにニシキギは肩を竦めた。

少しずつ、瑞樹は意識がぼんやりしてくるのを感じていた。眠り
の沼に引きずり込まれるように、意識が遠くなる。

「……あなた、何か入れた？」

瑞樹は、ぼんやりした意識の中でニシキギを睨みつける。

「何の事かな？」

ニシキギは意味ありげににやりと笑った。

瑞樹はずぶずぶと沈んでいくような眠気に必死で耐えていたが、
ほどなく意識を手放した。

「……何のつもりなの？」

瑞樹が意識を失うと同時に、目覚めたのはデイモルフオセカ人格
だった。弱めの睡眠導入剤で、ほんの少量摂取しただけだったので、

人格交代によってすぐに意識を回復できたらしい。ニシキギを睨みつけたデイモルフオセカの視線は、次の瞬間小型シャトルの室内をさまよい、瞬間に激しく動揺する。

「ここはどこ？ あなたは私をどこに連れていくつもりなの？」

「あんたはデイモルフオセカなのか？」

ニシキギは慎重に確認する。デイモルフオセカはその名に反応した。

「どうして瑞樹はあなたと一緒にいるの？」

「瑞樹に脅されて、あんたをアグニシテイに連れていく途中だ。もう一人の人格が何をしているか知らないのか？」

デイモルフオセカは首を横に振って否定した。

「瑞樹はアグニシテイで何をするつもりなの？」

「さあ、訊いたけど答えてくれなかったな」

ニシキギは高揚していた。十歳の時からずっと追い続けていた人物が目の前にいる。

ニシキギの脳裏に、アール・ダーのガイアエクスプレスのプラットフォームですれ違ったあの日の記憶が呼び覚まされる。

「今からナンディーに帰ることはできますか？」

デイモルフオセカは、ニシキギの様子には気づく様子もなく問いかけた。

「……帰ることはできるけど帰すつもりはない。瑞樹が出てくれば、また的外れな話で俺を脅すだろうよ。二度手間だ」

「では、カナメに連絡をとらせてください」

「配偶者に助けを求めるわけだ」

ニシキギは意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「いけませんか？」

デイモルフオセカはニシキギを睨みつけた。

「……あんたさあ、デイモルフオセカ・オーランティアかなんだろ？」

「……違うことは証明されたんでしょう？」

デイルフォセカは用心深くニシギを見つめた。

「アンドロイドよりもハルが一枚上手だったと……そういうことなんじゃないのか？」

「私は本当にデイルフォセカ・シヌアータだったんです。結婚する前は……」

——この人はハルがここにいたことを知ってる……危険だ。

「それはアール・ダーに行く前の名前だろ」ニシギは続けた。

「シヌアータ、オーランティアカそしてグラブラ……すべて同一人物だ」

ニシギはデイルフォセカを見つめた。

「……違います」

デイルフォセカはニシギから目をそらした。

この人はアール・ダーのことも何か知っているのかもしれない。

アール・ダー村で育ったデイルフォセカ・オーランティアカのことを……。警戒音が心で鳴り響く。

声が震えていなかっただろうか、鼓動が速くなる。

「違うさ。俺はあんたを知ってる、あんたがガイアエクスプレスでアール・ダーにやってきた時から知ってるんだ」

デイルフォセカは、はっと顔をあげてニシギを見つめた。

「アール・ダーに……いたの？」

——森の民ではない彼が何故？ 旅行者？ もしかして、彼も森の民なのだろうか。

「俺は十歳までアール・ダーで育った。森の民の両親の間に生まれたからな。なのに俺は森の民じゃなかった。あんたが乗ってきたガイアエクスプレスに乗って、俺は地下都市に連れて行かれた。あんたとはガイアエクスプレスのホームですれ違ったんだ。あんたは覚えていないだろうな。まだ小さかったし……ひどく泣いていた」

デイモルフオセカは驚きのあまり何を言っているのか、言っているのか思いつけなくて凍りつく。

デイモルフオセカは、三歳の時に森の民の力を発症してアール・ダー村に移送された。

「……それでも、あんたは俺の顔に見覚えがあるはずなんだがな」
そう言われて、デイモルフオセカはニシギギの顔を注意深く見つけた。次の瞬間、ゆるやかに昔の記憶が蘇る。

最初から、私はこの人が怖かった。どうしても分らなかったけど、今やっとわかった。

——似ているのだ。彼に……。

本能的に感じる後ろめたさで怖かったのだと突然気づいて愕然とする。

「……シーカス？」

「やつと思い出したか？俺と弟は良く似ていると言われていたんだがな……それとも、もう弟のことなんか忘れちゃったか？」

「弟……」

呆然と呟いて、次の瞬間はつと我に返った。

「私……ごめんなさい。でも、シーカスにとっても自分にとっても納得のできない結婚だと……そう思っていて……それで……」

——逃げ出したのだ。地下都市へ……。

デイモルフオセカは俯いていた顔を突然上げた。

「カナメは何も関係ないんです……私の勝手な行動に巻き込まれただけで……だから……」

カナメを巻き込むわけにはいかない。カナメを自分のせいで危険にさらすこと、それをデイモルフオセカは最も恐れていた。

「誤解の無いように言っておくが、俺は別にカナメ・グラブラをどうこうしようなんて思っていないぜ。あんたが森の民じゃなかったとアンドロイドたちが断定した時点でやつはもう安全圏さ。良かったな」

ニシキギは面白くなさそうに肩を竦めた。

「じゃあ、何故今さらこんな話を？」

——私はどうなるんだろうか。

ニシキギの意図が分からない。それでも、カナメが巻き込まれないならそれでいい。デイモルフオセカは自分に言い聞かせて落ち着こうと努めた。

「ただ本当のことを知りただけだ。そして、あんたがデイモルフオセカなのならば、現実を知っていて欲しいと思った。それだけだ。あんたの名前は、地下都市に向かうガイアエクスプレスの車掌に聞いた。それ以来俺はずっとあんたの情報を集めていた」

「……何のために？ 現実って？」

デイモルフオセカは恐ろしくなる。なにか途方もなく悪いことに巻き込まれている気がする。

「俺はあんたが許せなかった」

ニシキギは吐き捨てるように言った。

デイモルフオセカは息をのむ。

——ワタシヲ ユルセナカッタ？

「俺はアール・ダー村が好きだった。光が溢れていて、緑で溢れていて、家族がいて、友人がいて……それが、森の民の能力がないからと地下都市ハデスに引きずり降ろされた。あんたを恨んでいたのは逆恨みだ、自分でも分かっていた。それでも光の中に解放されたあんたの代わりに俺は闇の中に引きずり込まれたんだとそう思わずにはいらなかった」

「それって……」

それは確かに、間違いなく、逆恨みだ、デイモルフオセカは呆然とする。

「地下都市の人間がアール・ダーの情報を手に入れるのは容易いことだった。逆は全くできなかったのにな。皮肉なことだ。俺はあん

たに関するあらゆる情報を引き出した。アール・ダーで起こった出来事は、些細なものでも、かなりの量が中央政府に監視されてた。そのことをあんた知ってたか？」

デイモルフオセカは首を横に振る。

「あんたが力をコントロールできずに、学校の先生にしょっちゅう居残りをさせられていたことも、アリッサムと比較されていじけていたことも全部知ってる」

ニシキギは意地悪そうに嗤った。

「……別にいじけてなんていませんでしたよ」

デイモルフオセカは力なく否定する。

双子の姉だったアリッサムが強い力の使い手だったのも、力をコントロールできないデイモルフオセカが、しょっちゅう先生に叱られていたのも事実ではあった。

本当の姉妹でないと知ったのはずっと後、逃げ込んだ地下都市でのことだったから、双子なのに何故こんなに力の差があるのかといつも不思議に思っていたのも本当のことだけだ。

「あんたがアール・ダーで楽しんでいればムカついたし、うまく行っていなければいい気味だと思ってた」

「……それって、すごい性格悪くないですか？」

デイモルフオセカは腹立たしくて泣きたくなくなる。

「悪いさ、自分でも嫌になった。それでも薄暗がりの地下都市で完璧に周囲から浮いていた俺にとって、あんたは格好の気晴らしだった。いきなり十歳から地下都市の生活をさせられるんだぜ。アール・ダーとは何から何まで違う、家族もいない、友人もなかなかできなかった。天災だ。俺だけに降った天災だと俺は思っていた」

「私にとっても天災だったと思いますよ。小さいうちに親から引き離されて……」

無駄だろうとは思いつつ反論してみる。

「それでもあんたには養父母と姉弟がいた。引き離されたことだっ

て覚えていなかったんじゃないのか？」

「それは……」

確かに、地下都市で記憶採取装置を使われるまでオーランティア
力が自分の本当の家族だと思っていた。

「そのあんたが、シーカスと結婚すると聞いて俺は驚いたよ。シー
カスは俺と違って強い力を持った森の民で性格も良い、まあ顔は俺
の方がちょっといいかな？ とにかく、あんたみたいなやつと結婚
なんてさせられるかって最高に腹が立った」

「結婚してませんよ、ご希望どおり」

デイモルフオセカは力なく呟く。

「あんたが結婚式の前夜に逃げ出したと聞いた時、俺はピンときた。
あんたは地下都市に逃げて来るってな。それから何日もガイアエク
スプレスが到着する時間にはハデス駅で……あんたを待ってた」

ニシキギに睨みつけられてデイモルフオセカは首を竦める。

「迎えが来てたなんて知らなかったわ。地下都市では随分ひどい目
に遭ったけど、でも……あなたに会ってたら、私はもっとひどい目
に遭ってたんでしょね？」

「……俺にもわからない。あんたに会ったらどうするかなんて何も
考えていなかった。会えていたら俺も途方に暮れていただろうな」

「お互い会わなくて良かったわね」

デイモルフオセカはにっこり笑う。

「あんたは……考えたことなんてなかったんだろうな、あんたがア
ール・ダー村を出た後にシーカスがどうなったかなんて……」

「どうって……ネモフィラと幸せになったんじゃないの？ だって、
私はその為に……」

「おめでたいな。世の中そんなに単純だと思うか？ ネモフィラと
結婚できたのなら既にしていただろうよ。自分の結婚式の前日に花
嫁が逃げ出す。当然弟は周囲に冷たい目で見られたことだろう。ネ
モフィラだって、恋人の結婚式がなくなりましたって言われて、そ
うですかって、そのまま弟と付き合えたと思うか？」

「それは……」

自分のことで頭がいっぱいだったのは確かだった。政府と親が勝手に決めたことだ、結婚なんてできないと何の考えもなしに逃げ出した。

「二人が付きあえなくなつて、しばらくしてネモフィラは死んだと聞いている。行方不明になったという噂もあるな。元々体の弱い人だったらしいし、真相は分からない。シーカスも色々責任を感じたんだろう、ハル脱出まで独身を通して最期はソーマに力を吸い取られて分解された。シーカスがマルチタイプだったのくらいは知っていたか？ 再生できないんだ」

デイモルフオセカは瞠目する。

——知らなかった。何も知らなかった。

自分のとつた行動が、いつのまにか周囲の人を傷つけていた。オーランティアカの家族だつて肩身の狭い思いをしたに違いないのだ。

——じゃあ、私は……どうすれば良かったの？

こんなに時間も場所も隔たったのに、傷つけ、心配させた人がいる、もつといたのだ、その当時はもつと……。

——私はそんなにひどいことをしていたのだろうか。

自覚が全くなかつたわけじゃないけど、突き付けられた現実という言葉を失う。

——そんなつもりじゃなかった。そんなつもりじゃ……。

デイモルフオセカは堪えきれずに泣きだした。涙が目の端で丸い水滴を結んで浮遊する。

「私……何も知らなかった。シーカスとネモフィラが別れたことも、ネモフィラが死んだことも……シーカスが再生されないタイプだったことも……何も知らなかった」

体中ががくがく震えてくる。そんなことになるなんて、これっぽ

「うちも考えていなかった。」

「あんたが地下都市で、誰かさんの手厚い庇護の下にあった時、弟は孤独な人生を送っていたというわけだ」

「……ごめんなさい、ごめんなさい、私そんなつもりじゃ……」

デイモルフオセカはニシキギが怖くて顔をあげることができない。涙があちこちに散乱する。

ニシキギはデイモルフオセカを見下ろしながら小さく溜息をついた。

——こんなに追い詰めるつもりじゃなかった。

でも、どうしてだろう自分を止められない。弟のことだってそれは弟が選んだ人生なのに……。

——そもそも俺は弟思いの兄じゃなかった。

力がない自分と並み以上の力を持つ弟。ニシキギだって親の見ていないところで随分いじめたのだ。それが後ろめたくて、森の民のタイプオリジナルを再生する方法を開発しようと躍起になっていたのかもしれない。

「泣くな、鬱陶しい」

予想以上の反応に逆にイライラする。

「ごめんなさい、私はどうすればいい？ シーカスとネモフィラはもう再生できないの？ 方法はないの？」

「再生してどうする？ 相変わらず単純なやつだな。それにシーカスもネモフィラも遺伝子情報は別の船に乗ってた。俺が森の民の家族と同じ船に乗せてもらええると思うか？」

「……じゃあ、どうすればいい？ 許してもらおうなんて思わないけれど……何か私にできることがあったら言って……ください」

ようやくの思いで勇気を振り絞ると、デイモルフオセカは潤んだ瞳でニシキギを見上げた。

ニシキギはたじろぐ。真実を知りたかったということに嘘はなか

ったが、半分は瑞樹への鬱憤を晴らす為に持ち出した昔話だ。何かをしてもらおうと思って聞かせた訳じゃない、もう済んだことだと言えはそれで終わりのはずだった……それなのに、どんどん残酷な気持ちが高まっていく。

「……何でもするという意味か？」

ニシギは意地悪く微笑む。

「……私にできることならば……」

デイルフォセカは怯えた目で見つめ返した。

「じゃあ、ソーマの黒い種を白くしてもらったのはどうだ？」

デイルフォセカは目を見開いた。

「……ソーマの種を持っているの？」

顔色が蒼白になっていく。

「ああ、持っている」

ニシギは口だけで笑った。

「……」

デイルフォセカは黒いソーマの種を一度だけその掌に乗せたことがあった。ハルの地下都市ハデスでのことだ。あの時は危ないところでカナメに助けられた。

力を吸い取られてゆく時のあの激しい苦痛を今でもはつきりと思い出すことができる。激痛とともに冷たい塊が体の中心で大きくなっていった、しまいには息さえできなくなる。ソーマは恐ろしい種だ。だけど……森の民はすべてそうされたのだ。シーカスも……。「……分かったわ。でも、この体は瑞樹のものだわ。種を乗せて十秒後にはとってもらえますか？ それくらい乗せれば白い種が一つか二つ採れると思います。それ以上乗せると……し、死んでしまうこともあるので……」

声が惨めなくらい震えた。

「分かってる」

ニシギはポケットを探りながらデイルフォセカの前に近づい

た。デイモルフオセカは震える左手を差し出した。その掌の上に握ったニシキギの右手の拳が近づくと、デイモルフオセカは恐ろしさに息を詰め目をつぶった。

ニシキギはしばらく、そんな様子のデイモルフオセカを息を詰めて見つめていたが、ふっと小さく笑うと左手でデイモルフオセカの冷たく蒼白になってしまった頬を撫でた。デイモルフオセカはびくりと体を震わせる。

「怖いかな？」

デイモルフオセカは怯えきった瞳でニシキギを見上げた。

「許してやろうかな？」

ニシキギの問いかけにデイモルフオセカは小刻みに震えながら小さく頷く。

「……キスしろよ」

ニシキギの言葉にデイモルフオセカは目を見開く。

「……何故？」

デイモルフオセカは困惑する。

「弟の代りだ。弟と結婚するはずだったんだろ？」

「……できないわ」

困惑しきった表情でデイモルフオセカは言った。

「弟に対する謝罪の気持ちなんか、その程度ということか……」
不思議なことにニシキギは傷ついているように見えた。

「シーカスが愛しているのはネモフィラだった。私が入り込む余地なんてなかった。それに私にとってシーカスはお兄さんみたいな存在だった。例えばシーカスが今ここにいたとしても彼は私を愛さないし、キスして欲しいなんて思わないと思う。彼はそんなことを望まないわ！」

混乱して早口でまくしたてる。

「シーカスがあんたを愛さないなんて誰にも分かるはずがない、やつはここにいないんだからな。分かっているのはあんたが俺なんか

とキスするよりも死んだ方がましだと思っっているということだけだ」

「それは……違う……」

「何が違う？」

「それは……」

デイモルフオセカは再び涙をまき散らし始める。疲労した心がガクガクと震えるようだ。そんなことができる自分ならば、シーカスと偽りの愛を誓うことだってできたはずなのだ。

次の瞬間デイモルフオセカは意識が途轍もなく強い力で落下させられるのを感じた。意識がくると反転する。

「ちよつと！ あんた！ なんでハニーをこんなに泣かせてんの？ いい加減にしないとただじゃ済まないよ！」

涙に濡れていた瞳に強い光が戻る。虚を突かれたように一瞬ニシキギはぽかんとしているように見えたが、すぐに意地悪そうに笑った。

「家主の登場ってわけだ」

「ハニーをここまで追い詰める権利があなたにあるの？」

瑞樹は自分の周囲に広がる涙をかき集めながらニシキギを睨みつけた。

「……ハルで俺の弟にした酷い仕打ちを許してほしいと言うから、キスしたら許してやるって言ったのに泣き出したんだ。酷いのはそっちだ」

ニシキギはしかめっ面で言った。

「……って、なんであんたなんかとキスしなきゃなんない訳？」

瑞樹は耳まで真っ赤になる。

「心配するな。デイモルフオセカは俺の弟との結婚が嫌で命を張ってまで逃げ出した女だぜ、そんなに気安く俺なんかに口づけするわけないだろ？ そう言えば、お前が出てくると思ったんだ。それに……ここまで連れてきてやった俺に感謝のキスくらいしなきゃならないのは、むしろお前の方じゃないか？」

真っ赤になっている瑞樹をニヤニヤ見つめながらニシキギは言った。突然、操縦席の方から呼音がしているのに気づく。

「なに？」

瑞樹はびっくりと小さく飛び上がった。

「アグニシティからの着陸許可だ、座席に座って安全ベルトを装着しておけ」

ニシキギは肩を竦めると操縦席に戻った。

座席に座って瑞樹は深い溜息をついた。

——私の中にいるデイルフォセカという女性……一体どういう人なんだろう。

ニシキギの弟との結婚を命がけで蹴ったなんて……よっぽど嫌だったんだろうと推測する。

——あ、もしかしたらお兄さんが厭で逃げたしたのかも……。

ここまで考えると、再び盛大に溜息をついた。

*

*

*

あまねく照らす太陽の光は地球上に生命をもたらした。そのことを太陽は知っているだろうか。答えは否だろう。人も同じだ。何気なくとった行動や発した言葉が、周りにどのような影響を与えたかなんてすべてを知ることはいらない。良い影響も悪い影響も及ぼしているんだろうと思う。太陽が温かい光と同時に有害な紫外線をももたらすように

第16話 今は亡き惑星（ほし）の光跡（1）

ニシキギと瑞樹を乗せたシャトルは、ナスカの地上絵にあるような鳥の模様が開口した侵入口から火星の地下へと進んだ。アグニシテイの中は薄暗がりで、ナンディーの中とよく似ている。

「で？ どうするつもりだ？」

ニシキギは完全に停止したシャトルの操縦席から振り返って問う。瑞樹は慌てたようにニシキギから顔をそらした。

——やだ。何でだろう……ニシキギの顔を見ると心臓がドキドキする。

「降ろしてくれたらそれでいい。ナンディーに戻るなり、ここに残るなり好きなようにしてよ」

瑞樹は努めて平静を装ってそっけなく言った。

「俺がどうするかなんて訊いていない。お前がどうするかだ」

「あなたには関係ない」

瑞樹は接岸したタラップをさっさと一人降りていく。

アグニシテイは想像していたよりも広くて陰気で鉄錆の匂いがする。

タラップを降りきった所に立っていた人に、エリアEの場所を聞くと瑞樹はニシキギを振り返りもせず立ち去った。

ニシキギは軽く溜息をつくと自らもタラップを降りた。

アグニシテイに降りたのは二度目だが、前回よりもかなり作業が進んでいるのがよくわかる。来たついでにあちこち見て回るかと考えていたところに声がかかった。

「遅かったね」

声が見る方を見るとカナメが立っている。

「何であんたがここにいる？」

ニシキギは苦虫でも噛み潰したように顔をしかめた。

「ラークスパーに頼まれて機材を運んだんだ」

カナメはニシギギを見て微笑んだ。

「なかなか着陸許可が出なかったのはあんたのせいかな？」

ニシギギは睨みつけた。

「ラークスパーが急いで届けて欲しいと言うものだから優先させてもらったよ。でも、そのお陰で色々情報が得られたんじゃないかな？ 僕も聞かせてもらったけどね。これは言うておかないとフェアじゃないから」

カナメから笑みが引いた。

「……盗聴してるってわけか」

「彼女は地球人だ。野放しにはできないだろう？」

「本当にそれが理由なのか？」

ニシギギは嫌味っぽく笑う。

「君の弟さんは気の毒だったと思うけど……デイモルフオセカのことをあまり悪く思わないでやってくれないか。彼女は自分のことだけを考えて逃げ出したわけじゃないんだ。それに……君が思っているほど、彼女は地下都市で安穩と暮らしていたわけでもない。僕は彼女をそれ程守ってやれなかったからね」

カナメは顔を歪めた。

「そんなことを俺にしゃべって無事で済むと思っているのか？」

ニシギギは冷ややかな目でカナメを睨みつけた。

「無事で済ませようなんて思っていないさ。無事で行けるところまでは行こうと思っっているけどね」

カナメは肩を竦める。

「言っとくがな、あれはデイモルフオセカじゃない。ミスキ・ヒュウガだ」

ニシギギは吐き捨てるように言った。

「……そうだね」

カナメは眉間に皺を寄せる。

わかっているのに、人に言われるとそれを否定したくなるのはど

うしてだろう。でも、それでも、あの体の中にはディモルフオセカも存在しているのだ、今は……。

「あいつがどこに行つたのか知ってるんだらう？」

「エリアEだよ。それ以外に彼女が行くところがあると思うかい？」

* * *

アグニシテイのエリアEは広大な草原になっていた。ナンディーの森も広いと思っていたが、アグニシテイの草原はその五倍以上はあるそうだ。

その広い草原のここに、ハルの気配があつた。

空気の中に草の上に草原を微かに吹きわたる風の中にハルの存在を確認する。

「……ハル」

初めは呟くように、

「ハル？」

次にはつきりと、

「ハールー」

そして声を限りに呼んでみる。声が遠くの金属の壁に跳ね返って木霊する。作業中のファームの民達が顔をあげてこっちを見るのが見えた。

瑞樹はエリアEの真ん中に立つて途方に暮れる。

ここに来ればハルに会えると……信じていた。

「どうかしたのか？」

ファームの民ではないごつい感じの男の人が声をかけてきた。ほとんど丸刈りにした濃い茶の髪に明るい茶色の瞳をしている。

「……いえ」

瑞樹はさらに途方に暮れる。

どうかしたわけじゃないのに、涙が止まらなかった。

あと少し手を伸ばせば支柱に掴まれると思って思い切り伸ばした手の先に、掴まるべきものが何もなかったとわかった時のこの気持ちは、蔓性つるせいの植物にしかわかってもらえないのじゃないかと思う。

声をかけてはみたものの、理由も言わずにただ泣き続ける瑞樹にアオギリは困惑した。ファームの民ではないその女の子は、今ナンディーから来たばかりだという。胸元にかけられているターコイズの玉に目がとまった。

「そのネックレスはどうしたんだ？」

ごつい顔が最大限優しく見えるように微笑んで、アオギリは話しかけた。

「カナメからもらいました」

涙を拭いながら瑞樹は言う。

「やっぱりそうか！ それはここで俺が見つけたターコイズだな。俺もそれと似たような石を持ってるぜ」

アオギリはそういうと彼の埃っぽい服のポケットから青い玉を取り出して見せた。

「あれ？ カナメさんに渡したのよかよっぽどこっちの方がハルに似てると思ってたけど……さすがカナメさんだなー」

アオギリが取り出して見せてくれた球は、青色が薄くて雲がたくさん浮いていて、雨模様の惑星に見える。

「……ハル」

瑞樹は再び涙ぐむ。

「そうだよな、ハルみたいだよな。カナメさんは地球みたいだって言っただけ、俺たちにとっちゃあ、これはハルだ。俺たちの故郷だ」
アオギリは晴れ晴れと笑った。

「故郷……」

瑞樹はさらに混乱する。

自分は地球人なのだ。カナメはそう言った。この玉は地球なのだとそう言った。

「なあに、今はこのアグニシティだのセレーネシティだのって街を作ってるが、そのうち地球にも造るさ。あそこまでハルに似てるんだ、俺達が住めねえわけがねえ。今だって、地球に地下都市を造っちまえば住めるんだ。俺に頼めばすぐにでもできるんだがなあ」

アオギリは物足りなさそうに言った。

「オジサンは街を造るのが仕事なの？」

瑞樹は目を見張って言った。

「おい、オジサンってのはやめろよ。俺はアオギリってんだ。あんたは？」

「瑞樹」

「瑞樹か、あんまり見かけねえ顔だが、こんだけ早く目覚めさせられたんだったらあんたにも何か特技があるんだろ？俺はあんたが言ったとおり街づくりが本業だ」

アオギリは胸を張った。

「目覚める？」

瑞樹はこの世界のことをあまりよく知らない。知っているのはハルとエリアEのことくらいだ。

——やっぱり私は地球人なんだろうか。地球の記憶も無いけど……。

「瑞樹」

後ろから聞き慣れた声がした。

「瑞樹……アグニシティのエリアEに来ても何も無いと言っただろう」

カナメはちよつと怒っているような、困っているような顔でそう言った。

「カナメさん、あのターコイズ、うまいこと加工しましたね。俺の持ってるのがみすばらしく見えちまう」

アオギリは野太い声でガハハと笑った。

「アオギリ、ここの宿泊施設はどうなってる？ 瑞樹みたいのでも
少しくらい滞在できるのかな」

「もちろんでさ、宿泊もできない街造ったって誰も住めねえでしょうが」

アオギリは無然とした様子で腕組みをした。

「じゃあ、少し泊めてもらうよ」そしてカナメは瑞樹に向き直って
言った。

「ハルがここにいないということをその目でしっかり確かめるといい」

「ハルは……ここにいないの？」

瑞樹はカナメを縋るような目で見上げた。

「いない。ハルは君が自分の足できちんと立って生きていけるように
して欲しいと頼んで行った。僕は……君を戻さなくてはならない」
カナメは辛そうに見えた。

「戻す？」

瑞樹は恐ろしそうに呟いた。

「私を地球に戻すの？」

そんな行った記憶もない惑星に一人で戻されるのだろうか。恐怖
で目の前が真っ暗になる。

「いや、その前に元の君に戻さなくてはね。ただ……もう少し待つ
てほしいんだ。僕に時間をくれないか？」

「元の私？」

どうして私は元の自分を失ってしまったのだろうか。ハニーが元
の私ではないんだろうか。ハルはすべてを知っている様子だった。
ハルに聞いておけばよかった。自分のこともハニーのことも、地球
のことも……。

「なんか事情があるみたいだけど……とりあえず居住区のご案内をし
ておきましょうか？」

アオギリが少し困ったような顔で言った。

「ああ、頼むよ」

カナメは小さく笑った。

* * *

それから何日も瑞樹はアグニシティの中をさまよい歩いた。

エリアAからエリアHまで一つ一つ確認していく。基本的にはナンディーと同じだ。しかし、ナンディーは宇宙船なのでコックピットがあるが、アグニシティにはもちろんそんなものはない。

それ以外を除けばほぼ機能的に同じなのだとアオギリが説明してくれた。もう一つ違うところがあった。アグニシティの道路はいくつかのレーンに分かれていて歩かなくても移動できるように動いていた。

「これだけの広さがあるからな。乗物で移動するか道路を動かすか検討したんだが、やはり地下都市で乗物は良くないだろうってことになってな。もちろん特殊な場合の乗り物はあるがね。重力も地球の半分だし、歩いた方が体にもいいだろうってことで……」

アオギリは実に細かいところまで説明してくれるので、会話が途切れて気づまりになることはなかった。もちろんそのせいではないと思うがハルの気配は全く感じられない。その残滓を感じられるのはエリアEだけで、ハル自身は影も形もなかった。

「あんたハルを探してるんだって？ この前カナメさんと話してるところを聞いてしまったんだが……ハルって人を探してるのかい？」

ぼんやりしている瑞樹を心配そうに見ながらアオギリが聞いた。

「……人じゃないと思う……たぶん」

瑞樹はぼんやりとしたまま呟く。

「人じゃない……」

アオギリは困り果てた様子で言った。

「アオギリさんはカナメのことをよく知ってるの？」

「アオギリでいいですよ。カナメさんが呼び捨てで俺にさんつけられると寝覚めが悪いんでね」

「ふうん。カナメってそういう立場の人なんだ」

「瑞樹の方がカナメさんと親しいのかと思ってたが……」

「私は何も知らない、何もわからない、自分が誰なのかもわからない……」

瑞樹は頭を抱え込む。

「おい、大丈夫だ、心配するなよ。カナメさんが元のアンタに戻してくれるって言ってたじゃねーか。大丈夫だ」

アオギリは瑞樹の背中をポンポンと叩くと、そんなによく知ってるわけじゃねーがなとカナメのこと、イブキのこと、フェリシアのこと、コブのことやその他諸々のハルでの出来事を教えてくれた。

アオギリは瑞樹のことを単純な記憶喪失だと思ったらしい。ハルのことを話してくれた後、決まった様に「どうだ？ 何か思い出したか？」と聞いた。アオギリはディモルフオセ力のことは全く知らなかった。

アグニシティのエリアEには高い木がない。木の実をつける樹木を植えたんだがとファームの民達が話しているのを瑞樹は聞いた。木の実をつける木の苗はおろか、食用にはならないが丈夫なことが取り柄の木の苗でさえ、人の背丈ほどの大きさまでしか育たないのだという。何が原因なのかわからないらしい。土壌のせいなのか磁場や重力のせいなのか、さっぱりわからないのだと彼らは言った。

瑞樹は草原の上に寝転がった。大地からエネルギーが体の中に入

り込んでくるのを感じる。この大地は豊かではないが植物を育むエネルギーは持っているようだ。何故木が育たないのか……考えているうちに意識が反転するのを感じた。

ハニーが出てくる……そう思った瞬間に意識が無くなった。

第16話 今は亡き惑星（ほし）の光跡（2）

覚醒したデイモルフオセカ人格は、あたりを見渡してくすりと笑む。目の前には、あたり一面草原が広がっている。

——瑞樹は本当に諦めない性質たちなのだ。

デイモルフオセカは嬉しくなる。

根っこを失くして尚、光を求めて力強く枝を伸ばし、支えをつかみ取ろうとするその力を彼女は心から頼もしいと思う。

そんな彼女だったからこそ自分はここまでこられたのだと確信する。彼女と話してみたいと思う、そして自分から解放してやりたいとも。そうしたら自分はどうなってしまうのだろう。消えてしまうのだろうか。

大切なものを失ってしまうことは、とても辛くて悲しいことだ。それが自分自身の命だったなら耐えられないくらいに辛い。何故なら、すべてを失わなくてはならないからだ。自分が大事にしていたすべてのものを。

それでも……人生には、すべてを失っても守らなくてはならないものが確かにあると思う。少なくともデイモルフオセカにはあった。——私たちの子供、カナメは……地球に無事に着いたのだろうか。

「瑞樹？ 何をしているの？」

真上でカナメの声がした。

相変わらずこの人はタイミングよく現れる。びっくりするくらいのタイミングでいつも私を危機から助け出してくれた。

「ねえ、カナメ、本当は瑞樹を元に戻す方法を知っているんでしょ？」

静かに問いかける。

「デイモルフオセカなんだね」

カナメは僅かに微笑んだ。

「それをするとは私は消えるの？」

デイモルフオセカは真っ直ぐにカナメを見つめた。

「……元に戻る方法はまだわからないよ」

カナメは目をそらす。

「……ねえ、カナメ、あなたはハルで私にたくさん嘘をついたですよ」

デイモルフオセカは膝を抱えて座りこむと遠くを見つめた。

「嘘？……そうだったっけ？」

カナメも横に座る。

「だって、すぐ分かるもの」

デイモルフオセカは小さく笑う。

——カナメが嘘をつく時の癖。言ったあと、必ず目をそらす。

「あなたは私を守る為にたくさん嘘をついてくれた。だから、あなたが嘘をつくとは私はこれは危険なことなんだって理解した。今も

……そうなのね」

「デイム……僕は……」

カナメは悲しそうに顔を歪めると、デイモルフオセカの頭を抱えるようにして抱きしめた。

「瑞樹を元に戻してあげたいの。そして彼女自身の人生をきちんと歩いて行けるようにしてあげてよ」

「……君を失うことになっても？」

カナメは痛みを堪えているように顔を顰めた。

「やつぱりそうなのね。瑞樹に記憶が戻ると私は消えてしまうんだ」

「……わからない。ハルはそうなるだろうって言っていた」

「ねえ、カナメ……私もあなたに内緒にしていたことがあるわ」

デイモルフオセカは寂しそうに微笑んだ。

「ブラキカムにあなたにも言うてはいけない、それは誰にとっても危険なことだからと念を押されて……あなたに一番に話したい事だったのに、一番話してはいけないことだった」

デイモルフオセカはカナメの胸に頭を寄せた。

「それは……子供のこと？」

カナメの言葉にデイモルフオセカは目を見開く。

「どうして知ってるの？」

「ハルから聞いた。その後ブラキカムに確認した。僕たちの子はガルドに乗せられていて、無事どこかに着いて再生されていれば、イブキとフェリシアの養子になっているそうだ。君がガルドに飛んで行った理由が今になってやっとわかったよ」

カナメはデイモルフオセカの髪を撫でた。

「二人の養子に？ そうだったんだ。知らなかった……」

デイモルフオセカは目だけでふわりと笑った。

「あの子……無事に着いたのかな。きつと着いたのよね。だって、ここにハルがいたんだもの。きつと地球に着いていたんだわ」

涙が一筋ひっそりと零れた。

「ハルもそう言っていた」

「だったら、なおさら瑞樹を解放してあげなくちゃ」

「どうしてそうなるんだよ？」

「リレーだから……」

カナメは府に落ちないという顔をした。

「リレーは次の走者にバトンを渡すでしょ？ 次の走者は私じゃない、瑞樹だわ」

「リレーじゃないかもしれないよ。例えば……ただの駆けっこかもしれない。誰が一位になるかなんて誰もわからない」

「そんなこと本気で思っていない癖に……」

デイモルフオセカはクスクス笑った。

「生き物は何でもリレーをしてる。次の世代にバトンを渡すために私はもうバトンを持っていない。もう渡しちゃったんだから」

デイモルフオセカはカナメを真っ直ぐ見つめる。カナメはデイモルフオセカを抱きしめた。

「もう少し……もう少しだけ待ってくれないか？ 時間が欲しいんだ」

カナメの悲しげな声が耳元で響いた。

瑞樹はエリアEで座っている自分に気がついた。すっと意識が戻ってくる感じ。ファームの民が休憩に入っているのが遠くに見える。誰かが傍にいた気配があったが、今は誰もいない。

随分長い夢を見ていたような気がする。こんな風に人格が入れ替わりながら自分とデイモルフォセ力は生きてゆくんだろうか、半分の人生を…それともどちらかが消える時が来るのだろうか。瑞樹は途方に暮れる。

ハルも見つけられず、記憶もない自分の方が消えるのだろうか。瑞樹はぼんやりと考える。

その時だった、瑞樹の指の先にあつた小さな苗木が小さな声で語り始めた。もちろん声ではない、幽かな風にも溶けてしまいそうなくらいの、小さなため息のような想いが頭の中に響いてくる。

とめどなく溢れるお互いへの愛情を基調にして、別れてしまった悲しみ、こんな形で出会ってしまった哀しみ、失ってしまった過去への哀惜、瑞樹への慈愛までも含めて、デイモルフォセ力のカナメの想いが伝わってくる。

瑞樹は身動き一つできなくなった。息をつめて耳を澄ます、悲しい哀しいその物語を全身で聞くために。

「おい、お前、いつまでここに居るつもりなんだ？」

背後から声がして、物語はぷつりと途切れた。

「！」

瑞樹は驚いて振り返る。

立っていたのはニシキギだった。瑞樹は凍りついたようにニシキギを見つめる。

「どうしたんだ？」

ニシキギは怪訝そうに瑞樹を見つめる。瑞樹はふと我に返ったよ

うに力なく首を振った。

「俺はナンディーに帰るぞ、もう二度と俺を脅かして何かしてもらおうなんて考えるなよ。もう何もしてやらんからな。ソーマで脅かしたって無駄だからな」

ニシキギはガミガミと言った。

「もう何も頼まないよ、もう何もないもん」

いきなり現実に取り戻されて、瑞樹は脱力して小さく呟く。

「何かあっても頼むな」

「もう頼まない。ごめん、脅かしたりして……ありがとう、ここへ連れてきてくれて……」

瑞樹は弱弱しく微笑んだ。

「で？ お前の目的は果たせたのか？」

ニシキギの問いに瑞樹は首を横に振った。

「でも、もういい。もういいんだ」

「……お前、地球に帰るのか？」

「私が帰るところは本当に地球なのかな。違う気がするんだよね。だって地球のどこに帰ればいいの？ 誰に会えばいいんだろう。ねえ、私はどうして記憶がないのかな。知ってる？」

瑞樹はニシキギを見つめた。

「それは、お前が一度死んだからだ」

ニシキギは片眉をあげて言った。

「一度……死んだ」

不可解な言葉だったので復唱してみる。

「お前は病気で一度死んだ。それを分解して再生したんだが、その時に記憶をつまく採取できなかったらしい」

「分解……再生……記憶採取……」

瑞樹には自分の過去の記憶が一切とっていいほどなかったが、例えば、右利きであるとか食べ物好みであるとか服の着方とか生きて行くために必要なことはきちんと覚えていた。言語についてもここで話している言葉をもう一つの別な言語で言おうとすれば言え

ることもわかっている。

もう一つの言語……これが自分の出自を証明してくれるのだろうとも薄々感じている。それらのことと同様に、一度死んだものは二度と生き返らないのだということが自分の中の常識であることを瑞樹は記憶していた。

「私……死んだの？」

途方に暮れるとしか表現できない。ニシキギは不思議そうな顔で頷いた。

「……じゃあ……じゃあ、私は……誰？」

途方に暮れたままニシキギを見上げる。

「お前はミズキ・ヒュウガだ」

「デイモルフオセカじゃないの？ だって、私は死んだんでしょ？」

「デイモルフオセカだって死んでる」

「それって……」

瑞樹は混乱した目でニシキギを見つめた。

「そういう言い方をするなら、ハルの人間はみんな一度死んでる。俺もカナメも……」

「……」

瑞樹は絶句した。

「だが、俺たちは生きている。動けるし考えるし腹も減る、そういう状態を生きていると言うのではないのか？」

「そう……だね。でも、そういうことがここでの常識なのなら……」

私は生きてはいけないうんじやないかな……」

瑞樹は観念したように薄く笑うと膝を抱えて俯いた。

「なんでそうなるんだ？」

「私の中の認識では一度死んだら生き返らないということになってる。たぶん、私のいた世界はそうだったんだと思う。それに、デイモルフオセカには守るべきものがあるけど、私には何もない。記憶

がないんだから……そうであるならば、この世界で生きるべきなのは、デイモルフオセカの方だね」

それきり黙りこむ。

「……」

ニシキギはしばらく黙って立っていたが、そのまま何も言わずに立ち去った。

* * *

地球上に暮らしているすべてのものは地球の法則に従って生きている。二十四時間たてば一日が終わるとか、地軸の傾きのせいで季節があるとか、太陽は東から昇って西に沈むとか、数多ある地球の法則の中に、死んだものは生き返らないということは含まれているのだろうか。どこか別の世界では、死んでも生き返ったり、死なない世界というものがあつたりするのだろうか。そもそも生きているとはどういうことなのか、何の為に生物は存在するのだろうか、この手の疑問は考えれば考えるほど分からなくなる。

（第16話 今は亡き惑星^{ほし}の光跡 終了）

第17話 Mars quake ―地震― (1)

「おい、あいつはどうなるんだ？」

ニシキギはカナメに詰め寄る。

「あいつ？ どうなるって？ なんのことだ？」

カナメはアグニシティの司令ルームで仕事をしていたところで、設計図を前に会議中だった為、アオギリを含む数人がカナメと同様にニシキギに注目する。

「あいつを地球に帰すからってあんたは土下座までしたんじゃないか？ たのか？」

詰め寄るニシキギを遮るようにアオギリが割って入る。

「こっちは仕事なんだ。いい加減にしろよ。私的な苦情なら後にしてくんねーかな」

アオギリが思いつきりすぐんで立ち塞がる。

「あと少しで休憩に入る。それまで待っていてくれないか？ アオギリ、もういいからこっちへ来てくれ、会議をさっさと済ませてしまおう」

カナメはニシキギにやんわり提案して、会議を続ける為にアオギリを呼び寄せた。

「おまえ、カナメさんに無礼な口をきくんじゃねーぞ」

アオギリは憤懣ふんまんやるかたない様子で吐き捨てると会議に戻った。

アグニシティのランチルームは広くて少々殺風景だ。セレーネシティのはもう少し狭いが巨大スクリーンに地球がいつも映し出されていて華やかだ。アグニシティのランチルームにもやはり巨大スクリーンがあるが、それは赤茶けた火星の地表が映し出されていた。「で？ どうなるってどういうことかな？」

カナメはモルオープンから飲み物を取り出しながらニシキギに問う。

「瑞樹のことだ。あいつはもう地球には帰さないのか？」

「……帰さなきゃいけないだろうね。彼女がいた世界へ」

カナメはニシキギの隣に座って飲み物を啜った。ニシキギの分は本人が受け取るうとしないのでテーブルに置いた。

「今のあの状態で帰すのか？」

ニシキギは飲み物には手をつけずカナメを見つめた。

「今の状態で帰すのはまずいだろう。帰る場所を彼女は知らないし、家族の顔さえ分らない様子だし……」

「記憶を戻す方法があるのか？」

「……」

カナメはすぐに返事をしなかった。かなりの間を置いてカナメはニシキギに訊ねる。

「君は……配偶者がいるんだよね？ この船に乗ってる？」

「なんだ？ 藪^{やぶ}から棒に……脱出の時に俺の配偶者だったのなら、おそらく乗ってるだろうよ」

「配偶者だったなら？」

カナメは不思議そうにニシキギを見つめる。

「確認してないだけだ」

「確認してない……」

カナメは今度は呆れたようにニシキギを見た。

「それと瑞樹の件とどういう関係があるんだ？」

ニシキギはイライラと問いかける。

「君に訊くべきじゃなかったかもしれない……」

カナメは脱力する。

「もう聞いたんだ最後まで話せ」

ニシキギは渋面で文句を言った。

カナメは背もたれにもたれながら顔を片手で覆う。

「そうだね、最後まで話すべきだろうね。瑞樹に記憶を返せばデイモルフォセカは消える……らしい」

「らしい？」

ニシキギは怪訝そうに聞き返した。

「ハルはそうなるだろうと言った。僕が君に訊いてみたかったのは……君だったらどうするかということだったんだけど……」

そう言つてカナメは項垂れると、大きな溜息をついた。

「……俺には配偶者が二、三人いた。もちろん一度にじゃないぜ。もう名前さえ覚えていない。ある日突然俺の部屋にやってきて政府から割り当てられた配偶者だと名乗る。ハルにいたころ俺はイブキさんの下で働いていて、自室にはほとんど帰らないという暮らしをしていたから、彼女たちを俺はほとんど構わなかった。ああ、いるのかという感じ、たまたま家にいて気が向けば抱いた。気づいたらどの女も俺の家からいつのまにかいなくなっていた。その繰り返しだった。俺は探しもしなかったし、待つこともしなかった。そんなもんだと思っていた。配偶者が誰かに憑^{とら}いていたとしても俺は配偶者をどうするべきかなんて腐心^{ふしん}することはないだろう。確かに俺に聞いたのはあんたの失敗だな」

「……憑^{とら}く……なんて言い方しないでくれよ……」

カナメは弱弱しく抗議する。

「そうだ！ 一人だけ俺が待っていた女がいたよ」

ニシキギは嬉しそうに皮肉そうに笑った。

「俺はかつてデイモルフオセカ・オーランティアカという女をガイアエクスプレスの駅で何日も待つて、探していた。あれが最初で最後だったな」

「……」

カナメはなんと返せばいいのかわからないまま黙り込む。

「俺なら……好きなようにするだろう。俺が残したい方を残す。もし、そうできるのであればな」

「どちらかを選ぶなんて僕にはできそうもない。選べるのかもわからない……」

カナメは絶望的な瞳で言った。

「……そうしてどちらに苦しめるか？」

ニシキギは冷たい目でカナメを見つめた。カナメはニシキギを見上げる。ニシキギは続けた。

「瑞樹は苦しんでいた、自分が存在する理由がないと言っていた。デイモルフォセカはどうだ？ 楽しそうに生きてたか？」

「デイムは……瑞樹を元通りにしなくてはならないと言った。君の言う通りだ。二人とも苦しんでる」

「……分解できないのか？ あんたのお得意だろう？」

「形があるものならばとつくにしてるよ。どうやって人格を分解すればいいんだ？」

カナメがむつとしてそう言い返したその瞬間、激しく大地が脈動した。

部屋にあった椅子という椅子が平行に同じ方向に滑っては返って来る、物が割れる音や人の悲鳴が乱れとんだ。カナメは丈夫そうなテーブルの脚にしがみついて落下物や滑り込んでくる椅子から身をかわした。反対側のテーブルの脚にはニシキギがつかまっている。「地震？」

カナメとニシキギは同時に呟いた。

* * *

エリアEに座り込んだまま瑞樹は地面からの幽かな振動をキャッチしていた。最初に感じたのは植物たちのざわめきだった。

——何が起きているの？

最初はずんずんと地面の下から何かが突き上げてくるような振動が伝わってきた、次いで激しい横揺れ。

大地そのものが悲鳴をあげているように轟音が響きわたり、ファ

ームの民達の悲鳴がエリアEに響きわたった。

瑞樹はとつさに地面に四つん這いになっていたが、地面に直接触れている掌に尋常でない力が地の底から這い上がって来るのを感じた。

「いけない！　ここはダメだよ！　だってハルが残したオアシスなのに……」

瑞樹は頭から血の気が引いていくのを感じた。

「止めなきゃ！」

地面についた掌に精神を集中する。

エネルギーを集める方法はハルを見ていて覚えた。地脈や気脈からエネルギーを吸収する。体の中がまるでマグマでも吸いこんでいるかのように熱くなっていく。

まだまだだ。まだまだ。体が燃え上がりそうに熱い。瑞樹は限界まで耐えると地面を両手でダン！と抑えた、一気に力を放出する。

瑞樹の両手から激しい閃光がほとばしり出た。

——アグニシティの広さはどれくらいなんだろうか、これくらいの力で足りただろうか……。

そんなことをふと思いつながら己の体から解き放たれていく力に眩暈を感じる。制御の利かない濁流のように、力は瑞樹の体から出て行く。最後の力を振り絞ったところで瑞樹は胸に鋭い痛みを感じた。
「つく……」

息ができなくなる、鼓動が激しくなる、目の前に半透明な光の玉が飛び始め、あまりの激しい苦痛に瑞樹は意識を手放した。

そのころアグニシティの真裏ほどの位置に火山が突如噴火した。地震によるアグニシティの被害は尋常でなく、電気系の回路が寸断され真っ暗闇になった。

「おい、大丈夫か？」

カナメはニシキギに声をかけた。

「大丈夫だ。それよりも電気系統が……」

「ああ、やられたようだね」

カナメはポケットから小型の脳コンタクトの器械を取り出してスイッチを入れた。明かりが灯る。

「ライトを持つてるのか？」

ニシキギは不思議そうにカナメを見つめる。

「これ脳コンタクトの小型版なんだけど、緊急非常時対応にしてあるんだ」

「用意のいいこつたな」

カナメはニシキギにもう一台放って渡した。

「何台持つてるんだ？」

ニシキギは呆れて訊いた。

「だからこれは脳コンタクトの器械なんだよ。二台ないと使えないだろ？」

カナメは肩を竦めた。

「僕は電気系統のチェックをする。このままだとアグニシティは凍りついてしまうからね。君は負傷者を医療センターに誘導してくれ。あそこなら自家発電装置があるからしばらくはしのげるだろう。それからナンディーに連絡を頼む」

「わかった」

ニシキギは神妙に頷いた。

今火星は真夏だが、それでもその最高気温はマイナス二十八度だ、夜明け前にはマイナス九十三度まで低下する。外壁は熱を伝えにくくように造ってはあるが、それでも電力が供給されなくなったアグニシティの内部は、かなりな速度で気温を下げ始めるだろう。

「医療センターへ行け！ 負傷したのも、そうでないものも、医療センターへ行くんだ。電気系統が復活する前に凍死してしまうぞ！」

ニシキギのどなり声が響きわたった。

「アオギリ！ アオギリはどこだ！」

カナメはアオギリを探していた。アグニシティの建設の責任者だ。誰よりもこの構造に詳しい。

「カナメさん！ ここです」

アオギリは倒れてきたスチール棚の下敷きになっていた。

「大丈夫か？」

カナメは顔色を変えて駆け寄った。

「足を挟まれてるんです。ちょっと手を貸してもらえますか？」

カナメはアオギリの上に覆いかぶさっているスチールに手をかけて渾身の力で持ち上げた。僅かにできた隙間からアオギリがほく前進して出てきた。

「他の人は？」

「残ってたのは俺だけだったんで、恐らく現場に行ってるんだと思うんですが……」

アオギリは顔をしかめながらそれでも何とかつかまって立ちあがった。

「大丈夫なのか？」

「制御室に行きましょう、電気系統の情報が手に入ります。ここにも何から手をつけていいのかわからない」

カナメは頷くとアオギリに肩を貸した。

「アグニシティはどれくらいもつ？」

「このまま電気系が回復しなければ十二時間くらいでしょう。断熱構造にはしてありますが、間もなく日没です。外気は下がる一方だ」
アオギリは唇をかみしめた。

制御室は非常用の電気系統が立ち上がっていて、カナメは制御盤に表わされている回路を食い入るように見つめた。

「ズタズタだな」

寸断された回路の先を順に確認していく。エリアE付近でほとん

どの回路が寸断されていた。

「こりゃ、まずいな」

アオギリも唸った。

「エリアEの被害が大きそうだ」

カナメはひやりとした思いで見つめていたが、アオギリの言葉に現実を確認する。

「エリアEに行ってくる。君は寸断した回路を回避して電力を保てるようにルートを組みなおしてくれるか？ この制御室がしばらく使えるならだけど……」

「カナメさん見くびらないで下さいよ、ここが駄目になる時はアグニシテイが駄目になる時です。医療センターよりもここは安全なくらいですよ。大丈夫回路はすぐに組み立てなおします」

アオギリは胸を張った。

「それよりも心配なのはエリアEです。早く行ってください。あそこが駄目になると真綿で首を絞められるみたいにジワジワ死ぬことになっちまいますからね」

「わかった。後ですぐに応援をよこすよ」

カナメはそう言い残して足早にエリアEに向かった。ガルダでもエリアEが甚大な被害を受けた。嫌な予感を打ち消すようにカナメはエリアEへと足を速めた。

第17話 Mars quake - 地震 - (2)

真っ暗闇で何も見ることはできなかったが、エリアEのと真ん中にぽっかりと穴があいていた。イベリスはその穴に落ちたのだ。手探りで這いずりながら登る。イベリスの身長の上の倍以上あるであろうその穴は、ついさっきまではなかったものだ。

アグニシテイに着いてエリアEの見学をしていたイベリスは、ぼんやりと座っている瑞樹に気づいた。声をかけようと歩み寄った瞬間、地面が波打った。慌ててしゃがみこむ。しばらくして、前方、瑞樹のいた辺りで閃光がひらめいた。その後は何が起こったのかわからない。気づいたら、イベリスはクレーターのような穴の中に落ちていたのだった。

「……何だよ、これは……」

イベリスは混乱したまま穴から這い上がった。地震が起こったのだろうということはわかったが、あの閃光とこの穴はどういうことなのか、イベリスは打ち身で痛む体に呻き声をあげた。

辺りは真っ暗闇で何も見えなかったが、たくさんの傷を負った人々の呻き声が聞こえる。

「おおい、大丈夫か？」

カナメの声がして、細い電灯の光がエリアEに射しこむ。

「どうなってるんですか？」

ファームの民の誰かが問いかけた。

「地震だ。電気系統がやられている。動けるものは医療センターへ、余裕のある者は必要な者に手を貸してやってくれ。廊下に出れば、非常灯が灯っている。とにかくエリアEから出るんだ。動けない重症の者はいるか？ 声を出してくれ」

あちらこちらから声があがる。

「今、救援を呼ぶ、動けるようなら少しずつでもこの明りを目指して移動してくれ」

カナメは、大脳コンタクトの別のボタンを押してニシキギを呼びたした。

「ニシキギ、声が聞こえたら緑色のボタンを押してくれ」

二度ほど繰り返したところで応答があった。

「エリアEで負傷者が多数出ている。医療スタッフに至急来るように伝えてくれ。それから制御室に電気系に強い技師をやってくれ、アオギリが一人に対応している」

「了解、この器械はあとどんな機能があるんだ？ 非常食とかは出たりしないのか？」

ニシキギの呆れた声が返ってくる。

「そんなもん出るか。非常用の機能はまだいくつかついてるが、今説明してる暇はない」

「了解」

カナメがかざしている灯りを頼りに、イベリスはヨロヨロと進んで行った。

「カナメさん……カナメさん、イベリスです」

「イベリス！ 来てたのか？ 運が悪かったな」

気の毒そうに微笑むカナメの顔にイベリスはホッとすする。

「怪我はないか？」

カナメは灯りをイベリスの体全体を照らした。見事に泥だらけだが、擦り傷と打ち身程度で済んでいるようだ。

「僕は大丈夫です。それよりも、瑞樹を見ましたか？」

イベリスは心配そうにカナメを見つめる。

「いや、見てない。今のところ、ここを通ったのは全部ファームの民だった」

カナメはひやりとする。

「僕、見たんです。瑞樹がエリアEの真ん中に座っているのを。声をかけようとしたら地面が揺れて、何かすごい光が閃いて、大穴が

……」

「光？ 大穴？」

「穴は今でもあいてますよ。光はすぐに消えてしまいましたけどね」
イベリスの顔は不安で歪んでいた。

「そこに瑞樹が……」

カナメは呆然としてるように見えた。

「カナメさん、灯りを他に持っていないませんか？ 僕、様子を見に行つてきます」

「灯りはこれしかない。とにかく君は医療センターに行きなさい。
もうすぐ救援隊が医療センターから着くだろう。その後で僕が探す。
必ず見つけ出すから……」

「でも……」

イベリスはためらった。もし瑞樹が土の中に埋もれているのだとしたら、事態は一刻を争うかもしれないのだ。

「君の言いたいことはわかってる。だが、この暗闇の中で動くのは
二次災害を引き起こす危険がある。君、もし余力があるようなら、
ザイルのようなものを探してきてくれないか？ 穴が深いのならば
必要だろう？」

「わかりました」

イベリスは大きく頷くと、非常灯が薄暗く灯る廊下の闇に消えて
行った。

「瑞樹！ 瑞樹！ いたら返事をしてくれ！」

ファームの民達がカナメの大声に驚いて振り返る。

返事はおるか安否を知るファームの民からの情報もない。カナメ
はジリジリした思いで灯りをかざしながら、ポケットの中のハル玉
を握り締める。ハル玉は光苔のようにひっそりと光った。

ハル玉は瑞樹の地球玉と対になっていて、近くにいると互いに反
応し合って蛍光を発するように仕組んである。カナメは絶望的な気
分でそれを握り締めた。瑞樹が確かに近くにいるのだ。返事もでき
ない状況なのだ。

——まさか、死んでいる？ そんなはずはない……。

そんなはずはないと自分に言い聞かせる。

しかし、イベリスは光を見たと言った。それは森の民の力の光ではなかったか、カナメは走り出したい気持ちをぐっと堪えて、灯りを持つ手を支えなおした。

救援隊は手間取っているらしく、なかなか到着しない。かなり時間が経ってから、カナメの背後で大きな光が閃いた。

「カナメさん、遅くなりました。医療センターもパニックで、すみません！」

医療センターの男はそう言った。

「重症者がかなりいるようだ。頼むよ」

医療センターのスタッフが持ってきた明かりで、エリアEの中は随分明るくなったが、奥の方はまだまだ暗い。カナメは手元の明かりを頼りに奥へ進んだ。

「瑞樹！ デイモルフオセカ！ どこだ？ 瑞樹！ デイモルフオセカ！」

返答はない。イベリスが言ったように、エリアEの中央付近に大きなクレーターののような穴が開いていた。直径は五メートルくらいで、深さは三メートルほどもあるように見える。

「なんだこれ……嘘だろ？」

カナメはクレーターの斜面を滑り降りて行った。クレーターの底を隈なく照らす。そこには誰もいなかった。

「瑞樹！ デイモルフオセカ！」

名前を何度も呼びながら手当たりしだい土を掘り返してみる。エリアEの空気は冷気を含んでいて土は予想に反してほんのり暖かく、まだ希望が持てる気がした。

「カナメ！ 大丈夫か？」

上からニシギギの声がした。大きなライトで穴の中が照らされて、イベリスがザイルを投げおろして降りてきたのがわかった。

「カナメさん、瑞樹いましたか？」

「いない……」

カナメは呻いた。

「本当にここにいたのか？」

ニシキギが、上から別なライトを照らしながら叫ぶ。

「僕、見たんですよ。地震が起こる前に彼女がここにいたのを……」

「ニシキギ、その辺を少し見回ってくれるか？ 僕が見回ったのは小さなライトでだったから見落としているかもしれない」

「了解」

ニシキギはカナメの言葉に素直に従った。

その間にも、カナメは土を掘り返しては名前を呼び耳を澄ます。

——すぐにナンディーに戻しておけば良かった。

後悔が込み上げてくる。デイモルフオセカの時と同じだ、早くアール・ダーに戻しておけば良かったと地下都市ハデスのエリアEで後悔したことがあった。フォボスに助けに行く少し前のことだ。

「……カナメさん、デイモルフオセカ・グラブラはデイモルフオセカ・オーランティアカだったんですね」

すぐ後ろでイベリスの静かな声がした。カナメは手を止めてイベリスを振り返る。

「ああ、そんなに怖い顔をしないでください。僕、何も言いませんから、誰にも……」

「君は……アール・ダーで彼女を知ってた？」

「ええ、知っていましたよ。僕の家のお姉ちゃん、良く世話になってましたからね。顔を知ってます。フォボスで処分された……いや、されるって母から聞きました。だからてつきり僕は、彼女がフォボスで死んだんだと思ってました。あなたが……助けたんですか？」

イベリスは泥んこになって土を掘り返すカナメを見下ろした。

「……僕は……あの頃死にたがっていてね、死んでもすぐに再生される自分の命にほとほと嫌気がさしていた。そんな時に、彼女が地下都市の僕の部屋に逃げ込んできた……」

カナメは土を掘り返しながらぽつりぽつりと語った。

「最初僕らは……僕とイブキは森の民の再生技術の開発に彼女を利用するつもりで匿った。彼女の完璧なデータを採取して、完璧に再生させるつもりだった。まだ、森の民に三つのタイプがあるなんて解明されてなかった頃だ。結局、ディモルフオセカはどうやっても再生されないオリジンタイプで……。僕は、そんな彼女の一度きりの命を……惜しんだ。彼女の命を惜しむことで、自らの命をも惜しむことができた。僕が守ってやらないと失われてしまう命。彼女を守ることは、僕が生きていることの理由になった」

「……そうだったんですか」

イベリスも別の場所の土を掘り返し始めた。

「……僕もカナメさんほどの力と能力があれば、母を助けられたのかな、ああ、でも無理か、母は父を殺めてしまったんだから……。母にもディム程の勇気があったら……。僕なんかを生まずに逃げたしていたら良かったんだ。僕なんか生まれなければ良かったのに……」

イベリスは小さく呟くとさらに小さく溜息をついた。

「生まれなければ良かった命なんてないよ。そんな命は一つもないと僕は思う……」

カナメはイベリスを振り返ってきつぱりと言った。

「そもそも君たち森の民がそれを証明したんじゃないか。政府に見捨てられて、君たちはアール・ダー村に隔離された。結果はどうだい？ 君たちの力なしで僕たちハル人は生き残れなかったよ」

「見捨てられた？」

イベリスはシヨックのあまり茫然とする。

「そう、シヨックだろうけど、それが森の民の真実だった」

「森の民は……そんなこと誰も知らない」

「森の民は何も知らないよ。知らせないことがとても重要なことだったから」

「何故？」

「絶望した森の民は力を生み出せない。政府は力を欲しがっていたからね。政府は森の民が現実を知って絶望することを恐れていた」

「じゃあ、デームはどうだったんですか？ 地下都市で色々な情報を得て、それで力を使えなくなったんですか？」

「否、使えなくなったのはほんの一時のことだったよ。人間の絶望なんて永遠に続くわけじゃないだろう？」

「じゃあ、政府のやったことは……」

「やり過ぎ…… だったんだろうね、今にしてみれば……」

「そんな……」

「人間はもつとしぶとくて強いものだよ。政府は過小評価していたんだと思う」

「俺もそう思うぞ」

突然上から声が降ってきて、カナメもイベリスもビクツと上を見上げた。

「ニシキギ！ 今の話を聞いたんですか？」

イベリスが狼狽する。

「彼は大丈夫だよ」

カナメがのんびりとイベリスに微笑みかけた。

「彼も知ってるんだ。デームのことも僕が過去にしでかしたことも……」

森の民である君にこんなことまで教えたこともだな……」

カナメは小さく笑った。

「僕はまた公安にいつ捕まってもおかしくない立場らしい」

大した事でもなさそうにそう言うときカナメは再び土を掘り始めた。大したことがないと思えるのはニシキギのせいなんだと、ふと思いつく。彼なら、カナメが居なくても、瑞樹を地球に帰してくれそうだ。

「俺は森の民の両親から生まれた。十歳までアール・ダーにいたんだ」

ニシキギの言葉に再びイベリスが驚愕する。

「だからデイモルフォセカのこと、イベリス、あんたのことも実は知ってた。今まで黙ってたて悪かったな」

ニシキギはズザザと音をたてて滑り下りてくると、土を掘り返し始めた。

「だったら、何故あなたはカナメさんを公安に通報したんですか？デイムが同一人物だって……」

イベリスが不満げにニシキギを問いただす。

「俺は何もしてないぜ」

ニシキギも不満げに言い返した。

「俺は森の民の側にいる人間を政府に売ったりなどしない。虐めるつもりなら直接本人に俺が手を下すさ。その方が楽しいからな」

ニシキギは最後の言葉をニヤニヤしながら言った。

「君じゃなかったんだー」

カナメが邪気のない声で言った。

「じゃあ、誰が？」

イベリスは困惑顔で呟いた。

* * *

傷のないエメラルドが無いように、永遠に存在できるものなど何一つ無いように、確かなものなどこの世には存在しない。大地は揺らぎ、水は溢れ、炎は万物を蹂躪し、風はそれを煽る。すべての自然が敵にまわった時、我々に何ができるだろうか。取るに足らないちっぽけな存在だと思い知らされて、唯々（ただただ）その強大な力が通り過ぎるのを待つことしかできない。しかし、その後に生き残ったものが再び生活を取り戻した時、自らを理解するだろう、

我々も自然の力を内包したその一部なのだと

(第17話 Mars quake - 地震 - 終了)

第18話 鎮魂歌・レクイエム・(1)

二日後に電気系は完璧に復活したが、瑞樹は見つからないまま三日目が過ぎようとしていた。カナメのハル玉は相変わらずエリアEでのみひっそりと淡く光った。

「カナメ、大丈夫か？」

エリアEにできた穴の中で土を掘り返しているところに、上からコブの野太い声が降ってきた。最初は大勢で搜索してくれていた人たちも三日目ともなると絶望視したようで、一人、また一人と瑞樹を探す人は減っていった。

「もつとはよ来てやれんで悪かったな」

コブはそう言っただけでカナメの背中を軽く叩いた。

「昨日まではもつとたくさんの方が手伝ってくれていたんだ、だから大丈夫だよ。でも、来てくれてありがとう」

カナメは憔悴しきった様子でコブを見上げてそう言うと、黙々と作業を再開した。

「カナメ、お前は少し休憩しろ。顔色が悪いぞ。上でイベリスが心配しちやる。飲み物とかが用意されちやるから、しばらく俺と代われ」

降りてきたコブは有無を言わずカナメをつまみ上げ立たせると、穴から上がるように押し上げた。

「コブ、おい、ちょっとやめろよ」

「悪いことは言わん、少し休め。この辺を掘ればいいんか？」

コブが指さしたところを見つめて、カナメは弱弱しく頷いた。

「カナメさん！」

イベリスが心配そうに駆け寄ってくる。

「飲み物とか食べ物を用意していますから……」

イベリスは泥だらけで顔色の悪いカナメを引っ張って行った。

イベリスが入れてくれた温かい飲み物を啜りながらカナメは溜息をついた。エリアEは電力が供給されるようになって再び明るく暖かくなっていた。

——少し眩しすぎるかな。俯いて土を掘っていたから気付かなかった。

胸ポケットからサングラスを取り出して掛ける。遮光服も着た方がいいのかもしれないとカナメはぼんやりと思う。幽かな風が耳元を吹き抜けて行く。

「カナメさん……瑞樹は本当にここにいたのかな」

イベリスの言葉にカナメは顔を上げた。

「僕は確かにここで瑞樹を見たと思ったけど……あれは本当に瑞樹だったのかな。なんだか自信がなくなっちゃって……」

「いるんだ……僕にははつきり分かる」

カナメはぼつりと呟いた。

「……なんだか、瑞樹自体が、僕にとっては幻だったみたいで……」
イベリスは大きな溜息をつく。その時だった。

「……おいで、ぼくと遊ぼう」王子さまは声をかけた。「ぼく、今すごく悲しいんだ……」

カナメ頭の中にふとそんな言葉が飛びこんできた。驚いて辺りを見回す。言葉は続いた。

「……きみとは遊べない」キツネが言った。「なついていないから」「なつくってどういうこと?」「ずいぶん忘れられてしまっていることだ」キツネは言った。「それはね、絆を結ぶということだよ」「絆を結ぶ?」「そうとも」とキツネ。「きみはまだ、ぼくにとっては、ほかの十万の男の子とにも変わらない男の子だ。だからぼくは、べつにきみがいなくてもいい。」

きみにとってもぼくは、ほかの十万のキツネとなんの変りもないでも、もしきみがぼくをなつかせたら、ぼくらは互いに、なくてはならない存在になる。きみはぼくにとって、世界で一匹だけのキツネになる……」[『]（**）星の王子さま（サン＝テグジュペリ河野万里子訳）より

カナメは言葉が聞こえてくる方にゆっくり歩いて行った。目を瞑り、耳を澄まし、心を集中する。その言葉は一本の小さな苗木から聞こえていた。

「カナメさん？ どうしたんですか？」

イベリスが訝^{いぶか}しげについてきた。カナメはいきなり膝をつくとも苗木の根元を掘り返しはじめる。

「カナメさん？」

大穴からずいぶん離れた場所だ。いきなり掘り始めたカナメをイベリスは心配そうに見つめた。イベリスの心配をよそにカナメは土を掘り進めた。小さな苗木だ、根っこなんてたかが知れているはずだ、しかし、その苗木の根っこはまるで大きな繭^{まゆ}のように広がり、何かを包み込んで守っているように見えた。

「イベリス！ 手伝ってくれ」

イベリスがカナメの手元を見れば、見たこともないような根っこの繭が顔をのぞかせているのが見えた。根っこが放つ精油のような清涼感のある匂いがあたり一面にたちこめる。

根っここの繭の中に瑞樹は入っていた。大穴からどうやってここに入り込めたのかさっぱりわからなかったが、瑞樹はその中にいて、弱弱しく生命をつないでいた。

「おおい、誰か担架を持ってきてくれ。瑞樹が見つかった。生きてるんだ！」

イベリスは声を張り上げた。

瑞樹はイベリスの大声に促されるように目を開いた。カナメの深い緋色の瞳を見て弱弱しく微笑む。

「カナメ……もうこのまま会えないかと思った」

「デймなんだね？」

「会えて良かった。瑞樹がハルの力を使って火山の噴火を止めたの。ここが噴火口になるところだったから……瑞樹が命がけで守ったの、もう、死ぬんだと思った……」

「デйм、良かった。このまま君を見つけることができなかったら、僕は一生後悔して生きることになっていたよ」

カナメはデイモルフオセカを強く抱き締めた。

「カナメ、あの苗木をとって」

瑞樹を包み込んでいた根をもつ苗木を指さした。

「どうするの？」

言いながら手を伸ばすと苗木をデイモルフオセカに渡した。

「ありがとう。カナメ……私はここを離れなくてはならないらしいわ」

デイモルフオセカは悲しそうにカナメの瞳を覗き込んだ。

「何故？ 助かったのに？」

カナメの声が掠れる。

「私を医療センターじゃなく、あなたの部屋に連れて行って」

デイモルフオセカの声は何か^せに急きたてられているようだった。

「デйм？」

「そして、瑞樹に記憶を返して」

「そんなこと……そんなことできない……」

「……じゃあ、私たちはこれで死ぬしかないわ」

「どうして？ どうしてそうなるんだよ？」

「一つの体に二つの人格は負担なの。瑞樹はもうずっと前から^{ひへい}疲弊していたの。私が出て行かなければ、瑞樹は駄目になる」

「僕に君を見捨てて瑞樹を助けると言ってるのか？」

「カナメ、間違えないで、この体は瑞樹のものなのよ。選択肢は二

つなの。瑞樹が生き残るか二人とも駄目になるかよ。私は瑞樹を助
けたい、こんな風に……」

ディモルフオセカは苗木を持つ手に力を集中した。
小さな苗木はその枝葉を伸ばして、根っこが自力で土の中に潜っ
ていった。力の放出にディモルフオセカは肩を震わせて喘ぐ。

「瑞樹に根っこを返してあげて、そうすれば私はここから出て行け
る。お願いよ」

縋るように見つめられて、カナメは力なく頷いた。

「イベリス、担架はいらない。僕が運ぶよ」

カナメは瑞樹を抱き上げるとエリアEから運び出した。

願いを聞き届けられて安心したのか、ディムは意識を失ってしま
った。ディムが体から出ることですべて果して瑞樹は助かるのか、それさ
えも危うい状態に見えた。抱きかかえた体の冷たさは、瑞樹の命が
依然薄氷の上にあるのだということを告げていた。

「カナメさん？ 医療センターはこっちですよ」

イベリスが慌てて追いかけてきて注意する。

「イベリス、ニシキギを呼んできてくれないか？ 1125室の僕
の部屋に来るように伝えてくれ」

カナメは歩みを緩めずにイベリスに頼んだ。

「ニシキギですか？」

イベリスは怪訝そうに問い返した。

「うん、急いでほしいんだ」

「わかりました」

イベリスは釈然としない様子で、それでも駆け足でニシキギを呼
びに行った。

カナメは個室の暖房を最高温度に設定した。瑞樹の土で汚れて湿
り気を帯びた衣服を脱がして毛布にくるむと抱きかかえたままベッ
ドに入った。胸のポケットから脳コンタクトの器械を取り出す。

「デイル、デイル……」

もう一度声が聞きたくて瑞樹の体を揺する。顔は蒼白で唇は紫色になっている。カナメは目を開く気配のない瑞樹の顔を手で擦った。冷たい頬、それはもうタイムリミットを越えているのではないかとぞつとする程で、カナメは息をのむ。

もう一度強く抱きしめてから、器械に記録されている瑞樹の記憶を選び定着モードに設定する。名残惜しそくに瑞樹の顔を見つめることしばし、カナメは意を決したように大脳コンタクトの機械を瑞樹の頭に装着してスイッチを押した。

「……駄目、駄目だよ」

一瞬目を開いて瑞樹がカナメの腕を握り締める。

「ハニーが消えちゃうよ!」

驚いて見返すカナメに静かな声が割って入った。

「いいの、これでいいのよ。ありがとうカナメ……」

「デイル……」

カナメは愛おしそうにデイルフォセカの頬を手で撫でた。

「一つだけ心残りだったのは……最後にあなたに会えなかった事だった。あんなにたくさん迷惑をかけて、守ってもらったのに、私、あなたにお礼を言つてなかったもの。それにあなたの腕の中で死にたかった。やつと願いが叶った……」

デイルは微笑んだ。

「デイル、礼を言うのは僕の方だ。君を守ってるつもりで、本当は君に支えられてたんだ。君に……救われていたのは僕の方だ」

デイルフォセカは小刻みに震える手を伸ばしてカナメの頬に触れた。

「カナメ……あなたが笑うと私も嬉しい、あなたが悲しい時は、私も悲しい……だから、あなたは、未来へ、行つて、そして、幸せになつて……それが私の、幸せになる。カナメ……未来へ」

デイルフォセカは未来を指さすように空中に指先を向けた。やがて、その腕はぱさりとベッドのシーツの上に落ちた。

カナメは指が指し示す方をしばし見つめた後、強く、強くディモルフォセ力を抱きしめた。

「ディム……君はひどいよ……二度までも僕を置き去りにしておいて……君なしで未来へ行けなんて……君の幸せが僕の幸せだったのに……逆だろ？ それじゃあ……」

カナメはディモルフォセ力を抱きしめたまま頂垂れた。

第18話 鎮魂歌 - レクイエム - (2)

「おい、俺に用があるってなんだ？ 瑞樹が見つかったって本当なのか？」

ニシキギがノックとともに部屋に入ってきた。ベッドの中のカナメと瑞樹を見つめてニシキギは固まる。

「瑞樹……」

ニシキギは絶句する。瑞樹を抱きしめて俯いていたカナメが震えながらニシキギを見上げた。涙に濡れたカナメの顔をみてニシキギは凍りつく。

「力を貸してくれ」

瑞樹の頭には大腦コンタクトの器械が取り付けられていて、ニシキギはデイモルフォセカが去ってしまったらしいことを察知した。悲痛な顔をしてニシキギはカナメの傍に来る。イベリスも続いた。

「デイモルフォセカは逝ったのか？」

ニシキギの問いにカナメは小さく頷いた。

「で？」

「君が持っているソーマの白い種を分けて欲しいんだ。持っているんだろう？」

カナメはニシキギを見上げた。

「低体温症だな」

ニシキギは瑞樹の紫色になってしまっている唇に触れた。

「ニシキギさん、ソーマの白い種を持っているんですか？ どうして……」

イベリスが驚いてニシキギを見つめる。

「こいつにそんなもの飲ませて大丈夫なのか？」

イベリスの問いには答えず、そう問いながらニシキギはポケットから透明なピルケースに入った種をとりだした。

「デイムはこれで命をとりとめたことがあるんだ。瑞樹が大丈夫か

と訊かれると断言はできないけど、このままだと彼女は死んでしま
う」

手も足も氷のように冷たい。指先ほどの体温が中心部まで広がれ
ば体の機能は停止してしまうだろう。

「おい、お前霊薬ソーマを飲んだことがあるんだろ？ 作ってくれ
よ」

ニシキギはソーマの白い種をイベリスに渡した。

「作ったことはないんですけど……」

イベリスは困惑気味に言った。

「強めのアルコールに溶かすだけだよ。メムシンあたりがいいだろ
う。ほんの少しの量でいいんだ」

カナメが言うと、イベリスはキッチンへと向かった。

「足先や手先をマッサージした方がいい」

ニシキギはベッドの上に上がり込むと、瑞樹の足先を掴み擦り始
めた。

「慣れてるんだね」

「昔、俺の弟がよく低体温症になってた。突然動けなくなるんだ。

そんなになるまで力を使わなければいいのにと思っていたが、あれ
は、もう……宿命だな」

ニシキギは思い出す。三つ年下のシーカスは力を自在に使える森
の民で、そうであるのに、力を必要としている植物を見ると力を差
し出してしまふのだ。自分の限界も考えずに……。

『兄さん、動けない……助けて』

ニシキギを呼ぶシーカスの幼い声が聞こえた気がした。その度に
手足を赤くなるまでマッサージして、家までおぶって帰った。

カナメが瑞樹の手先を擦っていると、イベリスがソーマのグラス
を手にしたまま、ぼんやりした表情で立ち尽くしているのが目に入
った。カナメの目線に気づいて、ニシキギも振り返って首をかしげ
る。

「イベリス？ できた？」

カナメは怪訝そうに声をかけた。イベリスははっと我に返ったように頷くとグラスを差し出した。

「スプーンもいるな」

「元妻だったんだし、口移しで飲ませれば？」

ニシキギがニヤニヤしながら言う。

「霊薬ソーマを普通の人間は一滴でも口にしてはいけない」

カナメはいたって真面目な顔で言った。

「森の民の命だからか？」

アーマルターシュがそんなことを言っていたのを思い出す。

「それもある」

イベリスからスプーンを受け取りながらカナメはそう言うと、ニシキギを脅かすように見つめた。

「理性を司る脳の機能がぶっ飛ぶんだ。ソーマは自覚しないまま理性で抑えつけていた感情や欲望を引きずり出す。もし君がどうしても試してみたいと言うんなら止めないけど、その時は自分の部屋に鍵をかけて、自分をどこかに拘束してから試すことを勧めるよ。そして君に殺人願望とか物騒な欲望がないことを祈るね」

「な、なんか凄そうだな」

ニシキギは怖気づいたように呟いた。

「凄いんだよ、あ、瑞樹の脚を抑えてて」

カナメは瑞樹の口をこじ開けるとソーマをスプーンで流しこんだ。ソーマが流れ込んだ途端に瑞樹はぴくりと体を震わせて目を開いた。だが、その瞳には何物も映っていないように虚ろだ。

カナメは慌てて瑞樹を抑えつけたが、それ以上暴れる様子もなく再びぐったりと力が抜け瞳は再び閉じられた。

「大丈夫そうだ。全部飲ませよう」

カナメは残りのソーマも次々とスプーンで流しこんだ。

「あんた、ソーマを口にしたことがあるんだ。そうだろ？」

「デイムの時にね……。知らなかったから、ソーマがそんなものだ

って……」

「で？　どうなったんだ？」

ニシキギは興味津津な風情で乗り出したが、カナメは肩をすくめて「ノーコメント」と言っただけだった。

「ソーマを飲んだ時って、ものすごい高揚感と陶酔感がありますよ。僕は森の民だから違うんだろうけど。普通の人が飲んだ時と違うなんて思ってもみなかった」

イベリスは呟いた。

「こいつはどうなんだろうな」

ニシキギは瑞樹を見下ろした。高揚している様子も陶酔している様子もなく、欲望をかなえる為に暴れだす様子もなく、安らかに眠っているように見える。

「さあね、地球人だから……また別なのかも」

カナメは肩を竦めた。

「しかも、自分が作り出したソーマの種だ。そこもまた違うのかもしれんな」

ニシキギは考え込むように言った。

「このソーマの種は瑞樹が作ったんですか？」

イベリスが驚いて聞き返した。

「瑞樹っていうより、ハルが作ったという方が正確だな」

ニシキギは苦笑いをしながら言った。

「……ハル？」

益々わからないという風にイベリスは首を傾げる。

「あれは本当にハルだったんだな」

ニシキギはカナメを見つめて言った。

「そうだよ。無論、誰も信じないけどね」

「あんたは信じてるんだろ？」

ニシキギはにやりと笑って言った。

瑞樹はソーマが効いたのか、唇も桜色になって、頬にもほのかに

血の色が戻ってきていた。

「イベリス、ちょっと代わってくれ」

ニシキギはベッドから降りて用足しに出かけた。分解しておいてくれと渡されたグラスをダストシートの前まで持ってきて、しばし躊躇する。自分にはどんな潜在願望があるのだろう、知りたいような知りたくないような複雑な気分だ。とりあえず今はやめておいた方がよさそうだとダストシートに放り込んだ。なにせ、ソーマの白い種はまだ二つもあるのだ。

用を足して再び戻って来てはっと立ち止まる。さっきイベリスがぼんやり立ち止まっていたのも調度このあたりだとふと気づいた。

「なるほど、なかなか刺激的な構図だな」

言ってイベリスの背中をポンと叩くと、イベリスは真っ赤になった。毛布からはみ出した瑞樹の白い手足がやけに艶めかしくてイベリスはさらに赤くなる。

「？」

カナメが不思議そうな顔で二人を交互に見つめた。

* * *

記憶は走馬灯（うしやうだい）のように瑞樹の頭の中を廻った。

初めての遊園地、乗せられた子供用のたわいのないジェットコースター。カタカタと音をたてながらゆっくり上るにつれて高まる不安、コースターの上で瑞樹は後悔していた。

——なんで乗ってしまったんだろ。

角度を変えて、まさに降りようとする瞬間、瑞樹の恐怖も頂点に

達する。とつさに目をつぶって母の体に顔を埋める。母が来ていたブラウスを透して伝わってくる母の匂いに心を落ち着かせて顔を上げた刹那、風と一体になっていた。

花火！　すぐ傍で打ち上げられて夜空に花開く大型の打ち上げ花火。

——どおん！

光に遅れて夜空に轟く雷鳴にも似た炸裂音。ちよつと怖くて耳を塞いで目を見張る。

三人で浴衣を着た。瑞樹は朝顔、皐月ちゃんは紫陽花、正樹ちゃんは蜻蛉の柄の浴衣を着て、赤とピンクと青いほわほわの兵児帯が揺れる。

金魚みたいだ、正樹ちゃんが言うのでみんなで金魚の真似をした。

こんな楽しい記憶ばかりじゃないけれど、これが私の記憶。私が今まで生きてきた軌跡。私が私である証。これが、私の根っこだった。

死ぬ前に、人は今まで生きてきた人生を走馬灯のように見ることもあると、よく言うけれど、私は今、生きるために、今までの私のささやかな人生を巡っていた。

私が生まれたのは三月の終りに近い、よく晴れたお昼間だったと母はよく話してくれた。病院に駆け付けた父の手には淡い黄色の花をたくさんつけたヒユガミズキ。

「庭にたくさん咲いていたんだ、昨日までは気付かなかったんだけど……」

父は照れ臭そうに見えたと母は言った。

「春が来たのね」

初めての出産の後で弱っていて、授乳やおむつ換えやこれからの育児のことを考えて少しだけ途方にくれていたけれど、その黄色い

花を見たらばあつと明るい気持ちになって、俄然^{がぜん}勇気が湧いてきたのだと母は笑って話してくれた。

春^{ハル}を運んできた娘だからヒュウガ・ミズキ、苗字とぴったり合うとその場で私の名前が決定したのだと父と母は声をそろえて言った。

春^{ハル}……ハル……切ないその響きを、瑞樹は何度も何度も呟いてみる。

記憶は、瑞樹の目の前をその速度を増しながら疾走していった。息もつかせぬ速度で今に近づいていく。

どこか遠いところで雨音がした。ピチョン、ピチョン……

——あれは雨の音？

瑞樹は音のする方へ歩き出す。

雨が降っていた。

海に、大地に、植物に、動物に、人に、すべてのものに雨はわけ隔てなく等しく降り注ぐ。濡れていない物は何もないびしょ濡れのこの世界を、瑞樹は一人静かに見下ろしていた。

雨は少し白っぽいようで、虹色のように、煌めいていて、その中に命を内包しているのを瑞樹は理解する。

——降り注ぐ雨が命を育むんだ。どうしてそんな当たり前のことを今まで気付かなかったんだろ。

瑞樹は呆然と呟く。

瑞樹は地球を抱きしめた。ふと前方に目をやれば同じような青い惑星が浮かんでいる。瑞樹は宙を蹴りその惑星にも手を伸ばす。

右手には地球、左手にはハルをしっかりと掴んで抱きしめた。

——つかまえた！　これは私のだ。欲張りと言われたって構わない、この二つは私のだ。もう離さない……。

涙が零れ落ちる。

涙は白銀色の滴になって地球にハルに降りかかる。涙は地上に落ちて雨に変わり、その海の上に幾重にも虹をかけた。

瑞樹はベッドの上で目を覚ました。背後に規則正しい寝息。振り向かなくても分かっている。愛しい人の温もりだ。

涙が流れて仕方がなかった。ハルもデイモルフォセカも行ってしまった、瑞樹が一人残された。

ハルも地球も抱きしめたまま……瑞樹は存在した。

涙が鼻を横切りシーツの上にぼたぼたと零れ落ちた。止めようとしても嗚咽を止められない。

「目が……覚めた？」

背後でカナメが起き上った。瑞樹は振り向いてその顔を見つめる。

「どうして……私に記憶を返してしまったの？」

哀しい気持ちで問いかけた。

「記憶が戻って良かったよ。君はミズキ・ヒュウガだから……これで良かったんだ」

カナメは静かに目だけで微笑んで、瑞樹の髪をそつと撫でた。
「……」

ミズキ・ヒュウガに戻れた安堵感よりも二人を失った喪失感の方が大きかった。しばらくはこの空虚さと闘わなければならないだろうと、止まらない嗚咽を懸命に抑えつけながら絶望的な気持ちでそう思う。

なぜならば……瑞樹はもう日向瑞樹でさえなかったのだ。

その気持ちをどう表現したらいいのかわからないまま瑞樹は口をつぐむ。この焼けつくようなカナメへの想いも心の奥底に沈めたまま、これから一人で生きていかなければならないのかと思うと途方にくれた。

* * *

嬉しかったことよりも、怖かったり悲しかったりした記憶の方がより強く長く残るのはどうしてだろう。眺めがいいからと座らされた遊覧船の船端で怖くて固まっていたことや、知らない小母さんにいきなりきつく注意されて悲しくて泣きたくなったことなんかを、いつまでもいつまでも覚えている。生きていくうちに、人は心の中に一つ一つ看板を立てていくからなのかもしれない。「危険につき立ち入り禁止」と

(第18話 鎮魂歌 - レクイエム - 終了)

第19話 地球へ(1)

「ねえ、アグニシティにあの地球人が来てるって聞いたんだけど、どこなの？」

地震の救援で駆けつけてくれた人の中に一際目立つ金髪の騒々しい美女が一人紛れ込んでいた。

「アーマルターシュ、地球人に何の用だ？」

ニシキギは眉間に皺を寄せる。

「情報が必要だからに決まってるでしょ？ 地球に行くことになったのよ！」

「地球に？」

ニシキギはぽかんとする。ラークスパーの説教はどうしたんだ？

「ほどほどの島を買い取って、そこを足掛かりに地下都市を造るのよ。ああ、そうだ。アオギリにも会わなきゃいけないわ。で？ その地球人ってどこにいるのよ」

「騒々しいやつだな」

ニシキギは倒れたスチールを片づけながら舌打ちした。

「まずは後片付けを手伝ったらどうだ？ その為に来たんだろっ？」

そうニシキギが毒づいたところに瑞樹がやってきた。

「あの、ニシキギ？ コブがエリアEで呼んでるけど……」

アーマルターシュは瑞樹を見ると親しげに近寄ってきた。

「あなたー、ナンディーに帰りたいって言ってた子でしょ？ アグニシティに来ていたの？ 災難だったわね。私のこと覚えてる？」

瑞樹は記憶の糸を慌ててたどる。これはディムの記憶だったかな。

「えっと……地球に行きたがっていた人……かな？」

瑞樹の答えにニシキギの目が細くなる。

「そうよ！ 地球に行けることになったのよ、堂々とね」

アーマルターシュは胸を張った。

「私はアーマルターシュ、あなたは？」

「私は、瑞樹ですけど……」

「瑞樹は何が得意分野なの？　これだけ早く目覚めさせられてるってことは何か特殊な能力があるんでしょ？」

アーマルターシュはわくわくした顔で瑞樹を見つめた。

「いや、あの、私、目覚めさせられたわけじゃないので……」

「何言ってるの？」

アーマルターシュのテンションがやや落ちた。

「こいつがお前の探している地球人だ」

ニシキギが割って入った。

「って、何言ってるのよ、あなた地球を知らなかったじゃないの！　しかも治療水槽にいたのはこんな子じゃなかったわよ……」

アーマルターシュは瑞樹が分解再生されていることを知らない様子だった。

「あの時は、記憶をなくしてたんで……」

アーマルターシュの勢いに押されて小さくなる。

「なんですって？　で？　記憶は戻ったの？」

「ええ、はあ、まあ、一応」

「瑞樹！　色々教えてほしいことがあるのよ、あなたを探していたの！」

アーマルターシュのテンションの高さに瑞樹はアップアップしてくる。ニシキギは溜息をつきながら逃げるように出て行った。

「私たちは地球にも地下都市を造りたいと思っているの、アグニシティよりも大きな地下都市よ。もちろん、地球にある既存の国とはトラブリたくないから、異質な文化に寛容な国の近くがいいとは思ってるのよ。それで、アブナイ国、例えばすぐ他の国を欲しがる国とか、異質なものは排除したがる国とかなにかと他国に干渉したがる国とかを教えてよ。あと、島の買い方と、それから……」

アーマルターシュの質問は難問奇問で、受験用の勉強しかしてい

ない日本の高校生に太刀打ちできるものは一つもなかった。

「あのあの、通貨は国によって色々なので……」

瑞樹はしどろもどろに答える。

「私たちは通貨なんて持ってないわ。通貨を使わずに島を手に入れたいのよ！」

「それなら、今は金とかプラチナとかの価値が上がってるって、二ユースで言ってたような気がするんで、そのようなものを用意したらいいんじゃないかと……」

「金とかプラチナかあ、そうね、拾ってきてもらっわ」「拾ってきてもらっ？」

瑞樹は鳩に豆鉄砲状態になる。

「前に、カナメがマンガン鉱を小惑星帯で見つけたって言ってたわ。金とかプラチナとかその他の金目の物を拾ってきてもらっことにしましょう」

アーマルターシュは非の打ちどころのない美しさで微笑んだ。

「はあ……」

海賊船の船長みたいだ。瑞樹はあつけにとられる。

瑞樹の知識不足はあつと言う間に露呈され、あなた役に立たないわね、いいわ、この前採取したヨーロッパの学者の記憶を見るからとか、あの政治家が詳しいからその人の記憶を見るわとか言われ、あつと言う間に瑞樹はアーマルターシュの使いぱしりに降格された。

そんな人たちの記憶を採取してるのなら、なにも私に訊く事ないじゃんと絡んでみたけど、アーマルターシュは瑞樹のことを鼻でせせら笑っただけだった。でも、ある意味、アーマルターシュにこき使われることは瑞樹にとってはありがたいことに違いなかったのだ。

何も考えずに体を動かしていれば泣かずに済む。ここにこうして
いる自分のことを何も考えずに済む。ひどく慌ただしくてひどく安

らかな喧噪の中で、アグニシティの復興は急ピッチで進んだ。

「瑞樹、足元、気をつけて！ ほら手を」

イベリスはとても優しい良い人だ。

この人も私と同様、アーマルターシュにこき使われている一人だ。この優しさに付け込まれるんだろうなと瑞樹は考える。

ナンディーに帰還するシャトルに乗り込みながら、瑞樹はカナメを目で追う。あれから、記憶を返してくれたあの日から、カナメと話す機会が全くなかった。お互いに忙しかったのもあるし、もうこれで自分はこの人と繋がりが、少なくとも表面的には無くなったのだと思うと、話しかけるのに気おくれがした。

「瑞樹、ベルトを締めて。できる？」

瑞樹は少々あきれてイベリスに頷く。ベルトぐらいしめられますよ、子供じゃあるまいし……。

隣にイベリスが座って通路を挟んだ隣にニシギが座って、その隣にカナメが座っていた。小型のシャトルは満員で、空調が追い付かなくてむっとしている。

ほどなくして、シャトルは開口したアグニシティの出口から飛び出した。瑞樹は窓際の席で外の景色を凝視する。火星地表上にナスカの地上絵のような進入口。初めて見た時と同じだ。ナスカの地上絵も、もしかしたら本当に宇宙人が描いたのかもしれないと思う。

「ねえ、イベリス、何か飲み物取ってきてよ」

安定飛行に入っすぐ、後ろの席に座っていたアーマルターシュがイベリスの座席をつついた。はいはい、と言いながらイベリスが席を立つ。

「瑞樹も何か飲む？」

瑞樹は窓の外を覗きこんだまま首を横に振った。

「俺の分を頼むよ、イベリス」

隣のニシキギが顔に乗せていた読み物もとらずに手を挙げた。

「了解」

イベリスは気持ちの良い返事を残して前方に泳ぐように進んだ。

イベリスが去って空いた席にニシキギが移ってきた。

「おい」

窓を覗き込んでいた瑞樹にニシキギが話しかけてくる。

「お前、記憶は本当に全部戻ったのか？」

ニシキギの声がすぐ隣で聞こえて、瑞樹はびっくりして振り返った。ニシキギの肩越しにカナメが目を閉じて眠っているのが見える。

「うん、たぶん……」

「いつの記憶から戻ってる？」

ニシキギの問いに瑞樹は固まった。

「いつって……なんで……」

瑞樹はうろたえる。

「地球にいた頃の記憶は戻ってるのか？」

瑞樹は首を縦に振って肯定する。

「もつと前は？」

「……あの？」

この人は……気付いている？

「質問に答えろ」

ニシキギは不機嫌そうに言った。瑞樹はニシキギの顔を見つめたまま固まってしまう。

この人は……あの時、ガイアエクスプレスの地下都市の駅で、ずっと待っていてくれたのだ。アール・ダー村を飛び出して、いつ着かわからない私を……いや、違う、それは私ではない。ディモルフオセ力を待っていたのだ。

私は、この人とデイモルフオセ力が会えなかった理由を知っていた。

初めて乗ったガイアエクスプレスはひどく揺れて、具合が悪くなった。荷物用の貨車だったのが悪かったのかもしれない、それでも具合が悪くなった。ハデス駅に着いた時デイモルフオセ力はふらふらで立ち上がることもできなくて、折り返し始めた列車から慌てて転がり落ちるように下車した。頭をしたたかに打ちつけて、その場でしばらく気を失っていたのだ。

もし、あの時デイモルフオセ力の具合が悪くならず普通に列車から降りていたら、彼女はこの人に会っていたに違いなかった。

どうしたかったかとデイモルフオセ力に聞けば、別にあの時この人にどうしても会いたかったわけではないと言うに違いなかったけれど……あの光に満ちたアール・ダーを追われた彼が、自分の為に時間を割いてくれたということ、彼女は切なく申し訳なく思っているに違いないと、私は確信できた。

自分のことであるかのように……。

「……ごめんね」

涙が溢れた。

「……何を謝ってるんだ、お前は？」

ニシキギの声が掠れた。

「……投げ飛ばして、ごめんなさい」

嘘をついた。ニシキギは一瞬むとした顔をした。

「……謝らなければならぬようなことはするな」

瑞樹はうん、うんと泣きながら頷いた。

強情な奴、と舌打ちするような声が聞こえたと思った、びっくりして顔を上げると、ニシキギは瑞樹の目の端で結んだ涙を自分の唇で吸い取った。

「な、なにをするの？」

弾かれたように瑞樹は体を引いて窓に頭をぶつける。

「鬱陶しいから、泣くな」

ニシキギは不機嫌に言った。不機嫌な声とは不調和な心の中を見通すようなニシキギの瞳に瑞樹は竦んでしまう。ニシキギは無言でもう一方の涙も唇で吸い取る。

「やめて」

瑞樹は弱弱しく抗議する。

「やめて欲しかったら泣かないことだな」

ニシキギは意地悪そうに笑うと自分の席に戻った。

入れ替わるようにしてイベリスが戻ってくる。アーマルターシュとニシキギに飲み物を渡すと自分の席に着く。

「瑞樹？ 泣いてる？ どうしたの？」

イベリスは驚いて瑞樹を見つめた。瑞樹の周りに透明な水球が散らばっている。瑞樹は慌ててそれをかき集めて、ハンカチで吸い取った。涙をかき集めるのってなんだかすごくまぬけだと瑞樹は思う。

「なんでもない」

瑞樹は窓にもたれて目を閉じた。

イベリスがアーマルターシュに何があったのか聞いているのが聞こえた。アーマルターシュはニシキギが泣かしたらしいと興味なさそうに言っていた。

カナメは閉じていた目を薄く開いて隣のニシキギをちらりと見た。カナメは心の中で溜息をつく、そうだな、こいつの方が僕よりもずっと前からデイモルフオセカのことを知っていたんだな。そして地下都市の暗闇の中で待ち続けていた。

イベリスに問われて、なんでもないと目を赤くして小さく笑ってみせる瑞樹の横顔をカナメは見つめる。

あの顔で、あの声で……。でも別人で……。カナメは溜息をついた。

ナンディーに戻ってからは、あつという間に地球に戻る日取りが決まった。アーマルターシュがブルドーザーのように諸々の作業を片づけて行ったので、地球に行く日程はものすごいスピードで固められていった。

「お前、本当に地球に帰っちまうのか？」

ナンディーに戻ってからニシキギは幾度となく瑞樹に問いかけた。しかめっ面で。

戻ったって苦勞するだけなのにとニシキギは言った。帰っても自分のことを日向瑞樹だと誰も認めてくれないかもしれない、事態は簡単ではない、それは確かなことなので瑞樹は否定はしないが、このまま両親に会わずにいるのは、もっと考えられないことだった。

地球に帰る、それはすぐ安堵感を覚えることだったけど、ナンディーを去る寂寥感はそのに勝るとも劣らないもので、瑞樹は忙しい作業のふとした合間に憂鬱になることから逃れられないでいた。

「瑞樹、また戻ってきてよ。絶対だからね」

ミントが涙を浮かべて言った。

「うん、絶対また来るよ」

どうしたら戻れるかなんてさっぱりわからなかったけれど、でもその気持ちに嘘はなかったので断言する。

気分が沈むとついつい何もかも放り出してエリアEに来てしまう。ここは穏やかで、光に溢れていて、温かい。アール・ダーとも地球とも何かが決定的に違うと思いつながら、ここもやはり心安らぐ場所だと改めて思う。アレオーレがクルクルと纏わりついて来る。

『瑞樹、瑞樹』

歌うように呼びかけられてすっかり嬉しくなる。

この子も地球では生きていけないのだ。この子はハルの子で、太陽の強い光を浴びて暮らせない。

湖に行ってみた。初めてアレオーレと会った湖。あの時は混乱し

ていたなあと思う。今も混乱しているけれど……。あの頃の混乱が見ず知らずの家に上がり込んでしまった時の混乱だとしたら、今の混乱は散らかった自分の家で片付けなければならぬ物の多さに途方に暮れている時の混乱だと思う。どちらにしても、どこから手をつけたらいいのかわからないというのが共通している。

ムラサキさんはあれから瑞樹に話しかけてこない。この前なんてまるで知らない人のように挨拶をされた。やっぱりムラサキさんは別人になってしまったのだと思う。

問題がなんだったのか、その問題は解決したのか、それが訊きたかったのだけど……。なんのことですか？ と美しい瞳で覗きこまれて、結局それ以上何も訊けなかった。

私は一体誰なんだろう。

日向瑞樹ではなく、デイモルフオセ力でもなく、地球とハルと二つの惑星を抱いていて……。自分にとっての問題はまさにそれで……。混乱する。

このまま地球に帰って、自分は生きていけるのだろうか。姿だつてこんなに変わってしまつて……。ママもパパも自分が瑞樹だと気づいてくれるだろうか。

ブラキカムは瑞樹に元の姿に戻すことができないと言った。でも、もし、元に戻すから分解すると言われたとしても、それを瑞樹が受け入れる気になるかどうかは極めて不透明で……。限りなく否定的だ。なのに瑞樹がそんな気持ちでいることは知らずに、ブラキカムはすぐく申し訳なさそうに謝った。

私の外側、私の内側……。私の内側を見せることはできない。大切なことは目に見えない……。唐突に、そんなフレーズが思い浮かんだ。

(**)それから王子さまは、キツネのところに戻った。

「さようなら」キツネが言った。「じゃあ秘密を教えるよ。とてもかんたんなことだ。ものごとはね、心で見なくてはよく見えない。いちばんたいせつなことは、目に見えない」

「いちばんたいせつなことは、目に見えない」忘れないでいるために、王子さまはくり返した。

「きみのバラをかけがえのないものにしたのは、きみが、バラのために費やした時間だったんだ」

「ぼくが、バラのために費やした時間……」忘れないでいるために、王子さまはくり返した。

「人間たちは、こういう心理を忘れてしまった」キツネは言った。

「でも、永遠に責任を持つんだ。きみは、きみのバラに、責任がある……」

「ぼくは、ぼくのバラに、責任がある……」忘れないでいるために、王子さまはくり返した(**)

(**)星の王子さま(サン＝テグジュペリ著河野万里子訳)より

瑞樹は大好きだった「星の王子さま」の一番好きな場面を暗唱した。母が何度も何度も繰り返し読んでくれた物語。これが、こんなに泣ける、心にしみる話だったなんて思わなかった。ただ王子さまのかわいいイラストと真実を探求する王子さまのひたむきさが、なんとなく気に入っていた。

デイモルフオセカが費やしてきた時間、日向瑞樹が費やしてきた時間、二人の費やしてきた膨大な時間が私を形作る。ならば、私はどこにも行けないんじゃないだろうか、ハルにとどまらず、地球にとどまらず、二つの惑星の間で揺れている。こんな重い現実、責任をどうやって持てばいいのか……。途方に暮れる。

第19話 地球へ(2) 最終話

「その物語、聞いたことがあるよ」

突然、後ろで声がして驚いて振り返る。カナメが立っていた。

「帰ってきたんですか？」

カナメもニシキギも小惑星帯に行くことが多くて、ナンディーに戻ってからカナメには全く会っていないかった。

「うん、帰ってきた」

カナメはにつこり笑う。

「さっきの物語をどこで聞いたんですか？」

ハルにも「星の王子さま」という物語があるんだろうか？

「アグニシテイのエリアEで、君を根っこに包み込んでいた苗木が語ってた。あの後、キツネと王子さまは別れたんだね」

「王子さまは旅をしていたから……」

瑞樹は微笑む。私の記憶だったのかと気が抜ける。

「旅か、いいね。僕も暇になったら旅に出ようかな」

カナメはのんびりと微笑んだ。

「こんなところまで旅してきたのにまた旅に出たいんですか？」

瑞樹は呆れてカナメを見上げる。

「ああ！ そうか。旅って言えば旅だね。でも僕にとっては敗走だったから……」

カナメは苦笑する。

「カナメは……地球には行かないの？」

一番訊きたい事だった。

「そうだね……当分は行かないと思うな」

「どうして？ 当分ってどれくらい？」

胸が締め付けられるように苦しかった。瑞樹は掠れた声で問いかける。

「さあ、どれくらいか分からない。他にやることがいっぱいあるからね」

カナメは小さく笑う。

瑞樹は動揺する。もう会えないかもしれないんだ。だってカナメの当分なんてどれくらいかわかるわけがない、この人は気が遠くなるほどの長い時間を生きてきた人なのだというのを、瑞樹はデイモルフオセカの記憶で、今は知っていた。

「ああ、そうだ、これムラサキから預かった。君に渡してほしいって」

きれいな包み紙に包まれたその中には色とりどりのキャンディーが入っていた。瑞樹は目を見張る。

「君は知らないと思うけど、ムラサキ先生は生徒を割りと甘やかす方でね、課題とかテストでいい成績をとると、そのキャンディーをこっそりくれるんだ」

知っていた、その話をハルで……同じ声で同じセリフで同じ人から……聞いた。瑞樹は胸が一杯になる。

「それは……つまり、私が課題をクリアしたということ？」

「クリアしたというか、そもそも簡単にクリアなんてできない問題だったというか……」

カナメは言葉を濁した。さっきのムラサキを思い出す。

「カナメ、これを瑞樹に渡してもらえますか？」

ムラサキはご褒美のキャンディーをカナメに託した。

「こういうものは自分で渡した方がいいのではないですか？」

カナメは肩を竦める。

「私では無理なのです。私は人の心を分析することはできませんが、人の心を開くことはできません。これはあなたにお願いします。そして瑞樹は難しい課題によく立ち向かったと私が言っていたと伝えてください」

「あなたは瑞樹の心を開いたと思いますよ」

そうでなければ、瑞樹はニシキギを投げ飛ばしなどしなかっただろう。カナメの言葉にムラサキは肩を竦めて小さく微笑んだ。

「それは私の前任のムラサキがやったことです。私には、ムラサキ055号が機能停止直後に発信したメッセージを理解することができませんでした」

「メッセージとは？」

「瑞樹を利用したくないというメッセージでした」

カナメは目を見開く。

目的を達成する為には人間でも利用する、ハルのエクソダスプログラムにおいて、それはかなり高度な強制力を持つ命令のはずで……。それをアンドロイドが拒否するということは普通ならばありえない。

「そんなムラサキ055でさえ、あなたの心を開くことはできませんでした。私たちの声は、あなたに届いていないようでした。それなのに瑞樹の救いを求める声はあなたに届きました。だからこそ、あなたは、彼女の為に立ち上がったのではなかったですか？」

ムラサキは静かな眼差しでカナメの瞳を覗き込んだ。

カナメは居心地悪そうに眼をそらす。

「瑞樹は問題を解決したのですか？」

カナメはムラサキを見つめた。

「この問題は、当然、一人の人間に解決できるものではなかったのです。彼女は単なる足がかりに過ぎませんでした。でも結局、我々は彼女を利用することなくプランEを終了し、プランFに強制移行することに決定しました。これから起こるであろう混乱から生じる怒りの矛先を我々は甘んじて受ける覚悟です」

ムラサキはカナメを穏やかな眼差しで見上げた。

「正確には、あなたと彼女を引き金にするはずだったのです。でもそれをハルが止めました。そんなことにあなたたちを利用してはいけないと警告する為に、あれは現われたのかもしれませんがね」

ムラサキは複雑な表情で微笑んだ。

「なんのことですか？」

カナメはさっぱりわからないという顔で問い返す。

「デイモルフオセカ・オーランティアカとデイモルフオセカ・グラブラが同一人物だと通報したのは私であり、メインコンピューターナンディーであつたのです」

カナメは瞠目する。

「ミズキ・ヒュウガを無理やりこの船に招いたのも我々です。彼女が包含しているものに私たちはすぐに気が付きました。驚愕しました。こんな言葉を、私に当てはめてもいいのか判断がつきかねますが、それ以外に表現ができない感覚でした。これは天の配剤だと、プランFへの移行のきっかけであると、そう思いました」

「プランFってなんなんですか？」

「我々の管理の終りです。これからは、あなたたち人間が判断して未来を切り開き、自分たちで自らを導くのです。私たちはあなたたちをハルから脱出させ、新天地に定着させる為に作られたプログラムでした。プログラムはここで終わりです。ここからは、すべての判断を人間に委ね、我々はサポートに回ります。我々を利用するもよし、排除するもよし。我々はできるなら穏便に利用されることを望んで瑞樹を巻き込んだのです。我々には我々自身を守るためのプログラムも組み込まれていましたから……」

「それと瑞樹がなんの関係があるんです？」

「私たちは、あなたたち人間をエクソダスの為に利用してきました。用途は異なっていたとはいえ、それは森の民にしても、ファームの民にしても、もちろん一般人にしてもそれは同様だったのです。あなたも再生される度に荒んだ目をするようになっていましたっけね」

ムラサキは淡く笑んで続けた。

「ハル脱出の為に、私たちは三つの種族の間に明確な線引きを行いました。効率よく脱出するためだけの線引きだったのです。扱いの違いから、それぞれの種族間には偏見もわだかまりも差別もあるこ

とを承知しています。プログラムが終了するということはこの線引きも消滅するということです。制度としてそれが消えても、それぞれの心の中にできたであろう溝を埋めることは容易いことではないでしょう。これからどうするのか、人間たちで考えてもらうつもりでした。一番虐げられてきたと感じている種族が反乱を起こすかもしれないし、いきなり三種族が和解するかもしれないし、三種族の間の溝がさらに深まることもあるかもしれないと予測しています。厳しく線引きを取り締まる立場にあった我々に、怒りの矛先が向かうことも当然予測されていました。ですから、あなたたちの婚姻はもつとも良い議論の対象であると判断したのです、穏便に線引きを解除する為の。あなたはファームの民とも心をつないでいましたしね。あなたのように森の民とファームの民と一般人が共に手を携えて生きていくことは良いことだ、少なくとも悪くはないと思ってもらう為の議論が展開されることを我々は期待したのです」

「……やはり、デイモルフオセカが森の民だと知っていたんですね」
カナメは憮然と呟く。

「トウキ001が森の民の力を検出し、その力を効率的にコントロールできる機能を持っていたことは知っていますか？」

ムラサキの言葉にカナメは目を見開く。

「いや……」

トウキ001は、かつてカナメの友人だったアイリスの世話係のアンドロイドだった。アイリスを死なせたアンドロイド。苦い気持ちでカナメは黙り込む。

「トウキ001だけが持っている特殊機能なのです。あれはその他にも色々な機能を持っているのです。メインコンピュータでさえ開くことのできないファイルがあるようです。すべて、彼がアール・ダーで獲得した機能なのでしょう」

その特殊能力を授けたのはアイリスだったのかもしれないと、カナメは思いついて切なくなる。

アイリスはトウキを愛していた。トウキはアイリスのことをどんな風に考えて……いや、認識していたのだろうか？ 人間の感情を察知することはできても、アンドロイドに、トウキには感情がないはずだ。

「……ならば、何故……」

その先を訊くのは不毛だと悟る。聞かずと知れたこと、要は利用するためなのだ。何もかも。アイリスにしてもディモルフォセカにしても瑞樹にしても、当然、僕にしても。

「議論の……対象ですか……」

カナメの心の中に、やり場のない鈍い怒りが湧き上がっているのをムラサキは察知して苦笑する。

「私たちはただのプログラムに過ぎません。そんな風にあなたが心良く思わないということを推測できても、任務の遂行の為にはやらざるを得ないのです。許してください」

ムラサキの謝罪を驚いたように聞いて、カナメは一つの時代が終わりを告げたのだということを実感した。

ハルを脱出する、その目的だけの為に多くの者が犠牲となり、多くのことが大きな力によって本来あるべき姿から撓められてきたのだという事実を、カナメはひどく重く感じていた。

歪みから生じる諸々の、これから起こるであろうことを考えると、のんびり旅を楽しめるようになるまでには、まだまだ時間がかかりそうだとカナメは苦く笑う。

瑞樹は小さな紫色のキャンディーを一つ口に入れた。それはとても良い香りがして、口の中で雪のようにふわりと溶けた。後に残る切ないくらいの甘い味……。泣きそうになるのをぐっと堪えた。

この人に、私はなんと言えはいんだろうか。あなたの奥さんの記憶を持っています……。そんなことを言っただうするの？ 記憶は記憶に過ぎない、私はどこまでいっても私だ。例えこの人をどん

なに恋しく感じたとしても。

気分を変える為に発見して嬉しかったことを口にする。

「私、いいこと気づいちゃったんだー、私の家の隣に住んでる正樹ってお兄ちゃんがいるんだけどね」

「ああ、一度、君の記憶の中で見たことがあるよ」

カナメは微笑んだ。

「正樹ちゃんて、イブキに似てるなーって」

嬉しそうに言った瑞樹の言葉に、しかしカナメは凍りついた。

「今……なんて？」

「へ？ だからイブキに似てる……」

瑞樹ははっとして口を押さえる。日向瑞樹がイブキを知っているワケガナイ、瑞樹はうるたえる。

「記憶は完全に戻ったと言ってたよね」

カナメは瑞樹の手首を捕まえた。

「……戻りましたよ、完全に……」

瑞樹は観念して呟く。

「どこから？ いつの記憶から戻ってる？」

カナメは言ってから、はっと気づく。アグニシティから戻るシャトルの中でニシキギが訊いたことと同じだ。ニシキギは気付いていた？

「初めて……アール・ダーのオーランティアカの家に着いたところから……」

「……そこで君は何をしていた？」

カナメは喘ぐように問う。

「泣いてた……ずっと泣いていたら、アリッサムが部屋に入ってきて、なんで泣いてるのかと訊いた。私はパパとママがいなくなったって言った。そうしたらアリッサムは私を階下に連れて行ってくれて……そこにはオーランティアカのパパとママがいた……」

アリッサムはディモルフオセカの姉だ、アール・ダーでの。

「もういい、わかったから！ わかったから……」

カナメは瑞樹を抱きしめた。

カナメはデイモルフオセカのその記憶をハルの地下都市で見たことがあった。デイモルフオセカの記憶を瑞樹が一人称で語ったことに愕然とする。

「どうしてすぐに言わなかったの？」

「言ったらどうなるの？ デイムの記憶が瑞樹の記憶かを消すの？」
カナメは抱きしめた腕に力を入れる。

「嫌だったの、どちらが消えるのも嫌だったから……」

だから二つの惑星を抱きしめたまま生きていこうと決めた。

「人は……その人がその人であるいうことを確認する時、何で判断するんだろっ、顔？ 性格？ やっぱ記憶も入るよね。だったら、私は日向瑞樹でもデイモルフオセカでもない、別の誰かってことになるのかな？」

瑞樹は俯いた。デイモルフオセカの顔を持ち、日向瑞樹とデイモルフオセカの記憶を持つ自分、これは一体誰なのか、これが私の混乱だった。

「こんなに混乱したままで地球に戻るつもりだったの？」

カナメは腕を解き、瑞樹の瞳を見つめて静かに訊いた。

「……私は、理由を知りたかった」

木々の梢を見上げながら瑞樹は言った。

「理由？」

「物心ついたときからずっと思ってた、私のこのどうしようもない人生は、きっと何か理由があって、こんな風なのに違いがないって理由が知りたかった。そしてここに来て、ハルとデイモルフオセカをここに届けるのがその理由だったのかもしれないって思った。もしたら、今のこの状況はどうしてなんだろうって、また理由が知りたくなった。星の王子さまみたいに、実際に苦労して探して回らなければ真実は見つけることが出来ないのかもしれないって思った。だから私は地球に戻るんじゃなくて、地球に行くの……」

瑞樹はカナメを見上げた。

私の記憶の中で、この人は最愛の配偶者だった。森の民で、地下都市のことなんか何も知らない、何が安全なことなのか危険なことなのかも区別できないほど無知な私を、常に抱きしめて守ってくれた。この人と費やした時間は、甘やかで切なくて息苦しくなる。

「……そうか、君がそう言うんならそうなんだろ……ね」

しばらく切なげに瑞樹を見つめていたカナメは何かを振り切るようにそう言って、瑞樹の額にそっと口づけた。

「でも瑞樹、忘れないで、僕はいつも君と居るよ。どんなに離れていても君の傍にいるから。僕たちは出会った。ハルの闇の中で、エリAEの光の中で……。どんなに時を場所を隔てても、また僕は君に会うよ、きつとね」

まるで解けない魔法にかかっているみたいだと瑞樹は思う。なんという甘やかな魔法。

* * *

「本当にあのまま行かせちゃったのか？」

ニシキギが呆れたようにカナメに問う。

「うん」

カナメは小型シャトルを改造して大質量を運べるピギーバックを取り付けるのに苦心していた。

「よく分からんな、あんたたちは」

「別に分かってもらおうと思ってないけど……」

ガガガという音とともに火花が散る。

「あいつはトロいから、事故に遭うかもしれんぞ。地球は事故が多いらしいからな」

「それはどこにいたっておんなじだろ？」

むしろこれからのハルの方が事件は多いかもしれないと、カナメは心の中で溜息をつく。

「両親に自分の娘だと気づいてもらえなくて、その辺で行倒れるかもしれないじゃないか」

「何とかなるだろう」

瑞樹の国は比較的安定している国だ。行倒れることはないだろうと思っただけで帰らせた。

「それに、すぐに誰かのものになっちゃうかもしれないぞ？ 割とかわいいし……」

ニシキギは言ってから何故か咳払いをした。

「それを瑞樹が望むなら構わないよ。幸せになればいい」

カナメは手を止める気配さえない。ニシキギは舌打ちをした。

「あんたは心配じゃないのか？」

「おんなじ太陽系の中にいるんだよ。僕の掌にいるようなもんじゃないか」

言い放ったカナメにニシキギは盛大に顔を顰めた。

「俺は、あんたのそういう神様気取りなところが大嫌いなんだ」

「ねえ、君も金星に行かないか？」

ニシキギの悪態を意に介さずカナメは問う。

「金星？」

ニシキギは低く唸る。

「この前、小惑星帯からマンガン鉱をたくさん確保してきたって言うただろ、あれをこれに積み込んで、金星にぶつけるんだ。太陽から近いから光を遮るようなフローティングシティも造るといいんだが、アオギリが地球に攫われて行っちゃったからなあ。でもまあ、なんとかなると思うんだ」

「何の話をしてる？」

ニシキギは眉間にしわを寄せる。

「無論、テラフォーミングの話だけど？」

カナメは不思議そうな顔で答える。

「金星をテラフォーミングなんて一体どれだけ時間がかかると思ってるんだ？ おい、金星に行くんなら、あんたがあいつを地球に連れて行けば良かったじゃないか。そうすれば、こんなに慌ただしく帰らなくても良かったのに……」

「そんなことアーマルターシュが認めないに決まってるだろ。それに時間はたくさんあるんだ、金星を千年くらいでなんとかしてみせようか、賭けるか？」

カナメは楽しそうにニシギを見つめた。

「俺も金星に行く。途中で地球へ寄ってくれ。俺があいつの様子を見て来る。行倒れてたら回収してくる」

「じゃあ、金星行き決まりだね」

カナメは破顔した。

そろそろ瑞樹が乗った船は月に近づくころだろう。カナメは地球がある方角に向かって目を細めた。

——デйм、僕は未来へ行くよ。君との約束を守るために。君が見れなかった明日の光を見るために……。

* * *

「月だあ、月だよなあれ」

瑞樹は船窓に張り付いて叫ぶ。

「瑞樹、こっちのテキストはもう見たの？」

地球上にあるあらゆる国の歴史や政府や体制や地理や民族のテキストを、地球に着くまでに頭に入れると大脳コンタクトで勉強させられていた。大脳コンタクトを使うと確かによく頭に入るし効率はいいんだけど……疲れる、ひたすら疲れる。

月の隣に見えている青い地球をぼんやりと眺める。

「やつぱ、きれいだよ……ね」

地球への思慕、ハルへの愛惜、二つの感情の波が押し寄せる。

「瑞樹、EU原加盟国と現加盟国を答えなさい」

アーマルターシュの目が鋭く光る。

「えっと……原加盟国は……ドイツ、フランス、イタリア、オランダ……えっと、えっと」

答えに詰まる瑞樹に、アーマルターシュのガミガミ声が降ってくる。アオギリがアーマルターシュを、まあまあ、とだめめている声がぼんやりした頭に入ってくる。

アーマルターシュを見てみると、以前叔母が言っていたアニメを思い出す。叔母が子供のころに夢中で見ていたというアニメ。

地球が放射能に汚染されて、それをきれいにするための機械をとりにくるようにと言われて、宇宙船で旅に出るというお話。その機械の名前は「コスモクリーナー」。

英語で言われるとなんだか凄いものを取りに行くんだなって思ったのよ、当時はね、と叔母は言った。『宇宙掃除機』なんて日本語にしたら、なーんだって思うよねー。叔母のむくれた表情がかわいかった。大人なのにつて。

たぶん、私もコスモクリーナーを持って帰ってるんだと思う。

アーマルターシュはカナメから分解再生装置をこっそり送ってもらう約束を取り付けていて、地球上のゴミと言うゴミを引き受けて……当然引き受けるからには料金を取るつもりらしい。格安でらしいけど。そしてそのゴミは分解されて地下都市を造る材料になるらしい。資材に腐心する必要がないかもしれないとホクホクしながら計算機を叩いていた。

なら、料金取るなよって気がするな。怖いから何も言わないけど。

コスモクリーナーと、口は悪いけどメチャメチャ美人の掃除婦を連れて帰ります。地球のみなさん待っててくださいね。瑞樹は青い地球を眺めながら小さく呟いた。

* * *

すべての生物は設計図を抱いている。その複雑極まりない設計図を^{へんげ}変化させながら命は未来に紡がれてゆく。何故か。その理由を探すために、生きて、生きて……命をその先の未来に運んでゆくのだろう。行き着いた先には何があるのだろう、絶滅か、無限に拡大していく未来か、光か、闇か。

神様の水槽……なのかもしれない。ゆったりと回る青い地球を楽しそうに、あるいは憂いながら神々が覗き込む。彼らは決して手を下さない。見守るだけだ。だからこそ、生きとし生けるものは、すべて等しく自らを救って生きていくしかないのだろう。それぞれの真実に辿り着くために

宙の船 流転の岸（了）

第19話 地球へ(2) 最終話(後書き)

最後まで読んでくださった皆様、本当にありがとうございました。
招夏(拝)

番外編 ニシキギの地球訪問

「おかえりなさいませーご主人さま!」

黒っぽいワンピースにフリルのついた白いエプロン、茶色い髪に、やけに大きな目をパチパチとさせた女の子がにっこり笑ってそう言った。

ニシキギは唖然とすると、一旦ドアを出て店の看板を確認してから、その女の子と再び対峙した。

「ご主人さま、日本語は話せますか? Speak Japanese
se?」

女の子は不安そうな顔でそう言った。

「話せる」

日本語の疑問形と英語の命令形に目を白黒させながら、ニシキギはポツリと言った。

「ああー良かった。日本語が通じなかったら別の人を呼んでこなければならなかったのです。ご主人さまが日本語できて良かったです。早速、ご案内いたしますね」

女の子はメニューを準備するといそいそと客席へとニシキギを案内した。

「ご主人さまはどちらからいらしたのですか?」

「ハルだ」

「ハル？ それは北欧の方の国ですか？」

一瞬、張り付いたような商業スマイルが払拭されて、きょとんとした無防備な顔が現れた。瑞樹と同じくらいか、もう少し上か…。普通にしていれば、愛らしい。

「まあ、そんなところだ」

？マークを頭の上に三つくらい付けた様子で首を傾げる彼女に、ニシキギは小さく笑んだ。

* * *

「だって……瑞樹の様子を見に行きたいって言ったのは君だろ？」

カナメは紅い瞳を悪戯っぽく輝かせながらそう言った。

「だからって、なんでそんな所に寄り道してから行かなきゃならないんだ？」

「郷に入らば、郷に従えって言うだろ？ 地球のことを知り、日本のことを知らなければ、瑞樹が大丈夫かどうかなんて分からないじゃないか。大丈夫そうに見えたって、瑞樹は辛いと感じているかもしれないし、逆に大変な目に遭っているように見えても、それが瑞樹の国では当たり前のことかもしれないだろ？」

カナメはもっともらしくしかめっ面をして説明する。

「なんで食事をとるところまで指定してる？」

ニシキギはカナメから手渡された計画書を睨みつける。

「評判の店らしいんだ」カナメはにやりと笑った。「小型の分解再生装置を渡すから、サンプルを採取してきて欲しいんだけど」

「勝手にサンプルを採ってもいいものなのか？」

胡散臭そうにニシキギは眉間に皺を寄せた。

「確認してから採取してくれ」

「デザートまで注文しなきゃならない理由は？」

「理由はない。君に任せるよ。でも瑞樹が食べたい時にここでも食べられたら安心すると思うんだけど……」

カナメはニシキギをちらりと見つめる。そんな様子のカナメを見てニシキギは顔をしかめた。

——こいつ……一言目には瑞樹だったとか、瑞樹が喜ぶとか、瑞樹が悲しむとか、言いやがって。

ニシキギは心の中で悪態をついた。

——この男を、見かけどおりの年齢だと思って話していると痛い目にあう。

ニシキギはこっそりため息をつく。

カナメの分解再生回数は九回だと聞いている。全部が全部、寿命まで生きたとは言えないだろうが、人の寿命のほぼ九倍を生きているという計算になる。どうみても二十代後半にしか見えない彼だが、その深い緋色の瞳がその長い年月を生きてきた証だ。

つまり、平たく言えば、老獪な爺であるのだが……。なんなんだ？ この子供みたいな瞳の輝きは！

ニシキギは盛大に溜息をつくとかナメの計画書に同意した。

ニシキギがこの計画書どおりに実行しないのならば、イベリスを代わりに行かせるとカナメが涼やかに宣言したからだ。

当然のことながら、老獪な爺は人の足元を見るのがうまい。

* * *

「じゃあ、ご主人さまも一緒に言ってくださいね。ハイ、まっぜ、まっぜ」

ニシキギの目の前でメイド姿の女の子は『まぜまぜお月見ナポリタン』を混ぜ始めた。

ニシキギは眉間を指でつまんで溜息をつく。

瑞樹が住んでいる街まで行くのに便利だからと、秋葉原でトウキと別れた。カナメから預かった貴金属の塊を質屋に持っていくと、かなり良い値がついた。

「これはどこで購入したのですか？」

頭の禿げあがったオヤジは目を見張って言った。

「質は申し分ないプラチナですな。デザインも変わっていて素晴らしい」

カナメから預かったプラチナは、ハンサ鳥をモチーフにした彫刻が施されたペンダントヘッドになっていた。その彫刻はカナメが施したものだ。

「アステロイドベルトで拾ったものだ。その彫刻は、カナメ……俺の知り合いが施した。品質には問題はないはずだ。デザインのことはどうでもいい。で？　いくらで買い取れる？」

「アステロイドベルト？　これ拾ったんですか？」

オヤジは胡散臭そうにニシキギを見上げる。

「違法なことはしていない。原石の中から取り出したものだ」

ニシキギは無表情に説明する。

火星と木星の間に広がっている小惑星体、アステロイドベルトの石の中から、分解再生装置を使って、純粋なプラチナを取り出した。純度には自信がある。

「そのカナメとおっしゃる方が細工師ですか？　あなたのお友達？」

「詐欺師？　確かにカナメは詐欺師と呼んでも差し支えないかもしれない。ほぼ、そのようなものだ」

「詐欺師ではなくて、細工師ですよ」

オヤジは苦笑する。

「カナメ・P・グラブラは、単なる主席エンジニアだ。細工師ではない」

ニシキギはうんざりしたように言った。

「……はあ、アステロイドベルトって、ロシアかどこかの街ですか？」

不安そうな表情はそのままだったが、オヤジがそのプラチナをニシキギにつき返すことはなかった。

「ここからは遠く離れた場所だ。ロシアよりも遠い」

「そ、そうですか……」

オヤジはニシキギの答えに黙りこんで、鑑定を始めた。

そしてオヤジから提示された金額は、相当なもので、桁が一つ間違っているんじゃないかと思われるものだった。これなら食事をして電車代を払っても、使っていないくらいの現金が手元に残るだろう。

ニシキギは食事代を支払うと外に出た。外の冷たい風が心地よい。『チョコッとクマたんケーキ』まで食べたので少し具合が悪かったからだ。ニシキギは甘いものがあまり好きではない。瑞樹なら喜んで食べそうな代物で、今からここに来て代わりに食べてくれと連絡したい衝動をぐっと抑えて食べた。

なぜなら、彼女を呼び出したのでは意味がないからだ。普段の彼女の様子を見ることが目的なのだから。

カナメから渡された計画書には、まだいくつかのミッションが書かれていた。

「お客様、プレゼントですか？」

店員が躊躇^{ためら}いがちにニシキギに話しかけてきた。

「俺が自分の為にこんなものを買うと思うか？」

ニシキギの流暢な日本語に店員は一瞬ほっとした顔をしたが、ニシキギの眉間の皺を見て店員は表情をこわばらせた。

「お子様へのプレゼントですか？」

「子供？ 俺には子供はいない……と思う」

「はあ」

妙齢の店員は、更に表情をこわばらせる。

「友人の友人の孫の結婚の祝いだ」

「友人の友人の孫……の結婚……」

一体、何歳の友人なのかと店員は首を傾げたが、ニシキギのしかめっ面を一瞥して追及を諦めた。

「ご結婚のお祝いなら、新郎新婦、対^{ついで}にしてお求めになれる方が多いですよ？」

店員は営業スマイルを貼りつけて説明を始めた。

* * *

「ミントが結婚するんだ。そのお祝いを買ってきてもらいたいんだけど」

ミントはファームの民コブの孫にあたる。瑞樹が宇宙船ナンディーにいたとき、何かと世話をしてくれた瑞樹の一番の友人だ。

「こんなのじゃないといけないのか？」

「何かほかにいいものがあれば、それでもいいよ。君のセンスに任せるけど……ミントは瑞樹と仲が良かったからね、瑞樹が喜びそうなものならミントも喜ぶんじやないかと思ったんだ」

「こんなものを瑞樹は喜ぶのか？」

ニシキギはインターネットの画面を覗き込んで顔をしかめた。

カナメは地球のインターネットにアクセスできるように、いち早くシステムを組んでいた。

「似たようなやつを持っているみたいだったよ」

「なんでそんなことまで知ってる？」

ニシキギは胡散臭げにカナメを見つめたが、戻って来たのは悪戯っぽいニヤニヤ笑いだけだった。

* * *

「これがいい、これにしよう」

「こ、これでございますね」

ニシキギが選んだ二つの毛皮に店員は顔を引きつらせた。

カナメが指定した店は、ぬいぐるみを店頭で作ることが売りのぬいぐるみ専門店で、クマやウサギや犬などのかわいらしいぬいぐるみの皮が店先に並んでいる。その中で、ニシキギが選んだのは、カエルとトリケラトプスのぬいぐるみ皮だった。

どちらも緑色だというところがぴったりとニシキギは思う。ファームの民は皮膚に葉緑体を持っていて緑色の肌を持っているからだ。ミントの相手もファームの民だ。

「では、綿を入れますので、こちらへおいでください」

ニシキギが足でパッドを踏むと、カエルとトリケラトプスの皮の中に綿が送り込まれる。

「そのハートを一つ選んで、手で挟んでお願い事をしてくださいね」

店員が恐る恐るニシキギに言う。

「願いごと？」

ニシキギは眉間に皺を寄せる。

「……はい」

店員は叱られたように頷いた。

* * *

宇宙船ナンディーのコントロールルームで、カナメは笑いを噛みしめていた。

「ニシキギは地球に行ってるんだって？」

背後から声がして、カナメはクルリと椅子を回転させて振り向いた。

「ブラキカム、珍しいね、こんな所にくるなんて。何か用？」

ブラキカムは医師なので、大抵エリアHの医療センターにいる。

ブラキカムもカナメと同様、分解再生を繰り返していて、長い人生を送っている一人だ。

「いや、用はないさ。ニシキギが地球に行ってるって噂を聞いたんで情報を仕入れに來ただけだ。あいつが単独で地球に行くとは思わなかった。どうやって行かせたんだ？」

「行かせたも何も、自分で行きたいって言ったんだよ」

「あいつがねえ……。瑞樹の為に？」

「そ、瑞樹の為にね」

カナメはにやりと笑う。

「で？ あいつ、もう会えたのか？」

「まだみたいだね」

カナメはモニターを覗き込んで笑う。

「……おまえ、何かしただろ」

ブラキカムはカナメを睨んだ。

「用事をいくつか頼んだだけだよ。日本に人を送り込むのは初めてだったから、調査を兼ねてね」

「なんの用事を頼んだんだか……。あんまりあいつを苛めるなよ。せっかく自分以外の他人を思いやるようになってきたところなんだからな」

ブラキカムは不満そうに文句を言った。

「ずいぶんニシキギを庇うんだな」

カナメは肩を竦める。

「あいつがいくつか、おまえ知ってるか？」

「さあ……再生、二、三回つてところ？」

薄い金髪と薄青い瞳の色から判断する。分解再生すると色素が抜けてしまうのだ。

「……あいつはエクソダスの時に初めて分解されたんだ」

ブラキカムの言葉にカナメは目を見張った。

「ほとんど実年齢と見かけが同じだということか？」

カナメは呆然とブラキカムを見つめた。

「やっぱり誤解してただろ、あいつは見かけよりもずっと若いし、経験が少ないんだ。おまえが本気で苛めたら潰れちまう。俺はそれを心配してるんだ……って、おい聞してるのか？」

カナメは眉間を指でつまんで肩を震わせていた。

「そんな若かつたんだー、失敗したー」

カナメはクスクス笑いながら言った。

「おいっ！ 何をさせたんだよ」

「楽しませただけかもしれない」

カナメは一人笑い転げている。

ブラキカムは不審げに首を傾げた。

「そんな若いんなら、もう手加減はしないさ。僕がそんなに簡単に瑞樹を手放すと思うかい？」

カナメは意味ありげにブラキカムを見つめると、再び椅子を回転させてモニターに向かった。

「……」

ブラキカムはやれやれと言いたげに肩を竦めるとコントロールルームを後にした。

* * *

夕日が西の空を赤く染める頃、ニシキギはようやく瑞樹の住んで

いる街に辿り着いた。カナメに頼まれた荷物で両手がふさがっている。

身長が高く、薄い金色の髪のニシキギは電車の中でも、街を歩いていてもとにかく目立つ存在だった。

遮光のサングラスをかけているので、更に怪しさまで醸し出している。そのうえ、この大荷物だ。すれ違うほとんどの人が振り返ってニシキギを見つめた。

日向の表札が掛っている家を見つけたのは、空の赤が薄れて薄紫色になってきた頃だった。

「瑞樹、夕刊を取ってきてくれない？」

女の人の声がした。

「ええー、やだー、今ブラッディーマリーの録画予約してるんだもん」

聞き慣れた瑞樹の声が聞こえる。

「もう、役に立たないわねえ」

ドアが開く音がして、中から黒髪の女性が出てきた。ニシキギはその女性を見て凍りつく。瑞樹？

その女性は、立ち止まっているニシキギを見つめて、一瞬目を見張ったが、軽く会釈をすると郵便受けから新聞を取り出して、そそくさと家の中に入って行った。

ニシキギはしばらく呆然立ち尽くしていた。その女性が分解再生される前の瑞樹にそっくりだったからだ。黒い漆黒の瞳。ニシキギは心の中に明るい日が射した気がした。

その時、突然家の中から声が聞こえた。

「瑞樹、最近変な人が多いから気をつけなさいね。さっき、家の前

に怪しげな外国人が立ち止まっていたのよー」

「怪しげな外国人？　へーえ、この辺の人かな？　どんな人？」

「すごく背が高い人で、金髪だね。スパイ映画とかに出てくるような怪しげなサングラスをかけた人ー」

「へー、怪しいねー」

「でしょー」

リビングの窓が開いていたのか、会話が丸聞こえだ。

ニシキギはがつくりと肩を落とすとトウキと待ち合わせをしている場所へと歩き始めた。待ち合わせの時間が迫っていたからだ。

* * *

カナメはニシキギが持つて帰った緑色のぬいぐるみ二体を手に苦笑していた。トリケラトプスは純白のブーケをかぶり純白のドレスを着せられていて、カエルは黒いタキシードを着せられている。

二体のぬいぐるみにはくそれぞれ出生証明書なるものがついていて、それぞれに名前と作成年月日と願い事が記入されていた。

トリケラトプスには「ミント、幸せな結婚生活を送れますように」「カエルには「セージ、結婚生活がうまくいきますように。行かない場合は、逃げ出される前に解決の糸口を見つけれられますように」と書かれていた。

おわり

番外編 ニシキギの地球訪問（後書き）

番外編を書いてみました。あまり深く考えずに読んでください。あは（＾＾） 招夏

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3814f/>

宙の船 流転の岸

2011年8月6日03時18分発行